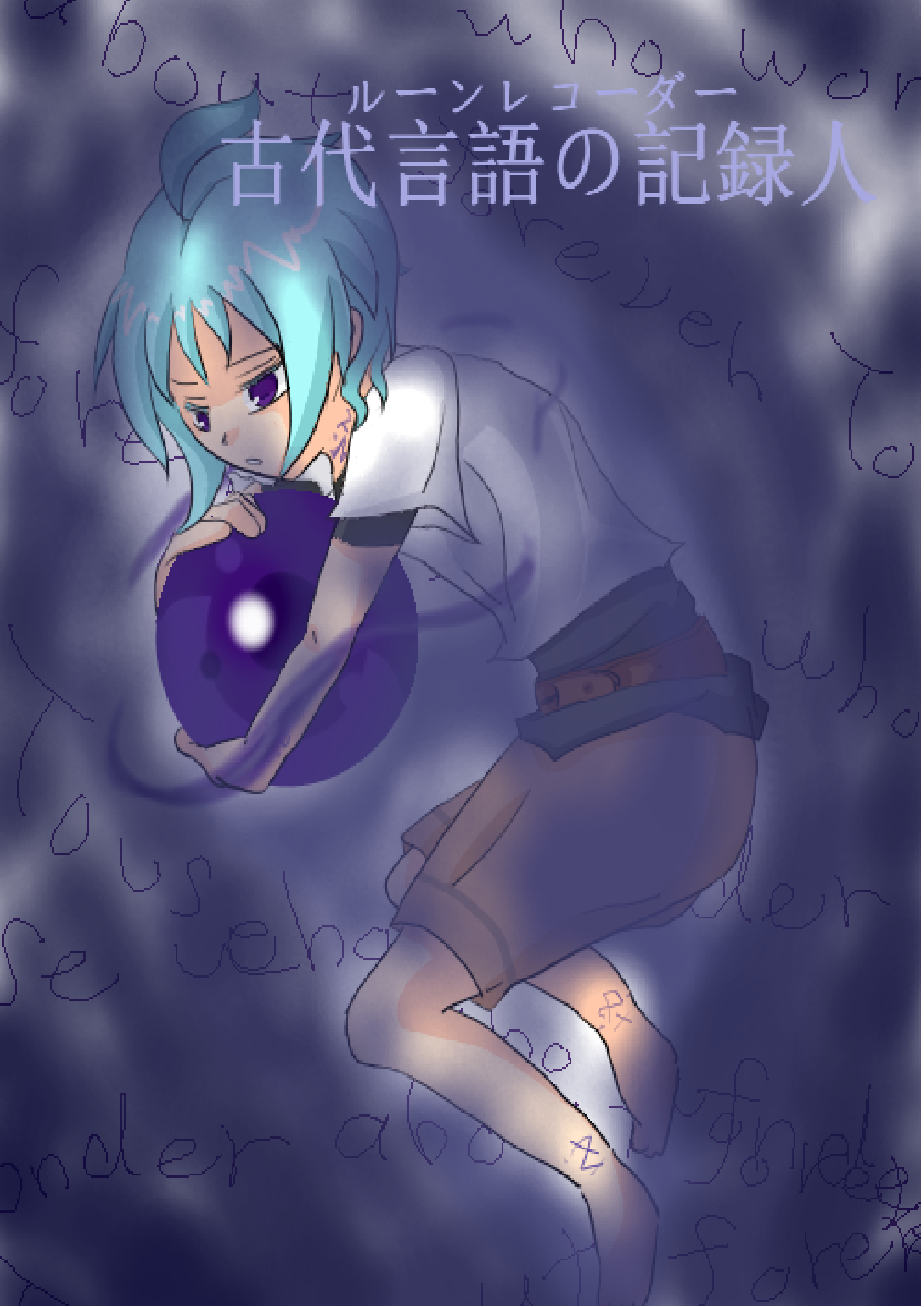
ルーンレコーダー

古代言語の記録人



　鉛色の壁で密閉された部屋。四隅に置かれた蝋燭の灯りは淡いはずなのに、妙に眩しく感じるのは、暗闇に目が慣れてしまったからだろうか。
「ついに……ついにこのときが来た！」
　対して高くない天井に向かって、両の腕を大きく広げて感動に浸っている一人の男。忌々しさがつのり、心の中で舌打ちをする。
「この実験が成功すれば……君は大いなる力を手に入れることができる！　歴史的大実験の被検体に選ばれたこと、誇りに思うがいい！」
（だったら自分自身で試せばいいだろ、この変態学者！）
　男は大仰に身振り手振りをしながら横たわる自分に語りかけてくる。しかし彼に対して自分の反論は決して表にでることはない。
　出したくても出せないのだ。口には猿轡、仰向けで両腕を真っ直ぐ横に伸ばされ、その先の手首、足首には枷。どんなに身を捩っても、外すことは不可能だった。声を出すことも、ここから逃げることも自分にはできない。
　顔を傾けて、床に刻まれた紋様が目に入る。続けて壁や天井を見ても、同じような紋様が隙間なく埋めつくされていた。こんなことをする労力があるのならば、もっと建設的な使い方をすればいいものを。
「さあ……頃合だ。今こそ、新たなる道が示されるとき！」
　男は懐から一枚の紙切れを取り出し、そこに書かれているであろう文を朗々と読み上げる。
「ギヴェ、ゼ、リフェ、ウィクフ、フォルロウス、テャトーー」
（いやだあああああああああああああ！）
　全身から感じる悍ましさに絶叫を上げるが、猿轡により封じられた口から漏れたのは、言葉にならない呻き声だけだった。
　ゴゴゴゴゴという音と共に、見るからに重量がある土の扉が開いていく。完全に開くのを待ちきれず、ある程度開いたところで、さっさと足を扉の奥へと向かわせ潜り抜ける。すると途中まで開いていた扉が今度は逆に閉まり始めた。重い音を立てながら少しずつ閉じ、そして完全にピタリと閉じてしまった。
　そのことに焦りは感じていない。この扉はそういう仕組みになっているのだと知っているから。開いた後、潜り抜けると自動的に扉が閉まる。
　何故見るからに重そうな扉が勝手に開いて、そして閉じるのか。その答えは単純明快、ここが『古代言語（ルーン）』で造られた遺跡だから。
　ルーンとは、言葉そのものに魔力が宿っているとされる太古から存在する特殊な言語。口で発する、または文字として刻むことによって特殊な効果を発揮することができる。
　例えば何もないところに火を熾して灯りにしたり、空っぽの桶の中を水いっぱいにすることも可能。太古の時代、ルーンを使った文明が発達し、ここテロンダ遺跡のような跡地が世界中様々なところに残っていた。
　開いた扉の先にあったのは厳かな祭壇だった。剣、槍、斧、弓と様々な武器を持った銅像が幾つも配置されている。そして持っている剣を掲げ、交差させている銅像の奥に、古びた箱が祀られていた。
「見つけた……！」
　歓喜の声を上げながら交差された剣の下を潜り、箱に手を伸ばす。蓋を開け、中身を確認すると、そこには箱と同じく年季の入った、古びた鏡が入っていた。
　設置する型ではなく、手で持って使うための柄がついている。円を覆う縁は鉄で出来ており、そこには複雑な紋様がびっしりと刻まれていた。縁の部分だけではなく、柄の先までその紋様は続いている。これはただの模様ではない、古

代言語（ルーン）だ。
「レフル！　これ、どうよ？」
『ふむ……ロン様、もう少しよく見せてください』
　ロンと呼ばれた人間の肩先から、ふよふよと浮かぶ小さな光。ふわりと箱の上に移動すると発光が徐々に淡い光りに治まりながら、人間の形をとり始める。襟首で揃えられた癖のない銀糸の髪。スッと尖った輪郭とつり目がちの琥珀色の瞳は鋭い印象を他者に与えるが、理知的な光りは気品を感じ、荒々しさは感じない。細かい装飾が施された白を基調とした長衣のローブを纏うその姿は、まさに知的な美青年と言っても過言ではなかった。身長が人間の掌ほどの大きさなのと、背中から透けている翼が生えてさえいなければ。
　レフルと呼ばれた小さな人間は箱の中へ降り立ち、小さな手でそっと鏡に触れた。
「どう……？　この鏡、僕達が捜し求めてるヤツ？」
　恐る恐るロンは聞いた。レフルはじっと鏡を見据えた後、徐に頭を横に振った。
『残念ですが……これも違うようです』
「ここも外れかよ……あああああー！」
　ロンは頭を掻き毟る。行き場のない苛立ちと憤りをぶつけられるところは限られていた。
「ああああああああああ！　簡単に見つからないことはわかってるけどさ！　こうも外ればっかりだと、いくら図太い僕でも心が折れてくるっていうね！」
『しかしロン様、この遺跡は複雑な内部構造になっております。この場所以外にも、このような宝物が眠っている可能性があるのでは？　わたくしは、この遺跡を探索する余地は充分おありかと存じます』
「そりゃあお前はさあ、ふよふよ浮いて僕についてくればいいんだからいいけどね！　ここまで来るのに一体幾つの扉開いたと思ってんだよ！　この遺跡扉多すぎるだろ！　更に扉ごと枝分かれしてるってどんだけ広いんだよ！　深いんだよ！　やってられるか馬鹿野郎！」
　ロンはどっかりとその場に座り込み、両手を突き上げながら思いの丈を叫び散らす。
　レフルは癇癪をおこしたロンを諌めるでもなく、ただ苦い顔をしながら、再び身体を光の中に包ませる。こうなってしまったロンに何を言っても無駄だということを経験上知っているから。
　この場合、落ち着くまで放っておくに限る。
　スススとレフルはロンから距離をとる。レフルの発する光は、暗闇の部屋の中を次第に明るくさせていく。暗い中にいたのでは気分も明るくならないだろう。部屋が明るくなれば気持ちも明るくなるのではという、レフルのささやかな配慮だった。
　ロンは横が少し長めであるふわりとした空色の髪をガリガリと掻き、その手は次第に砂色のスカーフに包まれた首元にまで移動する。
「あああああー！」
　そのまま堅い床へと両手を打ちつけた。指先のでた二の腕まで覆っているグローブがクッションとなり、痛みはさほど感じてはいない。そして両足を真っ直ぐ投げ出して、ベタリと床に寝そべって大の字になった。どことなく天井を見つめる瞳は紫紺の色。大きく丸い瞳は少女のようであるが、見ようによっては女顔の少年にも見える中性的な面立ちをしていた。
　暫くしてから二つの紫紺の珠が動き、レフルを捉えた。
「……少し休憩したら、出口の方へ戻ろう」
『……承知しました。では次の目的地を――』
「急くなよレフル。誰がもう次の場所に行くって言った」
　ロンは身体を起こし、片膝を立ててその上に腕を置く。それに合わせて、レフルは少しずつ光りを弱め、ロンの眼前へと移動した。

「この遺跡は広い。だから、適当に進んだここから別の場所へ移動するんじゃなくて、一旦出口に戻って、隅の方にある順路から一つずつ攻略していく。そうすれば取りこぼし一切なく進められるだろ？」
『なるほど、確かにそうですね。早合点してしまい、申しわけありませんでした』
「いいさ別に。僕も言い方が悪かったよ」
　もう片方の膝を曲げて手をつき、よいしょという掛け声と共にロンは立ち上がる。
「ところでレフル、あの鏡はルーンが刻まれただけの普通の鏡？　それとも、何かしらのトラップ的なもの？」
『後者ですね、ロン様。あの鏡から発している魔力には流れがあります。恐らく箱の中から移動させた際にトラップが発動するのでしょう』
「成る程。じゃあ無視できないか……。こんなところに、僕以外の人間がこられるかどうかは別にしても」
　面倒くさ、と呟きながら、ロンは再び古びた箱に手を伸ばす。自身の首元から服の下に片手を忍ばせ、首から下がっている紐を引っ張り上げた。
　グローブに包まれた小さな手に握られたのは、紋様が刻まれた乳白色の大粒の石。鏡に刻まれているのと同じもの。しかしこちらは隙間なく刻まれてはおらず、短い一文だけ。その石には留具がつけられ、首飾りになっている。
　首飾りを箱の中の鏡の上に翳す。すると鏡からポウと淡い光りが零れだし、首飾りへ、乳白色の石の元へと引き寄せられ、中へと消えていく。
「よし、これでここにはもう用はないね。戻ろう戻ろう」
『鏡はそのまま置いていくのですか？』
「だってこの鏡ボロいじゃん。デザインもありきたりで珍しいわけでもないし、魔力を完全に吸い取った後の何の効力もない鏡なんて、買い手が見つかるわけもなし。だったら持って帰るだけ無駄無駄」
　ロンは首飾りを再び服の中へと戻して踵を返す。
　祭壇に背を向けたロンは、完全に閉まっている扉を見据えた。扉の中央部分には、ルーンが刻まれている。それにはこう書かれていた。
『己の姿と正反対のものを映し出す道具とは何か（ウァトイステェトールウィクフプロジェクトス・テェオッポシテティングオフイツェルフスフィグレ）』
　ロンは軽く息を吸い込んだ。
「鏡（ミッロル）」
　刹那、ルーン文字がカッと閃光を発し、ゴゴゴゴゴと重低音を立てながら扉が開いていく。ここの遺跡の扉は、刻まれたルーン文字に対する返答が、開くための呪言となっていた。
　扉を潜り抜けて一つ前の通路に戻ると、そこは三股に分かれている。しかしロンは躊躇うことなく一番左の通路を通り抜けた。歩みを遮る扉に差し掛かると、扉に書かれたルーンを見もせず呪言を呟く。開いていく扉に合わせて更に歩みを進めた。
　ここは一度通った道だった。それをそのまま戻るだけなのだから、来るより簡単なのはロンにとっては当たり前。道順、そして扉を開くための呪言の全てを『覚えている』。
『ロン様……トレジャーハンターとして、様になってきましたね』
「そう？」
『ええ。ラン様もその姿を見たら、きっとお喜びになると思います』
「！」
　レフルのその言葉に、ロンは淀みなく進めていた足をピタリと止めた。正確には、ある固有名詞に反応したから。
「レフル、本当にそう思う？　ランが喜んでくれるって」
　心なしか、ロンの頬が薄らと朱に染まっている。レフルはそれを見て微笑ましげな笑みを浮かべた。
『勿論です。初めは宝物の良し悪しもわからず、ルーンの使い方も恐る恐るだったというのに、今はこんな奥深い遺跡

の中でも堂々とされております。ロン様の行く末を何より案じておられたラン様です、ロン様の成長した姿を見たら手放しで褒めてくださいますよ』
「そっか。自分じゃわからないものだけど、僕も『成長』というものをしてるのか」
　ロンが首飾りがあるであろう部分を服の上から触れながら、口の端を緩める。
「ラン、元気にしてるかな？」
『元気でしょう。もしも何かあったとしても、ラン様は心身共に強い方ですから何とかなさるでしょうし。それに彼女はお一人ではありません。あの方が常に寄り添っておられます』
「――うん、そうだね。それにしても懐かしいな。ランと別れてから、何だかんだでもう二年以上は経ってるのか」
『月日とは、長いようであっという間に過ぎ去ってしまうものですね』
　今この場にはいない人物を連想しながら、二人は再びを歩み始めた。過去を懐かしく思うのもいいが、今は出口まで戻るのが先。それでも懐かしい気持ちは心を温かくし高揚とさせる。
　来るときよりも明らかに早いペースで出口にまで戻ろうとしていた。
「中央（センテル）」
　最後の扉の呪言を紡ぐ。この後別の扉を開いて改めて探索を続行する――はずだった。
「――漸く出てきたか。大人しくしろ、遺跡荒しめ」
「げ」
　ロンは顔を引きつらせた。出入り口を塞ぐように、大勢の武装した人間がこちらに獲物を向けて立ちふさがっている。これでは別のルートを行くどころか、遺跡の外へ出ることもできない。
「大人しく投降すれば手荒な真似はしない。だが、抵抗するというのであれば、我らは決して容赦はしないぞ」
「……」
　人数はざっと見て二十人は軽く超えているだろう。対して広くはない出入り口に固まっているせいで、やたらと圧迫感を感じた。
「……レフル、どっちでもいいから、扉を開けるルーンを調べてきてくれない？　大至急」
『承知しました、ロン様』
　レフルにだけ聞こえる声量でボソリと呟くと、彼はふよふよとロンから離れていく。
　ここ入り口には今通ってきた扉を含めて、三つの扉がある。ロンが今出てきたのは、丁度真ん中にある扉。右と左、それぞれまだ通っていない扉が残っている。レフルが向かったのは、正面から見て左側の扉だった。
　レフルはロンに獲物を向ける人間達の真ん前を通りながらも、誰も彼に注視する人間はいない。
「……あーあ、そんな風に脅さなくても、抵抗なんてしないよ。っていうか、この状況でできるわけないだろ？　僕が大人数相手に大立ち回りをしでかすような豪傑に見える？　だから武器をしまってくれないかな、怖い顔した騎士さんたち」
　レフルが扉の前に向かうのを横目で確認した後、ロンは肩を竦めながら、降参の意を示すため両手を上げた。
　この剣や槍を持っている物騒な集団は、全く同じデザインの服を着ていることから、ここに駐在している騎士だろう。見張りはルーンで眠らせたはずだが、遺跡の中へと入っていくのを誰かに見られてしまったのだろうか。
（今はそんなこと考えてても意味ないけどね）
　今大事なのはこの場を上手く切り抜けること。そのためには、レフルが扉に刻まれたルーンを解読する時間を稼ぐことが重要である。
「そのままこちらへこい。そうしたら武器を構えるのをやめてやる」
「そんなに警戒しなくても、僕に何かできるとでも？　全く怖がりな騎士さんたちだね、こんな可愛い美少年に怯えるだなんて」
「……無駄口を叩いてないで、早くこちらへこい」

「はいはい、わかりましたよー」
　ロンはがくりと項垂れながら、トボトボと武器を構える男達の元へと近づいていく。

『ロン様！　わかりました！　この扉を開く呪言は『左（レフト）』です！』
　レフルの叫ぶ声を聞いて、ロンは気づかれないようにニヤリと口元をつり上げた。
　武装した人間達の隊長核であろう男の前に立つと、逃がさないとばかりに手首を捕まれる。
「詳しい話は牢で聞かせてもらう。いいな？」
「……」
　ロンは男の一方的な問いに俯いたまま無言になった。先ほどまでベラベラとしゃべっていたのが嘘のような姿を訝しく思った男は、顔を顰める。回りの者達も、不審を露にロンを見据えた。ロンに意識が集中する。
「おい。急に黙って、どうし――」
「ぐっすりと眠りなさい（スレエプ・ソウンドルイ）」
　幼さを残した甲高い声音が、凛と空気を揺らした。
　ロンが顔を上げると、忌々しげに顔を歪められた視線と目があった。見下ろしていたそれは次第に下へ移動し、力なく床へ倒れこむ。回りを取り囲んでいた男達もまた同じように、次々と床に倒れ伏していった。
「え、み、皆!?」
「……やっぱり全員は無理だったか」
　立ちふさがっていたせいで見えなかっただけで、入り口の外にも更に武装した人間が複数いたらしい。しかしそれを予想していたロンは、突然倒れた味方に呆然としている彼らの隙をつき、左側の扉に向かってレフルから聞いた呪言を唱える。
　重低音を響かせながら開く扉の音に、数人がはっと我に返った。自由に動いているロンに気づいてしまう。開ききる前にレフルと共に扉を潜り、すぐさま扉の真横に背中をペタリとくっつけ、身を潜ませる。
　ロンが通ったことにより閉まり始めた扉を潜り抜けようと、走り出した姿が先ほどちらりと見えた。ならばここで通り抜けてくるのを待ち、彼らも同じようにしてしまえばいい。
　扉が完全に閉まろうとする寸前、潜り抜けてきたのは二人だった。灯りもなく暗闇に包まれた内部に目を凝らし、ロンの姿を探している。そんな二人とは違い、暗闇の中にずっといたため闇に目が慣れていたロンには、はっきりと二人の姿が見えている。
「ぐっすりと眠りなさい（スレエプ・ソウンドルイ）！」
「っ……ぐっ……！」
「！」
　こちらを振り向きながら、床に崩れ行く二人の男。
　ロンはフウと軽く息を吐いた。今のは、聞いた者を深い眠りにつかせることができる呪言。彼らは数時間、気持ちよく寝続けるだろう。その間にここから更に奥地へと足を運んでしまえば、彼らにロンを追う術はなくなる。複雑な造り故に、一度見失えば探しようがないのだ。それに、奥まで進めんでしまえば、並みの人間は戻る道順すら把握するのは難しい。下手をしたら一生遺跡の中を彷徨うことになってしまう。そんな危険を冒してまで、ロンを追ってこようとするわけがない。
「さーて、さくさく攻略していくとするか」
『はい、ロン様』
　次に進むべく、レフルと共に二股に別れている通路の一つを選んで進む。途中横たわる彼らの横を通り過ぎようとして――ある異変がロンにおきた。
「どわ!?」

『ロン様!?』
　足に違和感。突然何かに足を掴まれ、バランスを崩してロンは転びそうになる。ギリっと下を見下ろすと、倒れている男の一人がロンの足を握り締めているではないか。
「んな！　こいつ呪言が効いてないの!?」
『！　いえ、ロン様。この男、倒れる直前自分の腿を持っていた短剣で刺し、その痛みによって睡魔に耐えたようです』
　レフルが示した先を、ロンは目を凝らす。足を掴む男の腿の部分に突き刺さっている棒のようなもの。
「げえ！　何こいつ！　自分の足刺してまで耐えるか普通!?　マゾなの!?　こいつマゾ!?」
「……逃がしは……しない。騎士団の……誇りに、かけて……！」
「うわしゃべった！」
　痛みとそして襲い来る睡魔に耐え、険しく細められた瞳と目があった。
「離せ！　離せよ！」
　足をぶんぶんと振って逃れようとするが、思いのほか掴む手の力は強く、離れない。
『今すぐその手を離しなさい！　ロン様に気安く触れるなど、言語道断！』
　レフルが少しずれたことを言いながら、男の眼前に移動し小さな肩を怒らせている。すると、男の顔に驚愕の色が走った。手からするりと力が抜け、足が解放される。
「よ、妖精……？」
「！」
『なっ！　あなた、わたくしの姿が……!?』
　レフルの姿は通常普通の人間には視ることができない。だからこそ、出入り口を封鎖していた武装した人間達のど真ん中を通っても、ロンに向かって大声で叫んでも、その存在に気づく者は誰一人いなかった。それなのに――
「――おっと、動くなよ」
「なっ……！　ぐえっ」
　突然背後から、何者かに首に腕を回され、締め上げられる。ここにはロンとレフルを含めた四人以外他に誰もいないはずなのに。
　ちらりとロンの足を掴んでいた男の方を見遣ると、そこにもう一人横たわっていたはずの男がいない。
「まさか上司や学者連中のお小言を避けるためにつけてた耳栓が、こんなところで役に立つなんてな」
「み、耳栓……!?」
　ロンを締め上げている男が、これみよがしに開いている手で握っているものを見せた。ゴムで出来た小さな栓が、憎らしげに存在感を見せ付けている。つまり、この男はロンの呪言にかかったフリをし、ずっと隙をうかがっていたということか。
「そういうこと。残念だったな、坊主」
「ックソ！」
　悪態をつくと、首の後ろに衝撃が走った。手刀をいれられたのだと気づくより早く、意識が遠のいていく。
『ロン様！　きっさまあああああ！』
　レフルが気を失ったロンを抱える男に向かって叫ぶが、彼は眉一つ動揺することなく、蹲っているもう一人の男の傍に寄った。彼の目に、レフルは映っていない。
「大丈夫か、アジェット」
「……あまり……大丈夫では……」
「なら無理すんな。応急処置は俺がやっといてやるから、お前は素直に意識飛ばしとけ。漸く暗闇に目も慣れてきたしな。暫くしたら、学者たちが扉を開けてくれるだろ」
「申しわけ……ありません」

「長い付き合いじゃねえか。気にすんな」

　男はカラカラと笑うと、ロンを床に寝かせ、新たに意識を飛ばした男の腿の処置をし始める。

『ロン様！　ロン様！　目を覚まして下さい！　ロン様！』

　横たわるロンの頭上で、レフルはひたすら呼びかけ続けていた。

　目を開くと、誰もいなかった。何もない深遠の闇の中、己の手足や身体だけが、ぼんやりと視界に映る。いつも傍にいるレフルの姿もない。ここにいるのは、己一人だけ。
（ここは……どこ？　レフルは……）
　まどろむ意識の中、小さな相棒の姿を探す。だが、キョロキョロと周囲を見渡しても見つからない。普段なら、目が覚めた時点で向こうから飛んでくるのに。
　突如、コツコツという小さな足音が聞こえた。一体誰だろう。確実にいえるのは、レフルではないということだけ。彼は常に宙を飛んでおり、地を歩くなどありえない。
　意識がはっきりと覚醒すると、暗闇しかなかった景色が一変した。
　薄暗い雰囲気は変わらないが、まず石材を積み重ねて造られた部屋が現れる。次に古びて乾燥してしまっている絨毯が床に敷かれ、その上に木材で作られた本棚が所狭しと並び始めた。本棚の中にはぎっしりと本が詰まっているが、どれもこれも痛みが激しく、少し触れただけでも破けてしまいそうなほど劣化してしまっている。
（何ここ……あれ、でも見覚えがある……）
　本棚のほかには、同じく木で作られた机や椅子が置かれていた。本を落ち着いて読めるように。ここはまるで――図書館ではないか。
（古びた図書館……あ、ここはもしかして――）
　この場所の心当たりが頭に浮かんでくると、コツコツと聞こえてきた足音がピタリと止まる。そして、最後に現れた軋んだ扉が、ギイイイと鈍い音を立てながら開かれた。
「あった……本当にあった！　やっと見つけた……！」
　扉の向こう側にいた人間の持つ、幼さが残る丸い紫紺の瞳がキラリと輝いた。背中を覆うほどある空色の髪を靡かせながら、すぐ手前にいたはずのロンの真横をすりぬけていく。
　ロンは目を見開きながら振り返った。そこには、本に手を伸ばして壊さぬよう丁寧に扱いながらも、真剣味を帯びた眼差しを注いでいる十台半ばの子供の姿。見覚えのある場所に、見覚えのある子供。
　そこでロンは理解した。これは現実ではなく、夢なのだと。
　これは過去のできごとだ。実際に起きた過去のことを、夢に見ている。太古の大昔、まだ古代言語が日常で使われていた時代に造られた、最も大きな図書館。そこならばきっと求める情報があるに違いないと、ずっと探していてやっと見つけ出したかつての自分。
　レフルと二人で旅をするようになる前、否、ランに出会うよりも前の出来事。
　気づくと、子供の回りに本が山を作っていた。輝いていた紫紺の瞳に焦りが混じり、本を扱う手が乱雑になっていく。欲しい情報のない本は無造作に投げ捨てられ、それが積もって山となり、その山は子供の身長を超えるまでに至っていた。
「ない……ない！　どうして載ってないんだよ!?　どうして！」
　悲痛な叫びとは裏腹に、目尻に雫は帯びていない。しかし紫紺の瞳に宿っていたものは、絶望というなの暗い光。
　バン、と子供が持っていた本を床にたたきつけた。するとその震動が伝わったのか、山になっていた本がぐらりと揺れ、そして子供に向かって崩れ落ちる。
　本に埋もれる寸前の子供の瞳には、既にもう何も映してはいなかった。

「貴様はどこで古代言語を覚えた!?　何の目的をもってテロンダ遺跡に侵入した!?　言え！　吐け！」
（うっさい……）
　テロンダ遺跡で意識を失ったロンを待っていたのは、カビ臭い匂いに満ちた牢獄と、同じことを何度も叫び続ける男の尋問だった。鉄格子は隙間がたくさんあるために、男の怒声を遮るということはしてくれない。何もない牢の中であぐらをかきながら黙秘を続けるロンに向かって、飽きることなく怒声を浴びせ続けている。
「レフル……僕の耳に防音ってできる？」
『申しわけありません、ロン様……わたくしに出来るのは光を操ることだけでございます。音に関しては専門外でございまして……』
「だーよねぇ……」
「貴様！　何を一人でブツブツと言っている！　そんな暇があるのなら、こちらの質問に答えろ！」
　狭い牢獄の中、男の怒声はとてもよく響いた。そのせいで耳が痛くてたまらない。
「答えろも何も、僕はちゃんと説明したっての。ルーンは本とか読んで独学で学んだ。でもって、トレジャーハンターに何で遺跡にいたのかなんて、愚問でしょー」
　耳を押さえながら、ロンは深い溜め息と共に何度か目になる説明を口にした。
「独学で学んだなどと、嘘をつくな！　ルーンは貴様のような子供が簡単に習得できるような言語ではない！　この遺跡にもぐりこんだのも、何か目的があるのだろう!?　そのような曖昧な返答でごまかされたりはせんぞ！」
「……」
　そのセリフを、ロンは一体何回聞かされただろう。何度も何度も、ルーンは独学で学んだ、トレジャーハンターが遺跡に侵入することに深い意味はない、と説明した。その度に真っ向から嘘だと否定され続ければ、次第に答える気にならなくなるのは当然だ。
　それにロンは決して嘘は言っていない。確かに曖昧に濁した部分はあるが、初対面の人間に己の全てを吐き出す必要などないはず。
　再びだんまりを決めたロンに、男がぎゃあぎゃあと吼え叫ぶ。無視し続けていると、男は次第にゼエ、ハアと息を乱し始める。当たり前だ、大声を出すというのは思っている以上に体力を酷使するもの。息切れをおこし、苦しそうに膝に手をあてながら肩を上下する男を、ロンは冷めた目で見遣った。
「この……クソガキが……！」
『フン！　怒鳴り散らすしか脳のない男など、ロン様と口をきくのすらおこがましい！』
　レフルが鉄格子の隙間を抜けて男の頭の上にどっかりと座ると、偉そうに腕と足を組んだ。しかし男は自分の頭の上に何かがいることに気づかず、ロンの方を忌々しげに睨み付けている。
「尋問中すんませーん」
「し、失礼致します」
　視線を適当なところへ向けて、睨みつけている男を無視し続けていると、若い男の声が聞こえてきた。全くすまなそうではない軽い声と、うって側って少し上擦った堅い声。
　ロンは新しくやってきた闖入者の顔を見るべく、視線を元に戻す。同じ相手がずっと叫び続けるだけで飽き飽きしていたのだ。誰がやってきたのか、興味が沸くのは自然なことといえよう。
　一人は黒みが強い灰色の癖の少ない髪を、背中で緩く纏めた長髪の男。着ている青が基調とされた軍服のボタンを二つ目まで開けており、袖を七分丈にまで捲くっている。髪と同じ色の瞳は切れ長で、どこか楽しげな、悪戯っぽい光りが宿っていた。
　もう一人はまるで正反対だった。第一ボタンまでしっかりとめた、きっちりとした着崩しが全くない格好に、短くさっぱりとまとめられた色素が薄い亜麻色の髪。生真面目そうな光りが宿った瞳は翡翠を思わせる緑色。
　共通しているのは、二人とも背がとても高いということ。ロンを尋問していた男は、首を上に向けて彼らを見なけれ

ばならなかった。男の頭の上に乗っていたレフルがするりと頭からおり、ロンのところへと戻ってくる。
「何だ、ギエルド、アジェット。見ての通り私はこのガキの取調べ中だ。邪魔をするなら今すぐ出て行け」
「い、いえ、わたし達は邪魔をしにきたわけでは……！」
「ワローラル女史に言われたんだよ、そのガキを自分とこに連れてこいってな」
「ギエルド……！　相手は先輩だ、ちゃんと敬語を……」
「なに！　ワローラル様が!?　それを先に言わんか！」
　男は長髪の男の無礼よりも、彼の口から出た名前に反応した。短髪の男がその勢いに若干身体を引かせ、長髪の男はニヤリと口の端をつり上げる。
「そのガキは俺らに任せて、あんたは休憩に入っていい、とのお言葉だったぜ。お疲れ様、だとよ」
「おお、そうであったか！　ワローラル様のご命令ならば、従うしかあるまい。ギエルド、アジェット、この場はお前達に任せよう」
「はい、お疲れ様です」
　男は今まで不機嫌にしていたのが嘘のように、上機嫌でこの場を立ち去っていく。ロンの尋問から解放されて嬉しいのと、そのワローラルという人物からの労いの言葉を賜ったことに浮かれているのだろう。つまりは、ワローラルという女性に惚れているということか。頬がうっすらと上気していて、気持ち悪かった。
『なんともまあ、わかりやすく、単純な男ですね』
「全くだ」
　レフルの呟きに同じようにボソリと、残った二人の男に聞こえない大きさでロンは呟く。
「そういうわけでクソガキ、俺達と一緒にきてもらおうか」
　ギエルドと呼ばれた男が、まっすぐこちらを見下ろしていた。先ほどの男と同じく高圧的な態度に、思わず顔を顰める。
　しかしこちらに拒否権はないだろう。
　本来ならば、この牢屋を脱することなど、ルーンを使えば造作もない。なのに大人しく牢の中で座っていたのは、荷物を全て気絶している間に没収されているからだ。金銭が入った小袋や、現在この地を治めている大国、ルインラトゥスの地図の入った鞄。腰紐に括りつけるようにして持ち運んでいたそれが、目覚めたときにはなかった。
　いや、確かにそれらを失ったら多少は困りはするものの、そこまで惜しいものでもない。問題なのは、いつも腹部の上を触るとそこにあるべき存在の宝石が今はどこにもないことだ。ぎゅ、と服を握りしめると同時に、ギリッと歯も食いしばる。他の荷は捨て置いても問題ない。だが、首飾りだけは、あの宝石だけは何としてでも取り戻さなければ。
「はいはい。行けばいいんでしょー、行けば」
　在処がわからない以上、この牢を出るだけでは意味がない。当然ながらこの牢獄に入るのは初めてであり、構造が全くわかっていないうえに誰かがどこかに隠したのか、それともずっと所持し続けているのかもわからないのだ。
　だからこそ、ここは下手に出た方がいいだろう。この二人が先ほどの男のように話が通じない輩ではないことを祈るばかりだ。
　カチャリと鍵の開く音がする。ギイイと甲高い鉄の音と共に牢の扉が開けられた。ロンは徐に立ち上がる。
「へえ、随分素直じゃねえか。あのときは思いっきり暴れてたってのに」
「……？　あ！　お前あのときの……！」
　黒みの強い灰色の瞳が、ロンよりも頭一つ分は高い位置から楽しげに見下ろしている。この男の声はよく覚えている。耳栓で呪言を無効化し、ロンがこんなところに収容される原因となった男の声。
　途端、苛立ちが沸き起こるが、ロンは彼を睨みつけるだけに止めた。ここで騒ぐのはよくない。今第一優先すべきなのは、自身の荷物の行方なのだ。軽はずみに挑発にのるわけにはいかない。
　気を紛らわせるため、もう一人の短髪の男を見上げた。すると彼は、ロンではなくある一点を凝視し、固まっている

ではないか。その視線の先にあるものは――レフルだ。
「っ！　お前、もしやあのときのマゾか！」
　レフルの姿を視ることができる人間は限られる。それに、あのときレフルをはっきりと視界に納め、妖精？　と呟いた声と先ほどの堅い声もまた、同一人物の声だ。間違いない。まだ真新しい記憶は、鮮明な音声のまま残っている。
「なっ、き、君は人に向かって何を大声で……！」
「ぶっ！」
　ロンがアジェットと呼ばれていた男に指を差すと、彼はレフルに向けていた視線をロンに向け、肩をわなわなと震わせる。そしてその隣で、盛大に噴出すギエルドと呼ばれた男。
「わたしは遺跡荒しである君を捕らえるために、ここで皆と同じように眠ってしまうわけにはいかないと……！」
「僕を捕まえたのはお前じゃなくて、そっちの長髪野郎だろ。そんな無駄な徒労をわざわざするなんて、マゾとしか思えないねー」
「……！」
　くわっと反論してくる男の反応が面白く、ついニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべる。カッと羞恥で顔に朱が走る様に、初心だと内心呟いた。
「ぶっはははは！　マゾ……マゾって……！　ぶっほお！」
「――っ、笑わないでください！」
　ツボにはまったのか、腹を抱えて笑い出すギエルドにアジェットの視点が移った。ゲラゲラ笑う男と、それを止めようとする男。二人はすっかりロンの存在を忘れているようだった。
「レフル、丁度いい。この建物の中の構造を把握してきて。できれば荷物――首飾りのの在処まで調べてきてくれると楽になる」
『はい、かしこまりましたロン様』
　ロンに注視していない隙をつき、横目でレフルを見て指示を出す。レフルは胸に手を当てながら優雅に一礼し、スイっと飛んでいった。
　本当ならばもっと早くにこうしたかったが、目覚めた直後にぎゃんぎゃんと吼え叫ぶ男が目の前にいては、思考する力も鈍るもの。あれを完全に無視して自らの思考に没頭できるほど、ロンの神経は図太くはなかった。以外に繊細な一面が残っているらしい事実に、何よりも驚いたのはロン自身である。
「よし、後は……」
　ロンは小さく呟くと、言い争いを続ける二人の様子を伺いながら、そっと気づかれないよう牢を出た。そしてそろりそろりと少しずつ移動していく。が、
「おっと、逃がさないぜ」
「逃げようとしても、そうはいかない！」
　がしっと二人同時に肩を掴まれそれを阻まれる。ロンはあからさまにハアと落胆の溜め息をついた。先ほどまで喧嘩らしきものをしていたとは思えないタイミングのよさに、心の中で舌を出す。
「ギエルド、今は言い争いをしてる場合じゃない。彼をワローラル殿のところへ連れていこう」
「だな。ほら、行くぞガキんちょ」
　人を放置していたのはお前らだろ、と内心毒づきながら、ロンは何も言わず彼らに従う。先行するアジェットの後をロンが追い、その後ろをギエルドがついてくる。
　ロンは首を動かさず、目線だけで周囲を見渡しながら進んだ。燭台の蝋燭に火が灯され、薄暗い廊下が続いている。嵌められたガラスの窓から日が差していないことを考えると、今は夜か。レフルに構造を把握してもらうよう頼みはしたが、自分の脳内に入れておける情報は入れておきたい。
　全てはここから逃げ、再びテロンダ遺跡に侵入するためだ。あそこはロンが辿り着けていない場所が多数存在する。

あの中に、ロンが求めてやまないものがあるかもしれないのだ。
（首飾りを取り返したら、絶対すぐに逃げてやる）
　ロンは心に強く誓うと、前方の亜麻色の後頭部を睨みつけた。
　テロンダ遺跡の名前の由来となった街、テロンダ。遺跡はこの街の郊外にある殺風景な岩山にある。遺跡周辺は全く人の手入れがされていないせいか、木々や草花が好き勝手に伸びていた。しかし、街からそう距離が離れていないせいか、野生動物の姿はどこにも見当たらない。
　行き交う人々。乱立する木造の家々。道端に展開する露店の店主は人々に声をかけ、人々はおしゃべりを楽しみながら商品を吟味する。どこの街でも見られるありきたりな光景だが、それが寄り集まって活気となる、必要な賑わい。
「よう、久しぶりだなぁ。元気にしてたかい？」
「身体は元気だが、心はそうもいかねえんだよなあ……いろんな街を渡り歩いたが、どこも財布の紐が堅くて、なかなか思うように売れなんだ」
「そりゃあ仕方ねえさ。お国が税金を上げちまったんだからよ。無駄な出費はできるだけ抑えねえとなあ。俺も、かみさんに晩酌の酒の量を減らされちまったよ……」
「世知辛くなっちまったもんだ」
　顔見知りと思わしき者達が、お互いの経済状況について軽い愚痴を零しあう。
「ねえ、聞いた？　昨日遺跡に賊が侵入したらしいわよ」
「私も聞いたわ。でも侵入したのって賊じゃなくて、可愛い顔した美少年じゃなかった？」
「え、何それホント!?　見てみたいわ！　どんな子なのかしら」
　その近くでは、若い女性達が頬を高潮させながら、噂話に花を咲かせる。
「遺跡に侵入を許すたぁ、騎士の連中は何をやってんだ、全く」
「しかもそれってまだ子供なんだろ？　一応は捕まえたって話だが、それよりも先に侵入を許すなっていう」
「ただ遺跡の外でぼーっと突っ立ってるだけで金貰えんだから、ボロイ仕事だよなぁ。ウラヤマシイもんだ」
　別の場所では、この地に駐在している騎士達への不満を漏らす者達。
　それぞれが思うがままに、好き勝手なことを語り合う。しかし、最終的な話題の内容は誰もが皆同じだった。
「こうなっちまったのも、王様が遺跡の発掘に金かけてるからだよな……税金が増えたのも、その費用を算出するためだし……」
「捕まっちゃった子、王様が遺跡の調査を進めてなければ捕まらずに済んだでしょうに……かわいそう」
「この事件で遺跡を守るためとか言って、騎士を増やされたら堪らんな……まるで街を監視されてるみたいで気分悪くなる。ま、王様が気にしてんのはあくまで遺跡の中に眠るお宝であって、俺達みたいな一般市民のことなんて、なんとも思っちゃいないんだろうけどさ」
　そこかしこで上がる不満の声、声、声。しかしそれはその場で霧散し、雑踏に紛れて消えていった。

「ワローラル殿、彼を連れてきました。失礼致します」
「どうぞ」
　とある部屋の前に辿り着くと、アジェットが足を止めてノックをする。中から聞こえてきたのは涼やかな女性の声。アジェットが扉を開いて中を見ると、そこには一人の女性が肘掛け椅子から立ち上がるところだった。
　まず目につくのは、肩で切り揃えられた金色の髪。彼女が動くたびにさらさらと揺れ、まるで金細工のよう。そして金のヴェールに包まれた顔は小さく、肌は白磁のごとく白くてきめ細かい。ロンを映している菫色の瞳は穏やかで気品に溢れている。
　男と同じ軍服を纏っていても、明らかにわかる線の細さと特有の丸み。しかし背筋はピンと伸び、佇まいは凛としている。そして身長も並みの女性より高い、長身の美女だ。ロンを尋問していた男がデレっとするのも頷ける。
「ありがとう、二人とも。君、私の向かいに座ってもらってもいいかな？」
「はーい」
　ロンはワローラルが示した普通の椅子に、自ら進んで腰をかける。ワローラルは自分の椅子に腰をかけ、二人は立ったまま彼女の後ろに控えることになった。
「今度は貴女が僕の尋問をするの？　お姉さん」
「フフ、そう警戒しないで。私は君を尋問するつもりなんてないから」
「おやまあ、そうなんですかぁ」
　表情ではおどけながらも、心の中ではだろうな、と呟いていた。
　尋問するだけなら、他の誰かに任せればいい。あの男に情報を聞き出す能力があるとは思えなかったが、それなら更に別の人間を使えばいいだけだ。
　彼女は恐らく武装した組織――王国、ルインラトゥス擁する騎士団のリーダー格だ。この国では老若男女関係なく、要職には相応の実力があるものが就任するという決まりになっている。だから女性が一つの部隊を纏めていることに、おかしなことはない。見た目通りの美女だと思って油断をすると、きっと足元を掬われるだろう。
「まずは自己紹介からしようかしら。私はエンジリカ。エンリジカ・ワローラル。テロンダ遺跡調査団を護衛するために王都から派遣された、護衛騎士団を纏めているわ」
　まずは自分の名前を名乗った後、彼女は椅子をくるりと動かし、後ろに控える二人の青年を示した。
「彼らもまた、護衛騎士に選出されたのよ。髪が長い方がギエルド。ギエルド・オルドスク。そして髪の短い方がアジェット。アジェット・フォン・ビクスマルテ」
　彼らの名前――否、家名を聞いて思わずアジェットの方を見つめた。名前と家名の間にフォンとつくのは、貴族の中でも力のある家柄であるという証。そんなお坊ちゃんが、何故こんな田舎町で騎士などやっているのだろう。
　彼女は再び椅子を元に戻すと、ニコニコとロンの方を見つめてくる。ロンは内心大きく溜め息をつきながら、口を開いた。
「僕はロン。あんた達みたいなご立派な家名のない、ただのロンだよ」
「そう、ロン。呼びやすくていい名前だわ」
「それはどうも、ありがとうございます」
　ロンもニッコリとエンジリカに微笑み返した。ロンはロンという自身の名前を気にいっている。だから含みのない世辞は、言われて悪い気はしない。
「それでは君をここへ呼んだ理由を単刀直入に話すけれど……いいかしら？」
「どうぞどうぞー」

　やっと本題か、とロンは話を促す。面倒なことは、さっさと終わらせてほしい。
「ロン、私と取り引きをするつもりはない？」
「取り引き？」
「ええ。こちらのお願いを聞いてくれるなら、今回君が遺跡に不法侵入した件を不問にするわ」
「ワ、ワローラル殿!?　突然何を……！」
　エンジリカの言葉に、アジェットが突然身を乗り出してくる。
「彼は不法侵入を犯した犯罪者です！　彼が遺跡に何をしたかはまだ調べがついておりませんが、貴女は犯罪を見逃すとおっしゃるのですか！」
「口を慎みなさい、アジェット君。私は今、君に意見を求めてはいないわ」
「ですが……！」
「私に文句があるのならば、後で話しを伺うわ。だから今は口を閉じて黙っていなさい。それができないのなら、今すぐこの部屋から出て行くといいわ」
「……！」
　エンジリカはアジェットの方を見もせずに、毅然と言い放つ。取り付く島もない。アジェットは苦虫を噛み潰したような顔をしながらも、口を引き結んでエンジリカの後ろへとのろのろと戻った。
「それで？　見逃してくれる変わりに、僕は何をすればいいんです？」
　つまり彼女は、ロンを見逃す変わりに何かをさせたがっている。そして「何」をさせたいのか、聞かずともおおよその見当がついた。
「ロン、君にね、遺跡調査の手伝いをしてほしいのよ」
「……」
　やはりか。当然のごとく口にはせず、そのままエンジリカの言葉を聞く。
「内部に入った君ならわかると思うけど、あの遺跡は複雑な構造になっていて、下手をしたら永遠に彷徨ってしまう危険があるわ。そのせいであまり奥まで進めていないの。その上に、しきりになっている扉には、開けるための呪言のルーンが一つ一つ刻まれているでしょう？　解読する箇所が多すぎて、調査が難航してるのよ。地図を作成しながら進めてはいるけど、ルーンなんて、学者でもしっかり読める人なんてほんの一握り。つまり、深刻な人手不足というわけ」
　ロンはテロンダ遺跡の構造を思い浮かべる。似たり寄ったりな小部屋が幾つも連なっている空間。見張りに立つ騎士達を眠らせ、遺跡の中へと侵入したとき、ロンも戸惑ったものだった。同じ部屋に複数ある扉。複雑に連なっている小部屋の数。確かにあの遺跡は、普通の人間（・・・・・）では攻略するのに時間がかかる。
　ほぼ身一つで奥地の一つに辿り着き、そして入り口まで戻ってこられる人間など、ロン以外には不可能だ。
「どこまで潜ったかはあえて聞かないけれど。ロン、君はある程度のところまで一人で行って、そして一人で戻ってきた。つまり、扉に刻まれたルーンを全て自力で解読した……そうよね？」
「――もしかしたら、その学者達が作った地図を盗み見て覚えたのかもよ？」
「そうかもしれないわね。でも、私も学者達が作った地図を見せてもらったことがあるけど、呪言については現代語で発音が書かれてるだけだったわ。ルーンは唱えるだけではただの言葉。呪言として成立させるには、ルーンの言葉の意味を真に理解していないといけないもの。見て覚えただけで口にしたとしても、言葉の意味を理解していなければ扉が開くなんてありえないわ」
「……ルーンに対して、全くの無知ではないようで……」
　ロンは内心舌打ちをする。
　ルーンはただ口にすれば、特殊な力を発揮する『呪言』になるわけではない。例えば、暗闇を灯す明かりが欲しいときに、『明るくなれ』という意味を表す呪言『ベコメ・リグフト』と唱えれば、淡い光りが生まれ、辺りを明るく照らしてくれる。しかし、このとき全く関係のない意味を表す言葉、例えば『火を熾せ』や『風よ吹け』と意味する呪言を唱

えたとする。その場合、明るくなることはおろか、火を熾すことも風を吹かすこともできず何もおこらない。
　入り口にある三つの扉にも、当然ながらルーンが刻まれていた。そのうち『中央（センテラ）』と『左（レフト）』の呪言でロンは二つの扉を開けたが、この扉も、『中央』や『左』という意味だと理解しないまま、『センテラ』、『レフト』と扉の前で叫んでも、扉はうんともすんとも言わず、先へ進むことは叶わない。
　この事実を知っている人間は実は少ない。元々ルーンは現代では全く使われておらず、研究者や学者が己の知的好奇心を満たすためや、遺跡などの過去の遺物を発掘するために学ぶ程度の認知度にまで、廃れてしまっている。
　その最たる原因であろうと思われる出来事をロンは知っている。今からおよそ五百年程前になるだろうか、かつてイクティンクというルーンの研究が盛んな国があった。そこでは多くの学者がルーンを研究しており、学者達は日々切磋琢磨しながら研鑽の日々を送っていた。
　しかし、この国は現在存在していない。あるとき、一夜にして国中の人間がいなくなり、建物は廃墟と化し、木々や草花は枯れ果てるという衝撃的な末路を経たために。
　他国は突然の出来事の原因を解明すべく、跡地へとやってきたが、誰も原因を特定することができなかった。国土のほぼ全てが焦土と化し、まるで戦争によって蹂躙されたかのように、イクティンクには何も残されていなかった。何も。
　ルーンを研究していた学者のほとんどがイクティンクに住み、イクティンクで研究を行っていたために、ルーンのことをよく知る人材や資料は、この事件でほぼ全て失われてしまったのだ。
　後の歴史書に『イクティンクの消滅』と書かれるようになったことから、学のある人間ならば、この事件の大雑把な内容と、この日からルーンが廃れる一方になったのだということを知っている。
　そんな昨今、普通に生きている場合、まずルーンと関わることはない。そんな人間達にとってルーンとは、『大昔に使われていた摩訶不思議な言語』くらいにしか認識していないだろう。
　だからロンが呪言で開く扉を開けたということは、自分はルーンについて詳しく知ってますと宣言したようなもの。ルーンに興味をもって少し調べれば、ルーンは言葉の意味を理解しなければならないことぐらいはすぐわかる。そして大抵の者はその時点で習得を投げ出すのだ。余程の執念がある者でないと、まずルーンを覚えることはできない。言葉の種類は現代語とほぼ同数存在し、文法もまた同じく、だ。
「君のようなまだ十数年しか生きていない子供が、どうして学者並にルーンの知識があるのかなんて、個人情報に首をつっこむようなことは聞かないわ。私はただ、その知識を活かして遺跡の調査を進む手伝いをしてほしいの。君が手伝ってくれるなら、きっと調査が捗るわ。それに君も、この遺跡を調べたいと思っているのでしょう？　悪い話ではないと思うのだけれど、どうかしら？」
確かに悪い話ではない。不法侵入を見逃してくれるうえに、ロンが望んでいた遺跡の調査もできるのだから。
　だからといって即答は禁物だ。まだ腑に落ちない点がある。それを解消しなければ、取り引きに応じるわけにはいかない。
「一つ聞くけど、どうして護衛してる騎士のお姉さんが依頼するの？　調査してる学者連中にでも頼まれた？」
「……いいえ。これはあくまでも私の独断よ」
「お姉さんの独断、ねえ。なら、どうして騎士団のお姉さんが遺跡調査の進捗状況なんて気にする必要があるの？　お姉さんたちの任務って調査する学者達の護衛でしょ？　言われた通り学者共を守ってればいいじゃん。連中がどれだけ調査に時間をかけようが、お姉さん達にはなんの落ち度もないんだし」
　ロンは捲し立てるように疑問をぶつけた。剣を持ち、国や民を守るために戦う騎士に、ルーンの知識を求めるわけがない。だからエンジリカはわざわざ、調査が難航しているからといってロンの力を借りようとする必要はないのだ。王都から派遣されたというエンジリカ達の任務は、遺跡の中にあるだろう侵入者避けのトラップから、学者の身を守ること。もしくはロンのように遺跡に勝手に侵入しようとする者を退けること。遺跡の調査の進捗を早めよという命令なんて、下るはずがない。学者達にロンの力添えを希望されたのならともかく、そうでもない。
　それなのに彼女は、軽犯罪とはいえ、ロンが力を貸す変わりに罪を見逃そうとしている。そこの頭の固そうな男では

ないが、そんなことをしてもいいものなのか。
「そりゃあ僕の罪を見逃してくれるっていうのは嬉しいけど？　でも、お姉さんがわざわざ罪を見逃してまですることじゃないよね？　申しわけないけど、何かあるんじゃないかと疑ってしまうよ。――あまりにも僕に都合がよすぎるんでね」
　エンジリカがロンに提示した条件は、ロンにとって都合がいいものばかり。だが、彼女の任務と遺跡の進捗状況は無関係だ。彼女に益になることがないのに、罪を見逃してまで協力を打診するなど、ありえない。彼女は一つの部隊を纏める責任者だ。このことが公になれば、責任能力が疑われ、築いてきたであろう信頼が失墜する。それなのにわざわざそんな危ない橋を渡ろうとする理由は、一体何なのか。
「僕に取り引きを持ち掛けたのはお姉さんの方。なら、そちらの事情を包み隠さず教えてもらわないと、対等な取り引きとは言えないんじゃない？」
「……そうね、君の言うとおりだわ」
　彼女の目つきが穏やかな笑みから神妙な顔つきに変わった。恐らく彼女はロンを甘く見ていたのだろう。甘い条件をチラつかせれば、簡単に誘いに乗るだろうと。
　ロンはそれにニッコリと笑って応えた。だが目だけは笑っていない。彼女の腹の内を探るべく、警戒は怠らない。
「ロン、君は我が国ルインラトゥスのこと、どこまで把握しているかしら？」
「うーんと……大陸最大の規模を誇る大国、ってことぐらいかな。この国へは来たばっかりだし」
「そう。なら、今我が国が抱えている問題のことについて、何も知らないということね？」
「うん、知らない」
　興味ないし、と続く言葉をロンは飲み込んだ。基本的に世界中を回る旅人は、国の世情に興味を持たない。用がなくなれば立ち去る場所に住む人間が、重税で悩もうが、兵役で戦に参加しなければならなくなったことを憂いていようが、自分に火の粉がかからなければ、どうでもいいことなのだ。ロンもその例外に漏れない。
「ルインラトゥスは、君も知ってる通り、他国に比べ広大な国土を誇っているわ。……国土が広ければ、その分国土内にある古代遺跡も、たくさん点在しているのだけれど……」
　まるで自慢のような内容から始まった説明に、ロンは相槌を打つことなく黙ったままエンジリカの言葉に耳を傾ける。
「二年ほど前に遡るわ……同盟国である隣国で、とある遺跡から財宝が発掘されたの。古代王朝の全盛期に、王が身につけていたとされる装飾品の数々がね。それで――」
「自分の国でも遺跡を発掘してお宝を見つけよう！　って偉い人が思ったわけ？」
「……ええ、その通り。王を中心とした一部の人間が、ね。それ以来、我が国の王は遺跡の調査・発掘にばかり傾倒するようになってしまったわ」
「うわあ……」
　挟んだ言葉が的中し、ロンは顔を引きつらせた。そして同時に、エンジリカの目的も見えてくる。
「王は今、国中の遺跡を調査すべく、ルーンの知識がある学者や研究者を集めているの。でも、全ての遺跡を調査するためには明らかに人手が足りないわ。そのために、僅かでもルーンの知識がある者まで集めているの。莫大な費用をかけて、ね」
「……因みに他の遺跡の進捗具合は？」
「ろくに知識のない人間が調査を進められるわけがないでしょう？　当然どこの遺跡も難航していて、費用が嵩んでいるだけ。恐らくここの遺跡と対して変わらないわ」
　ルーンは文字が読めればいいというわけではない。何度もいうが、ルーンの力を発揮させるには、言葉の意味を真に理解していないといけないのだ。齧った程度の人間を使うのは無駄だとしかいいようがない。
「国民も、初めは遺跡から出るだろう宝物に思いを寄せていたのだけれど、二年経ってもなんの成果も上がらない現実

に、不満が募り始めているわ。でも、王はそんな民の不満を、遺跡から財宝が出れば解消されると思っていて決して辞めようとしない。それどころか、遺跡発掘になんの関係もないルーンの研究にまで投資するようになってしまって……」
「そりゃあ不満も溜まるだろうねぇ」
　結果の見えないことに莫大な金を使われ続ければ、不満や不安が溜まっていくのは当然のこと。そして王自身がそのことに気づき辞めようとしなければ、不満はいつか必ず爆発する。
「……これだけ話せば理解してくれたかしら？　私が君の罪を見逃してまで協力してほしいと言った理由が」
「とってもよくわかりました」
　エンジリカは、ロンに協力させてここの遺跡の調査をさっさと終わらせて欲しいと願っている。成果が出ようが出まいが、一つでも終わらせることができるならば、この場にいる学者をまだ調査が進んでいない遺跡へ回すこともできるし、その分の費用を減らすことができるから。
「……聞くけど、僕が協力を拒んだらどうするの？」
「気が乗らないのなら、私も強制はしないわ。でも、その場合は法律に従って王都へ送検ということになるわね。因みに馬車でも、五日はかかる距離にあるわ」
「それ……僕に拒否権ないようなものじゃん……」
　ハアとロンは盛大に溜め息をついた。軽く目を伏せながら額に手を当てる。この時点でもう答えは一つしかなかった。
「やりますよー……やればいいんでしょー」
「ありがとう、ロン」
「どこまで僕が役に立てるかどうかは、わからないけどね」
　手をひらひらと振りながら、背凭れに深く寄りかかる。
「釈放されたら、当然没収された僕の荷物も返してくれるんだよね？」
　その姿勢のまま、不遜だと思われる体勢で尋ねたことを、誰も重要なことだとは思うまい。決してそれを悟られるわけにはいかず、ロンはあえて『ついで』を装った。
「もちろん。この遺跡の調査が終わり次第君に返すわ」
（チッ。やっぱり終わるまで返してくれるつもりはない、か……）
　はっきり言おう。ロンに遺跡調査の手伝いをする気はさらさらない。一人で（正確に言えば二人で）深いところまで行くことができ、そして戻ってくることができるロンにとったら、手伝いだなんて、面倒以外のなにものでもない。何故足手纏いの面倒まで見なければならないのか。そして何より効率が悪い。自分一人、どんどん先行して調べた方が早いに決まっている。
（そんな苦労したのにもしも見つからなかったら、絶対暫く立ち直れない……）
　テロンダ遺跡に期待をかけてはいるが、ロンが求めているものが必ずあるという保障はないのだ。足手纏いの面倒をみながら、ちまちまと進めたうえにここにもないと判明した日には、どれだけ精神的に消耗するだろう。同じ見つからないなら、一人で全部ちゃっちゃと調べた方が、まだ気持ち的に軽く済む。
（やっぱり、何としてでも取り返さないと……）
　改めて誓った後、『渋々了承した』という表情を浮かべながら顔をあげた。
「今日はもう晩いから、手伝いは明日からね。――アジェット君、ギエルド君」
　エンジリカが椅子から立ち上がると、後ろに控えている二人の方を振り向いた。
「君達に、ロンのお世話兼護衛を頼むわね。確か君たちの隣の部屋は空き室になっていたと思うから、ロンをそこで休ませてあげてちょうだい」
「え……あ、はい。ご命令とあらば」
「うげ……俺達にこのクソガキの面倒を見ろと……？」

　戸惑いながらも、エンジリカの言葉に頷いたアジェットと、あからさまに嫌そうに顔をしかめたギエルド。一見正反対の反応だが、アジェットもまた命令だから仕方なくといった表情やロンに対する不信感を隠しきれていない。未熟者め、と心の中で呟く。
「君達が一番ロンと歳が近いと思ったから、君達に頼むのよ。常に行動を共にするなら、歳が離れた人よりも近い方がお互い気が楽でしょう？」
「まあ……確かに俺らが一番歳が近いとは思いますがねえ……」
（僕はむしろ年配のじいちゃんの方がいいなあ……簡単に撒けるし）
　ロンは心の中で己の願望を願う。口には出さない。何故なら、エンジリカが彼らを選んだ真の理由が、ロンを監視する役目を負わせるためだからだ。
　エンジリカは了承したロンに謝辞を述べたが、当然ロンのことを信用したわけではない。出会ったばかりの人間を、しかも遺跡に侵入した犯罪者をあっさりと信用するのは、ただの考えなしの馬鹿だ。護衛を兼ねた世話役をつけるという名目で、監視役を置くのは当たり前の処置といえる。
「ロンも、この二人で問題ないかしら？」
「僕は誰だろうが構わないよ」
　エンジリカも、ロンがこの二人が監視役だと思っていることくらい、見抜いているだろう。だから下手に疑いをかけるようなことをいうよりも、従順に従っていればいい。初めは大人しさに首を傾げても、それが続けば慣れるというもの。そこから隙は生まれるのだ。
「現状の詳しい説明も、明日学者達にさせるわ。探索に必要だというものも、こちらで全部用意もするし。遺跡の中は複雑な造りなのでしょう？　言ってくれれば、この二人以外にもできる限り人を寄越すわ」
　ロンは彼女の口から出た言葉に、顔が引きつりそうになるのを何とか堪えた。ここで嫌そうな顔をすればせっかくの演技が無駄になる。それに、ここから抜け出すことができれば、彼女の言った通りのことにはならないのだ、とロンは自分に言い聞かせて平静を保った。
「いや……別にいいよ。お付もこいつらだけで充分。僕は生まれつき記憶力がよくってね、遺跡の中で道に迷うなんてことは絶対にないから。その証拠に、結構奥まで行ったけど、ちゃんとこうして出口に戻ってきた。――だから、生きた目印なんて僕には必要ない」
　複雑に通路と通路が繋がっているテロンダ遺跡の中で彷徨わないための措置として、きっと彼らは騎士の人間を間隔を空けて配置することで、それを避けているのだろう。表にあんなにうじゃうじゃと無駄に多く騎士がいたのは、きっとその役割を果たすためだ。彼らからしたら、とても不本意なのだろうが。
「そう。なら、今日はゆっくり休んでちょうだいね。フフ、とても頼もしいわ」
　エンジリカは最後に穏やかな笑みを一つ残し、颯爽とした足取りで部屋を後にする。アジェットは彼女の背に向け一礼するが、ギエルドは大きく肩を落としながら項垂れていた。
「あーあ……相手がグラマラスな美人だったらやる気でるのによー……よりにもよって色気のないガキのお守かよー……ついてねえ」
「うっわ、失礼なおっさんだね。こんな可愛い美少年を捕まえといてさ」
「おっさ……!?　俺はまだ十八だ！　こんな若さ溢れるいい男がおっさんに見えるなんざ、お前目が見えてねえんじゃねえのか、ああ？」
　失礼なことをいうギエルドに、こちらもあえて挑発的なことを口に出せば、相手はいとも容易く乗ってきた。開いていた間を一気に詰められ、ロンが座っている椅子の背凭れに片手を置く。まるで覆い被さるように顔を近づけてくる。
「おい、よーく見ろ。この顔の、どこがお前にゃおっさんに見えるってんだ？　え？」
　近づけられた顔は、本人が言う通りかなり整った顔立ちをしている。少年期を終え、すっきりとした輪郭と鼻梁。切れ長の瞳も、長めの睫が縁取っており、黒に近い灰色の色彩は野性味を感じ、本来なら艶っぽい雰囲気を出すのだろう。

しかし今は苛立ちを露に顰められており、肝心の艶っぽさは影を潜めている。
「アッハハハハハ！　随分必死だねえ。もしかして気にしてた？」
「テメエ……この状態で減らず口が叩けるたぁ、いい度胸だな」
「ギエルド……やめないか。先に彼に失礼なことを言ったのは君が先だろう？」
　バチバチと至近距離での睨みあいに、アジェットが呆れが多分に含まれた声音で仲裁に入ってくる。ギエルドの肩をポンと軽く叩き、首を横に振っている。
「ロン……だったか。君も君だ。言われたからと言い返したら、不毛な争いが続くだけだろう？」
　彼はギエルドを窘めたあと、まるで小さな子供をあやすかのように、わざわざロンに目線を合わせてくる。
（おい、僕は幼いガキじゃないぞ……）
　確かに彼らに比べたら背は低いし、小柄な方でもあるが、それでも一般的に『チビ』と呼ばれる身長ではない。ヒクッと思わず口元が歪むが、ロンは無理やり笑顔を作った。
「そうだね、僕が大人にならないと」
「ハッ、十をちょっと超えただけのガキが偉そうに」
「ギエルド……お前も大人になりなよ……」
　アジェットが呆れたように嘆息すると、ギエルドは舌打ちしながら、ロンから離れた。ロンは自由になると椅子から降りてアジェットの背中に回り、そこから顔を出してギエルドに向かってべーと舌を出す。
「……っの、クソガキ……！」
「わー、あのお兄さんこわーい」
　苛立ち混じりの鋭い眼光で睨みつけられ、ロンはわざとらしく怯えてみせる。
　そんなやりとりを見て、アジェットは深く嘆息した。
「おや髪の短いお兄さん、溜め息を吐くと幸せが逃げるよ？」
「ハハハ……そう思うならギエルドをからかうのをやめてもらえないかな？」
「はーい」
　素直な子供のように返事をする。彼らをからかうのもいい加減にしておこう。ギエルドが変わらず苛立ちを露に、こちらを睨みつけている。
「今日はもう休んでいいんだっけ？　なら僕の部屋へ案内してよ。お兄さん達が案内してくれないと、僕動けないんだけど」
「……今から案内するよ。わたしの後についてきてくれるね？」
「はーい」
　手を上げながら棒読みの返事を返すと、二人の男は互いに顔を見合わせた。
　そしてどこか諦めたような顔をしながら移動しはじめる。ロンはニヤリと不敵に笑いながら、二人の後を追った。

　コンコン、と部屋の扉がノックされる。入室を促すと、一人の部下が恐る恐る中へと入ってきた。
「こんな時間にどうしたの？」
「え、その、あの……王都から、あなた様に、このような手紙が……」
「手紙？」
　自身の眼前にある机の上にそっと置かれたのは、可愛らしい薄い桃色の封筒。うっすらと薔薇の模様が描かれているそれは、誰がどうみても『恋文』だとしか思えない。
「あら……今度は誰からかしら？　フフ、ありがとう、わざわざ持ってきてくれて」
「い、いえ！　そ、それでは自分は失礼いたします！　おやすみなさいませ！」
　彼は来たときとは打って変わって、バタバタとした足取りで部屋を出て行く。バタンと完全に扉がしまり、一人きりになったところで封筒に手を伸ばした。手馴れた手つきで封を開封する。無機質な紙の音と共に、折りたたまれた手紙を開いた。
「……なんですって？」
　呟かれた言葉は低く、苛立ちが混ざっていた。鋭く双眸が細められ、剣呑な眼差しを手紙に向けている。それは、恋文に対する反応とはかけ離れていた。
「やはり、遺跡の調査を進めるしかないようね……。一刻も早く終わらせなければ……この国は……」
　彼女は手紙と封筒を手に立ち上がり、燭台の傍へと立った。そして手にしていたそれを火元へ近づける。火は簡単に手紙に燃え移り、あっという間に全てを焼き尽くした。
　騎士団の宿舎は牢屋や会議用の部屋と同じ建物内にあるらしく、思っていた以上に広かった。そして宿舎の方へと向かう途中、ジロジロという擬音があてられてそうな視線が、あちらこちらから向けられる。
（僕は珍獣か）
　そう毒づきたくなるのを堪え、表面上は笑顔を浮かべながら前を歩く二人の後に続いている。
　向けられる無遠慮な視線は、当然ながらロンの存在を快く思わないものばかり。彼らからしたら、侵入を許した犯罪者が上の命令とはいえ協力者になるのだから、複雑な気分になるのは致し方ない。歓迎してくれ、などとは思わないし、してほしくもない。
　それでもロンとて人間だ。ジロジロ見られて気分がいいわけがない。早く宛がわれる部屋につかないだろうか。
「ついた、ここが君の部屋だよ」
　ロンの願いが通じたのか、漸く到着したらしい部屋の扉をアジェットが開く。手で促され部屋に入ると、一人で使うには申し分ないほど広い奥行きのある部屋がロンを出迎えてくれた。
「おー、あのお姉さん太っ腹だね。この部屋、本当に僕一人で使っていいの？」
「んなわけあるか。当然夜は俺とアジェットが交替で監視するに決まってんだろ」
「監視役も大変だこと」
　不本意を露にするギエルドを後目に、ロンは部屋の中へと進む。そこには二つベッドが置かれている。元々二人で使う部屋なのだろう。ベッドへ歩みより、布団に触れた。あまり柔らかくはない硬い弾力がかえってくる。
「あまり寝心地の良さそうなベットじゃないね」
「わがまま言うなよガキ。俺たちゃ皆同じようなベッドで寝てんだからな」
「べっつにー、屋根と布団さえあれば寝るには充分だよ。ただ、文句も何も言わずにただ寝るだけなのはつまらないじゃん」
「つまらなくていいから、大人しく寝ろ。もうガキは寝る時間だ」

「いい年したおっさんもそろそろ寝た方がいいんじゃない？　あんまり晩くまで起きてると明日の朝が辛くなるよ？」
「ほう……それは一体誰に向かって言ってるんだ？」
「さあて、誰だろうね？」
「また始まった……」
　ベラベラと口から淀みなくでる悪口雑言の応酬に、アジェットは手で顔を覆う。
　実はここまで辿り着く前にも、何度かロンとギエルドはこうした言い合いを繰り返していた。そのつどアジェットは二人を仲裁していたが、何度も続いたせいで億劫になっているのだろう。深い溜め息が聞こえてくる。
「二人とも……何度も仲裁するわたしの身にもなってくれ……」
　げんなりしているアジェットをギエルドが不憫に思ったのか、ロンの方を一睨みした後、わざとらしく視線を逸らす。
「ならアジェット、今日のところはお前がこのガキの監視をしてくれ。明日は俺がやるから」
「……わかった。なら一日交替にしよう」
「おう。じゃ、今日のところは任せた！」
　ギエルドはそう言うなり、脱兎のごとく部屋から逃げるように出て行った。バタンと勢いよく扉が閉められ、ロンとアジェットが部屋に残される。アジェットに体よく押し付けたいだけなのは、目に見えて明らかだった。
　ロンはアジェットに気づかれないよう、口の端をつり上げる。
（よし、作戦通り……！）
　ベッドの上で布団を弄りながら、ちらりとアジェットの様子を伺う。彼は既に誰もいない扉の方を遠い目で見据えていた。その背中は厄介なものを押し付けられたといわんばかりに黄昏ている。決行するなら今だろう。
「ねえねえ、お兄さん。ちょっといい？」
「え、あ、うん。なんだい？」
　彼の傍に移動して、子供らしい仕草を意識しながら袖を引っ張る。振り向いた彼の顔を上目遣いで見上げた。
「あのさ……僕、折り入ってお兄さんにお願いしたいことがあるんだ」
「お願い？」
　今までの生意気な姿はなりを潜め、打って変わってロンはシュンとした顔でアジェットを見上げた。彼はキョトンとした顔をしながらも、話しやすいようにするためか膝を折ってロンと目線を合わせる。生意気な姿が一転したせいか浮かべる表情は訝しげだが、まっすぐこちらを見据え、聞くだけは聞こうという姿勢が伺える。思惑通りの反応に、心の中でほくそ笑む。
　ギエルドという男は、ロンの呪言を耳栓で無効化していたにもかかわらず、こちらを油断させるため効いたフリをしていたような曲者だ。彼に向かってあどけない子供を演じたとしても、胡散臭がられるだけがオチで、何を言っても何か企んでいると一蹴されるに違いない。しかし、生真面目そうなアジェットならばどうか。疑いつつつも、耳を傾けるくらいはしてくれるだろう。相手が聞く姿勢になってくれるならば、後は話の持って行き方次第でどうとでもなる。だからギエルドがロンに嫌気がさすよう、一貫して生意気な少年を演じ、アジェットと二人きりになれる状況を狙っていた。
「目が覚めたときさ、僕が持ってた首飾りがなくなってたんだけど……あの長髪の奴が取り上げたの？」
「あ、うん、まあね……。何かルーンが刻まれているみたいだったから、念のために、ね。でも大丈夫だよ、あれは君の物だから、こちらでは勝手に触ったりなんて絶対にしない。ギエルドもそこはわかっているから」
　やはり首飾りも彼らが持っていたか。ただの装飾品なら没収されなかっただろうが、首飾りにつけられた宝石には、ルーンが刻まれている。研究者がいるのなら、別段害のないものとわかっただろう。が、知識の全くない彼らからしたら得体の知れないものだろう。得たいの知れないモノと得たいの知れない子供を一緒にするわけにはいかず、取り上げた。そんなところか。
「その首飾りなんだけど……あれね、前に僕と一緒に旅をしていた大事な友達から貰ったものなんだ……今はもう一緒

にはいないけど」
「……！」
　アジェットが顔を強張らせる。ロンは顔を俯けながらニヤリと口元を歪ませた。人情話に弱そうと踏んだが、当たりのようだ。
「あの首飾りは、僕の宝物なんだよ。だからね、その……首飾りだけでいいから、先に返してくれないかな……？　あれがないと落ち着かなくて」
　俯きつつも、ちらりとアジェットの様子を伺う。彼はすっかり眦が下がり、ロンに同情的な視線を向けている。そこにはもう警戒心はない。あと少しだ。
「あ、でも……無理ならいいよ。勝手に僕に返したら、お兄さんが罰せられちゃうかもしれないもんね。――僕のせいで足を怪我したようなものだし、流石に申しわけないし……あっちの長髪野郎はどうでもいいけど」
　駄目押しとばかりに、実は彼が自分の足を刺したことを気にしていた風を装いつつ、健気な姿を演じた。しかし生意気だから、ギエルドの悪口も忘れてはいけない。
「――わかった。首飾りは先に返そう」
「ほんと!?　ありがとう！」
　アジェットは一度軽く目を伏せてから、了承を口にする。ロンはわざとらしくならない程度にパアッと顔を明るくさせ、喜んで見せた。
「でも、その前に一つだけわたしと約束してくれないか？」
「約束？」
　てっきりタダで返してくれるものと思ったロンは、その言葉に顔を顰めそうになるのを寸でで堪える。今のロンは生意気だけど根は素直な子供。首飾りを確実に取り返すまでは演技を続けなければ。
「今後は、絶対に遺跡に侵入しないと誓ってほしい」
　ロンは目を見開いて固まる。彼は今、何と言った？
「遺跡は確かに宝物が眠っていて、トレジャーハンターには夢の場所なのかもしれない。だが、遺跡自体は国の所有物になっているから、勝手に入れば不法侵入だ。それに遺跡の中には侵入者避けの危険な罠もあると聞いている。君が罪を犯しながら危険に身を晒すことを、亡くなってしまった大事な友達が望んでいると思うかい？」
「……」
　ロンは無言のまま、再び顔を俯かせた。自然と手に力が篭り、握り締める。
　ここは彼に向かって「うん」と一言頷けばいい。渋々頷くでもよし、その言葉に心を打たれたフリをするでもよし。自分の本音がどうであれ。
　頭ではわかっているのに、ロンの身体は動かない。否、動かすことができない。今、僅かでも力を抜けば、湧き上がる激情を抑えきれず、身を委ねることになってしまう。
「ワローラル殿も言っていたけど、この国は今、国中の遺跡を調査するために、ルーンの造詣が深い者を欲している。これを機に、学者になってみるのはどうだろう。君はルーンを使いこなしているようだし、きっとすぐになれる。そうすれば合法的に遺跡の調査をできるし、護衛も――」
「黙れ（ベ・シレント）」
「――！」
　ロンがボソリと低い声音で呪言を紡ぐと、不愉快な声が聞こえなくなる。――もう限界だった。
　顔を上げると、喉を押さえながら、困惑気に口をパクパクと動かしているアジェットの姿。
「うっさいんだよ、さっきっから！　お前、何様のつもり？」
　限界を超え、溢れ出る感情は抑えが効かず、爆発する。
「人のことよくも知らない癖に、自分の価値観で善意を押し付けんな！　こっちだってな、好きで遺跡に侵入してん

じゃないんだよ！　非合法だってわかってるさ、危険だってこともな！　お前なんかに言われなくたって、充分理解してる！　だけど、こっちにも事情ってもんがあるんだよ！　お前の物指しで勝手に判断するな！　不愉快だ！」
　アジェットがロンの剣幕に翡翠色の瞳を瞠り、呆然とロンを見つめた。ルーンによって言葉を封じられておらずとも、その様子ではきっと言い返す言葉を口にすることはできなかっただろう。
「それに学者になれだ？　ああ!?　僕は学者という生き物が、この世で一番大ッ嫌いなんだ！　頼まれたって絶対なってやるもんかよ！」
　実を言えば、絶対に逃げ出したかったのはそれが原因だ。嫌っている学者の手伝いをしなければならないなど、虫唾が走る。少しでも関わることすら嫌悪感が募るというのに、四六時中一緒にいなければならないなど耐えられない。
　そして、いくら知らないとはいえ、そんな嫌っているものになれと言ったアジェットに激しい苛立ちを覚えてやまない。
「麻痺しろ（ベ・パラルイゼット）！」
「――！」
　刹那、アジェットはがくりと膝から力なく倒れ、床に俯せになる。苦悶の表情を浮かべながら、目線だけでロンを見上げようとしている。ロンは冷めた目でアジェットを見下ろした。
「フン、お前みたいな温室育ちのお坊ちゃんの力を借りようとしたのが間違いだった。暫くそこで蹲ってろ」
　ロンはくるりと踵を返し、苛立ち混じりの足取りのまま、扉を開く。
　最早ここにいる人間の力を利用しようなどとは思わない。ロンにはルーンがあるのだから、自力で道を開いてみせる。首飾りを見つけ、すぐにでもここから抜け出すのだ。
『ロン様！』
「！　レフル!?」
　部屋を出てすぐの廊下に出たところで、背後から声をかけられた。ロンのことを様という敬称をつけて呼ぶのは、この世でたった一人しかいない。
『大変遅くなってしまい、申しわけございません！』
　背中に羽を生やした小さな人間、レフルが、自身の持つ襟まであるさらりとした白髪をなびかせながら、こちらへ向かってくる。
「……ちょうどよかったレフル。荷物一ってか首飾りのある場所はわかってるんだよね？」
『当然でございます』
　荷物の在処はもののついでのように頼んだが、レフルはしっかり調べてきたようだ。これでもう、あの二人の騎士に用はない。
「よし、案内して。でもって取り戻し次第、すぐに逃げよう」
『はい、ロン様。こちらです』
　レフルの先導の元、ロンは走った。当然ながら、道中勤務している騎士と鉢合わせしてしまうのは避けられない。
「な！　貴様っ……！」
「ぐっすりと眠りなさい（スレエプ・ソウンドルイ）！」
　だが、それは遺跡で使ったのと同じルーンで眠らせることで事なきを得る。眠らせてしまえば、人を呼ばれることもない。ロンは次から次へと出合った者達を眠らせていき、順調に進んでいた。
『あともう少し……あそこです！　あそこの扉の先の保管庫の中にロン様の所有物が纏めて置かれています！』
　レフルが示す先の扉の姿が見えると気持ちが逸り、走るスピードが増した。無用心にも、扉の前には誰も立っていない。ロンは回りに誰もいないことを確認したのち、勢いよく扉を開いた。
「あの中か！」
　そこにあったのは、ドッシリと鈍重そうな石で出来た保管庫。大きさは大体直径一メートル程。鉄でできた頑丈そう

な台座の上に乗せられている。そして取っ手のところに金属で出来た錠前がついていた。だから扉の前に誰もいなかったのかと納得する。これなら鍵さえ所持していれば、中身を盗られる心配がない。
　しかしロンは慌てることなく、ニヤリと口元をつり上げた。錠前に触れ、真っ直ぐ見つめる。
「鍵よ開け（イトスアケイ・オペン）」
　呪言を唱えると、カチっという音がした。錠前に触れている手を動かすと、それはあっさり動き、開いた。
「よし、首飾り首飾り……」
　保管庫の扉を開き、中に置かれているモノを掴んだ。それは紛れもなくロンが今まで使っていた鞄そのもの。早速中身を確認すべく、口を開けた。
「地図、財布にえっと……あれ？」
『どうかいたしましたか？　ロン様』
「ない！　首飾りがない！　他のモンは全部揃ってるのに、首飾りだけが入ってない！」
『なっ……！　そんな、わたくしが先ほど確認したときは、確かに……！』
「探し物はこれかい？　お嬢さん（・・・・）」
「！」
　突然背後から声をかけられ、ロンはバッと振り向いた。
「なっ……お前！　何でここに……！」
　そこに立っていたのは、ロンの監視の任をアジェットに押し付けたギエルドだった。片方の手を偉そうに腰に当てながら立っている。そしてもう片方の手にはぶら下げられた首飾りの紐を握っている。その先にあるのは大粒の乳白色の宝石。紛れもなく、ロンの首飾りだった。
「俺も自室で寝ようと思ったんだが、隣の部屋からアジェットに首飾りを返してくれっていう声が聞こえたもんでな」
　曰く、宿舎の方は壁が薄く、両隣の音が漏れ易いらしい。
「俺がいなくなった後にその話を切り出したことがちょいと引っかかってな。やましい心が本当になけりゃ、すぐにでも切り出したい話なはずだろ？　杞憂で済めばそれでいいと思ってここでこうして待機してたわけだが……ほんっとに用心しといてよかったぜ」
　ギエルドは肩を竦めながらやれやれと首をふる。ロンはチッと小さく舌打ちした。いなくなったことに安心したのがいけなかった。細心の注意を払わなければならないのに。
　同時に動転した気が落ち着きを取り戻していく。ロンはギエルドを注視した。見たところ彼は武器になるものを所持していない。しかし、遺跡のときと同じく耳栓を着用している確率は高かった。だが、目の前に首飾りがあるというのに、諦めるわけにはいかない。
「……レフル、あの男の眼前に移動して。でもって僕が合図したら――」
『！　なるほど……了解いたしました、ロン様』
　皆まで言わずとも、レフルはロンのしようとしていることを把握したようだ。そっと音もなくロンから離れ、ふよふよと移動し、ギエルドの眼前に辿り着く。
　その間ロンは、ギエルドと睨みあいをしていた。相手は自分の優位を信じている。ならばこちらが圧倒的不利なのだと見せることが、最も有効な時間稼ぎだ。歯を食いしばりながら紫紺の瞳を鋭く細め、ギエルドの黒灰色の瞳を睨みつける。
「大人しく従ってりゃ、無罪放免で釈放されるってーのに。――流石に二度目はねえぞ。こちらに従う意思がないなら、そのまま王都に送検し――」
「レフル！　今！」
　ギエルドの言葉を遮り、ロンはレフルに向かって叫ぶ。同時に瞼をぎゅっと閉じ、更に手で目を覆った。
　カッ

　眩い閃光が、レフルを中心にして迸る。
「くっ……！　目が……！」
　ロンはギエルドの呻く声を聞いて、手を顔から離し、目を開けた。レフルが腕を組み、ふんぞり返りながらギエルドを見下ろしている。
『ハハハハハ！　わたくし達を出し抜くなど、貴様には早い！』
　レフルが見えているらしいアジェットとは違い、ギエルドは確実にレフルが見えていない。ロンは独りだと思いこんでいる。その思い込みを利用しない手はないだろう。
「首飾りを返せ！」
　目が使い物にならなくなったギエルドに向かってロンは突進する。相手はロンより背が高いため、高く手を掲げられてしまうことだけは防がなければならない。腹部に思い切り身体をぶつけた。
「ぐっ……！」
動揺し隙だらけの身体は、体格差のあるロンの力でも容易く突き飛ぶ。ギエルドは姿勢を崩し、背中から床に倒れた。取り返すなら今しかない。
「返せ！」
　ロンはギエルドが起き上がれないように腹の上にのしかかり、片手で肩を抑えながら、ギエルドの手に握られている首飾りへ自身の手を伸ばす。
　しかし、紐を掴もうとした直前、ガシリと逆にロンの腕が捕まれた。
「人様の上に乗ってんじゃ……ねえ！」
「うわ！」
　強い力で腕を引っ張られるのと同時に、下に引いていた身体が捻られる。その動きに合わせてロンの身体は床へと落とされた。
「残念だったな。目が見えなくても、お前の狙いがわかってりゃ行動の予測はつくんだよ」
「っのやろ……！」
　床に落とされ反転したロンの身体の上に、今度はギエルドがロンの動きを封じるべく覆い被さってきた。両手首を押さえつけられているせいで身体を起こすことができない。
『このケダモノオオオオオ！　ロン様から離れなさい！　今すぐ！』
　レフルが顔を怒りで真っ赤にし、必死にギエルドの腕を蹴り飛ばしているが、それはスカスカと虚しくギエルドの身体をすり抜けるだけ。
　そう、レフルは誰の目にも見えないだけでなく、物や人に触れることもできない。だからこそ鍵のかけられた保管庫をすり抜け、その中にある鞄の中身を確認することができるのだ。しかし、物に触れることができない以上、こっそり首飾りだけを盗み出すということはできなかった。
「どけよ！　この変態鬼畜腹黒ウザ髪野郎！」
「……この状況でよくもまあスラスラと悪口が出るな」
　ロンは組み敷かれた姿勢から逃れるために身体全体を動かしてもがくが、両足を開いた間にギエルドが自身の足を置いているため蹴り飛ばすこともできず、拘束から逃れることができない。
　ロンは忌々しげに顔を顰めながら、レフルの光りのダメージから回復しつつある黒灰色の瞳を睨む。余裕を取り戻し、不敵な笑みを見せるギエルドに苛立ちが募った。
（……ちょっと待て、こいつさっき僕の言葉に返事した……ね）
　ロンが口にした悪口雑言に返事をした。つまり、ロンの口から出た言葉が聞こえていたということ。
「――ねえ。お前、今耳栓してないんだろ？」
「！」

　ギエルドがギクリと僅かに顔を強張らせる。取り戻した余裕が再び崩れ、ロンはニヤリと笑った。彼は耳栓をしているフリをしていただけ。今ならギエルドに、ルーンが効く。もしも手を使ってそれを防ごうとしても、片方の手が離れた隙を逃すロンではない。どちらに転んでも、確実にこの体勢から逃れることができる。
「ぐっすりと眠りな（スレエプ・ソウンド）――」
　優位を取り戻すべく呪言を紡ぐが、それは途中で遮られた。だが、ギエルドの両手は変わらずロンの手首を抑えている。ギエルドは手を使わず、ロンの呪言を止めた。
　目の前と言わず、ゼロの距離にギエルドの顔があった。長めの髪がロンの頬をなぞりながら床に零れ落ちている。
　唇に触れている柔らかい感触。それがロンの呪言を封じた。ギエルドは己の唇をロンに押し当て、呪言を最後まで紡がせなかった。
『貴様あああああああああああ！　なんということをおおおおおおおおおお！』
　レフルが顔を手で覆いながら、絶叫を上げる。ロンもまさかギエルドがそんな手段で呪言を封じてくるとは露にも思わず、身体が固まった。
「……悪く思うなよ、これしか封じる手立てがこっちにゃなかったもんでな」
「っの……！」
　苛立ちに怒りを混ぜて睨みつけると、ギエルドは口を引き結び、顔を背ける。不機嫌になりたいのはこちらの方だ。手首を抑えられて身動きがとれず、もしもまたルーンを使おうとすれば、言い終わる前に口を塞がれるだろう。レフルに再び発光による視界へのダメージを与えても、組み敷かれた現状では何の意味ももたないし、この距離ではいくら目を瞑っていたとしても、ロンにもダメージが及んでしまう。八方塞がりだ。
　ドタバタと外が段々騒がしくなっていく。部屋で身動きがとれなくなっているアジェット、そして廊下のど真ん中で眠りこけている騎士達。彼らを目撃した眠らせていない他の騎士達が、ロンを捕まえるべく動き出したのだろう。ここに人が押し寄せてくるのも時間の問題といえる。
　失敗、その二文字がロンの胸中に過ぎった。

ビリビリと全身が痺れる感覚は、全くよくなるきざしがない。少しでも気を抜けば意識を失いかねない状況で、アジェットはかろうじてまだ意識を保っていた。
（彼が逃げたこと……皆に伝えなければならないのに……）
しかしアジェットの口からは言葉どころか、呻く声さえ口から発することができなかった。全身が痺れるより先にロンが紡いだ呪言。あれが何の意味を表すルーンなのかはわからないが、その呪言を紡いだ直後から声が出なくなったのだから、直接の原因と考えて間違いない。眠らせたり痺れさせたりするだけでなく、ルーンは声を封じることもできてしまうのか。
ロンが部屋を出て行ってから大分時間が経ってしまった。もしかしたら彼は既に外へと逃げてしまっているかもしれない。
だがアジェットはロンが外へと逃げることよりも、他に気がかりなことがあった。
（わたしは彼を……傷つけてしまったのだろうか……）
アジェットは、エンジリカの提示したロンの罪を見逃す変わりに遺跡の調査を手伝わせるという判断に、本音を言えば今も反対だった。不法侵入は軽犯罪とはいえ、罪は罪。相応の罰を負うのが法の定め。そして何より、罪を見逃すことはロンのためにはならない。
だが、エンジリカが難航するテロンダ遺跡の調査を早く終わらせたい気持ちもわかる。今すぐ手伝ってもらえば、きっと順調に調査は進むだろう。ロンが罪を償い、学者になるまで待つというのは建設的ではない。アジェットも一日でも早く調査を終わらせてほしいという思いは同じなため、反対はできなかった。手段を選んでいる余裕など、自分達にはないのだから。
具体的な歳はわからないが、ロンはまだ十を幾つか超えたばかりだろう。まだ親の庇護下にあるはずの、歳若い子供。だが、彼から保護者の存在は感じられなかった。
親のいない子供は、ルインラトゥスでは珍しくない。広大な土地を持つが故に、目端の効く王都周辺地区はまだしも、全く目の届かない辺境の街などでは、流行病などで親を亡くし、生きるためにスリなどの悪事を働く子供が何人もいる。
ロンも幼くして両親を亡くし、生きるためにトレジャーハンターとなって遺跡を巡っているのだろう。だが、たった一人で遺跡に侵入するなど、無謀以外の何者でもない。テロンダ遺跡は内部が複雑で、迷ったが最後、一生抜け出せなくなるという可能性が高いと聞く。他の遺跡もテロンダ遺跡と同じとは思わないが、何が起こるかわからないため騎士団が学者達の護衛をしているのだ。
そんな危険なことを、ロンのことを大事に思う人達が望むわけがない。だからアジェットは、ロンにしかるべき罰を受けさせた後、更正させたかった。彼には深いルーンの知識がある。現在ルーンの知識を欲しているルインラトゥスなら、きっと真っ当な道を歩けるに違いないと思って。
だから大事な友から貰ったという首飾りを返す変わりに、二度と遺跡に侵入しないと約束させたかった。彼に今からでも、真っ当な道を歩んでほしくて。
しかし自分の思いを口に出した途端、ロンの反応が変わった。無言で俯いたときは聞いてくれてるのだとばかり思ったのに、彼が突然紡いだ呪言で声が出なくなる。それにも驚いたが、それ以上に顔を上げたロンの表情に驚いた。
眉間に寄せられた皺、鋭く細められたあどけなさの残る瞳。そして何より、その瞳の中に激しい憎悪の光りが宿っていた。まるで親の仇を見るかのように。そんな眼差しを向けられたことは今まで一度もなくて、アジェットは動揺した。何故彼はそんな目で自分を見るのだろうと。
一方的に捲し立てられた怒りの言葉の数々。正直に言うと、動揺していてあまり内容を覚えてはいない。だが、それ

でもはっきりと頭に残っている言葉がある。
『こっちにも事情ってもんがあるんだよ！　お前の物指しで勝手に判断するな！　不愉快だ！』
　アジェットがよかれと思って言った言葉が、反対に彼の逆鱗に触れてしまったのだろう。確かにアジェットはロンのことを何も知らない。何故危険を冒してまで遺跡に独りで侵入しようとしているのか。今までどんな暮らしをしてきたのか。どうやってルーンを学んだのか。知らないことが山ほどある。
　だが、自分は決して悪いことを言っていないとも思っている。どんな事情があるにしろ、ロンも自身が罪や危険を冒していることを自覚していた。だからといって法を破っていいわけがない。法は全ての人民の安全と幸福を守るためにあるのだ。それを簡単に破られては、人々に余計な不安を与えてしまうかもしれないのだから。
　ロンを傷つけて申しわけないのと、法を守らせたいという二つの気持ち。相反する思いがぐるぐると頭を巡っている。
　法を守るのは当然だ、だが、その思いがロンを傷つけた。ロンを傷つけたのは事実だ、だが、法は守らせなければならない。同じことを肯定しては、また否定して、の繰り返しだ。そしてかろうじて繋いでいる意識を自身の思考にあてていたせいで、この部屋に誰かが近づいていることに気づかなかった。
「おい、本当にアジェットは無事なんだろうな？」
「だから自分の目で確かめればいいって、さっきっから言ってるだろ。図体だけでかい男が、しつこいんだよ」
「んだと――お、アジェット。大丈夫か？」
　開きっ放しの扉から、二人の人間が姿を現す。先に入ってきたのは、アジェットがよく知るギエルドだった。彼はまっすぐアジェットの方に駆け寄ってくる。遺跡の中でも、ロンのルーンに抗うために刺した腿の応急処置をしてもらった。また彼に迷惑と心配をかけてしまったことを苦々しく思う。
「触らない方がいいよ。全身痺れてるから」
「てめえ……いけしゃあしゃあと！」
「忠告してあげただけ感謝してほしいもんだね」
　そしてギエルドについて後ろにいたのは――出て行ったはずのロンだった。戻ってきたのか。
「なら！　アジェットをこんな風にしたお前が！　責任もってアジェットを床から動かせ！　お前ほどのルーンの使い手なら、それくらいできるだろ！」
「面倒くさ……」
　気だるげな声は、本当に面倒で堪らないといった調子だった。重い足取りでゆっくりこちらに近づいてくる音がする。
「浮け（フロアト）、アジェット」
　ロンが呪言を紡ぐ。瞬間、動かない身体がまるで何かに引っ張られるかのように、床から離れていく。ルーンは人を浮かせることもできるのか。しかし不思議と、浮遊感は感じない。自身が宙に浮いているという実感はあまりなかった。
「彼をそのまま仰向けにしてベッドの上へ（ヘイスマデスピネアスイトイスアンド・イトイストアベドトプ）」
　今までにない長い呪言の後、アジェットの身体がゆっくりと反転していく。床から壁、そして天井と映るものが変わっていった。そして音もなく宙を移動する。あるところでピタリと止まると、少しずつ下降し、床よりは柔らかい布地に背中が触れる。これは布団か。
「これでいいだろ？」
「……おう」
　視線を横にやると、ロンが偉そうに腕を組みながらギエルドを睨みつけていた。顰められたその表情は、まさに不機嫌としかいいようがない。ギエルドの後からやってきたことを考えると、彼に捕まったために連れ戻されたのか。また、ギエルドに謝罪すべき事柄が増えた。

「今日のところは、この部屋はアジェットに使ってもらう。お前にゃ俺達の部屋で寝てもらうからな」
「だったらもう寝る。監視でもなんでも好きなだけしてろ」
　ギスギスとした雰囲気の中、ロンが隣のアジェット達の部屋に向かうべく背を向ける。そのときアジェットの視界に飛び込んできたものに、アジェットは息を飲んだ。
　まるで銀糸のようなさらりとした襟首までの髪、激しい動きができそうにない白の長衣を纏った、掌ほどの大きさしかない小さな人間。更に、その背中から生えている透き通った四枚の羽は、見間違えようがない。
（妖精……！）
　初めて見たのは、テロンダ遺跡の中。このときはロンにルーンをかけられており、意識が朦朧としていたから見間違えたのだと思った。二度目はロンを迎えに行った牢屋。ロンの近くで浮いているのをしっかりと両目に焼き付けていた。しかし、ギエルドと口論をした後、妖精の姿はそこになかった。つまり、また見間違えたのだと自分を納得させた。
　これで三度目。流石にここまでくると、自分の目を信じるしかない。背中に羽の生えた妖精が存在していることを。
　妖精はロンに付き従っているようだった。遺跡ではロンの行く手を阻むアジェットを怒り飛ばし、今も部屋を出て行くロンの後をついていっている。妖精のことは翌朝、ロンに聞けば何かわかるかもしれない。彼の言うとおりであるなら、この痺れは翌朝にはとれるはずだから。
（今は……身体を休めることに専念しよう）
　逃げ出したロンが戻ってきた。アジェットの一つの懸念事項は解決されたのだ。他の気になることは明日に回したとしても問題ない。
　アジェットは目を伏せ気を楽にさせると、あっという間に意識を手放した。
　ロンは最悪の気分でベッドの上に横になる。また捕まった上に、首飾りは他の荷物とは別の場所に厳重に保管されることになってしまった。そしてそれを返す条件として、遺跡調査の手伝いをしろと、騒ぎを聞きつけてやってきたエンジリカに釘をさされたのだ。
「ちょいと待って下さいよ。このガキ、俺達を油断させるためにいろいろ画策してたんだぜ？　もう手伝わせるなんて話はなしに――」
「言葉というものは、無責任に紡ぐものではないわ。ロン、ルーンを使いこなす君なら、それがわかるでしょう？」
「……」
　異を唱えるギエルドを無視し、エンジリカは例え本意ではなくとも、ロンは手伝うと口に出したのだからその責任を全うしろと言ってきた。思わず訝しく思う。
　一度脱走を試みたのなら、二度三度とそれを繰り返すことを考慮していないのか。当然ロンは逃げ出すことを諦めたりはしない。彼らの言うことを素直に聞く意思は毛頭なかった。
「こちらとしても、君としても、お互いの利益は一致していると思ったのだけれど、一体何が不服なのかしら？」
　彼女はロンに視線をあわせてきた。どいつもこいつも、人を子供扱いする。
「不服？　何もかもに決まってる。僕はお前らみたいな奴らと馴れ合うつもりはない」
　ロンには遺跡に不法侵入したという気はない。遺跡の扱いは国ごとに異なっているが、基本的に放置している国がほとんどだ。ルーンは齧った程度では到底解読はできず、深い知識を持つ人間は限られているから。それを無理やり調査しようなどとしている無謀な国は、このルインラトゥスくらいだ。世界一広大な国だからこそ、潤沢な資金が確保できる。
　遺跡は場所によって、当然ながら仕組みが全く違う。テロンダ遺跡のように複雑難解なものもあれば、構築にのみルーンを使い、誰でも進入できる遺跡もある。ルインラトゥスの隣国で見つかったとされる装飾品は、そういった遺跡から見つかったのだろう。つまり、運がよかっただけだ。
「王が遺跡発掘にどれだけ力を入れようが金をかけようが、僕の知ったことじゃない。僕は、自分のペースで目的を果たしたいだけ。足手纏いの面倒なんて、真っ平ゴメンだ。何より、学者と行動を共にするなんて吐き気がする」

菫色の瞳を睨みつけながら、言葉を吐き捨てる。こちらは決してお前の望むようには動かないと。
「――成る程。つまり君は、自分の好きなように遺跡を探索したいのね」
しかし返ってきたのは満面の笑みだった。だが、ゾゾゾと背筋に悪寒が走る。確かに顔は笑っているのに、目が笑っていない。
「なら、こういうのはどう？　君はアジェットとギエルド、二人の騎士だけを護衛に遺跡の中を自由に探索する。他の学者達の手ほどきはしなくてもいいわ。彼らに会いたくないというのなら、彼らにもできるだけ顔を合わせないように釘をさしておくから。だから君の好きなときに行って、好きなときに帰ってくればいい。成果はそのときに聞かせてちょうだい」
「……」
ロンは口先がひくひくと動くのを堪えることしかできなかった。今この図を客観的に見た場合、駄々、もしくは癇癪を起こした子供を冷静に宥めようとしている大人の図だろう。ちらりと回りを見回すと、圧倒的にエンジリカに心配そうな目を向けている者達ばかり。ロンに集まっていた視線が一気にエンジリカへと向いた。
ロンへの敵愾心以上に、彼女への同情心の方が上回っている。
（この女、自分の使い方がよくわかってやがる……！）
身体を屈ませ、ロンに視線を合わせた状態では、目が笑っていないことに気づいている者はいないだろう。生意気な子供を持ち前の包容力によって受け入れる、心優しい女隊長様の完成だ。
エンジリカも本来であれば、ロンをとっとと送検してこの件を終わらせたいに違いない。笑っていない目がそれを物語っている。しかし、どうやらそうも言っていられない事情があるのだろう。わざわざ煮えくり返っている腹を抑えてまで、ロンが戻って来やすい状況を作ろうとしている。
もしここでロンが異を唱えれば、非難は先ほどまでの比ではない。心優しくて美人な女隊長を裏切った、と取り巻き達の敵愾心が煽られる。そして是が非でもロンに手伝わせたいエンジリカは、それに気づきながらも、どうしてもだめ？　とか言って聞き返してくるだろう。それをロンが否定し、また騎士達の敵意が増し――の悪循環に陥る。確実に。
今ならまだより面倒くさい状況に陥る前に、元の鞘に収まることができる。同時に、彼女は何とお優しい方だと騎士達の心の掌握できる。まさにエンジリカにとって一石二鳥の状況。
（この女の思惑に乗るのはつまらないけど……）
彼女の目は、手伝わなければ首飾りは返さない、とも言っている。レフルが心配そうにこちらを見遣ってきた。彼もまたエンジリカの思惑に気づいたのだろう。ロンにはもう、一つしか道が残されていないことに。
（やっぱり感情的になるとろくなことない……）
敗因は、後先考えずに感情をぶちまけたロンにある。ここはもう折れるしかない。
「……わかったよ。それでいい」
「――ありがとう、ロン」
渋々ながら肯定の返事をすると、騎士達からエンジリカへ、憧憬の眼差しが注がれる。流石ワローラル様だ、と。
そんなことがあって、ロンは精神的にかなり疲れていた。その上、ロンが使うはずだった部屋で動けなくなっていたアジェットを、ルーンを使って浮かせて移動させたのだ。一体、今日だけでどれだけルーンを使ったのだろう。明日もまた遺跡の中で扉を開けるためにルーンを使うのだから、これ以上の魔力の消耗もさせたくない。――首飾りが手元にあれば、魔力の消耗なんて考えなくていいのに。
『ロン様、大丈夫ですか？』
レフルが横たわるロンの頭上から、琥珀色の瞳を心配そうに細めた。彼の言葉に返してやりたいとは思うが、今ここにいるのはロンだけではないため、コクリと軽く頷くようにして首を動かすに止める。
「……おい、風呂に入りたきゃ先入れ」

　この場にいるロン以外の人間、ギエルドが素っ気無く部屋の中にあるもう一つの扉を指差した。個室に風呂までついてるなんて、珍しい。大抵こういった詰所は大浴場が一つあるのが主流なのに。この建物が無駄に広いのは、一つ一つに風呂までつけたからか。なんという贅沢だ。だが、
「めんどくさい。だからいい」
「……」
　今のロンに、個室の風呂は魅力的には映らない。今日はもう、何もしたくはなかった。
「お前……面倒だから風呂入らないって、自分が女っていう自覚はねえのか」
「ないよ」
「即答かよ」
　呆れた声が聞こえてくる。それに返すこともしない。ロンにとって、それは事実なのだから。
『ロ、ロン様、お疲れだとは思いますが、お風呂に入られた方がいいのでは？　ここ久しく宿をとってはいませんし、気分もきっとサッパリしますよ』
　レフルがロンの顔を覗き込みながら、入浴を勧めてくる。気分もサッパリするだろうという言葉に若干惹かれた。
『あのケダモノの監視はこのわたくしめにお任せください。覗こうとしたら、発光して目を潰してやりますので！』
（そこは微塵も心配はしてないけどね）
　ギエルドは先の言葉の通り、ロンが少年ではなく、男装の少女なのだと見抜いている。保管庫でロンのことを『お嬢さん』と呼んだことを考えると、牢からロンを連れ出したときにはもうわかっていたように思えた。
　バレたからといって、ロンは態度を変える必要は感じていない。この性格は元からであるし、男装していることに、そこまで深い理由があるわけでもないから。
　それにギエルドは、ロンのことを色気のないガキと評している。実際ロンも自身に女としての魅力がこれっぽっちでもあるとは思ってもいないので、相手が劣情を催す可能性はゼロに近いだろう。
　ロンはむくりと起き上がった。明日からは厭でも手伝わされるのだから、風呂はいい気分転換になるだろう。
「やっぱ入る」
「……そうかい。じゃあさっさと入ってくれ」
　ギエルドの言葉を受けながらロンはベッドから降り、浴場に繋がる扉に向かう。開けるべく戸口に手をかけたとき、ふとした疑問が頭を掠めた。くるりと振り返ってベッドで寛いでいるギエルドの方を向く。
「ねえ。お前さ、どうして僕が女だって気づいた？　僕、そんな素振り何も見せてないと思うんだけど」
　ロンが女らしくないことは、自分が一番理解している。それなのに何故ギエルドは、ロンが女であると見破ったのか。
「んあ？　ああ……遺跡から出るとき、お前を担いだの俺なんだよ。男にしちゃ細っこくて、おまけにやわらかいときたら、もう男じゃねえだろ。他の連中はどうか知らねえがな」
「あー、なるほど」
　見た目や言動ではなく、直接身体に触れられてしまえば、男と女の違いはごまかしようがない。
「そっちこそ、何でわざわざ男のフリなんざしてるんだ？」
　ギエルドの方からも質問が返ってくる。特に隠すことでもないため、ロンはさらりと答えた。
「女じゃない、ってだけで避けられるトラブルは多いんだよ。旅をしてるとね」
「……なるほどな」
　ギエルドは言外に含まれた言葉を理解したらしい。顔を僅かにしかめながら頷いている。
「でも、男でもいいっていうヤツもいるんじゃねえの？」
「確かにいるけど、女でないと嫌だってヤツの方が圧倒的に多いだろ」
　低い確率でも、そんな相手に出くわしたことも確かにある。だが、その度にルーンを使い、己の身を守ってきた。特に『ぐっすりと眠りなさい（スレエプ・ソウンドルイ）』は聞いた者を眠らせるため、簡単に相手を無力化できる。短所

は、聞いた者を無差別に眠らせてしまうということか。無差別に効果を発揮してしまうのは、このルーンだけにいえることではないが。

ロンは話は終わったとばかりに、今度こそ本当に風呂に続く扉を開く。レフルがロンに向かって一礼し、扉の外へ待機した。

ピシャリと扉を閉め、脱衣所に置いてある籠の中にポイポイと服を放り込む。一糸纏わぬ姿になり、浴槽の扉を開けようとしたところ、備え付けられている洗面台の大きな鏡に気づいた。紫紺色の丸い瞳が、こちらを見つめている。

鏡に映ったロンの胸元には、ささやかながら膨らみがある。手足はすらりと長いが細く華奢で、男ならばついているものが、ロンにはない。女だという自覚がなくとも、こうして己の裸身を見ると、やはり自分も女なのだなとまるで他人ごとのように思った。

一度目を伏せて開くと、ロンの視線は首にいく。常にスカーフで隠されているところへ。その視線は次第に下がり、両の手首へ、そして鏡に映っていない自身の足首へ。

（……今は余計なことを考えないようにしよう）

気が滅入っているときは、考えもどんどんネガティブな方向へと行ってしまいがちになる。これから気分転換として風呂に入るのだ。ロンは頭を振って気持ちを切り替え、浴槽へ続く扉を開ける。

湯船はそれほど広くはない。大の男であるアジェットやギエルドには小さいだろうが、ロンにはちょうどいいくらいだった。シャワーの首を掴み、湯の印がついた蛇口を捻る。温くなく、熱すぎない丁度いい温度の湯が、足元を濡らした。シャワーの頭を頭上に移動させ、頭から湯を被る。

（ああ……気持ちいい……）

久しぶりに触れた温かいお湯は、ロンの全身を温めてくれる。今この時間だけは、嫌なことを全て忘れていられそうだった。

埃っぽさが漂う室内。ドンと居並ぶ大きな棚は、どれも仕切り板で区切られた腹を空っぽにして佇んでいる。その棚の中身と思わしきたくさんの本は、床に無造作に積み重ねられ、山のようになっていた。

本の山を辿っていくと、一部雪崩が起きたように崩れている部分があった。その中心に、本ではない異物が、埋もれている。

密閉された空間には場違いな、無限に広がる青空のような空色の、艶のないボサボサの髪が本の隙間から生えている。別のところには、病的にまで青白い色をした五本の指がついた手が、はみ出ていた。

崩れている本の表面は、分厚い埃が溜まっている。それは何年も、否、気が遠くなるほどの月日が経過していたことを、示していた。

スゥ……スゥ……。

規則的な小さな寝息が、埋もれているところから聞こえてくる。

本に埋もれた少女は、その日からずっと眠り続けていた。日が暮れて夜になり、朝になる。

しかし、少女は目を覚まさない。夜になっても、朝になっても、埋もれている少女が起き上がることはなかった。

永い月日を経た今も、小さな寝息は続いている。少女はいつまで眠り続けるのか、それは誰にもわからない。

　目を覚まして身体を起こす。片膝を立ててそこに肘を置き、垂れ下がる前髪を押さえた。ちらりと隣を見遣ると、そこにいるのは見知った幼馴染の同僚ではなく、珍しい空色の髪をした少女の姿。

「げ……ああ、そういや昨日ここで寝てたんだったな……」
　ロンがアジェットをルーンで全身麻痺させたせいで動かせなくなり、仕方なく自室で寝かせたのだ。本来なら、アジェットがロンを見張るはずだったのにも関わらず。
（こうしてみりゃ……ふっつーに可愛い顔してるってのに）
　すやすやと眠っている寝顔は、あどけなさがありありと残っており、生意気な雰囲気はすっかりなりを潜めている。伏せられた瞳を縁取る睫は長く、空色の髪はふわりと柔らかな雰囲気を纏う。彼女が何故旅をしているのかは知らないが、正直言って勿体無いとギエルドは思った。少し性格がまるくなるなり、もう少し髪を伸ばしたりすれば、誰の目にも可愛らしく映る少女になるだろう。
　コンコン、と扉がノックされた。ギエルドはベッドから一度降りて立ち上がってから、相手に入室を促す。
「おはよう、ギエルド」
　早朝だというのに、既に頭の上からつま先までしっかりと着衣を整えたアジェットが、爽やかな笑みと共に現れる。
「はよさん、アジェット。身体はもういいのか？」
「ああ、まあね。目が覚めたらすっかりよくなっていたよ。彼の言うとおりだった」
　アジェットは苦笑しながら、まだ夢の世界にいるロンを見遣る。その後すぐにロンから視線を外し、何もないところを一身に見つめだした。一体何をそんな真剣な眼差しで見ているのか。不思議に思いながらアジェットを見ていると、彼は徐にこちらを振り向いた。
「……ギエルド、貴方は妖精がこの世にいると思いますか？」
「は？　妖精？　いきなりどうしたよ……でもってここで敬語はヤメロ。このガキんちょがいつ起きるかわからねえだろうが」
　アジェットに釘を刺すと、彼はうっかり滑らしたと言わんばかりに顔をハッとさせる。ギエルドはそれを見て腰に手をあてながら軽く息を吐く。アジェットの真面目な性格故に敬語を使わないということに抵抗があるのはわかる。だが、それではこちらは困るのだ。何故アジェットが同年代であるギエルドに敬語を使っているのか、などと聞かれてしまう。アジェットもそこを理解しているからこそ、今では大分慣れてはきているのだが。
「って、話が逸れたな。で、ほんとにどうしたよ？　急に妖精が一とか言い出しやがって」
　突然何故そんなファンシーな存在のことを口に出し始めたのか。しかし色素の薄い亜麻色の髪に翠の瞳を持つアジェットの顔は甘く整っているため、そんなことを口に出してもあまり違和感がない。もしもギエルドが同じことを言ったら、きっと回りの連中は爆笑するだろう。似合わないことを言うなと。
「……そうか、あな……君には見えていないのか」
　アジェットが再び視線を何もない一点へと戻した。ギエルドもそこをじっと見つめるが、やはり何かいるようには見えない。
「そこに妖精さんがいるってか？」
「……ああ。まるで細かな糸のような銀色の髪に、白で統一されたローブを纏っている。背中から透き通った薄い四枚羽が生えていて……」
「随分具体的だな、おい」
　アジェットがいうには、その場で宙に浮いており、ロンのことをずっと見つめているらしい。こうしてこちらがその

妖精に対して話しているというのに、気づいていないのか、こちらを見ることも瞳が揺らぐこともないという。そして実は、遺跡でロンを捕まえたときからその妖精の姿があったとか。
「……こいつが起きたら聞けばいいんじゃねえの？」
「そうだね。そうするよ」
　口に出したのがアジェット以外の人間ならば、ギエルドは決してまともに聞こうなどと思わなかっただろう。ギエルドの目には見えないのだから、信じろという方が無理がある。だが、相手はクソ真面目なアジェットだ。ふざけて妖精が見える、なんて言うはずがない。
　それでもギエルドには妖精の姿は見えないのだから、妖精がロンを気にかけているのならロンに聞けとしか言い様がなかった。神妙な表情で何もないところを一身に見つめる姿はシュールだったが、あえて言うべきことでもない。こうして見ているのはギエルドだけなのだから。
「とりあえずそろそろ起こすか……おい、起きろクソガキ」
　ギエルドはロンが眠っているベッドの近くに寄り、腰を折って顔を覗き込む。んん……と子供らしいくぐもった声が聞こえてきた。
「あとちょっと寝かせてよ……ランん……」
「ラン？」
「……おい、俺はそのランってヤツじゃねえぞ。だからとっとと起きろクソガキ」
　ギエルドはベッドの端を、足でガンガンと蹴り飛ばす。ゆさゆさとロンの身体が揺れ、漸く伏せていた紫紺の瞳が開いた。
「うげ……」
「色男が二人もいるってのに、その反応はおかしくね？」
　目を開けた途端、盛大に顔を顰めたロンにギエルドは内心呆れた。ロンは自分で認めた通り、少女であるはずだ。今までギエルドは、女性から熱い眼差しをおくられたことはあれど、こうして嫌悪感を丸出しにされた経験はない。少なからず自分の容姿に自信のあったギエルドは、その反応に少しショックを受けていた。異性ならば誰もが己に見惚れるなどとは流石に思ってはいないが、嫌悪感を抱かれるとも思っていない。自分が寝ているロンの姿を見たときも同じような反応をしたことは、完全に棚にあげている。
「おはよう、ロン」
「……お前もいたんだ、短髪」
　ロンは顔を顰めたまま、むくりと身体を起こす。布団によって隠れていた華奢な身体が露になった。
「……お前、スカーフ巻いたまま寝てたのか？」
　彼女の首には、寝る前にもつけていたスカーフ。更には、二の腕まである長い手袋までつけたままだった。こういうものは、寝るには煩わしいものではないのだろうか。少なくともギエルドだったら、この二つは外してから眠る。たとえ外すのが面倒であっても。
「悪い？　外すのが面倒だったんだよ」
　丸い紫紺の瞳が、不機嫌な色に染まる。不遜な態度は、一日経っても全く変わらずだった。
「……それより、お前アジェットに何かいうことがあるんじゃないのか？」
「は？」
「とぼけんなよ。昨日お前がアジェットに何をしたのか、もう忘れたとか言わせねえぞ」
　ギエルドは二人のやりとりの途中で保管庫に向かったため、彼らにあったできごとを全て把握しているわけではない。だがエンジリカとの対面の後、部屋に向かう途中アジェットはどうしたと問うたギエルドに、部屋で這い蹲ってると素っ気無く返したロンの姿は、まだ記憶に新しい。詳しく問い詰めると、アジェットを利用して首飾りを取り戻そうとしたが、気に障ることを言われたためルーンを使って身動きをとれなくした、とのたまった。

　実際部屋に戻ってみると、アジェットはピクリと動くこともなく、更に呻き声すらもあげない。それなのにそうした張本人は何でもないように、痺れているから触らない方がいいと言ってくる。こんなに自分勝手な奴を見たことはない。朝目覚めたら、真っ先にアジェットに謝罪をさせようとギエルドは思っていた。
「こいつにしたこと？　――ああ、声封じて全身麻痺させたあれね」
「は、声？　おま、そんなことまで……！」
　だから声をかけたとき、何の反応もなかったのか。全身を痺れさせるだけでは飽き足らず、声まで封じるなんて。
「お前に常識って言葉はねえのか！」
「へー。知らなかったからって勝手に人の踏み込んでほしくない領域にまで足つっこんでくるのは、常識的なことなんだ」
「はあ？　お前何を……」
　紫紺の瞳が揺らぐことなく、ギエルドの瞳をまっすぐ見据える。
「先に僕の領域に踏み込んできたのはこいつ。感情的にとった行動だってのは認めるけど、謝る気は更々ないよ。悪いことをしたとは思ってないんでね。よくも知らない第三者に、口を挟まれる筋合いはない」
「んだと……！」
　しかし反論したいのに言葉が見つからない。ロンの言うとおり、ギエルドはアジェットが酷い目にあったことを怒っているだけであり、二人の間で起きたできごとを全て把握していないのだ。
　アジェットを見遣ると、彼は困ったように俯いていた。
「……ロン、君の言うとおり、わたしは事情も知らずに勝手なことを言ったと思う。――だけど」
　アジェットの翠の瞳がロンの紫紺の瞳をとらえる。そのときにはもう瞳に迷いはなく。交差する視線は、互いに一歩も引こうとしてしない。
「わたしも自分が言ったことが悪いことだとは思わない。だから、傷つけてしまったことは謝るが、前言を撤回する気はない」
　はっきりと言い放ったアジェットの言葉をロンはどう受け取ったのか。ロンは目を軽く伏せてからこちらを横目で見てくる。
「だってさ。僕もこいつに理解を求めるつもりはないし、これで痛みわけだ」
　張本人であるアジェットが恨み言を言わないのであれば、ギエルドは何もいうことができない。お互い相手のしたことを責めるつもりはないが、変わりに引くつもりもないときたなら、第三者がどうこう言うのは筋違いだ。
「……アジェットが納得してるってなら、俺はもうこの件にゃなんもいわねーよ」
「すまない。ありがとうギエルド」
　気持ち的にはロンのことを許しきれていないが、よく考えたらギエルド自身もロンに責められてもおかしくないことをしていたことを思い出す。
　保管庫で揉み合いになったとき、ロンが紡ごうとしたルーンを防ぐために己の口で口を無理やり塞いだこと。いくら本人に女という自覚がないとはいえ、ロンがまだ歳若い少女であることに変わりはない。好きでもない男から唇を奪われたら、普通の少女は傷つくはずだ。特にロンぐらいの十台半ばぐらいの年代ならば、その手の行為に憧れを抱いているもの。それについてギエルドはロンから激しい罵りを受けても、何も言い返せる言葉はない。他でもないギエルド自身が口付けをしたという行為に罪悪感を抱いているから。
　しかしされた本人は、直後は忌々しげにこちらを睨みつけたものの、その後一切、ギエルドを責めようとする素振りがない。本人が何も言わない以上、こちらから気にしてないのかと聞くのは憚られた。もしも忘れようとして何も言わないでいるのであれば、それをつつくような真似をしたくない。
　つまりは、ギエルドもまたロンに借りがある。ロンのしでかしたことを許せないと思うなら、自分もまた彼女に恨まれることをした。お互い様だ。今は気持ちの整理がつかなくとも、それは時間が解決してくれるだろう。神経の図太さ

には自信がある。
「そうだ、ロン。君に聞きたいことがあったんだ」
「ん？　何？」
　ロンがベッドから降り、備え付けられている洗面台へ行って顔を洗って戻ってきたときアジェットが切り出した。
「君は妖精という存在を信じているかい？」
「はあ？」
「おま……いくらなんでも、質問が直球すぎるだろ」
　案の定、ロンはわけがわからないといった呆れ顔をしている。しかし真意を伝えず、腹を探るように聞くなど、真っ正直なアジェットにはできないだろう。ギエルドもまた、そんな器用なマネはできない。
「遺跡で君に出合ったときから、まるで見守っているかのように君に連れ添う羽の生えた小さな人間がいるんだ。今も、そこにいる」
　アジェットがずっと見つめていた何もない空間を指差す。ロンは呆れた眼差しのまま指差す方を見て、大袈裟に肩を竦めた。
「妖精ってのは、人間の空想が生み出した物語の中でしかいない存在だろ？　いるわけないじゃん」
「だが……実際に……！」
「お前の目の錯覚か、頭がおかしくなったんじゃないの？」
（まあ……普通はそうなるよな……）
　アジェットは納得がいかない顔をしているが、ギエルドの目に見えていない以上、ロンがしらをきっているとは断言できない。むしろ、それが普通の人間の反応だろう。それに、もしもアジェットの言うことが本当だとしても、実はこの妖精と自分は――と真実を語ってくれるとも思えなかった。自分達は昨日出合ったばかりであり、しかも不法侵入したロンを捕まえたという最悪の出会い方をしている。こちらがロンのことを信用できないのと同じように、向こうもこちらを全く信用してなどいないだろう。
「あー……、この話はここで終いな。とっとと外に出るぞ。ワローラル女史が、きっと待ちわびてる」
　見るもの全てを魅了するような笑みを浮かべながら、ロンが来るのを今か今かと待っているであろう、異性の上司の姿を想像する。
　そういえば昨日、彼女の様子がおかしかった。常々、遺跡調査が全く進んでいないことに対して、何とかならないだろうかと考え込んでいる姿は見かける。だから、始めにロンに協力を依頼したことは特に何とも思わなかった。ギエルドとしても、宝が出るかわからない遺跡発掘を続けるよりも、他にもっと建設的な金の使い方をしてほしいと思っている。むしろそれくらいのことは融通が効いていいとすら思っていた。
　だが、ロンが脱走を図った後の態度は妙だった。ロンはこちらに協力する意思はなく、荷物――首飾りを取り戻しさえすればもう用はないと、ずっと隙を伺っていた。その思いは今も変わってないだろう。首飾りをロンの視界に入れたが最後、眠らせるルーンでその場にいる人間全てを眠らせ、逃走する。
　エンジリカは遺跡調査団の護衛騎士達を纏めるリーダーだ。統率力に部下から慕われるカリスマ性、そして状況判断力に長けている。そんな彼女が、ロンがこちらの意思に従うなんて思っているはずがない。
　事実、ロンがギエルドと揉み合ってでも取り返そうとした首飾りは、エンジリカが預かることになった。つまり、ロンがエンジリカに従わなければ首飾りを取り戻すことができないことを意味する。いくらロンが先に罪を犯したといえど、物を取り上げて言うことを聞かせるのは、褒められた行為ではない。これでは、ただの脅迫だ。そのことに気づいている人間は、あのとき何人いただろうか。
（そこまでしてロンに手伝わせたくなった……もしや事情が突然変わった、か？）
　そうでなければそこまでする理由が見当たらない。
　ギエルドは二人に気づかれないように溜め息をついた。悪いことが起きないことを祈って。

　アジェットとギエルドに連れられ、ロンは再びあの女性と顔をあわせることになってしまった。昨日のやりとりで、すっかり彼女に対する印象が悪い。それを知ってか知らずか、エンジリカはロンを見とめると、いつもの優雅な微笑みを向ける。
「おはよう、ロン。よく眠れたかしら？」
「……それなりに」
　エンジリカが首飾りの行方を握っている以上、下手に逆らうことはしないほうがいいだろう。機嫌を損ねたからと約束を反故にするような人間ではないだろうが、あまり相手にしたくない。適当に頷いて会話をとっとと終了させたかった。
「朝食はまだよね？　一緒にどう？　今日の段取りの話もしたいし」
　しかし彼女の方は簡単にロンを解放するつもりはないようだった。ロンは内心大きく項垂れる。その際ちらりと不自然にならない程度に己の左肩付近に浮いているレフルに視線を送った。余計なことを言うなよ、という意味をこめて。いくらアジェットにしか姿が見えず、ロンがシラをきりとおせば他の誰にもレフルの存在を知られることはないとはいえ、アジェットの前では無言を貫いてもらったほうが都合がいい。もしもお互い意思疎通ができているとアジェットに感づかれたら、再び彼はロンに妖精が云々と説明を求められるだろう。正直煩わしい。レフルには申し訳無いが、暫くはただロンを見守るだけの妖精でいてもらう。
「僕、朝はいつも食べないんだよねーお腹すかないから。――話がまだあるなら聞くよ。それにこっちもいろいろと要望もあるし」
　とてもではないが、仲良く朝食を食べる気分ではない。それなら話にだけ混じり、できるだけ自分の気分がいいように遺跡を調査できるよう、取り計らった方が気持ち的に楽だ。
「そうなの？　でも何も食べないのは身体によくないわ。スープくらいなら飲めるわよね？　用意するから少し待っていて頂戴。君達二人も、ね」
　そう悪戯っぽく笑うエンジリカに、ロンは顔が引きつるのを抑えながら曖昧に頷いた。
　エンジリカが促すままに席に座らせられ、両隣にアジェットとギエルドが座る。向かいにエンジリカが座ってから暫くして、食事が運ばれてきた。運んできた男の顔を見てロンは心の中でうげ、と呟く。牢屋でロンに向かってひたすらギャンギャン吼えていた騎士だった。
「な、何故貴様がワローラル様と……！」
「ありがとう、そこへ置いておいてくれるかしら？　あとは自分でするから」
「は、はい！」
　ロンを視界に入れるや否や、騎士の男は顔を顰める。しかしエンジリカに声をかけられると、うってかわって喜色に変わった。本当にわかりやすい男だ。そして持ってきた盆をテーブルの上に置くと、背筋を真っ直ぐ伸ばしてエンジリカに敬礼し、部屋を後にする。
「それじゃあまずは、ロンの言いたいことから聞きましょうか」
　エンジリカは朝食を机の上に並べる。手伝おうと立ち上がったアジェットを制し、ロンの前には野菜のたっぷり入ったスープが置かれた。ロンはスプーンでスープを掬い、一度だけ口へ運ぶ。
「僕、昨日学者と行動するのは嫌だって啖呵切ったの覚えてる？」
「ええ、よく覚えているわ」
「できればここにいる間、一切接触したくないんだ。でも、僕がどんどん遺跡の調査を一人で進めたら、向こうは確実に僕に結果を聞きに来る」

　学者というものは、知識を探求するために物事に没頭する。例えそれが得体の知れない相手だとしても、自身が求める知識を持っているとわかれば、危険を顧みず根掘り葉掘り聴きたがる。それが学者だ。
「せっかく一人で自由に中を調査させてもらえても、それじゃあ意味ないだろ？　学者の顔を見たり、声を聞くのも嫌だ。だからさ、僕のした結果報告先にそっちに渡すから、そっちの方から学者にやってくれない？」
　つまり、ロンと学者の間にエンジリカという橋渡しを挟む。そうすれば、ロンは学者と顔をあわせずに済むというわけだ。
「学者の方からも質問とかあるだろうから、それもそっちが紙に纏めるなりしてから、僕に渡してくれない？　絶対、顔を合わせたくないからね」
　あんなヤツらの問いに答えてやる義理などないが、気になったらとことん追求するという学者の性質は悪く、直接乗り込んでくる可能性が高い。それならば、誰かを挟んでその質疑に答えてやったほうが何倍もマシと言える。
「お前の学者嫌い、筋金入りだな」
　右隣にいるギエルドが、呆れた表情を浮かべながら頬杖をついていた。
「それは構わないけれど……遺跡の中や街中で鉢合わせをした場合においての責任は、流石にとれないわ。昨日も言ったけれど、一応こちらからも学者達にロンに話しかけたりしないよう注意はしておくけど」
「うん、それはわかってる。だから、その場合は護衛の二人に対応を任せていい？」
「げっ！」
「……」
　ロンは晴れやかな笑顔をエンジリカに向けた。明らかに引きつっている両隣のことなんて意に返さない。護衛と評した煩わしい監視につくのだから、彼らもまた有効的に利用しなければ損というもの。
「――そうね、そうなったら君達にお願いするわ。アジェット君、ギエルド君」
「あ……はい」
「……了解しましたよー、ワローラルサマ」
　所詮、下っ端であるこの二人は、上官であるエンジリカに逆らうことはできない。だからエンジリカさえ頷かせれば、彼らもまた了承しざるをえないのだ。
「わぁい、ありがとうお姉さん」
　ロンは諸手を上げ、無邪気な子供のように喜んでみせる。それを見た両隣が更に顔を引きつらせた。彼らもまた、己の知識欲に忠実な学者を相手にするのは億劫なのだろう。ロンはニヤリとほくそ笑む。自分ばかり不都合を背負わされるのは癪だったが、これでスッキリした。
　そしてエンジリカの聞きたいことというのは、学者にロンのことを説明する際の注意事項の確認だった。それは今ロンが言ったこと、学者の方から決してロンに接触しないことを納得させるまで聞かせる、と念を押すだけで終わった。その後ほぼ手付かずだった食事に皆が手を伸ばすが、ロンは結局スープをほんの数口飲んだだけで、ほとんど残す。こちらは食欲がないと言って断ったのだから、残したとしてもそれを責められるいわれはない。
　男二人はあっという間に食事をたいらげ、それに合わせてロンも両手を合わせた。
「もういいのね？　なら、もう退出していいわ。遺跡の調査、よろしくね」
　エンジリカは自身が食べ終わるのを待つ必要はないと言わんばかりに、ロン達に退出を促した。ロンはその言葉にありがたく従い、ニッコリと満面の笑みを浮かべながら二人よりも先に部屋を出る。
「あー、やっと解放された……！」
　宿舎から外へと出てから、ロンは大きく伸びをする。昨日は日のあるうちはずっと遺跡の中、そして日が暮れてからは宿舎の中にいたため、外の眩しい太陽が妙に懐かしく感じた。
「この野郎……俺達に面倒なこと上手く押し付けやがって……」
「いてっ！」

　ギエルドがエンジリカの前ではできなかった不満を発散するためか、ロンの頭を大きな手でわし掴む。ギギギと鈍い音がした気がした。
『このケダモノ！　ロン様から手を離しなさい！　痛がっておられるではないですか！』
「いてててててて！　離せ！　このウザ髪長髪野郎！」
「ギエルド、気持ちは分かるがもう決まったことなんだ……ロンに当たっても仕方がないだろう？」
　アジェットが叫ぶレフルの方を気にしながら、ギエルドの腕をロンの頭から払う。舌打ちと共に、わし掴む手が頭から離れた。しかし、まだ頭はズキズキと痛みを発し、掴まれていた余韻を残す。
「ケッ、僕だけがあの女の言いなりになって堪るかっての。せいぜいお前達は、僕に振り回されるがいいさ」
「上等じゃねえか。振り回せるモンなら振り回してみろ」
「二人とも……街中で言い合うのはやめてくれ」
　バチバチとギエルドの黒灰色の瞳とロンの紫紺の瞳の間に火花が飛び散る。アジェットがそれをどうにか宥めようと口を開こうとするが、うまい言葉がみつからなかったのか、至って当たり前な言葉しか出てこない。
　ギエルドと睨みあっていると、次第にロン達の周囲に人込みが出来始める。その誰も彼もが、興味津々といった表情でロン達を伺っている。何とも野次馬根性のある町人達だ。
「あー！　ギエルドが男の子いじめてるー！」
「いっけないんだぁ！」
　幼く甲高い声が、こちらに向かって叫ばれる。耳を劈くような声にロンは僅かに顔を顰めるが、トテトテとこちらに向かってやってきた二人の少年少女に、ギエルドの表情が和らいだ。
「リデル、ラーラ」
「何だよ、お前ら目がわりぃな。どう見たら俺がこいつをいじめてるって見えんだよ」
「いじめてたじゃない！　あたまをがしってつかんで、痛そうだったよ！」
「ギエルドは皆を守る騎士さまなんだろ？　なのにいじめるなんてさいてーだ！」
　アジェットにリデルとラーラと呼ばれた子供たちが、ロンをギエルドから庇うように短い腕を広げて前に立つ。名前からして、男の子がリデルで女の子がラーラだろう。一体何事か、とロンはポカンと自分よりも頭一つ分は低い二人の子供の後頭部を見下ろした。こげ茶色の短い髪と、高い位置で可愛らしく結い上げられた赤茶色の髪が揺れる。
「別にいじめてねえっての！　これはあれだ、対等な喧嘩だ喧嘩」
「年下の少年と対等な喧嘩なんて、するものじゃないだろう……」
　膝を折って腰を落とし、リデルとラーラに視線を合わせるギエルドに、アジェットは横目で呆れ混じりに息を一つ吐く。
　口では尖った言い方をしながらも、子供と話すギエルドの表情は楽しげだった。そんな彼に向かって、二人の子供は遠慮なく言い立てる。ロンは即座に頭を切り替え、今己が陥っている状況を把握した。
「――このお兄さん、本当に酷いんだよ。きっと若さあふるる美少年な僕が羨ましいんだ！　もう歳だから……！」
　ロンはしゃがみこんでリデルとラーラの背中に隠れた。わざとらしいセリフに、ギエルドの顔が顰められる。
「てめ、子供を盾にすんな！　でもって俺はまだ十八だっつっただろうが！」
「わー、お兄さんこわーい」
「ギエルドー！」
「いじめちゃだめー！」
　リデルとラーラに視線を合わせた位置から、子供の背中に隠れているロンをギエルドが睨むと、子供たちの口からは更に非難の声。ロンの怯えた声は全くの棒読みだったが、興奮している子供たちにそれは関係ないらしい。
「……ギエルド、諦めた方がいい。君とロンでは、誰もがロンに肩入れしたくなるのは明白だ」
　上背があり、細身だが鍛えられた体躯の持ち主であるギエルドと、小柄で華奢な少年が喧嘩をしているとあれば、誰

しも後者を応援したくなるもの。アジェットがポンとギエルドの肩に手を置いた。
「ッ！　ああもう、わかったよ！　俺が悪かった！　悪かったな！」
　己に味方してくれる人がいないと判断したギエルドは、ヤケクソ交じりに叫びながら立ち上がる。
「うん、わかればいいんだよ」
「もうこのお兄ちゃんいじめちゃだめだよ？」
「ああ、わかった。わかった」
　両手をあげて降参のポーズをとりながら、ギエルドはがくりと項垂れる。リデルとラーラはそれを見て満足したのか、満面の笑みを浮かべながらアジェットの足に絡みついた。
「ねえねえアジェット！　僕たちギエルドからお兄ちゃんを守ったよ！　すごい？」
「あたしもがんばったよ！」
「あ、ああ、そうだね。二人とも、偉い偉い」
　アジェットが二人の頭を撫でると、二人は嬉しそうにキャッキャと笑う。
（ああ成る程、あいつに褒めてもらいたくて僕をダシにしたわけか）
　言い方は悪いがつまりはそういうことだろう。現に二人は既にロンのことは眼中になく、キラキラと輝く瞳は一身にアジェットへ注がれている。
「たぁっく。俺とアジェット、扱いが違いすぎやしねえか？」
「日頃の行いの結果、じゃあないかな」
「そうそう！　ギエルドはひごろのおこないが悪いのー」
「ギエルドもアジェットをみならったら？」
「生意気いうよになったなぁ、お前ら！」
　ギエルドが二人の頭をわしゃわしゃと思い切り掻きまわすように撫でると、二人は楽しそうな黄色い悲鳴をあげる。ギエルドも彼らに嫌われているというわけではないようだった。
「二人とも、悪いけどわたし達はこれから遺跡に行かなければならないんだ」
「えー、もういっちゃうのー？」
　いつまでもこんなところでもたもたしているわけにはいかない。ロンとしても、とっとと遺跡に行って探索がしたかった。彼らに気づかれない程度に、軽く肩を竦める。
「そういえば、このお兄ちゃんどうしてアジェット達と一緒にいるの？」
「それは……」
　ラーラの邪気のない問いかけに、アジェットは唸った。エンジリカから口止めされてはいないが、一応ロンの護衛及び監視は騎士団としての任務。軽々しく口外していいものではない。ちらりとアジェットがこちらに視線をよこす。彼らに言ってもいいのか、ロンに判断を委ねるようだった。
　ロンは逡巡の後、遺跡調査に無関係な一般人に不法侵入者とバレたとしても、騎士団の信用が下がるだけで自分に不利になるわけではない、と判断した。
「僕が遺跡調査の手伝いをすることになったから、こいつらはその護衛。つまり、僕を守ることが、こいつらの仕事ってこと」
　簡単に説明すると、リデルとラーラはバッと勢いよくこちらを向いた。二つの双眸がキラキラと輝いている。その輝きはアジェットに向けられていたもの以上のもので、ロンは思わず一歩後退した。
「お兄ちゃん、遺跡のチョウサのおてつだいするって、ルーンが使えるの!?」
「え、ああ、まあ……」
「すごーぉい！」
　キラキラ輝く純粋な瞳に見つめられることに耐えられず、ロンは思わずアジェットの背中に回りこんだ。だが、子供

たちは容赦なくロンの後をついてくる。
「ブッハハハ！　こりゃあ傑作だ」
「微笑ましい光景だね」
「笑ってないで助けろお前ら！　何のための護衛だ！」
　アジェットを盾にしようとするが、彼ら二人も回り込んできてしまえば、それもできない。ロンは非常に困っている状況だというのに、護衛を任された二人の背の高い男共は笑うばかりだ。
「いやいやいや、別に今は守ってやる必要なんてねえだろ？」
「そうだよ。リデルとラーラはルーンが使えるロンのことをすごいと思ってるだけなんだから」
「ねえねえ、ルーンってどうやって使うの？」
「見せて見せて！」
　アジェットを軸としてぐるぐると暫く逃げ回ったが、小さい身体にどこにそんな体力があるのか、ずっとロンに続いて同じようにぐるぐると回り続ける。
「だあああああ、わかった！　見せてやるから止まれお前ら！」
「見せてくれるの!?」
「やったあ！」
「ハァ……ルーンは見世物じゃないってのに……」
　無邪気な子供の執念に巻けたロンは、小さく文句を言いながらも、瞳を輝かせるリデルとラーラの前に掌を広げた。
「松明の灯り（トルクフ・リグフト）」
　呪言を唱えると、ロンの広げた掌から、ポワッと小さな炎が生まれた。燃え広がることも、尽きることもなく、ロンの掌で真紅が風に揺れる。
「うわあああ……！」
「お兄ちゃんすごい！」
「へー、ルーンでこんなこともできるもんなんだな」
「綺麗だね」
　気づくとリデルとラーラだけでなく、ギエルドとアジェットも当たり前のようにロンの掌を覗き込んでいた。ちらりと回りを見渡せば、こちらの様子を伺っていた野次馬もロンの掌をじっと見つめているではないか。居心地が一気に悪くなったロンは、開いていた掌を握り締めた。同時に炎がパッと消える。
「はいお終い」
「えー！　もっと見たいぃ！」
「もう一回見せてよお！」
「駄目」
　まだ見たいと駄々をこねるリデルとラーラを一言で一蹴する。ぶうと頬を膨らませながら睨んでくるが、別に怖くもなんともない。
「ケチケチすんなよ。減るもんじゃねえだろ」
「減るわボケ。ルーンは使う度に使用者の魔力消費してんだ」
　簡単なものでも、魔力は必ず消費される。テロンダ遺跡はただでさえ呪言によって開けなければならない扉が多いのだから、こんなところで無駄に魔力を消耗させたくはない。取り上げられた首飾りがこの場にあれば、そんなことを気にする必要もないのだが。
「ねえねえ！　それならあたしたちにルーンをおしえてよ！　あたしも手からポン！　ってやってみたい！」
「あ、僕も僕も！」
　先ほどのルーンが余程気に入ったのか、今度は教えてくれとねだってきた。リデルもそれに便乗し、期待に満ちた眼

差しを再び向けられる。
「リデル、ラーラ。悪いけど、わたし達はこれから遺跡に――」
「古代言語は興味本位で学ぶものじゃない」
　流石に二人を諌めようとしたアジェットだが、ロンはそれを遮った。先ほどは逃げた眼差しを、今度は彼らに視線を合わせて真っ直ぐ見つめる。
「僕がルーンを使うのは、必要に迫られているからだ。僕の目的を達成するためにはルーンを使わなければいけないから、仕方なくルーンを使ってる」
　リデルとラーラは突然の神妙な空気に驚いたのか、固まっている。だが、しっかりロンの言葉に耳を傾けているようだった。
「大昔ではルーンは日常的に使われていたけど、今は全然使われていないだろ？　どうしてだと思う？」
「うんと……」
「わかんないよ……」
　ロンの問いかけに、二人は表情を曇らせ顔を俯かせる。きつい物言いになっていることを自覚しているものの、優しく諭すという器用な真似ができるわけがないので、そのまま言葉を繋いだ。
「必要がないからさ。人間はルーンなんてなくても、普通に生活することができる。皆がいらないと思えば、使わなくなるのは当然だろ？　現にお前達も、ルーンを使ってないけど毎日元気に暮らしてる」
「あ、そっかあ」
「そうなんだあ」
　ルーンが完全に廃れてしまったきっかけは『イクティンクの消滅』であるが、ルーンの衰退自体はそれ以前から始まっていた。イクティンクは、ルーンの衰退を防ごうと奮起していた国である。
　ルーンが廃れ始めた本当の理由など知るわけがない。あくまでロンの推測だ。それでも方向性は間違っていないだろう。使われなければ廃れる、忘れられる。それは自然な流れだ。
「それと、僕が見せたルーンをお前達は綺麗だと言ったけど、あれは暗い夜道を明るくするための灯火だ。使用者以外が触ろうとすれば火傷するし、物を近づければ燃えてしまう。つまり、本物の火と同じで、危ないものでもあるんだ」
　ロンが見せたものがただの火だったという事実に、リデルとラーラは口をポカンと大きく開けた。この年頃の子供なら、親から火遊びは危ないからしてはいけないという注意を受けたことくらいはあるだろう。
　ルーンは決して綺麗なだけではない。危険な面も含んでいる。特に善悪の判断のつかない子供がルーンを覚えるのは、子供がナイフを手にしているのと同じこと。軽い気持ちで手にしていい力ではないのだ。
「何度も何度も考えて、どうしても自分にルーンの力が必要だと思ったら、学べばいい。でも、ルーンは一つ間違えば、大事なものを傷つける危険な力なんだ。それを絶対忘れるな」
　ルーンはあくまで利用するもの。人間の心持一つで救う力にもなれば破壊する力ともなる。取り返しのつかないことをして心に傷を負わせるよりも、今ここできつく止めておいたほうがいい。
「……むずかしくて、よくわかんないよ」
「うん……」
「――つまり、お前たちにルーンは早いってことだ。諦めろ」
　ギエルドがリデルとラーラの頭にポンと手を置く。しょぼんと二人は落ち込んだが、頭を撫でられて気分が向上したのか、表情に笑みが戻った。
「じゃあお兄ちゃん、また今度見せてよ！　それならいいでしょ？」
「んー、まぁそれなら……」
「やったあ！　約束だよ！」
　先ほどまで落ち込んでいたのが嘘のように、喜色満面の笑顔を見せる。そして流石にそろそろ遺跡へ向かうため、二

人とはここで別れることになった。
「絶対だからね！　約束やぶったらダメなんだから！」
「バイバイ！　ちっちゃいお兄ちゃん！」
「ちっちゃ……こいつらがでかいだけで、僕は決してチビじゃ……うぐ！」
「おら、さっさと行くぞー。学者と鉢合わせるのはこっちだってゴメンだからな」
　最後に聞き捨てならない言葉を残すラーラに抗議の言葉をあげようとしたところ、ギエルドに首根っこを掴まれずるずると引きずられる。
「ロン……その、君は背が低いことを気にして……？」
「だから僕はチビじゃないって言ってんだろ！　比較対象がでかいせいでチビ扱いされるのが嫌なだけ！　どいつもこいつも、僕より背が高いからってチビ扱いしやがって……！」
「それを気にしてるって言うんだろ」
　ギエルドの手が離され、ロンは自由を取り戻す。その後ギエルドがロンの頭から足の先までしげしげと見下ろした。
「まあ確かに、そんくらいの背丈はチビじゃあないな。かといってでかいわけでもないけど」
「そういえばロン、君は幾つなんだい？　変声期もまだのようだけど」
「……」
　ロンは思わず押し黙る。アジェットはまだロンのことを少年と思って疑っていないようだった。それならば、それにあわせた年齢でなければ変に訝しがられるというもの。
「十四」
　口に出した年齢は、勿論本当のものではない。だが、ロンの見た目を客観的に見て、もっとも妥当な年齢であると思われる。実年齢は口が裂けても言えるわけがない。
「その歳でその背丈は、まぁ普通だな」
「成長期はまだ始まったばかりだから、これからどんどん背は伸びるよ。わたしもそうだった」
　アジェットだけでなく、ギエルドも腑に落ちたように納得している。どうやら両方からの納得を得られたようだ。
　その後は順調に遺跡の元へ進める、とロンは思っていた。しかし、それがとんでもない思い違いだったことに、頭を悩ませることになる。
「おう、アジェットにギエルドじゃねえか。その見慣れないガキんちょ、どうしたんた？」
「おはよう、アジェット、ギエルド。朝早くから元気そうね。今度うちの店に寄ってってよ。サービスするわよ？」
「こんなところで何やってんだ？　巡回か？　何違う？　そりゃあ悪かった！」
　街中を進むたび進むたび、誰かしらに声をかけられる。声をかけられたのに無視をするということは立場上できないため、呼び止められる度に今から遺跡に向かうのだという旨を伝えなければならなかった。
「随分慕われていることで」
　そんな皮肉を口にしたのは、何人目かになる街の住人から解放されたときだった。もしもロンの護衛についたのがロンの事情聴取を行っていた騎士だったなら、こんなにも街の住人に声をかけられることなんてなかっただろう。むしろ敬遠されて通り易かったかもしれない。
「街の人々を守るために、わたし達騎士団はいるんだ。彼らを無下になんてできるわけないだろう？」
「そういうこった。監視についたのが俺達みたいなヤツ等で運が悪かったとでも思いな、チビスケ」
　ギエルドに頭を軽く小突かれ、ロンはムっとして前を歩くギエルドを睨みつける。
「だから、僕はチビじゃない」
「俺らよりも明らかに背が低いんだ。ならチビって言われても文句は言えないだろ？」
『僕よりも背が低いんだ。仕方ないだろおチビさん』
　からかうようなギエルドの後に、脳内であるセリフが甦った。それはかつて共に旅をしていた友人から言われた、今

と同じくロンをからかうために紡がれたもの。
　彼女は背が高い女性だった。異性の衣装を纏い、凛と立つ姿は二年以上の月日を経ても未だに鮮明に思い出すことができる。
「ギエルド、ロンが気にしていることをわざと口にするのはやめないか。ほら、ロンが黙ってしまったじゃないか」
「黙りこくるほど気にしてるとは思わなかったんだよ。――悪かったな」
　突然無言になったロンに、二人はロンが気分を害したからだと勘違いしたようだった。ばつが悪そうな顔をするギエルドに、別にと素っ気無く返したあと、そのまま無言で遺跡に案内するように訴える。
（何でこいつらを見て、ランのことを思い出すんだよ……）
　ランと過ごした時間はロンにとってかけがえのないもの。それなのにこんなヤツ等とのやりとりで思い出してしまったことが、何故か癪に障る。
　その思いを振り払うため、ロンは遺跡につくまでずっと無言のままギエルドとアジェットの後を追った。

　ランのことを表すなら、とても男らしい、の一言に尽きる。本来の性からしたら不名誉極まりないはずのそれを口にしても、彼女はむしろ嬉しそうに口の端をつり上げて「だろ？」と不敵に笑うだろう。そこが『男らしい』と称される最たる所以かもしれない。他でもない彼女自身が男らしい自分を気に入り、誇りを持っている。
　そんなランの様子がおかしくなったと感じたのは、この街に来てから暫くのこと。『おかしい』と表現するのは変かもしれない。とある人物の前で頬を赤らめたり、いつもは真っ直ぐ目を見て話すのに、挙動不審になったりするのは、彼女の本来の性を考えたら『普通』のことなのだから。
「だからラン様はおかしくなったわけではありません。至って普通のことなのですよ。彼女も女性なのですから。わかりましたか？　ロン」
　真剣な顔をしてランの様子がおかしいと相談を持ちかけた旅の道連れである少女に、レフルは務めて穏やかに、そして理解できるように丁寧に答えた。
　ロンからしたら、初めて見せたランの女性らしさは『変』と映ったのだろう。そこらの男よりも男らしく、常にロンを妹として可愛がるランが見せる『女』としての表情を。『彼』が傍にいるときにだけしか見せないそれを。
「ランがおかしくなったわけじゃないのは、わかった。でも、何であいつといるときだけそうなるのさ。今までいろんな人と会ったけど、ランがあんな風になったこと、一度もなかったのに」
「それは……」
　丸い紫紺の瞳が、じいっとレフルを見つめてくる。レフルはあることを失念していたせいで言葉を失う。皆まで言わずとも、ランの変調の理由を感づくだろうと思っていた。『人間』ならば、誰もが一度は抱くであろう感情に。しかし目の前で睨みつけるかのように真っ直ぐ見てくる少女は、どうして『彼』の前でのみランがそうなるのか、全く理解していなかった。それはロンが鈍感だから、ではない。そういう感情があるということ自体を知らないのだ、この少女は。
「ラン様は、あの方に『恋』をなさったのです」
「コイ？」
「そう、『恋』です」
　反復すると、ロンの瞳が訝しげに揺れる。
「レフル、『コイ』って何？　僕（・）の知らないルーン？」
　男らしいランの下で数年の月日を過ごしたロンは、彼女の影響を多大に受けていた。自身を表す一人称が、それを物語っている。
「ハハハ……ルーンではありませんよ、ロン……」
　案の定なロンの反応に、思わず乾いた笑みを浮かべてしまう。やはりそこから、彼女は理解していなかった。
　レフルは気を取り直して『恋』というものがどういうことなのか、丁寧に説明する。ロンはたまに相槌をうちながら、レフルの説明にしっかりと耳を傾けた。
　人間ではないレフルが人間であるロンに人間としての感情を教える。なんて奇妙な光景だったが、ロンの首に巻かれたスカーフを見て、レフルは感傷的な気持ちになった。
　ロンはランに出会うまで、人の温もりを全く知らずに育った。出会ったばかりのロンの姿は衝撃的で、今だ忘れられずにいる。
　幾多の本の下に埋まっていた体。本同士の隙間から空色の髪や指がはみ出ていなければ、そこに誰かが埋まっているということにも気づかなかったかもしれない。そして人の手が一切入っていないことを意味する分厚い埃まみれの本の下にいた少女に、度肝を抜かれた。
　浅い呼吸を繰り返していたのだから、生きているのは間違いない。しかし、本に被っていた埃の量から察するに、気

が遠くなる程の時間をこの本の下で過ごしていたことになる。普通の人間が、食事も何もせずに永い時を眠り続けるなど、不可能だ。それに、本に埋もれた時点で圧死していてもおかしくはない。
　なのに少女は生きていた。首や手首までを覆っているだぼっとしたみすぼらしいローブは全体的に痛んでいて、袖の部分はボロボロだった。
　ランが眠っている少女を埋もれている本の山からルーンを使って救いだし、少女の頭を膝に乗せる。その間に痛んだローブの先からちらりと見えた首や手首に刻まれたものを見て、レフルは瞠目した。それと同時に何故少女がこんな生命の息吹のないところで延命していたのかも理解する。彼女は自身の力で生き続けていたわけではない。ある力によって生かされていたのだ。
　ランに少女の事情を説明した後、少女本人から話を聞くために、再びランのルーンで強制的に目覚めさせる。自然に目を覚ますまで待つほど、悠長に構えてはいられなかった。
　目を開けた少女は、紫紺の瞳を驚愕に見開き、跳ね起きてランから距離をとった。そのせいで彼女は近くの本棚に背中を打ちつけ、苦痛に顔を歪ませながらペタリとその場にしゃがみこむ。だがこちらを見つめる眼差しは、警戒心に満ちていた。
「おはよう。そして初めましてお嬢さん。僕はラン。君の名前を教えてもらってもいいかい？」
　警戒心むき出しの少女を落ち着かせるためか、ランはニコリと爽やかな笑みを浮かべながら少女に語りかける。しかし少女は口元を引き結びながらこちらを睨むばかり。丸い紫紺の瞳からは怯えの色が見えた。
「怖がらなくていいよ。僕は君みたいな可愛いお嬢さんに、危害を加えるつもりなんてないから。ただ、少し話しがしたいだけ。だからまず、君の名前を教えてほしいんだ」
　まるで口説いているかのような台詞にレフルの口元は僅かに引きつった。『女の子は愛でるもの』というよくわからないランの持論だけは、唯一共感することができないでいる。
「……」
　少女はその問いに応えなかった。ランが問うた後、暫くランを睨みつけていたのに、次第に顔を俯かせてしまった。どうにも様子がおかしくレフルは少女の顔を覗き込む。少女はこちらに一瞥もくれないことからレフルの姿が見えていないことがわかった。だからレフルの声も耳に届くことはないだろう。
「えーっと、言いたくないならそれでもいいよ？　無理にとは聞かないから。でも、この質問には応えてほしい、かな」
　こちらを警戒するばかりで反応に乏しい少女から、ランは比較的穏やかに少女から事情を問い詰める。何故その身にそんなものを刻んでいるのかを。
　そしてそれを尋ねた途端、少女の様子は一変した。
「好きでこんな身体になったんじゃない！　変態学者の実験台にされたんだ！」
　元々が感情的な性格だったのか、少女は悲しみとも憎しみともつかないような複雑な表情で己の全てをぶちまける。生まれてからほぼずっと、人のことをメモ帳や辞書代わりにしていたくせに、いざとなると実験台として捨て駒にされたことを。
（空色の髪と紫紺の瞳……まさか、彼女は『記録人（レコーダー）』……？）
　『記録人（レコーダー）』とは、ルーンの全盛期が過ぎたおよそ三千年程前に突如発現した、少数民族。彼等は人間離れした記憶力をもち、一度見聞きしたことは決して忘れることはない特殊な力を持つ一族だ。個人差で濃淡の違いはあるものの、髪は青空のような空色をし、深みのある紫紺の瞳を持つという外見的特徴を持っている。目の前の彼女と同じように。
　彼らは、ルーンや伝承を正確に伝えるために、且つ悪しき者に知識が渡らないよう文字として残すことをしないために、全ての子孫に膨大な記憶力を持たせたいとレフルと同等の存在と契約を交わしたのが始まりだ。その特性上、闇雲に数を増やしすぎず、かといって絶えてしまっては元も子もないという微妙な人数を維持し、血を繋げていた。
　しかし細々と繋いでいた彼等一族の血は、五百年程前に完全に途絶えてしまった。否、途絶えたはずだ。

日常的にルーンが使われていた時代は移り、徐々に廃れる一方だったルーンに歯止めをかけていた国がかつて一つあった。多くの研究者が集って一心にルーンについて追求していた国、イクティンク。この国で研究を進める者達にとって、古より口伝で伝えられてきたルーンの知識は、喉から手が出るほど欲しいものだろう。

辺境の地で細々と暮らしていたはずの記録人（レコーダー）は、ルーンの知識を求める研究者達に献上されるため、故郷を追われた。彼等の特異性が、ここにきて仇となってしまったのだ。

かつては、奴隷制度が合法として存在するのが当たり前の国柄で、人身売買も公然と行われており、彼等がイクティンクに奴隷として売られてしまったことを止められる者も、止めようとする者もいなかった。一人、また一人と捕まり売られ、元々の数がそう多くないことも相俟って、全ての記録人（レコーダー）が囚われるのに、きっと一年はかからなかっただろう。

イクティンクに強制的に連れてこられた彼らの末路は、イクティンクが辿ってしまった末路と同じ。一夜にして国中が廃墟と化した『イクティンクの消滅』により、全ての記録人（レコーダー）が命を落とした。奴隷や貴族階級、研究者など身分に関係なく、あの日あのとき、イクティンクで過ごしていた者全ては死んだ。あの事件で生き延びられた者がいたという話は、聞いていない。

（待て……五百年前のあのできごと……まさか）

『イクティンクの消滅』では、当時イクティンクにいたレフルの同族も数人ばかり消滅している。その場に居合わせた者が全て消滅してしまった以上、あの時一体何が起こったのか知っている者は誰もいないが、想像だけは容易にできる。どこかの誰かが、『禁忌』と呼ばれるルーンを使ってしまったのだと。そうでなければ、国一つが一夜にして消滅してしまった理由に説明がつかない。

そして少女の首と手首に刻まれているものは、まさしくその『禁忌』のうちの一つを表していた。それにルーンを研究していた学者にいいように使われていた過去を吐露したことと、外見的特徴を鑑みて、彼女が『記録人（レコーダー）』であることは間違いない。そこから導き出される事実は、ただ一つ。

（失敗したのだとばかり思っていた……だが、成功してしまっていたのか。こんな少女に、何てことを……）

初めは彼女が力ほしさに己自身の手で『禁忌』を犯したのだと思った。だがそれは違った。彼女もまた被害者だったのだ。そして彼女は『記録人（レコーダー）』最後の生き残りにして、『イクティンクの消滅』の顛末を知る唯一の生存者。

彼女の見た目は、十五、六の少女といったところ。だが、彼女が実際過ごしてきた月日は、その年月の何十倍にも及ぶ。凡そ人が過ごすことはできない永い時を、彼女はずっと生きてきた。たった独りで。

「――ねえ、君。僕についてくる気ない？」

ランが少女に向かって手を差し伸べる。レフルはそれに苦言をいうことなく、黙ったまま事の成り行きを見守った。

もしもこの少女が己にかけられた『禁忌』から解放されることを願っているのなら、自分達の目的と――レフルの悲願と同じもの望んでいることになる。反対する理由などあるわけがない。

少女はランの話を聞き終えると、紫紺の瞳を大きく見開く。じわりと目尻に雫が溜まりはじめた。そして差し伸べられたランの手をとることなく、勢いよく立ち上がってランの胸に飛び込んだ。

「うわっととと！」

ランは突然飛び込んできた少女に驚き、尻餅をつきながらもしがみついてきた少女の背中に優しく腕を回した。そして頭をそっと撫でてやる。

「うん、今は思いっきり泣くといい。スッキリしたら、今度は一緒に頑張ろう。ああそうそう、僕にはもう一人仲間がいてね。後で紹介してあげる。きっと驚くよ」

暫く少女の嗚咽が狭い図書館の内部に響き渡った。レフルは、なきじゃくる少女の姿を、ずっと見つめていた。

「特定の人物に対して、心がドキドキして落ち着かなくなったり、少しのことで一喜一憂したり、ずっと一緒にいたいと思ったりするのが『恋』で、ランは今、あいつに対してそう思ってるってこと？」

「はい、そうです」
　ロンに『恋』の説明を終えると、彼女は俯いて顔を曇らせた。恐らく姉のように慕っていたランが、ぽっと出の相手にとられてしまうのではないかという恐怖を抱いたのだろう。旅をするようになって徐々にロンにも社交性はついてきたが、今までずっとロンはランにベッタリだったのだ。寂しい、と不安に思ってしまうのは当然だろう。
「大丈夫ですよ、ロン。ラン様は、貴女を置いていくような無責任な方ではありません」
　ランは普段飄々とした態度を崩さないが、その内面は困っている人を放っておくことができないお人よしで、責任感も強い。一度決めたことは最後まで貫く意志の強さも持っている。そんな彼女だからこそ、レフルはランと『契約』を交わし、彼女の補佐をしてきた。
　正直言って、ランが誰かに『恋』をすることは想定外のことで、レフルも戸惑っている。しかし、男よりも男らしいと自他共に認めているランが初めて見せた『女』としての表情に、安堵を覚えている自分もいることも自覚していた。ランとは彼女が物心ついたときからの付き合いで、その頃から既に今のような男らしさの片鱗を見せていたため、心配もしていたのだ。彼女は女らしさとは無縁で生きていくのではないかと。
　だが安堵すると同時に、旅の道中で『恋』をした場合、それを叶えるには旅をするのを諦めなければならないということになる。ランが恋心を抱いた男性は普通の人間であり、特に腕っ節が立つわけでも、ルーンの知識があるというわけでもない。そんな彼に、いつ終わるかわからない自分達の旅についてこい、というのは酷というものだろう。彼の方もまた、ランを強く想っているため、ランと共にあるためならついてくることを厭わないかもしれないが。
　だからこそランは芽生えた想いに蓋をし、彼の想いに応えないようにしている。だが、このことをロンが知る必要はない。それに、ランは無理をしていることをロンに知られたくないだろう。ランはロンにとって、格好いい『兄貴分』でいたいという願望が強く、特にロンの前では無理に平静を装うことに躍起になっている。それでも隠し切れず、こうしてロンが不思議に思ってレフルに相談しに来たのだろうが。
（ラン様は決して約束を違えない……だから彼の想いに応えることは決してない……お気の毒とは思いますが）
　レフルとしても、ランの初めての恋を応援したい気持ちはある。だが、そうすることができないという事情があった。ランはレフルの契約者であり、レフルはランに力を貸す代わりに、ある目的に協力してもらっている。もしも彼女の恋路を応援するのであれば、この契約自体を破棄しなければならなくなるのだ。レフルはそれを望んではいないし、ランもまた望んでいないだろう。
「……ねえ、レフル」
　ずっと押し黙っていたロンが、不意に口を開いた。まっすぐレフルを見つめる紫紺の瞳は、何かを決意したかのような強い光りが宿っている。
「ランとの契約を破棄して、僕と契約することってできる？」
「なっ……！　何を突然おっしゃるのですか！」
「できるなら、僕と契約してよ。そうすれば――ランに旅を続ける理由がなくなる」
「ロン……貴女はそれでもいいのですか……？」
　ランに旅を続ける理由がなくなれば、彼女は彼の想いに応えることができる。ずっと彼の傍にいることができる。だがそれは同時に――
「レフル、僕ずっと考えてたんだ。いつまでもランにベッタリじゃ駄目だって。何時かランに、僕のこと拾ってくれた恩を返さないといけないって」
「それが……今だと？」
「うん、そう」
　ロンの目は真剣そのもの。唇を噛み締めている表情から、ランに対する恩返しをずっと考えていたに違いない。本当はそんなもの、する必要はないというのに。ランもまたロンと旅をするようになって、よく笑うようになった。守るべき存在が傍らにあるというだけで、彼女は強くなれた。それだけで充分恩返しに相当している。

「……ラン様は、きっと反対なさいます。確かに出会ったばかりの頃に比べて、貴女にも一般常識は身につきましたし、社交的な振る舞いも覚えました。ですが、旅は危険がつきものです。妹のように大事に思っているロンを、送り出してくださるとは……」
「だから、ランには内緒で契約するんだよ。契約さえしちゃえばこっちのものじゃん」
「……」
　ロンは口の端をつり上げて悪戯っぽく笑う。つまり、ランに気づかれないよう旅立つ準備をし、そしてロンと契約する。確かにそうしてしまえば、さしものランも強くいうことはできなくなる。
「レフル、僕はランが大好きだよ。だからランには、幸せになってほしいんだ。ランと別れることは淋しいけど……でも、そろそろラン離れをしないと。ううん、しなきゃいけない」
「――そうですね」
　レフルとしても、ランに幸せになってもらいたい気持ちはある。己との契約のせいで彼女の幸せを妨害しているのは事実だ。ならば、ここはロンの口車に乗りかかるのもいいだろう。
「しかしロン、契約するのは構いませんが一つ問題があります」
「問題？　何それ」
「わたくしと契約を交わすということは、これからはロンがわたくしの主となる、ということです。つまり、これからわたくしは貴女をロン様とお呼びすることになりますが、ご承知いただけますか？」
「……」
　決意を秘めていた瞳があからさまに動揺した。恐らくそのことについては、何も考えていなかったに違いない。湧き上がる悪戯心に、思わず口の端が釣りあがる。
「えっとさ……今まで通りじゃ駄目、なの？」
「駄目です。ラン様とも、契約を結ぶより前はランとお呼びしておりました。ですからロン、貴女のこともこれからは敬称をつけてお呼びしなければなりません」
「べっつにいいじゃん、敬称なんてさー。それに僕は、サマ付けされるような立派な人間じゃないよ」
「これはわたくしなりのけじめなのですよ、ロン。これが受け入れられないというのであれば、貴女との契約の話はなかったことに……」
「え、ちょちょちょ！　待った待った、それは困る！　困るってば！　っていうか、レフルだってさっき納得してたのに！」
「それとこれとは話が別でございます」
　契約の話を持ちかけると、ロンは泡を食ったように慌てだす。そんなロンに対してレフルはしれっと返すと、彼女はそのまま押し黙った。どうやら葛藤しているらしい。その姿はとても可愛らしくもあり、微笑ましく思う。
（ラン様の保護を受けないということは、一見少女の一人旅にしか見えないということ……邪な輩からしたら、絶好のカモでしょう。わたくしが全力でロンをサポートしなければ）
　これからは、ロンは己とレフルだけを頼りに旅を続けることになる。レフルはランの胸の中で泣きじゃくっていたロンの姿を思い起こした。
　あの日以来、ロンが泣いたことは今まで一度もなかった。彼女は生来気が強かったのか、慣れない旅路に弱音を吐くこともなく、たまに落ち込むことはあれど、すぐに真っ直ぐ前を向ける芯の強さがある。
　だが、それも常に傍にランがいたからこそ、強くあれたのだろう。弱さを見せられる相手がいることで、心に余裕が生まれる。レフルもロンを支えていなかったわけではないが、ランに比べたら精神的支えの度合いは低い。
「――っ、わかった、我慢してやる！　サマ付けも旅してればいつか慣れるだろ、どんどこいだ！」
「フフ、漸く覚悟が決まったようですね」
　ずびし、と勢いよくこちらに向かって指を差す少女に、レフルは満面の笑みを向けた。

（絶対に守り抜きます、心身共々。そして――）
　ロンにもランのような幸せを。今はまだ『恋』を知らないけれど、時間はたっぷりあるのだから、きっと彼女もランのように突然恋をしたりするのだろう。そして孤独だった大半の人生を思い起こすことのない程、幸せな記憶でいっぱいになればいい。
（わたくしの可愛い娘を預けるのですから、当然、ロンを守るに相応しい男を見定めなければなりませんね……！）
　笑顔の奥でレフルがそんなことを思っていることなど、ロンには知る由もない。

学者が遺跡の前にいることを覚悟していたが、入り口の前で立っていたのは見張りの騎士だけだった。騎士達はロンの姿を見とめると、不機嫌そうに顔を歪めたが、何か言うでもなく沈黙したままだった。いくらロンが昨日遺跡に勝手に進入した不法侵入者だとしても、それはそこまで彼らの機嫌を損ねるようなことなのだろうか。思わずそれをそのまま口に出すと、彼らは口元を明らかに引きつらせながらも何も言わず、沈黙を保つ。

「なーんだよその態度。感じ悪っ」

彼らに聞こえる音量でいい捨てながら入り口を潜り、本来ならば昨日探索するつもりでいたルートを行こうと、『左（レフト）』の呪言で扉を開ける。

「彼らが不機嫌だったのは、多分不寝番だったせいじゃないかな。これ以上侵入者を許すわけにはいかないと、警備が強化されたから……」

「どっかの誰かさんのせいでな」

「それはそれはご愁傷様だこと」

ロンはまるで他人事のように二人の言葉を流す。過ぎたことを一々気になどしてる暇などロンにはない。

『左（レフト）』の呪言で開いた扉が閉じる音を背中で聞いたロンは、くるりと振り返ってロンの後ろにいる二人を見遣る。

「二人に忠告。ここから生きて出たかったら、僕の後ろを付かず離れずでついてこい。余計なことは一切するな。わかったか」

「随分上から目線な言い方だな」

「道中遅れて扉の内側に取り残されても、僕は構わず先に進むからそのつもりで」

「それは……」

「お前ら僕の護衛だろ？　護衛が護衛対象に助けてもらおうなんて思うなよ」

もしも彼らがロンからはぐれた場合、それは一生ここから出られないことを意味する。二人はルーンの知識が全くない素人だ。たとえロンの紡いだ呪言の発音を覚えていたとしても、その言葉の意味を理解していなければ扉が開くことはない。手前の方ならば運がよければ学者達が扉を開けてくれるかもしれないが、奥に行けば行くほど、可能性はほぼゼロになる。

こうまでして釘を刺すのは、魔力の消耗を出来る限り抑えたいからだ。彼らのせいで手間をとる、なんてことがあってはならない。だからこそ、彼らの自尊心を刺激するような言葉をあえて口にした。

そしてそれを口にした後、二人の目つきは明らかに変わった。ロンの言いたいことが伝わったのだろう。特にギエルドは、絶対にお前の手なんて借りないとばかりにギラギラと光っている。

「んじゃ進むか。松明の灯り（トルクフ・リグフト）」

先ほどリデルとラーラに見せたルーンの呪言を紡ぐ。掌から淡い炎が生み出された。そしてその淡い炎を、まるでボールを放り投げるかのように手を動かすと、掌にあった灯火が宙へと移動する。

通常ならば、レフルが松明代わりに発光し、周囲を明るく照らしてくれる。しかし、アジェットがレフルの姿が視える以上、レフルと必要以上に言の葉を交わすことはできない。レフルの力を借りるなんて論外だ。

本人もそれがわかっているのか、宙に浮いた灯火に目が釘付けになっているアジェットを、ここぞとばかりに睨みつけている。そんな熱い視線に気づいたのか、アジェットがふとレフルの方に視線を向けるが、それを見越したレフルは睨みつけるのを止め、ロンに視線を戻した。本当に器用なヤツだ。

「アジェット、余所見してると置いていかれるぞ」

「え、ああ。すまない」

レフルに視線を送るアジェットを気にすることなく、ロンはスタスタと歩みを進めた。ギエルドがそれを諌め、ロンの後ろをついてくる足音が二人分聞こえてくる。
暫く三人は無言で歩みを進めた。監視の二人はともかく、ロンは彼らと親しい間柄ではないのだから、会話が弾むわけがないし、花を咲かせる必要も感じていない。
それは彼らも同じかと思いきや、背後で息を吸い込む音が聞こえてきた。
「ロン、そういえば君は何故トレジャーハンターになったんだ？　止むに止まれない事情があると言っていたけれど……」
「それをお前に話さないといけない義理があるとでも？」
「素っ気ねえな。断るにしても言い様ってもんがあるだろ」
「お前だけには言われたくないね」
こちらは馴れ合うつもりは毛頭ないのだと、振り返りもせずに応えることで拒絶を表す。
「そう言われてしまえばこちらは何も言えなくなってしまうよ……君は、学者だけでなくわたし達と会話するのすら、嫌なのか？」
「嫌ってわけじゃない。面倒くさいだけ」
監視という彼らの存在を煩わしく思うことはあれど、別に学者のように心底嫌っているわけではない。ロンが捕まったのは確かに彼らのせいではあるが、彼らも彼らで自分の務めを果たしただけ。それは彼ら個人を嫌う理由にはならない。
「僕はさっさと探索して、さっさと出て行きたい。それはそっちだって同じだろ？　だったら無駄話なんてする必要はないと思うけど？」
厄介払いがしたい、という点において、彼らもまたロンの存在を煩わしく思っているはずだ。本来ならば、捕らえた時点で王都に送検し、法による罰が与えられるのにも関わらず、見張りとして遺跡の奥深くまでついていかなければならなくなってしまったのだから。
上司からの命令故逆らうことができないだけで、本当ならそんな面倒くさいこと、誰だって御免だろう。ロンの立場が逆だったなら、間違いなくそう思う。
さっさと終わらせてすぐにでも解放されたい。これが三人の総意だとロンは思っている。だから会話なんて面倒なことはせず、やるべきことを速やかに行うだけだ。
「厄介払いをしたいのはお互い様。違う？」
「っ……」
「……」
それをいうと二人は無言になった。漸く彼らも理解したらしい。再び沈黙が降りてきたのを確認すると、ロンはひたすらまっすぐ伸びる道のりを進む。
そこに辿り着いたのは、既に両の指で数えるには足りない程の回数の扉を開けたときだった。
「行き止まり、か」
そこは昨日、ロンが辿り着いた小部屋に酷似していた。獲物を手に持った銅像がずらりと並び、その先に祭壇があり、そこに古びた箱が置かれている。しかしこの部屋の方が置かれている銅像の数は多く、祭壇の形も微妙に違った。
しかしながら、同じ遺跡内なのだから構造が似るのは当然のこと。ロンは対して気に留めることなく歩みを進め、古びた箱の蓋を眺めた。この箱にルーンが刻まれていないことを確認した後、蓋を開ける。
「……剣？」
箱の中に入っていたのは短剣だった。握る柄や鍔は、恐ろしくシンプルな造りをしている。それこそどこにでもありそうな普通の短剣。刃に隙間なくルーンが彫られてさえいなければ。
ロンの肩付近にいたレフルが徐に首を左右に振った。これも違うというサインだ。ロンは軽く肩を落とした。これも

また、ロンが求めているものではない。
「へー、剣か」
「これはどういったものなんだい？」
「!?」
　いつの間にか二人がロンの背後に立ち、箱の中に入った短剣を覗き込んでいた。思わず呆気にとられてしまい、ギエルドが短剣に手を伸ばしたのを阻止することができなかった。
「ヘンテコな短剣だな。これ全部ルーンか？　せっかくの剣にこんなことしちまったら、使えねえだろ」
「何か儀式的なものに使うものだったかもしれないよ」
　ギエルドが短剣を持ち上げ、自身の顔の近くまで持っていきしげしげと眺めている。アジェットもそれを咎めることなく、顎に手をあてながら呑気に感想を述べた。
「！　馬鹿お前ら！　その剣を早く元に戻せ！」
「んあ？　何でだよ、っと」
　ロンがギエルドの手から剣をひったくろうと腕を伸ばすが、それを見越したギエルドが剣をロンの手が届かないところへと掲げてしまう。身長差から、どんなに跳ねたところでロンの手は短剣に届かない。
「これ、漸く見つけたお宝だろ？　持って帰らねえと成果になら――」
「うわっ！」
　ギエルドの言葉を途中で遮る。短剣から、否、短剣に刻まれたルーンが突然発光し、薄暗い部屋の中を照らした為だ。眩い光りに思わず目を瞑ると、ギ、ギギギと擦れるような鈍い音が聞こえる。扉は開けていない。ならばこの音はもしや――
「なっ……！　銅像が動き出した……!?」
「どうなってんだありゃ……」
「ああくそ、遅かったか……！」
　視力が回復したロン達の目に映ったのは、持っていた獲物をこちらに向けて構えている銅像の姿。初めはぎこちなく動いていた手足が、次第に滑らかなものとなっていく。
「チッ！　やっぱりこいつらゴーレムか、面倒くさいな」
　ゴーレムとは、古の技術で造られた自立式の人形。主に石材を基調とした身体を造り、ルーンの力を得て、まるで生きているかのように動く。その役割は主に、こうした遺跡に侵入者を撃退するために設置される。石材で出来ているから身体は硬く、もしも一部が壊されたとしても死ぬことはない。ただ、下された命令に従って完全に身動きがとれなくなるまで動き続ける。それがゴーレムだ。
　手前にいた剣を持った銅像がこちらに向かって剣を振りかざした。三人は反射的にそれぞれ違う場所へと避け、バラバラになる。
「おい長髪！　その剣を壊せ！　今すぐ！」
「ああ!?　なんでだよ！」
「それは宝じゃなくて侵入者撃退用の罠だ！　箱から取り出したらゴーレムが侵入者を撃退するように、ルーンが刻まれてたんだよ！　止めるにはそれを壊すしかない！」
　侵入者用の罠が発動してしまった以上、剣を元の場所に戻したとしても変わらず襲ってくるだろう。恐らく自分達三人の生命活動が停止するまで、ゴーレムは止まらない。
　しかしゴーレムが稼動しているのは、ルーンの力があってこそだ。スイッチの役割をしている剣のルーンを崩せば、ルーンの効果は失われて元の銅像に戻る。パッと見大した剣ではないのだから、床に叩きつけるなりすればあっさりポッキリと折れるはず。
　ロンは己に向かって振り下ろされる刃を避けながらギエルドをちらりと見遣り、思わず顔をしかめた。彼は右手に

しっかり短剣を握りながら、銅像と対峙している。
「おい、早くしろ！」
　ギエルドの左手で抜き放った淀みのない剣筋が、銅像の持っている槍の穂先を切り落とす。片手が使えない不利な状況だというのに、まるで戦いを楽しんでいるかのように不敵な笑みを浮かべていた。
「勿体無いだろ、せっかくのお宝を壊すなんざ」
「何馬鹿言ってんだ！　それは宝じゃないって言っただろ！　ルーンが刻まれただけの、どこにでもあるただの剣だ！」
「だからこそ、持って帰ることに意味があんだよ」
「どんな意味だ、どんな！」
　口を動かしつつも、ギエルドの視線は襲ってくる銅像から外れることなく、今度は斧の付け根を的確に斬り、ゴトンと音を立てて斧の刃先が床に落ちた。
『ロン様、危ない！』
「！」
　レフルの声に思わず振り向くと、背後に銅像がロンに向けて斧を振り上げているところだった。頭は全身に今すぐ逃げろと警鐘を鳴らしているというのに、身体が竦んでしまって足が動かない。
　来るべき衝撃に耐えるべく目を閉じ、身体を硬くすると、衝撃は頭上からではなく横からきた。強い力で突き飛ばされ、受身をとる余裕のなかったロンはそのまま床に倒れる。
「アジェット！」
「え……？」
　一変して焦りが混じったギエルドの声に身体を起こすと、ロンの前には真っ赤な雫を滴らせながら剣を構えている青年の姿。左肩の部分の服が裂け、じわじわと真紅に染まっていく。
　刹那、ロンの脳裏にある場面が甦る。目の前の青年よりも細くて華奢な背中が、ロンを守ろうと立ち塞がる姿。腹部に裂傷を受けて血を滲ませながらも、決して引こうとしないその姿に戦慄したのを覚えている。
　そのときと酷似したこの光景は、確かめるまでもない。
「お前、僕を！」
「くっ……」
　アジェットは剣を銅像に向けて構えるも、斬られた箇所が痛むのか片膝をつく。そんなこちらの状態をゴーレムが慮ってくれるわけがなく、無情にも槍の穂先がアジェットを捉えていた。
「チッ、仕方ねえ！」
　相棒の危機に、漸く宝を持ち帰るべきではないと理解したのか、ギエルドは一度短剣を利き手であろう左手に持ち替え、近くの壁に向かって力強く突き刺す。その行動に、迷いはない。永い時を経て古くなっていた剣は、バキンと音を立ててあっさりと折れた。
　ギギギ……ギ
　短剣が折れると同時にゴーレムの動きが鈍り、そしてアジェットに槍が届く寸前に、完全に停止した。
「止まった……」
　ロンはふうと軽く息を吐きながら肩を撫で下ろした。発動のキーとなった短剣が壊れた以上、このゴーレム達が動くことは二度とないだろう。
「アジェット！　大丈夫か!?」
「！」
　しかし安堵したのも束の間、アジェットに駆け寄るギエルドにロンは彼が負傷したのだということを思い出す。傷の深さがどれくらいかわからないが、出血の量からして決して軽症ではない。
「う……」

ゴーレムが止まって気が抜けたのか、アジェットが呻きながら前のめりに倒れこむ。倒れる寸前をギエルドが支え、反対に彼を仰向けに寝かせた。
そのおかげで怪我の全貌が明らかになる。左肩から腰まで一気に斬られたらしく、一直線に服が裂け、そこから夥しい血が溢れかえっていた。これは相当深い。例え応急処置を施したとしても、ここは遺跡の中だ。背負って今すぐ走って遺跡の外へ向かっても、これだけ血が出てしまえば助かる見込みは限りなく低い。
（出血が酷すぎる……これじゃあ助からない。――でも）
アジェットが怪我を負ったのはロンを庇ったから。その庇う原因を作ったのはギエルドで、ロンが止めた時点で彼もまた止めてくれれば、このような事態を招かなかったかもしれない。
言うならば彼らの自業自得。ロンを守るべき二人が危険を招いたのだから。しかし、アジェットがロンを庇ったのもまた事実。
「どけ！」
「うお!?」
持ってきていた応急処置の道具を広げ、処置をしようとしたギエルドに向かって体当たりした。不意を食らったギエルドは、あっさり突き飛ばされる。ロンはギエルドがいた場所にしゃがみこみ、アジェットの傷口付近に手を伸ばした。
「いきなり何しやがんだテメエ！」
『ロン様いけません！　『魔石（リフェ）』なしでそのルーンは……！』
「うっさい黙れ！　気が散る！」
ロンの行動をそれぞれ違う意味で咎める二人を一喝し、伸ばした両手に意識を集中させ、大きく息を吸った。
「傷よ癒えろ（テェ・ウォウンドムストヘアル）！」
呪言を唱えた刹那、ロンの体中から淡い光りが溢れ出す。そしてロンの腕を伝い、アジェットの中へと流れるように次々と吸収されていく。
「これは……」
荒かったアジェットの呼吸が落ち着きを取り戻し始めた。淡い光りに包まれているロンの横顔を、驚きの表情で見つめる。しかし、次の瞬間アジェットの顔は顰められた。
「っ……！」
ロンの袖口と手袋の境となっている僅かに露出された腕から、突如血が噴出した。腕だけではなく頬、スカーフが巻かれた首、同じく僅かに露出された膝と、次々と血が吹き出る。服の下の背中や腹部も紅く染まり始め、そこも出血したのだとわかった。ロンの表情が苦痛に歪む。
「お、おい！　お前突然どうしたんだ!?」
「ロン……血が……！」
「だから黙れって言ってんだろ！」
豹変したロンの様子に二人が声をかけてくるが、ロンはそれを再び一喝した。まだアジェットの治療は終わっていない。完全に終わるまでは、決して気を緩めてはいけない。気を逸らした瞬間、ルーンは霧散し無意味なものとなってしまう。
次第にロンから溢れ出る光りの量が減りはじめ、そしてロンの腕を通してアジェットに全ての光りが吸収されると、完全に光りが収まった。
「終わっ……た」
ぐらりと頭が揺れた。同時に全身から力が抜けるのを感じ、ふらりとする身体はぐらりと横に傾いてそのま地べたへ倒れこむ。
『ロン様……あの者は無事です。よく頑張られました……』
レフルがロンの顔を覗き込んだ。口はいつもの穏やかなものだが、目許は安堵の光りが浮かんでいる。心配をかけて

しまったことを申しわけなく思いながら、軽く目を伏せることでレフルの言葉に応えた。
「暫く……休む……お前ら、も、休め……」
「おい、ロン！　おい！」
「血が……今すぐ止血をしないと……！」
「俺がやる。お前だってさっき死に掛けたばっかだろうが。暫く寝てろ」
「しかし……！」
　休めと言ったのに騒がしくなる二人。だが、ロンには既に彼らに大人しくしろと言う気力は残っていなかった。
　薄らいでいく意識が完全に途絶えるのに、そう時間はかからなかった。
　不思議な光景だった。少年の身体から光りが溢れ、そしてその光りが己の身体の中に染み渡るように吸収されていく。それは不快ではなく、むしろアジェットを優しく包んでくれるような、温かい光。現に、光が注ぎ込まれる度に痛みが和らいでいくのを感じていた。
　しかし、アジェットの身体が癒されていくということは、ロンの身体を蝕むということだった。ロンの腕だけでなく全身から血が吹き出て、光が収まったときには既に彼は血に塗れていた。そしてギエルドと止血についてもめているうちに、彼は完全に意識を失っていた。
　ロンがこうなってしまったのは、恐らく彼がアジェットを助けるために紡いだルーンが原因だろう。だから助けられたアジェットがロンの手当てをするのが道理だろうとギエルドに進言するが、彼は頑なに首を縦に振らなかった。
「アジェットが怪我をしたのは、俺がこいつの言うことを聞かずに馬鹿やったからだ。俺にも責任がある。……それに、俺だけじゃ多分お前を助けることはできなかった。これくらいはやらせてくれ」
　そこまで言われてしまい、アジェットは仕方なくその気持ちを汲むことにした。床に膝を立てて座り、そこへ腕を乗せて体重をかける。すると、アジェットの眼前にあるものが飛び込んできた。

『貴様！　わたくしの話を聞きなさい！』
「君は……！」

　背中に四枚の透き通った羽の生えた、小さな人間。片手を腰に当て、もう片方の手をアジェットに向けて指を差している。ずっとロンの傍に寄り添っていただけの妖精がアジェットに直接話しかけてきたのは、これで二回目だ。

『今すぐあのケダモノ男を止めなさい！　ロン様に手当ては不要！　まっすぐ仰向けにさせるだけで結構です！』
「え……でも、ロンは傷だらけで……」
『わたくしは誰よりもロン様を理解しております。そのわたくしが不要と言っているのです。だからあの男にロン様から離れるよう言いなさい。今すぐ！』
「あ、ああ……わかった」

　すさまじい剣幕で眼前に迫ってくる妖精に気圧され、アジェットは流されるまま頷いてしまう。そして包帯を片手に、ロンの腕を掴んでいるギエルドの方を向いた。

「ギエルド、ストップ！」
「あ？　どうした。また自分がやるとか言うんじゃねえだろうな？」

　手当てする寸前のところを止められたギエルドは、胡乱な眼差しをこちらに向けてくる。アジェットはちらりと横目で妖精の様子を伺うと、早く言え、と言わんばかりに両腕を組んでこちらを睨んでいた。心の中で溜め息をつく。

「いやその……ロンの傍にいる妖精が、仰向けに寝かせるだけでいいと……今すぐロンから離れてほしいと言われて」
「……何だそりゃ。てか、離れたら手当てができねえだろうが」
「それが……彼が言うには、手当てをする必要はない、と……ロンのことを誰よりも知っている自分が言うのだから、って」

　妖精に言われたことを、ほぼそのままギエルドに伝えると、案の定彼は訝しげに顔を顰めた。その言葉を鵜呑みにできるわけがない、とその表情が語っている。

『――ああもう、仕方がないですね！　わたくしの言うことを疑うのであれば、ロン様の腕をよく見てみなさい。そうすればわかります！』
「えっと……ロンの腕を見ればわかるらしいよ」

　ギエルドの理解が得られていないとわかった妖精は、苛立ちを露にアジェットに指図する。
　アジェットも彼の言葉に納得したわけではないため、半信半疑ながらも妖精の言葉をアジェットに伝えた。

「腕？　腕がどうしたって――！」

　顰めた顔のまま、ギエルドはロンの腕をとる。呆れた眼差しだったのも束の間、表情に驚愕が走る。

「ギエルド……？」
「アジェット、ちょっとこっちこい」

　ギエルドがロンの腕に視線を向けたまま、アジェットを手招きした。立ち上がって二人の傍に行くと、ギエルドはガーゼを手に、ロンの腕を染める血を拭う。

「見てみろ」
「これは……！」

　血が拭かれ、綺麗になった腕には何もなかった。出血した痕すらない。もしもロンに起こったことを知らずにこの腕を見せられたら、出血したなどとても信じることはできないだろう。

『だから言ったでしょう？　ロン様の手当ては必要ないと。既に体中の傷口は完治しております。痕も残っておりません』
「……手当てがいらないのはわかったよ。でも、傷が塞がるだけじゃなくて傷跡すらないのは、どうしてなんだ……？」

　ルーンを使ったせいでの出血で出来た傷は治りが早く、傷口が塞がったというのならばわからなくはない。だが、短時間で傷口が跡形もなく完治するなど、目の当たりにしても信じられることではなかった。

『……それはロン様がお目覚めになられてから、お話し致しましょう。――それよりも』

　妖精は顔を僅かに曇らせながら、一度俯いた。しかし再び顔を上げたとき、そんな鬱屈した表情は微塵もなく、カッと琥珀色の瞳を見開く。

『もう手当てが必要ないと理解したのだから、直ちにロン様から離れなさい！　今すぐ！』
「……ロンから離れてほしい、だそうだよ、ギエルド」

　妖精は真っ白な顔を真っ赤に染め上げ、ギエルドを睨みつけている。そうだとは露も知らないギエルドは、ロンの上半身を自身の膝の上に乗せながら、ガーゼで頬についている血を拭っていた。

「俺、血拭いてやってるだけなんだけど……？　何でそれが気に食わないんだ、妖精さんは」
「確かに……何故だい？」

　手当てをする必要はなくても、血を拭いてやらなければ肌にこびりついたまま固まってしまうだろう。まだ乾ききっていない今、拭いたほうがいいとアジェットも思う。

『そこのケダモノに大事なロン様を触らせるなど、言語道断！　それは貴様がやりなさい、亜麻色の騎士！』
「わたしがやるのは別に構わないけど……どうしてそんなにギエルドに敵愾心を抱いているんだい？」

　妖精はまるで火山が噴火したかのように、ギエルドに怒りを向けている。確かにギエルドはロンをからかったりしてはいたが、それはロンも同じでお互い様だ。いくらなんでも、逆鱗に触れるようなことはしていないはず。

『貴様はこいつがロン様にしたことを知らないから、そんな呑気なことが言える！　こいつはロン様の初めてを奪った、憎き男です！』
「ロンの初めてを奪った？」
「ゲフッ！　ゴホッゴホッ！」

　妖精の言っている言葉の意味がわからず、思わず聞き返すと、何故かギエルドが激しく咽た。心当たりがなければそんな反応をするはずがない。アジェットは純粋に疑問に思って、事情を知るであろうギエルドに尋ねる。

「ギエルド、ロンの初めてを奪ったとは、どういうことだい？」
「悪い、聞くな、頼むから」

　ギエルドが腕を真っ直ぐ伸ばして手の平のこちらに向ける。普段の飄々とした雰囲気はなく、余程知られたくないらしい。そんなギエルドから無理やり聞き出そうなんて思うはずがなく、アジェットは深く追求するのをやめた。

「あー……やっぱり初めてだったのかよ……あー……」

　ボソリとギエルドが何か呟いているが、アジェットの耳にまで届かない。

「……アジェット、パス。妖精が俺にロンに触るなって怒ってんなら、お前がやってくれ」
「ああ、構わないよ」

『血を吹くのは服で覆われていない所だけで結構です。後は戻ってから、ご自身で汚れを落とすでしょう』
「わたしが助けられたのだから、別に全身を拭いても――」
『貴様にそんなことをさせて堪るか！』

　彼の方がこちらに血を拭かせることに対して遠慮しているのかと思えば、また激しく激昂された。どうやら、こちらのことを慮っているわけではないらしい。

（何故そこまでロンに触れることを、彼は厭おっているんだ？）

　彼にとって、ロンが大事な存在であることは理解できた。だが、できる限り自分達に触れさせないようにする理由がサッパリわからない。確かにある程度拭ったら、後は風呂にでも入って自分で落としてもらうことになるのだろうが、できる限り拭いてやった方がロンとしても楽なのではなかろうか。
　そう思いはしたが口には出さない。ギロリと光るつり目がちな琥珀色の双眸が、こちらを監視せんとばかりに見張っているから。もし口に出したら、きっとまた彼は怒る。
　ギエルドと交替し、アジェットはロンの腕を手に取った。鍛えている自分やギエルドとは違う、華奢で細い腕。肩幅も狭く、背は決して低い方ではないのに小さく見えるのは、そのせいではないかと思われた。伏せられた瞳を縁取る睫は長く、こうして見るとまるで少女のようにも見える。

（女の子に見えた……なんて言ったら、ロンは怒るだろうな）

　アジェットは抱いた感想を、そっと胸の奥にしまいこむ。今はただ、己を救ってくれた少年に感謝をするだけ。
　ガーゼを手に取り、腕にこびり付いている血を拭った。

　うっすらと目を開けると、薄暗く高い古ぼけた石造りの天井が映る。起き上がることなくぼんやりと天井を眺めているうちに、意識がはっきりとしてくる。そして何故自分がこんなところに横たわっているのか、経過と結果を思い出した。

（身体に力が入らない……やっぱり魔石（リフェ）なしで治癒系のルーンなんて使うもんじゃないな……）
　目を覚ましたはいいが、指先を僅かに動かすくらいはできるものの、身体を起こすどころか腕を動かすこともできない状態だ。
『ロン様！　お目覚めになられましたか！』
「レフ……ル」
　喜色を浮かべたレフルが、ロンの顔を覗き込む。そして少し遅れて、もう一人別の人間がレフルに続いて覗き込んできた。
「よかったロン。目を覚ましたんだね」
「……」
　覗き込んできたのは、ロンがこうして倒れる原因となったアジェットだった。浮かべているのは安堵の表情。彼までがこうして覗き込んでくるとは思わず、面食らう。
「……僕はどのくらい眠ってた？」
　目覚めたロンが気になったのは、まずそこだった。割と早めに駐在所を出て、何とか遺跡まで辿り着き、そしてこの場所までやってきたのは大体所要時間を考えて昼前くらいだと把握している。己がどのくらい寝て、時間を潰してしまったのか、知っておきたい。
「まだ一時間は経ってねぇな。起きてんのが辛いなら寝とけ」
　ロンの質問に答えたのはギエルドだった。思っていたよりも時間が経過していない。だからまだ身体が自由にならないのか、と納得する。最低限動きまわれるようになるには、まだ時間が必要だ。
『ロン様、その……申しわけありません。亜麻色の髪の騎士と、会話をしてしまいました……』
「そう。まあ仕方ないね……」
　レフルがアジェットと会話したということは、もうレフルの存在についてシラをきることはできないということ。だがそうでなくても、アジェットの怪我を治した時点であることが彼らにバレてしまうと理解していた。己のその問題からしたら、レフルの存在を知られることは些細なことに過ぎない。それにどっちみち、レフルのことを彼らに説明しなければならなくなるだろうとも思っていた。今までラン以外の誰にも告げなかったロンの事情の全てを、彼らに知られてしまうとわかっていながら、ロンはアジェットを助けたのだから。
「……お前ら、僕に聞きたいことが山ほどあるんじゃない？」
　覗き込んでいたアジェットの顔が、その言葉によって強張った。図星をつかれた顔だ。本当なら、ロンが目覚めた時点で質問攻めにしたいに違いない。なのにそれをしないのは、ロンがこうなったのは自分達に非があると理解しているからだろうか。ほんの僅かな付き合いしかないが、彼らの性根が曲がってはいないことくらいはわかる。そうでなければ、街の人間からあれだけ好かれるわけがない。
「お前の言葉に否定はしねえよ。むしろ、気にならないってほうが無理あるだろ。で、だ。お前はそれを話す気はあるのか？」
「このことをずっとお前らの胸の中に秘め続けてくれるってなら、それに越したことはないね」
「……借りがあるから、そうしてやりたいのはやまやまなんだがな。だが俺達には、お前の抱えている『事情』っても

のが、この国を脅かすのかそうでないのかを判断しなけりゃならねえ義務がある。だから何もなかったことにするのは無理だ」
「僕がそれは大丈夫だと言っても？」
「お前は反対の立場だったら、それで納得するか？」
「しないね」
　彼らはこんな場所にいるが、腐っても騎士だ。彼らの国であるルインラトゥスを守るために、騎士は存在する。ギエルドのいうことは最もだ。ロンも彼らの立場なら、同じことを言うだろう。
『ロン様に助けられたくせに生意気な……！』
「向こうにも守らなきゃいけない大事なもの、ってのがあるんだろ。だから落ち着けレフル」
　拳を握ってわなわなと震えているレフルを落ち着かせる。そして何から彼らに話そうかと頭を過ぎらせ、まずはギエルドにレフルの姿が視えるようにさせるべきかと判断した。
「レフル、あいつにお前の姿が視えるようにしてやって」
『……仕方ないですね』
　不本意極まりない、といった顔をしながらも、レフルはふよふよとロンから離れていく。暫くすると、なっ!?　と驚愕するギエルドの声が聞こえてきた。これで彼にも、レフルの姿がはっきりと視えるようになった。
『わざわざ視えるようにしてさしあげたのです。ロン様に深く感謝することですね』
「ちびっこい癖に、態度はデカイ妖精さんだな」
「！　ギエルドも、彼が視えるようになったんだね」
　仰向けになっているロンには彼らがどんな表情をしているのかわからないが、驚いていることだけは確かだろう。まずはレフルについて、彼らに説明する必要がある。
「こいつはレフル。レフルゲンセル。『光り輝いている者』っていう意味。でもって妖精じゃなくて『精霊』っていう存在。『光』に関する力を持ってる」
「『精霊』？」
「なんだそりゃ。聞いたことねえな」
　声に疑問の色が混ざる。ルーンが廃れていくのと同時に、彼らの存在もまた、人々に忘れられてしまっているのだから、当然の反応だった。
「精霊は、簡単に言うと身体全体が魔力でできてる生命体。一人だけで、大体人間一万人分くらいの魔力を持ってる」
「いちま……」
「そりゃすげえな」
　二人は感嘆する。ロンは精霊についての自身の記憶を掘り起こし、分かり易い言葉を選んで紡いでいく。
「精霊には、それぞれ固有の力があって、レフルでいうなら『光』。他には『風』とか『水』、『火』に『音』とかもあるよ」
　力の大小はあれど、それぞれが持つ固有の力を自在に操ることができる存在が精霊だ。レフルは『光』を操る力を持ち、暗い遺跡内部を照らすのはいつも彼の役目でもある。
「姿形も、様々。レフルみたいに人間みたいな姿をしている奴もいれば、鳥とか魚とか動物とか、後は木とか植物みたいな姿をしてたりもするみたいね」
「みたいって、曖昧だな」
「僕だって、レフル以外の精霊に会ったことないんだよ。精霊は基本、人間の前に姿を現さないから」
「……なら何故、彼はここにいるんだい？」
「それは……」
『そこはわたくしがご説明いたします』
　アジェットの質問にどう答えるべきか言葉を濁したロンに変わって、レフルが凛とした声をあげる。確かに彼ら精霊

のことは人間であるロンの口からいうよりは、自身の口から言った方がいいだろう。精霊の事情をよく知るロンにとって、それを口にするのは憚られた。
『まず太古の大昔。ルーンが日常的に使われていたときのことです。人間の身体には魔力を生み出す細胞があり、そこから湧き出る魔力を頂く代わりに精霊は力を貸すという契約を結んでおりました。現在残っている多数の遺跡は、大体がこの時代に造られた集落的なものです』
　レフルの口調は淡々としていた。そのときのことを懐かしがるわけでもなく、ただ事実を語るといった様子は、普段ロンに対する過保護な面を全く感じない。そんな様子のレフルを、二人は一体どう感じているのだろう。
『しかしある時を境に、その共存関係は崩れました。己の欲望を満たすがために、精霊と契約し協力するのではなく、利用する人間が現れ始めたのです』
「！」
「なるほどな、ありえる話だ」
　アジェットの息を飲む音と、ギエルドの冷めた声音が聞こえてくる。
　精霊が人前から姿を消したのは人間から我が身を守るため。つまり、人間側の自業自得による結果だった。
『先ほど治癒のルーンを使い、手負いとなったロン様の姿はまだ覚えておいでですよね？　ルーンは魔力を消費して発動します。消費量は用途によって様々ですが、中には消費量が著しく激しいルーンが幾つか存在します。治癒系のルーンもその一つです』
　話題が突然変わったのにも関わらず、彼らが口を挟むことなくじっと大人しくしている。聞き逃すまいと必死なのだろう。
『消費量の激しいルーンを使うとき、使用者の魔力が消費量を下回っていた場合、先ほどのロン様のようになります。魔力を生み出す細胞から、無理やり不足分の魔力を搾り出すのです。そのため全身の毛細血管が裂けます。それでも足りない場合は、生命維持に使われている分の魔力まで吸い上げ、最悪の場合死に至ることも』
「な……」
「わたしは……そんな危険なことをロンに強いてしまったのか……」
　ロンがアジェットに治癒のルーンを施そうとして、レフルが止めようとしたのはこれが原因だ。怪我を治すルーンは膨大な魔力を消費するため、治す方も命懸けとなる。
「終わったことだから気にしなくていいよ。それより、ちゃんとレフルの話を聞いてろ」
　レフルがこのことを話したのは、精霊について全くの無関係ではないからだ。アジェットに反省を促すためではない。
『消費量の激しいルーンは主に人体に悪影響を及ぼすようなものが、それに当たります。例えば人を操り、思い通りに支配する。他者に危害を加える、もしくは命を奪う。治癒系のルーンは正反対なのに何故と思われるかもしれませんが、人を救ったり命をないがしろにする行為には、それ相応の代償が必要になるのは当然のことです』
「何だか納得いかねえな。傷つける代償は大きいのに越したことはねえが、なんで助けるのにも同じくらい代償が必要になんだよ」
『怪我をするのはとても簡単でしょう？　ですが、負った怪我が治るのにはどんなに小さな怪我でも時間がかかります。それを短時間で治そうとするのだから、代償が大きくなるのです。これだけにあらず、壊すことよりも創造することの方が難しいというのは、この世の理、自然の摂理ではないでしょうか』
「……確かに」
　ギエルドの疑問と同じことを、かつてはロンも持っていた。簡単に人を傷つけることができないのと同じように、簡単に人を助けることもできないのは、人を助けるというのは簡単なことではないから。ロンにそう教えてくれたのはレフルではなく、ランだったが。
『これを元に話を戻します。ルーンには消費量の激しいものがあります。大抵の人間は、万全の状態でもこれらのルー

ンを一度使うだけでも厳しいことです。何故なら、人間が一人当たり持っている魔力はそれほど多くはないからです。でも、消費量の激しいルーンを使うとき、もっと魔力を持っている存在から魔力を供給できれば……その存在が、人間とは比べ物にならない魔力を持っているのなら、消費量の激しいルーンを際限なく使うことができるのではないかと気づきました』

元々治癒系のルーンは、一人で行使するものではなかった。最低でも二人ないし三人。怪我を治そうと願う人々が集まり魔力を一つに合わせて初めて、安全に怪我を治すことができる。たった一人で治癒のルーンを使うことは危険だからと、暗黙の了解で禁止されていた。しかし、あるときとある人間が、複数で治癒を行う行為をヒントに、他者から魔力を供給できるのだと、気づいてしまったのだ。

『人間達は精霊個人の力を借りるのではなく、精霊が保有する魔力に目を付けました。なんせたった一人で人間一万人分の魔力です。しかし精霊も馬鹿ではありません。自分達の力ではなく、己を形成する魔力が狙いとあらば身を守るために次々と人間から離れていきました。が、それでも執念深い人間に捕まってしまった仲間は大勢いました』

まだランと一緒に度をしているときに、ロンもまたレフルからこの話を聞いた。ロンにとってレフルは大きさは違えど、同じ目的で旅をする仲間だと認識していたため、利用しようと企む人間の気持ちが理解できなかった。太古の大昔の人間も、精霊を仲間や友達だと思っていたのだろうに、どうしてそんな彼らを利用しようだなんて思ってしまったのか。その事実に泣きたくなったのを覚えている。精霊を道具のように見なした昔の人間達に対する怒りなのか、それとも同じ人間がそんなことをしでかした悲しさか。――もしくは同じように道具扱いされていた過去と重ね合わせてしまったからか。当時も今も、そのときの複雑な気持ちをよく理解していない。

『精霊は元々、人々の目に映っていましたが、利用されることを恐れ、人に姿を発見されないように身を潜めるだけでなく、姿そのものが見えないよう、隠形するようになりました。しかし、これもまた完璧なものではありません』

精霊が持つ隠形の力は、自身の存在を希薄化させるものであり、完全に姿を消せるというわけではない。先ほどレフルがギエルドに施したのは、隠形していても精霊を視ることができるようになる力。つまり、精霊自身から見破る方法を授かれるのだ。しかし己の首を絞めるようなことを精霊が進んで行うわけがなく、隠形している精霊が人間に見破られる理由は別にあった。

『極々稀にですが、普通の人間よりも一度に多くの魔力を生み出せる細胞を持った人間が生まれることがあります。常に多くの魔力を保有する人間には、どんなに隠形して自身の姿を希薄化させても、姿を視られてしまうのです』

「ちょい待て。じゃあアジェットがお前の姿が見えたってことは――」

『ええ。そこの亜麻色の騎士は、通常の人間の倍以上の魔力の保持者となります』

「だからわたしだけが、君の姿を視ることができたのか……」

レフルはほぼずっとロンの傍にいたにも関わらず、レフルの存在に気づいたのはアジェットのみだ。アジェット以外の騎士団の人間や、テロンダの街の人々が気づいた様子はない。

『因みにここ十数年、多くの人間を見てきましたが、わたくしの姿を視ることができた人間は貴方を抜けばたった一人しか知りません。当時も極めて少ない人数しか存在しませんでしたが、無条件で姿を視られることは、かつての我々にとってそれだけで脅威でした』

精霊の姿を視ることができる人間は貴重で、そのため多くの国々がその人間を高待遇で重宝していた。そして率先として精霊の捕獲が行われていたのだ。そのため精霊達は常に人間の影に怯えながら暮らしていたらしい。

『ロン様の持っていた首飾りは覚えておいでですか？』

「ああ、必死に取り戻そうとしてた奴だろ？」

「ルーンが刻まれた大粒の宝石……だったよね」

首飾りを取り戻すためにひと悶着起こしたせいか、ロンの首飾りは二人の印象によく残っていたようだ。レフルは話しが早いとばかりに言葉を続ける。

『あれは宝石ではなく『魔石（リフェ）』と呼ばれる魔力の塊――精霊の魔力を抽出し、凝縮して可視化したもの。そし

て魔力を搾取された精霊の名が、魔石の表面に刻まれます。ロン様の持つ魔石に刻まれている名は、光り輝いている者（レフルゲンセル）』
「それは……つまり……」
「だからあれだけ必死だったわけか」
「そういうこと」
　リフェとは、『命』を意味するルーンである。一見宝石のような美しい石であるが、それは精霊の生命力の源である魔力からできている、精霊の命そのもの。だから魔力の塊である石は『魔石（リフェ）』と呼ばれた。
『精霊の魔力を魔石（リフェ）と化すルーンを編み出した人間達は、捕らえた精霊を次から次へと魔石（リフェ）に変えていきました。わたくしもその例に漏れません。それだけではなく狡猾な人間は、魔力全てを魔石に変えるのではなく、存在が保てる程度の魔力をわざと残すのです。そうすると精霊は自身の魔力を回復させようとするのですが、その回復する魔力は精霊にではなく魔石（リフェ）に注がれてしまう。精霊の身体から分離したとはいえ、魔石（リフェ）は精霊の命の塊。それに違いはなく、どんなに魔石（リフェ）から距離をとっても、精霊自身の魔力が回復することはありません』
　エンジリカに取り上げられた魔石（リフェ）はレフルの命そのもの。つまりロンは、彼女にレフルの命を握られているのと同意なのだ。
『わたくしは、魔石（リフェ）にされる前に自身に細工を施しました。わたくしの魔石（リフェ）は、わたくしと契約を交わした者でなければ使用できないように、と。契約は人間と精霊、両者の同意がなければ結ぶことはできません。だからわたくしの魔力を魔石（リフェ）にした人間は、使い物にならないならばと、破壊しようとしました。一方的に延々と魔力を搾取し続けられるよりかは、いっそのこと、この場で死を迎える方がマシだと考えての行動です』
　精霊にとって生きるのが困難であった古の時代のことは、ロンは考えないようにしてきた。過去がどうであれ、大事なのは今を生きること。レフルがこうして精霊の存在を初めて知った者に己の境遇を話すのは、彼にとっても既に過去のことと完全に割り切っているからだ。
『死を覚悟したそのとき、運よく助けの手が入りました。精霊を利用するのではなく、共生して生きていくのだと、変わらぬ思いを抱いている人間の手によって。そんな人間は利己的な者達より多くはありませんでしたが、少なくもありませんでした』
　レフルが何故魔石（リフェ）にした人間の傍にいるのかというのならば、全ての人間が悪いわけではないと知っているから。利己的な面もあれば誰かの為に己の身を省みない者もいる。もしもこうして人間に助けられなければ、人間に激しい憎悪を抱いていた可能性もあったかもしれない。
『次第に人間達は精霊を巡って互いに争うようになりました……まあここは特に関係ないので省略します。その結果、わたくしは精霊を守護するある人間の手に渡り、ひっそりとした人里で祀られ、暫くの間眠ることになりました。大体二千年くらい昔の話になりますが』
「気が遠くなるな。で、その祀られてるはずのあんたが、なんでこんなところに？」
『人の話は最後まで大人しく聞きなさい、ケダモノ』
「けだ……おいおいそりゃ心外だな」
　レフルにとって、ギエルドはケダモノで固定らしい。どうやら、保管庫でもみ合いになったことをまだ許していないのだろう。過保護な奴、とロンは内心呟いた。
『わたくしが祀られたのは、元に戻る方法を見つけるまで、わたくしの魔石（リフェ）を狙う人間からわたくしの身を守るためです。そしてあるとき、遠く離れた大陸で魔石（リフェ）にされた精霊を戻すことができたと、眠っていたわたくしは起こされました。魔石（リフェ）から魔力を解放されたかつての友であった精霊が、魔石（リフェ）のまま眠りについていたわたくしを見つけて教えてくれたのです。ですが』
　今まで淡々と話していたレフルの声音に、突如落胆の色が混じる。

『わたくしが目を覚まし、その話を聞いたのは、わたくしが祀られてから数百年経った後のことでした。精霊にとって数百年はほんの僅かな時間でも、寿命が短い人間にとっては長すぎる時間。ずっと人間の目に触れないよう生きてきた精霊は、そのときから既に人間達から忘れ去られ『妖精』といった御伽噺のような架空の存在へと成り果ててしまったのです。わたくしを祀っていた里もまた同じ。そのときにはもう、魔石（リフェ）は昔からの習慣で祀っているだけで、何故祀られているのかもわかっていないような状態でした』

　レフルはこちらに向かって飛んでくると、横になっているロンの頭に手を伸ばしてくる。そしてその手はロンに触れることなく、すり抜けた。

『このように、魔石（リフェ）に魔力の大半を奪われてしまったわたくしは、人や物に触れることができません。つまり、自身の魔石（リフェ）にも触れることができない。魔石（リフェ）を持って移動するということができないのですよ。同胞から聞いた話では、『それ』は人間と精霊が共同で創りだした『モノ』で、その場に精霊とその魔石（リフェ）がないと意味がないと。そしてその精霊も元に戻ってから大分時間が経過していたため、今はどこにあるのかわからないとも言っておりました。自力で探しに行くこともできず……更に言えば、魔力の量が薄いということは、意識せずとも常に隠形しているのと同じ状態なので、普通の人間にわたくしを視ることはできません。案の定、当時の里にわたくしの姿を視ることができる人間はいませんでした』

「元に戻った精霊に協力を仰がなかったのかい？　話から察するに、彼らは物理的に物に触れることができるのだろう？」

『物理的に触れるといっても、精霊の身体は魔力の塊です。精霊同士が触れ合うとお互いの魔力が混ざり合い、最悪の場合相手に取り込まれて存在を失います。魔石（リフェ）も同様です。別れているといっても、魔石（リフェ）は精霊の魔力の塊ですので』

　そのため、精霊同士は触れ合うことができない。だから、魔石（リフェ）を動かすには、人間の協力が必要不可欠だった。

『そこのケダモノにしてやったように、一度わたくしは里の人間達に己の姿が視えるようにし、事情を説明しました。しかし、彼らからしたらわたくしの話は青天の霹靂。毎日何事もなく、のんびりと慎ましやかな生活を送っていた里の人間達は、それを大変気に入っておりました。そんな生活を捨て、どこにあるのか、姿形もわからない『モノ』を探す旅をすることに抵抗を覚えるのは致し方ありません』

　誰しも、平穏な生活を捨て難く思うのは自然なこと。レフルとしても、今の生活を捨ててまで自分に協力してほしいとは言えなかった。人間の寿命は精霊に比べて遙かに短い。その短い生を己の好きなように生きる権利を奪うのには、抵抗があったのだという。

『だからわたくしは、これから生まれ出でる者達の中に、わたくしと共に旅立ってもいいと言う者が現れるかもしれない、という願望に掛けることにしました。わたくしには彼らと違い、時間だけはたっぷりありますからね。二桁の誕生日を迎えた子供に姿を見せ、協力するかしないかを問う、一種の儀式のようなものが生まれました。そしてそれは今から十四年前に漸く叶いました。わたくしに協力してもいいとはっきり口にした子供が現れたのです』

「その人間はロン……ではないよね。歳が合わないし……」

　彼らに伝えたロンの年齢は十四。実際は違うが、このときレフルに協力すると言った人間は確かにロンではない。

『幼き頃から知識欲と好奇心が強く、里の外に憧れを抱いている子供でした。そしてそこの騎士のように、力を与えずとも精霊の姿を視ることもでき、実を言えば更に幼い頃から交流がありました。その子供の名前は、ランといいます』

　レフルの口から紡がれる名前を聞いて、ロンはそっと目を伏せた。切れ長の瞳に悪戯っぽい光りを宿した表情が脳裏に過ぎる。こうして思い出すランは、いつも笑っている表情ばかりだ。彼女は心身共に強く、常に前を向いて生きている女性だった。

『ラン様が十を迎えた誕生日、正式に契約を結び、そして旅に出たというわけです』

「十になったばっかのガキが旅!?　危険すぎるだろ！　誰も止めなかったのか？」

『……』
　ギエルドの問いに、レフルは黙り込む。この流れはロンも知っている。ランとレフル、二人はいつ出合ってどうして旅に出たのかを聞いているから。だからレフルが思わず間を空けたくなる気持ちもわからなくはない。
『……止めたに決まっているでしょう？　ラン様はまだ幼いからと反対する里の人間やわたくしの言葉を振り切り、魔石（リフェ）を祠から勝手に持ち出して家出をするかのように里を出たのです。本人曰く、ルーンは既に大人よりも使いこなせるのだから問題ない。そして後二年も三年も待てるか、と。魔石（リフェ）を持ち出されてしまっては、わたくしにラン様を止める術はありませんでした』
「……随分無鉄砲な子供だったんだね」
「こっち見て言うなっつの」
『ラン様の末恐ろしいところは、本当に危機を何度も己の力のみで脱していることです。まあ現代は世界規模でルーンが廃れてますから、そのおかげもあったのでしょうが』
　かけられたルーンは防ぐことが出来る。正反対の意味を持つルーンを紡げば、効果が相殺されるのだ。ルーンが廃れていることにより、かけられるルーンを防ぐ手段を世界中の人間が失ったことは、ランにプラスに働いただろう。
『そしてラン様と数年間旅をした後……わたくし達はある遺跡の中でロン様に出会いました。その遺跡というのは――』
「待って、レフル。そこからは僕が話す」
　ロンは徐に身体を起こす。長く話しているうちに、大分回復してきたのか、身体が動くようになっていた。
「話してくれるのは嬉しいけど……身体は大丈夫なのかい？」
「動きまわるのはまだ無理だけど、起きて話すくらいは別にどうってことない」
　起き上がった際、多少頭がフラついたが、じっとしていれば何の問題もない。ロンは片膝を立て、それに寄りかかるように腕を置く。
「僕がレフル達に出合ったのは、古の時代に建てられた遺跡の中でも、ルーンに関する書物のみが集められた『古代言語（ルーン）の森』と呼ばれてた図書館だ。でもって何で僕がそんなところにいたのかというと――」
　ロンは首に手をやり、そこに巻かれていたスカーフを外した。そしてあごを上にあげて、そこにあるものを示す。
「刺青……っぽいが微妙に違うか……？」
「これは……もしかしてルーン？」
「ご名答。これと同じものが、両の手首と足首にもある。これを解くために『古代言語（ルーン）の森』で解き方を探してたんだ。……結局、見つからなかったけどね」
　ロンの首にあるのは、まるで刺青のように刻まれた古代言語。先ほどの侵入者退治用の罠である短剣に刻まれていたものや、扉に刻まれているものと中身は違えど同じもの。通常は物質に刻まれるべきそれが、ロンの肉体に直接刻まれていた。
「お前達見たんだろ？　僕の身体についた傷が、勝手に癒えてくのを。それはこのルーンのせい」
「ルーンってそんなこともできるようになるのか？」
「とてつもない代償を払えば、ね。歴史で習ってない？　たった一夜にして突然滅んだっていう国のこと」
「それってもしかして『イクティンクの消滅』のことかい？　でもそれは、今から五百年も昔のことじゃないか。それが一体どうしたというんだ？」
　アジェットがすぐさまロンが求めていた答えを口にする。しかし前後の因果関係がわからず、首を傾げた。ギエルドは何かを考えているかのように口元に指を当てている。もしかしたら彼は何か感づいたかもしれない。
　ロンは首にスカーフを巻き直し、二人の方を向きなおす。
「かつてイクティンクは、徐々に廃れ行くルーンに歯止めをかけようと、世界中から研究者が集まって毎日のように研究していた、ルーンの一大都市だった。そして当時は、イクティンクから次第にルーンが広まり、再び日常的にルーン

が使われる日が訪れるのではないかと、多くの国から援助を受けてはまた発展して……を繰り返してた。なのにイクティンクは滅んだ。何でだと思う？」
　ロンは絶対答えられないのを承知で、あえてそれを二人に問う。
「あの事件は、当事者であるイクティンクの人間全てが姿を消してしまったから、原因は不明のままだったはずだよ」
「……その時代の人間でも原因がわからなかったってのに、俺達が答えられるわけねえだろ」
　予想通りの答えに、ロンはコクリとうなづいた。ここで大事なのは、二人が答えるということではない。イクティンクの顛末を知る存在は、この世に存在しないという認識を再確認させるために、ロンはあえて二人に問うたのだ。
「生存者がいないから原因不明とされた『イクティンクの消滅』だけど、実はいたんだよね。たった一人だけ、生存者が」
「なんだって……？」
「――へえ。とりあえず何でお前がそんなこと知ってんだとか、それとお前のこととどう関係あるんだとか聞きたいことは山ほどあるが、今はあえて聞かねえよ。とっとと続きを話してくれ」
「わかってるよ」
　ロンは一度瞳を伏せて頭の中身を整理する。どの部分からどう話すか。己の中に眠る記憶を引き起こす。
「その生存者は、生まれが特殊な子供だった。お前ら『記録人（レコーダー）』って知ってる？」
「『記録人（レコーダー）』……古よりルーンや伝承を正しく伝えるべく突如発現した少数民族。記録の継承は全て親から子へ、口伝のみで伝えられていた。それを成し得たのは、その民族が持つ特異性、一度見聞きしたものは絶対に忘れないとされる記憶力によるもの。しかし彼ら民族は、イクティンクの消滅と同じ時代にその血を全て絶やしてしまった……と習ったよ」
「あんな複雑な言葉を口伝のみって……すげえ記憶力だな、おい」
　まるで辞書に載っている文章をそのまま音読しかたのように、アジェットが『記録人（レコーダー）』についての知識を述べた。その隣でギエルドが顔を引きつらせている。
「『記録人（レコーダー）』の記憶は、ルーンを研究する学者にとったら喉から手が出るほどほしくて堪らないもの。ルーンの生き字引だ。『記録人（レコーダー）』はその口伝される記憶に目をつけられ、学者達に売られるために皆捕まった。奴隷制度が合法な時代だから、それを咎める殊勝な人間なんて勿論いない」
　囚われ、奴隷とされた『記録人（レコーダー）』達に、逆らう術はなかった。当時は今と違い、相手にルーンをかけてしまえばそれでいいというわけにはいかない。ルーンを紡げばルーンを返される。そして『記録人（レコーダー）』は少数民族。その全体数は三桁にも届かないと言われていた。多勢に無勢では、どんなにルーンの知識があっても敵うはずがない。
「その子供は、あるルーンに魅せられていた一人の学者の元へと売られることになった。そして数年が経ったとき、その研究の成果を試すためにある実験が行われた。その子供を実験台にして」
　そう口に出した途端、ある光景がフラッシュバックした。窓一つない狭い部屋の中、床から壁、天井にまで細かく刻まれたルーン。そしてついに悲願を達成できると喜悦する学者の姿。
　ロンは軽く頭を振ってその光景を打ち消す。今はあのときの感傷に浸っている場合ではない。
「――話を一旦変えるけど、ルーンには絶対紡いではならないと言われている『禁忌』がある。禁止されてる理由は倫理に反するからとか、何が起こるかわからないとか様々だけど、一番の理由は危険だから。その数は全部で三つ」
　記憶の引き出しから『禁忌』について引っ張り出すのは、久しぶりだ。かつてはほぼ毎日のように説明させられ、辟易したものだった。
　しかし今は、厭おう気持ちはない。強制されるのと自発的に口にするのとでは、大分気持ちの持ち様が違う。
「まず一つ目。『あるべき姿からの脱却』。簡単にいうと、人間を人間以外の生き物に変えようとしたりすること。鳥とか猫になったりとかね。後は男が女になったり、女が男になったりするのも駄目。同じ人間でも、男と女は全く別の生

き物だからこれも該当する」
「人間以外になるのは、確かに危険な感じはするけど……」
「もしも破って実行したらどうなるんだ？　元に戻れなくなるー、とかか？」
「戻れなくなるだけならまだいいんだけどね」
　元の姿に戻れないだけでも大問題ではあるが、問題はそこではない。『禁忌』と呼ばれるからには、相応の原因というものがある。
「実質問題として、人間が鳥や猫になることはできる。できるけど、動物に変化すると同時に、人間だったときの意識や理性を失って暴れだす。そこから人間の姿形に戻すこともできるけど、失ってしまった意識と理性は戻らない。二度とね。人間だけに言えることじゃないけど」
　姿を変えると、人格が崩壊し暴走する。止めるには――生命活動を停止させるしかない。それが禁忌とされる所以だ。
　二人はそれを聞いて呆然とするが、ロンは気にせず話を進める。
「続いて二つ目。『生命の創造』。ルーンで命を生み出すこと。――分かり易くいうと死者蘇生。これは詳しく説明しなくても、禁止されてる理由くらい想像つくよね」
　アジェットとギエルドは顔を強張らせながら頷く。死んだ人間を生き返らせることはできない。それが自然の摂理。
　これは別に今肝心なことではないため、具体的なことは省略しても問題あるまい。
「そして最後に三つ目。『不老不死の付与』。でもって何でこんな話しをしたかといえば、とある科学者が魅せられていたルーンっていうのが、この三つめの禁忌のことだから」
　不老不死。老いもせず、死ぬこともない人間の理想。人間、一度くらいは夢見ることはあるのではないだろうか。
「その科学者は『記録人（レコーダー）』の子供を使って不老不死のルーンの実験を行った。その結果が、お前達の知る『イクティンクの消滅』だよ。不老不死を願うことは、治癒系のルーンの何百倍もの魔力を必要とする。だから禁忌なわけだけど、そのせいでイクティンクは消えたんだ。学者が用意した魔力を補助するルーンでは足りず、イクティンクに住んでいる人間や植物といった生命体から、建物に使われている無機物が僅かに持ち得る魔力まで吸い尽くした。住人が全て消えたのはそのせい」
　不老不死のルーンを成功させるには、途方もない魔力が要求された。精霊が人間一万人分の魔力を持っているとしたら、百体の精霊が必要といわれている。それなのにあの学者は実験を行う際に精霊を、魔石を使用しなかった。この時代にはもう、精霊どころか魔石すら残されてはいなかったのだ。変わりに小部屋に刻み込んだルーンが魔力を増強する役割を担っていたのだが、そんなものは禁忌の前では児戯も同然。
　そしてイクティンクは文字通り『消滅』した。国中の魔力という魔力を吸い取られ、今までの発展が全て、無に帰した。不老不死を願うルーンを紡いだ、その刹那に。
「そして誰がどう見ても失敗したとしか思えない不老不死のルーンの実験は、成功（・・）した。何年経っても子供は老いるどころか成長もせず、また怪我をしてもみるみるうちに治っていく。学者が望んだ不老不死そのものが、子供に与えられてた」
「ロン……それってまさか……」
「成る程。その実験台にされた子供っていうのは、お前のことなんだな、ロン」
「そういうこと」
　ロンは、イクティンクの顛末を知る、唯一の生存者だった。ある日食事に睡眠薬を盛られ、目が覚めたら猿轡に両手足には枷をつけられて寝かせられていた。必死の抵抗むなしく、学者の口からルーンが紡がれ、そして――
「不老不死のルーンが学者の口から紡がれると、身体中に何かが入り込んでくる感覚に全身が痛くなって、僕は気絶した。そして目が覚めたらそこにあったのは実験小屋じゃなくて、瓦礫と荒野だった。はじめは唖然としたよ。でもすぐに理解した。『記録人（レコーダー）』としての記憶が、どうしてこうなってしまったのかを教えてくれたから。そして

自分の身体に起きた変化も。自分が国一つ犠牲にして、不老不死を与えられてしまったのだということもね」
　ためしに近くに落ちていた尖った石で肌を切りつけ、そしてあっという間に癒えていく傷を見て戦慄した。ロンは自分自身が不老不死になることなんて、望んでなどいなかったのに。
「不老不死なんて全く望んでなかった僕は、不老不死のルーンを解くためにある場所に向かった。僕の記憶の中には、不老不死のルーンを解けるルーンがなかったから。でも、『古代言語（ルーン）の森』と呼ばれる古の図書館になら、禁忌である不老不死を解くためのルーンが載ってるんじゃないかと一抹の希望を持って。そして記憶だけを頼りに探すこと数年、僕は『古代言語（ルーン）の森』へと辿り着いた」
「ちょっと待て。それだとランとかいう奴と出合った時期と合わなくねえか？」
「ランという人物が旅に出たのは、十四年前だよね……？　いくら本がたくさんあるからって、全て読破するのに五百年もかかったのかい……？」
「……」
　ロンは思わず口を閉ざす。ここからはできればあまり言いたくはない。しかし、それではランと出会うまで、約五百年の空白ができる。その間一体何をしていたのか、気になるのは人間の性分とやらだろう。
「さっき言ったろ。探したけど見つからなかったって。……ずっと寝てたんだよ。『古代言語（ルーン）の森』は、僕にとって唯一の手がかりだったんだ。なのに見つからなくて、どうしようもなくて……何もする気も起きなくなって、そこで眠り続けてた。ランが来るまで、ずーっとね」
　生まれは五百年以上も前ではあるが、その大半を、ロンは眠って過ごしていた。藁にもすがる思いで見つけた『古代言語（ルーン）の森』。しかし、その僅かな希望は打ち砕かれた。全ての本を読みあさったが、その中にロンの望む不老不死のルーンの解除方法は記載されていなかったのだ。一縷の望みを絶たれてしまったロンは立ち直ることができず、そのまま意識を失い、眠り続けた。眠り続けることで、自分ではどうすることもできない現実から、目を逸らし続けていた。もしもランが来なかったら、ロンは今でもあの図書館の中で本に埋もれたまま、眠り続けていただろう。
「……悪い」
「すまない、短慮だった」
「いいよ別に」
　謝罪する二人を一言で流す。話題をとっとと次に進めたかった。
「そして永い年月が経って、ランが『古代言語（ルーン）の森』へとやってきた。そして言われたんだ。自分についてこないかって。自分はこのルーンを解除する方法を知っていて、それを探しているからって」
　あのとき差し伸べられた手は、ロンに比べて大きく長い指をしていたが、細くて綺麗な手をしていた。生まれてすぐルーンの知識を植え付けられ、学者に人間ではなく備品扱いされたうえに使い捨てるかのように実験台にされた。不老不死になった後も、ろくに人と関わるようなことなく『古代言語（ルーン）の森』を探し当てたため、ロンを人として手を差し伸べてくれた人間は、ランが初めてだった。
　更に彼女は、ロンがずっと追い求めていた不老不死のルーンの解除方法を知っていた。それをランの口から聞いたとき、自分の中にかつて打ち砕かれた希望が沸きあがった。元に戻れるのだと、普通の人間になれるのだと、歓喜に打ち震えた。
「僕とレフルが探している、かつて人間と精霊が創り出した魔石（リフェ）にされた精霊を元に戻す道具っていうのは、掛かっているルーンを解除することができる道具なんだ。系統に関係なく、どんなものでも。だから精霊を元に戻すだけでなく、僕にかかっている不老不死のルーンも解除することができる。――それがどこにあって、どんな形をしているのかまではわからないけど」
『ルーンを解除する道具というのは、我等にとっては悲願ではありますが、使い方を誤れば遺跡などのルーンを使って建てられた建造物のルーンを解除してしまうことが可能になります。それを避けるため、厳しい侵入者避けの罠がある遺跡に隠されたのではないかと、我々は見ております』

　それがロンがレフルと共に、遺跡に侵入する理由だ。確証はないが、精霊を戻すために創られたモノがそのまま忘れられて人の手に渡っていることよりも、厳重に保管されている可能性の方が高い。もしもここでその道具を使った場合、遺跡全体が倒壊する可能性すらある。そんな危険性を併せ持つ代物を、当時の人間が放置するとは思えなかった。
「だから君は……危険を冒しても遺跡の探索を続けると……」
「そう。元に戻る……不老不死のルーンを解くためには、遺跡に潜って探さないといけないんだ。だから僕はトレジャーハンターになった」
　ランと行動を共にするようになってから、幾つもの遺跡を探索したが、全て空振りで終わっている。

　しかしここ、ルインラトゥスは広大な国土と共に、幾多の遺跡を所有しているため、見つかる可能性が大きい。更に言えば、ここテロンダ遺跡にも淡い期待を抱いている。
「普通の人間なら、ほぼ確実に迷っていずれは餓死する複雑な内部構造。でもって宝を発見したかと思えば発動する侵入者退治の罠。かなり徹底的に侵入者を殺しにかかってる。だから、テロンダ遺跡のどこかに、僕達が探しているモノが保管されてる可能性が高そうなんだ」
　先ほどの侵入者退治の罠があったフロアは、きっと他にも幾つか存在する。迷いに迷って漸く辿り着いたと思ったら罠だった、というのはよくあるパターンではあるが、テロンダ遺跡は同じような小部屋が続きながら別れているうえに、一つ一つの扉を通る度にルーンで開けなければならない。侵入者の体力をすり減らすことを目的にしているとしか思えない構造なのだ。
「以上、これが僕が抱えてる事情。後の判断はそっちでよろしく」
　全てを話し終わり、ロンはごてんと再び横になった。大分回復してきたとはいえ、まだ動くのには不十分。話し終わったからには、座るより寝ている体勢の方が楽でいい。
「話せ、っつったのはこっちだが……本当によかったのか？　ワローラル女史に漏らすとか考えなかったのかよ」
「今更だな、ほんとに」
　ロンはちらりとロンの傍に佇むレフルを見遣る。彼は穏やかな顔で頷いてみせた。
『わたくしは数多くの人間をこの目で見ております。分別のある人間を見分けるくらい、造作もないことです』
「まあもしお前らが闇雲にバラすようなことがあれば、それはこっちの判断ミス。見る目がなかったっていうだけさ」
　ギエルドはいちいちつっかかってくるような言い方をするが、二人共根は善良な人間だとロンは判断している。旅をして培ってきた人を見る目には、それなりに自信がある。レフルのお墨付きなら尚更だ。
「……こうまで言われちまったら、こりゃもう裏切れねえな」
「そうだね」
　その言葉は、今聞いたことを他言しないという了解の意を表しているのだと、表情は見えずとも話しの流れでよくわかる。
「ロン、動けるようになるまでにはどれくらい時間がかかるかわかるかい？」
「んっと……歩けるようになるのはもう少し、ルーンが唱えられるようになるまでにはまだまだってところ」
　ここまで来るには、道中幾つかの扉を開かなければならない。そして帰りもまた同じ。それはロンが回復しなければずっと、ここに止まらなければならないということだ。
「もう暫くここで立ち往生、か。まあ慌ててもしょうがねえ。先に腹ごしらえでもしとくか」
　ギエルドのそのセリフから、今が大体昼を過ぎた辺りなのだろうと検討づける。不老不死のルーンにより、食事を摂取せずとも生きられるロンの腹時計は、完全に役立たずとなっている。
「ほら、お前も食え。あんまり旨くはねえがな」
「ん？」
　ギエルドがこちらに向かって何かを投げる。紙に包まれた、固形の細長い形をしていた。これはランと旅をしている

時に何度か口にしたことがある。
「携帯食料か……これまずいんだよね、いらない」
　旅人や巡回する騎士などが素早く簡単に栄養がとれるように、様々な食物を粉末にして固めたもの。栄養バランスのみを配慮して作られており、そのせいで味は二の次となっている。間違っても、おいしいなどと言える代物ではない。
「ロン、朝も全然食べてなかったじゃないか。それなのに身体は大丈夫なのか？」
「この身体、何も摂取しなくても生かしてくれるんだよ。便利なもんだ」
　だから朝、エンジリカに勧められた朝食を食欲がないからと断った。ロンには全く必要のないものであるから。それでも何も口にしないのは怪しまれるため、少しは口にしたというだけ。
「ワローラル殿の勧めたスープを飲んでいたから、食べられないわけじゃないんだよね？」
「まあね。でも、食事事態が億劫だから最近は全然食べてないな」
　この不老不死の身体は、食事だけでなく休息も本来不要のもの。精神的負担がかかったり、今のように消費の激しいルーンを使ったりすればこうして消耗するが、日常の動作で疲労を感じることはまずない。だから、一度遺跡に潜った後はそのまま探索し終えるまで、遺跡にずっと篭っている。
　レフルの魔石（リフェ）を取り戻す計画を立てたときも、テロンダ遺跡にもぐりこむことに成功したならば、何日掛かろうとも終わるまで外に出るつもりはなかった。そうすれば騎士達は出てこないロンを遺跡の中で彷徨い、そして日が経てば餓死したのだろうと思い込む。探索が終わる頃には警戒が緩み、そのまま次の街へと移動するという算段だったのだ。それは今ここにいる長い黒髪の男によって、ぶち壊されてしまったが。
「あー、あと予め言っとくけど、さっきみたいな罠が発動しても、別に僕のこと守らなくていいよ。どうせ死なないから、守るだけ無駄無駄」
『ロン様――』
「怪我をしても、僕は放っておけば治る。だけど、お前らはそうはいかないだろ？」
　レフルが口を挟もうとするが、あえてそれを遮る。何を言おうとしてるのかはわかっているから。自分の身体をもっと大事にしろ、だ。
　ロンとて自分の身が可愛くないわけではないし、痛い思いを進んでしたいわけでもない。
　ただ、先ほどのアジェットのようにロンを庇ったために大怪我をされたくないだけだ。どんな大怪我を負っても必ず完治するロンを身を挺して守るのは、まさしく『無駄』なこと。アジェットはロンが治癒のルーンをかけなければ、確実に命を無駄にしていた。無駄死にさせるのはロンの本意ではない。
「――ロン、それを聞くことはできない」
　気づくとアジェットがロンのすぐ傍にいて、顔を覗き込まれていた。その顔つきはまるで痛みを堪えるかのように唇を噛み締めている。
「わたしは騎士だ。そして今の任務は、君を守ること。なのにそれを自ら放棄することはできない」
「真面目な騎士様だこと……でも、それで死んでたら元も子もないよ。そっちはまだ二十年も生きてないんだろ？」
　命よりも、任務や己の矜持を優先するのは、はっきり言って馬鹿げている。他人を蹴落としてまで、という根性はロンも好きではないが、そのせいで若い命を散らすのもまた論外だ。
「――そうだね、君の言うとおりでもある。先ほど怪我をしたのは、ロンの周りにまで気を遣っていなかったからだ。レフルゲンセル殿がロンの危機を叫んでくれてやっと、わたしは君の危機に気づいたという有様だった。わたしの不注意が原因だ」
　確かにあれは彼らの不注意から起きたこと。ロンは彼らに勝手なことをするなと警告していたにも関わらず、安置されていたルーンの刻まれていた短剣を許可なく手に取った。彼らがロンの言うとおり大人しくしていれば、未然に防げていただろう。
「遺跡の中では、ロンの指示に従うことを誓うよ。二度と、勝手な行動はしない。――だから君のことを、守らせては

くれないか。いくら治ると言っても、痛覚はあるんだろう？　また血に染まる君を、わたしは見たくない」
『何で庇ったのか、て？　そんなの、ロンに痛い思いをしてほしくないからに決まってるだろう？　死ななくても、怪我をしたら痛いんだ。それに、妹分の危機を助けない兄貴分なんていないよ』
　かつてランと共に遺跡を探索中、ロンの不注意によって発動した罠から、ランに庇われたことがあった。腹部からダラダラと血を流し、顔色は青白かったが、しかし表情だけはこちらが拍子抜けするくらいにあっけらかんとしていた。ロンはこういう罠があるから気をつけるべしと注意されただけで、自身が負った怪我については、何もロンを責めなかった。ロンはどんなに重い怪我をしても、かけられているルーンがそれを徐々に癒し、そして完治する。ランもそれは承知していたはずなのに、彼女は傷を負ってまでロンを庇った。それをどうしてと問うたときの返答がそれだった。
　ランからすれば、妹が危険だったからそれを助けただけに過ぎない。自分が怪我をして痛い目を見るのにとか、ロンが怪我をしても死なないから大丈夫という損得勘定は微塵もなかった。
　これが無償の優しさなのだろう。ずっと備品のように扱われていたロンにとって、人の温もりや優しさは、知らないことばかりだった。
　そして騎士として護衛対象を身体を張って守ったアジェットの行動もまた、それに該当する。言葉通り、ロンが傷つく姿を見たくないから守りたい。ただそれだけ。
「……僕が危険な罠にわざと嵌めようとするとか、考えないわけ？」
　ランを相手にしたときは、その優しさに対して素直に甘えられたにも関わらず、アジェット相手に口から出たのは憎まれ口だった。彼らに対してはずっとそんな態度でいたからか、突然素直になれるわけがない。
「はは、その心配はしてないよ。君は自分の複雑な事情をわたし達に知られることを承知で、わたしのことを助けてくれた優しい子だもの。そんな君の行動を、わたしは信じる」
　ロンの零した憎まれ口に、アジェットは微笑みを持って返してくる。ロンのことを信じて疑っていないその表情に、感動するよりも呆れが先走った。
「随分とお人よしなお坊ちゃんだ……貴族って奴は皆そういうもんなの？」
「貴族全員がこいつみたいなお人よしなら、民衆に不満なんざ溜まらんだろ」
　ギエルドの言葉にそれもそうかと納得する。つまりはこの男が特別お人よしなのだろう。もしかしたら、彼の家族も皆そうなのかもしれない。
「……僕がお前を助けたのは、庇われた借りを返すためだ。それに、目の前で死なれたら目覚め悪いし。お前が言うような優しさからじゃないよ」
　アジェットの口から出た『優しい』という形容詞に全身がこそばゆくなってきた為、決して彼を助けたのは親切心からの行動ではない、と訂正しておきたかった。ロンは自分が優しい人間ではないと自覚している。自分のことで手一杯で、人のことは後回しだ。ランのように、出合ったばかりの厄介者を受け入れるような器は持ち合わせていない。
「優しい心がなければ、自分が傷ついてまで人を助けようなんて思わないよ。だから君は優しい子だ」
　否定したのにも関わらず、アジェットは爽やかな微笑みと共に、再び『優しい』と口にする。ひくっと身体が震えた。
「いや、だから僕は――」
「諦めろ。アジェットはそういう奴だ」
　飄々としたギエルドの声が、否定の言葉を紡ごうとしたロンの口を挟む。ギエルドのようなからかい混じりの言葉なら、ウザイだの鬱陶しいだの返せる言葉は山ほどある。だが、アジェットにはロンをからかうような素振りは全くない。だからこそ余計に身体がむずがゆいのだろう。彼は心の底からロンを『優しい』と思っている。
「それと――ロン、君はいらないと言ったけど、やはり食べないと駄目だよ。好き嫌いをするのはよくない」
　ずいっとロンの眼前に、紙で包まれた長細い物を突き出してくる。携帯食料だ。
「……これを好む奴はいないと思うけど……」
「真理だな。俺もこれだけは慣れねえ」

　とか言いながら、もぐもぐと順調に咀嚼する音が聞こえてくる。彼からしたら、腹を満たせるものがこれしかないから、諦めも混じっているのかもしれないが。
「だがよ、お前生かしてくれてるルーンを解くために旅してんだろ？　なのにそのルーンに甘えるのはよくねえんじゃねえか？　自分に人間だって自覚があるなら、人間らしいことをするべきだろ」
『ロン、確かに君には休息も食事も必要ないのかもしれない。だけど、君は僕と同じ人間なんだ。だから僕と同じように、しっかり寝たり食べたりしないと駄目だよ』
　どうして彼らはかつてランの言ったことを思い出させることばかり言うのだろう。ランと彼らは全く違う人間なのに。
　食べなくても死なない、怪我をしてもすぐに完治する者に向かっての言葉ではない。彼らはロンを人間として扱っている。不老不死という人間離れしたルーンがかかっていると知りながら。
「……」
「ロン？」
　ロンはむくりと身体を起こした。そして無言でアジェットの手にある携帯食料を手に取り、紙を剥いて口元へ運んだ。
「……まずい」
　口いっぱいにパサパサした触感と、何ともいえない味が広がる。思わず口に出してしまうほど酷い味だが、ロンは携帯食料を全て食べきった。
「……暫く寝る。お休み、アジェット、ギエルド」
　魔力を回復させるため、再びロンは横になる。まるでそっぽを向くかのように彼らとは正反対を向いて。
「おう、ゆっくり休めよー、ロン」
「お休み、ロン。助けてくれて、本当にありがとう」
「……！」
　ロンは猫のように丸くなりながら、両目をぎゅっと伏せる。
『お休みなさいませ、ロン様』
　レフルだけでなく、二人の青年の瞳も穏やかな色をしていたことをロンは知らない。

　ロンの顔を覗き込み、すやすやと規則正しい寝息が聞こえてくるのを見て、本当に眠ったのだとレフルはほっと安堵した。
『さて……』
　レフルは振り返って、携帯食料を口に運んでいる二人の青年を見遣った。ロンが完全に寝入ったと知ったアジェットは、既にギエルドの向かいに移動している。
『ありがとうございます』
「んお？　どうした、急に」
「レフルゲンセル殿？　どうかしたかい？」
　ギエルドとアジェットに向かって、レフルは頭を下げた。今レフルは、感謝の念を二人に抱いている。
『不老不死のルーンを知ったうえで、貴方がたはロン様を人として接してくれました。本当に、ありがとうございます』
「大袈裟だな。ルーンが掛かっていようがいまいが、人間なのに変わりはないだろ？」
「そうだよ。特殊な力はあれど、彼だって一人の人間で、一つの命だ」
　間髪を入れずに返ってきた言葉に、レフルは心が温かくのを感じた。根は善良と判断した己の目は、決して間違っていなかったことを知る。
　彼らになら、言ってもいいだろう。もしも上手くいけば、ロンの内面をいい方向へ変えられる転機となるかもしれない。
『……ロン様は、人として扱われない幼少期を過ごしました。そのせいか、ロン様自身も己の身を道具と思っている節があるのです』
　レフルがロンと出合ったのは、ランと同じく『古代言語（ルーン）の森』で本に埋もれているロンを見つけたときだ。だからロンが学者の奴隷として過ごしていた時期のことは、詳しくは知らない。だが、他の精霊から伝え聞いていた当時の状況と、己の身を大事にしようとしない振る舞いを見れば、どんな扱いを受けていたかを察するには充分すぎる。
「……そうだね、自分を守ることが無駄だなんて、普通は言えないよ」
「俺らに対して生意気な態度だったのも、もしかして壁を作るためか？」
『そうです。事実、貴方がたのようにすんなりと受け入れて下さる人間の方が少ないでしょう。通常とは違う者を敬遠するのは何も人間に限ったことではありませんし、防衛本能のようなものですから。……元々気が強いところはありますが、根は素直な方なのですよ』
「確かに、わたしも本当は素直な子なんだと思う。あんなに渋ってたのに、携帯食料を食べてくれたし」
　ロンが携帯食料を食べたのは、彼らがランのように、ロンを人として扱ってくれたからだ。何も言わなかったが、嬉しかったのだろう。『お前』ではなく、しっかりと二人の名前を口にしたのがその証拠だ。気恥ずかしくなったのか、彼らとは正反対を向いてしまったが。
『ロン様がラン様と過ごしたのは大体五年ほど。その間、ラン様のおかげもあり、ロン様は人間らしさを取り戻していったように思います。本物の家族のように仲がいい二人でした』
　ロンを可愛がるランに、ランを慕うロン。その姿はまさに兄妹、ではなく姉妹のようだった。
「そういや、そのランって奴は今どうしてるんだ？　死に別れ……じゃないよな。年齢的にもまだ二十代半ばだろうし、名前を口にしたときのロンの表情も別段暗くはなかった」
「そういえばロンが首飾りを取り戻そうとしてたとき、大事な友達から貰ったものだから返しえほしいと……その友達は今はいないとも言っていたけれど、その友人というのがラン殿かな？」
『おや、ロン様はそんなことをおっしゃってたのですか。そうです。その言葉自体に嘘はありません。今はいない、と

いうのはこの場にいないという意味であり、死別したという意味ではありません。ロン様も、死んだとは一言も言ってないでしょう？　とある事情により、ラン様とは道を別つことになったのです。理由がどうしても気になるのでしたら、詳しいことはロン様からお聞き下さい。暗い話ではないので、気を遣ってくださる必要はありません』

大切な人のことを他の人間に話すこともまた、ロンの心をほぐすきっかけとなるだろう。それに、今はランのことについてより、他に言いたいことがある。

『ラン様と一緒にいたときは、ラン様に合わせて休息や食事をとっていたのですが……ラン様と別れてからというもの、ロン様はほとんど休息や食事をとっておられません。ロン様の身体は空腹も疲れも知らないため、一人では感覚がわからないのです。かく言うわたくしも、休息や食事のいらない精霊ですから、同じくその感覚がわからず……休息や食事をすることを進言しても、大丈夫の一点張りで……特に遺跡の中では不眠不休で探索しておられます。この遺跡もそのつもりで探索する予定でした』

「このだだっ広い遺跡を不眠不休？　そりゃすげえ」

「普通の人間なら無理だけど、不老不死のルーンが、それをなしえてしまうんだね……」

休息を必要とせずに探索できることは、効率を考えるならいいことかもしれない。だが、ロンはレフルとは違い、人間なのだ。疲れたら休み、腹を空かせたら食事をする。それを必要としないことを便利だと断じてしまうのは、己の人間離れを肯定しているも同然だった。

『生来のものか、長く学者の元にいたせいかはわかりませんが、考え方も効率を重視する傾向があります。それも相俟って、ラン様と離れた二年の間に、すっかり人間らしい生活をしなくなってしまいました……ロン様には、他に慕っている人間はおりません。街中で人と接する際も、常に一定の距離を保った人付き合いをしておりました。一つどころに長く止まることもなく、すぐに別れることになる人間に己の事情を全て話せるわけもないと言ったら身も蓋もありませんが……人間と深く関わる機会がないも同然の環境下にいたせいか、自身の身を省みることがほとんどなくなりました』

旅や遺跡の探索に慣れていくうちに、ロンは次第により効率がいい選択をするようになった。レフルも初めはロンの身を思って苦言をいうこともあったが、ロン自身にこの方が効率がいいと説明されてしまえば、頷かざるを得ない。

それに人間ではないレフルが、人間であるロンに向かって人間らしいことをしてほしいなど、言えるわけがなかった。

『お二方に頼みがあります。遺跡を探索している間だけで結構ですので、ロン様を年下の子供として接し、お守りしていただけませんか？　ラン様以外にも、特殊な生い立ちである身を受け入れ、人として守ってくれる人間もいるのだと、感じていただきたいのです』

今のロンに必要なのは、それだ。ランと出会って覚えた人の温もりを、また感じてほしい。ギエルドが言った通り、ルーンが掛かっているとはいえ、ロンも人間だ。だから人間として、精一杯生きてほしいとレフルは思っている。

「別にそんなこと、今更言われるまでもねえよ。実は俺達の倍以上生きてるって言われても、正直ピンとこねえからな。生意気なガキんちょだが、子供守るのに理由なんていらねえだろ」

「先ほどもロンに言ったけど、わたしは騎士として、ロンを守る。今後は怪我をさせず、治癒のルーンも使わずに済むよう、全力を尽くすよ」

『――ありがとうございます』

ロン本人が口にしたように、不老不死であるロンを守ることは非効率的である。にも関わらず、彼らは当然と言わんばかりに快諾した。この二人は一見正反対に見えるが、結局のところは似たもの同士なのだろう。困っている人を放っておけないお人よし。だから彼らはいがみ合うことなく、対等な友人関係を築いている。

（いや待て。彼らの関係が対等ならば、何故亜麻色の騎士は、黒髪の騎士に向かって敬語を使っていた……？）

アジェットは二度、ギエルドに対して敬語を使っている。一度目は遺跡内でロンが捕まったとき。そして二度目は今朝方。後者においてはロンに聞かれたらどうすると警戒を露にしていた。

それを鑑みるに、本来彼らの関係は今のような対等なものではないと推測できる。そして貴族であるアジェットが敬

うべき立場の人間は、極少数に限られた。もしや彼は――
（――余計な詮索はここまでにしておきましょう。彼らが本当はどんな立場の人間だろうと、この場ではロン様を守る役目を言いつけられた一人の騎士。それに違いはないのだから）
　もしも本来の立場を使ってロンを利用する算段を立てようとするならば、いくら隠し立てをしていても、瞳の奥に利己的な光りが宿るもの。しかし二人にそれがないことを見るに、彼らは己の立場を利用してロンをどうこうするつもりがないことがわかる。それさえはっきりしていれば充分だ。
「しっかし、遺跡の中にいるとほんとに時間間隔が狂うな……」
「今は昼過ぎくらいだと予想がつくけど、あくまで予想だから正確ではないからね。ロンが動けるようになるまでどれだけ時間がかかるかはわからないけれど、夕方過ぎくらいには出られるんじゃないかな」
「できればまだ明るい時間帯に遺跡を出たいんだけどな……」
「うん？　何か用事でもあったのかい？」
「いや、俺じゃなくてな。――ロンの服血塗れだろ。このまま遺跡探索終わるまで、その格好でいさせるわけにはいかねえと思ってさ」
「あ、そうか……わたし達の服では確実にサイズが合わないから、店で買うとかしないと駄目だね」
『――それでしたら、今すぐここをたちましょうか。真っ直ぐにしか進んでませんから、迷うこともなさそうですし』
　レフルが口にした提案に、二人は訝しげな視線をこちらに送る。その反応は最もだ、この二人はルーンの知識がないため、扉を開くことができない。普通ならば。
「ロンはまだ寝てるだろ？　何だ、俺達に扉を開けろとでもいうつもりか？」
『その通りです。扉は刻まれた文字が読める必要はなく、答えとなるルーンを紡げばいいのですから。わたくしがルーンの意味と発音をお教え致します。どちらかはロン様を起こさないよう、背負ってくださいませ』
　扉を開くルーンの意味と発音があってさえいれば、その者がルーンを読める必要はない。別の第三者がそれを理解しているのならば、この二人でも扉は開けられるのだ。
「今から戻るのなら、確実に夕方になる前に出ることはできるけど……」
「つか、俺達にわざわざ教えるなら、自分で開けばいいだけじゃねえのかよ」
『ルーンは人間のみが扱える特殊な言語。どんなに知識があろうとも、精霊であるわたくしにルーンを扱うことはできません。変わりに一部を除いたルーンを無効化できますが』
　精霊はルーンが使えない代わりに、それぞれ固有の力がある。魔石に魔力の大半を持っていかれてしまったため強い力は使えないが、それでも灯りのない遺跡内部に、レフルの光りの力は有用だ。
「ならアジェットが扉を開けてくれ。俺がロンを背負う」
「わかった」
『……貴方がロン様を、ね……』
　ギエルドが悪い人間ではないと判断はしたが、彼にはロンの唇を無理やり奪ったという前科がある。できればロンを完全に少年と思いこんでいるアジェットに背負わせたかったが、彼もまたロンの治癒のルーンで回復したばかりで、本調子ではない。ロンはそこらの人間よりも細いため重くはないが、人を背負って歩くのはなかなかの重労働だ。だから怪我をしていないギエルドがロンを背負うのには納得はいくが、気に食わないと思う気持ちはどうしようもない。
「うわ、信用ねえな。別に何もしないっての」
『当然です。もしも何かしようものなら、素振りを見せた時点で目を光りで潰しますのでそのおつもりで』
「洒落にならねえな……」
　一度保管庫でレフルの強烈な光りを受けたことを思い出したのだろう、ギエルドが顔を引きつらせている。視力を失うほどの強い光りを放つのは大変なことであるが、ロンの一大事とあっては力の出し惜しみはしない。
「大丈夫だよ、レフルゲンセル殿。ギエルドは不真面目に見えるけど、不義理なことをするような人間ではないから。

わたしが保証する」
『理解するのと癪に障るのとは全く別のことですよ、亜麻色の騎士』
「そんなに嫌か、おい」
　せっかくのアジェットのフォローをレフルはしれっと流した。そんなことは言われなくてもわかっている。だが、娘のように可愛いと思っている相手の唇を奪った事実を、簡単には認められるわけがなかった。たとえ当のロン本人が全くそのことを気にしていないとしても。
『ロン様は自分を大切になさらないので、過保護なくらいが丁度いいんです』
「それは言えるな……本人に気にした様子がなかったし」
『本当に気にしてませんからね、ロン様は。貴方が状況的にああするしかなかったと、理解しておられますから。だからわたくしが代わりに怒っているのですよ。あれがロン様以外の方でしたら、頬に手跡が残るくらいの力で殴られても文句は言えませんよ』
「俺だってそれくらいは理解してるっての」
「……本当にロンに何をしたんだい？　ギエルド」
「……」
　ロンは色恋の類を全く理解していない。ギエルドのした行為が、本来は恋人同士で行うものだということ自体は知っていても、ファーストキスは好きな人と、というような乙女チックな考え方は持ち合わせていないのだ。
　ある意味そのおかげで傷つかなかったとも言える。ロンがもしも普通の少女と同じ感性を持っていたら、ギエルドを殴りつけた上で大泣きしていてもおかしくはない。
　どうやらギエルド本人も、そのことについて罪悪感を抱いてはいるらしい。ロンの唇を奪ったあと、罰が悪そうに顔をそらしたのはそのためか。アジェットの問いにも、一向に答えようとする気がない。
『――今だけはロン様を背負うことを許しましょう。さあ、早くしないと日が暮れますよ』
「そりゃどうも……行こうぜアジェット」
「話しを逸らして……まあ言いたくならなら構わないけど、ロンに悪いことをしたと思ったのなら、謝らなくてはだめだよ」
「へーへー……」
　自分達の会話から、ギエルドがロンに何をしたのか検討づいてもよさそうだが、アジェットは全く感づいてはいないようだ。彼はロンをまだ少年と信じて疑っていないせいもあるだろうが、この会話やレフルの態度でロンは実は少女なのだと気づいてもよさそうではあるのに。恐らく彼もまた色恋の話しに疎いのだろう。初心そうではある。
「レフルゲンセル殿、そろそろ扉を開くルーンを教えてもらっても？」
　レフルが失礼なことを考えていたことなど露知らず、礼儀正しい態度でアジェットが促した。ちらりと横目でギエルドを見れば、その背には目を覚ます気配のないロンがいる。これで最早ここに用はない。
『行きましょう。ここの扉を開くルーンは『スタブ』、刺すという意味です』
「ありがとうございます」
　アジェットが扉の前まで移動する。無意識だろうか、手は拳を握り、緊張と興奮に僅かに身体が震えている。それは遠い昔、レフルが祀られていた里の人間に初めてルーンを教えたときの里の人間がしていた反応とよく似ていた。思わず懐かしさに相好を崩す。
「『刺す（スタブ）』」
　刹那、刻まれたルーンが発光し、鈍重な扉が重低音を響かせながら開いていく。
「開いた……」
「すげえ……」
『当然です。では行きますよ。この扉は、開いたらすぐに閉じてしまうのですから』

ルーンを覚えたばかりの初々しい反応をする二人に背を向け、レフルは音もなく宙を移動する。
遺跡を出た際にロンが目覚めたら、彼女はどんな反応をするだろうか。先ほど感じた懐かしさも相俟って、レフルは口の端に笑みを湛えたまま、暗い遺跡内を自身の光りで照らした。
彼女の口から告げられた言葉が、信じられなかった。
「昨日遺跡に侵入した少年……ロンというのだけれど、彼にはルーンの深い知識があるようだから、協力を仰ぐことにしたの。もう遺跡へと向かっているはずだわ」
思わず身体が震えた。彼女の力に最もなれているのは己だったはずだ。かつて彼女に言われた、自分にのみ向けられた言葉を思い出す。
彼女と出合ったのは、今から約一ヶ月前。テロンダ遺跡の調査を任せられた学者グループの護衛をするとして、王都から派遣された騎士団と対面したときだった。
「私があなた方学者達を補佐する騎士団を纏めております、エンジリカ・ワローラルです。以後お見知りおきを」
そういって優雅に一礼する姿に、目が釘付けになった。彼女が動くたびにさらりと揺れる肩で切り揃えられた金色の髪。微笑を湛える形のいいピンクの朱唇に、透き通った白い肌。菫色の双眸は、どんな宝石よりも美しいと感じた。
そう、彼女はとても美しかった。女性が少ない騎士団を纏めることに気負いもあるだろうに、凛と立つ姿はそんな素振りを全く感じさせない。彼女に惹かれない者なんていないのではないかと思う程、己の目は彼女に釘付けられていた。
このときは、まさか自分がルーン研究以外に関心を持つなどと、戸惑いがあった。大事な研究中にも彼女のことが頭に浮かび、作業に集中できない自分はおかしくなってしまったのだと思うことさえも。
しかしある日のこと、与えられた己が使っている研究室に突然彼女がやってきた。
「こんにちは。今、少しお話してもいいかしら？」
「は、はい！　大丈夫です！」
資料で散らかった机や床を慌ててかき集めて整理し、己の向かいにある椅子に座るよう彼女を促す。
「ありがとう」
椅子を引いて座るその動作すらも、彼女は美しかった。そしてそんな美しい彼女と自分は二人きりで向かい合っている。それを意識すると心臓の音がドキドキと大きく音を立て始めた。そわそわと浮き足立って落ち着かない。
「実はね、貴方がとても優秀な方だと聞いて、一度こうしてお話しをしてみたかったの。私もルーンには興味があるから」
「ほ、本当ですか!?」
「ええ。貴方さえよければ、ルーンについて色々教えていただけないかしら。勿論、無理にとは言わないわ」
「だ、大丈夫です！　自分でよろしければいくらでも……！」
何と、彼女は自分が優秀だと人づてに聞いて、興味を持ってくれたのだ。それが嬉しくて思わず己が持っているありったけの知識を、彼女に説明する。次第に熱くなりすぎて、自分がどんなことを彼女に話したのかは正直覚えていない。だが、ずっと微笑みながら耳を傾けていてくれた彼女の姿だけは、はっきりと脳裏に焼きついている。
「ありがとう、勉強になったわ。それにしても、貴方は本当にすごいのね。私はルーンのことについては少し齧った程度の知識しかないから、尊敬するわ」
「お、恐れ入ります……！」
彼女の賛辞に、沸々と歓喜が沸きあがった。思わずぐっと拳を握り締める。今まで自分が得てきた知識が、彼女の役に立てたことが何より嬉しかった。自分が持つ知識は、彼女を喜ばせることができる。
「貴方のような優秀な学者がいるから、徐々にだけれど調査が進んでいるのね。ねえ、今はどのくらいまで進んでいるの？」
「ち、調査の進捗ですか？　そ、それはですね――」

期待に満ちた眼差しを受け、思わず口ごもる。正直なところ、テロンダ遺跡はそこまで順調に調査が進んでいるとは言い難かった。しっかりメモをしなければ彷徨ってしまう複雑な内部構造もさながら、扉に刻まれているルーンは相当古いもので、解読が難しい。更に、扉に刻まれたルーンが示すルーンを答えなければ扉は開かず、解読だけでなく読解力も必要とされた。こればかりは焦ってもしょうがないと、一つ一つ扉の解読に勤しんでいる。その進捗状況は、まさに牛の歩みだ。現に、調査が開始されてから二月は経過しているが、解読できた扉は十に満たない。

これを知ったら、彼女はさぞかし落胆してしまうだろう。だが、長年研究ばかりしていた自分にとって、咄嗟に上手い嘘をつくという芸当はできず、せめて彼女が落胆しないように言葉に注意しながら真実を語るしかなかった。

「そう……あまり進んでいないのね……残念だわ」

「も、申しわけありません……」

彼女の期待に添えることができず、思わず肩を縮めた。現存する資料には、ルーンを現代語に訳したものなどほとんどなく、それぞれが持つ知識を合わせて何とか解読に至っているという現状だ。物理的に無理があるとはいえ、彼女が望むことをなし得ることができない自分の力を歯がゆく感じる。もしも古代言語を全て現代語に訳した辞書のようなものがあれば、解読スピードは格段にあがるだろうに。

「仕方ないわ。貴方達は全力を尽くしてくれているもの。大変なのでしょうね……廃れいく一方の現代の知識では、限界があるでしょうし」

「まさしくその通りです……それでも、時間はかかりますが絶対にやりとげてみせます」

テロンダ遺跡の調査を進め、その全貌を明らかにする。前までは好奇心に任せるまま進めており、こんな風に確固たる目標を立てて研究したことなどなかった。そのため飽きたらその時点その研究を止め、他に興味があることに対象が移って行くのが普段の自分だ。しかし、このテロンダ遺跡の調査だけは、途中でやめるわけにはいなかい。もしもそんなことをすれば、彼女は自分に失望するだろう。それは絶対嫌だった。

「ありがとう、心強いわ。……焦ってもしょうがないものね」

自分の言葉に彼女は再び笑顔を見せてくれるが、僅かに見え隠れする陰りがどうにも気になった。彼女は遺跡の進捗を気にしているようではあるが、何故気にかけているのだろう。彼女は騎士であり、自分達学者が安全に調査に没頭できるよう取り計らうのが役目で、進捗具合を気にかける必要などないであろうに。そう思って口に出すと、彼女は言いづらそうに顔を曇らせた。

「す、すいません変なことを聞いてしまって……！　わ、忘れてください！」

「いいえ、変なことではないわ。貴方の疑問は最もだもの……ただ、これを聞いたら貴方が気に病んでしまうかもしれないと思ったから……貴方のせいではないから」

彼女は淡く微笑むと、実はと切り出し、己が抱えている事情を教えてくれた。

「国王陛下が遺跡の調査を大々的に指示し始めたのは知っているでしょう？　国を富ますため、眠っている遺跡を発掘し、貴重な宝を見つけると。……正直に言って、私はそれに反対なのよ。遺跡を調査することは別に構わないわ。でも、莫大な費用をかけてまでするのではなく、他にもっと有効的なことに、貴重な税を使ってほしくて。このままでは、闇雲に財を消費し続けるだけだわ」

彼女は国を、ルインラトゥスの未来を憂いていた。こうして自分達が呑気に時間をかけて遺跡を調査できるのも、言い換えれば国の補助があるからだ。学者達はルインラトゥスの王の方針に諸手を上げて喜び、より一層研究に没頭することになったが、その資金源はルインラトゥスで暮らす民達から得ているものだと、意識している者はいないだろう。

まさに自分もそうだった。思うがままに研究ができる環境。それさえあれば、他のことは基本的に興味が沸かないのが学者の性分である。

「ごめんなさい、貴方にこんなことを話しても困惑するだけだというのに……」

「い、いえ、そんなことは……！」

一応否定の言葉はあげたが、彼女に言われるまで、自分もまた研究費の出所のことを気にしたことはない。そんなこ

とを気にする暇があるのなら、少しでも研究を進めている。しかし、本当にそれでいいのだろうか、という念が自分の中に湧き上がってきた。だが、解決方法など見つかるはずもない。自分には、政治的な見識はないのだ。
「だから一つでも調査が終われば、その分の費用はもうかからないでしょう？　だからつい進展が気になってしまうのよ。――貴方たちのことを責めているわけではないから、誤解しないでくれると嬉しいわ」
「誤解するだなんて……貴女はとてもお優しいのですね」
　彼女は美しいだけではなく、優しい。国を守る騎士なのだから当然と言ってしまえばそれまでだが、ルインラトゥスで暮らす未来を案じ、かつそのことで自分達学者が気を悪くしないか心を配っている。回りには同じ学者か、研究一辺倒な自身を敬遠する人間ばかりで、彼女のような人は初めてだった。
（こんな優しく、美しい女性がこの世に存在したなんて……）
　何としてでも彼女の力になりたい。優しい彼女が、心を痛めることがないように。
　そのためには自分はどうすればいいか頭をよぎらせ、それはすぐに思いつく。彼女が今望んでいることは、わかりきっているではないか。
「い、遺跡の調査、これからはもっと真剣味をもって行います！　少しでも早く調査が終わるよう、全力を尽くします！　皆にももっとしっかり取り組むよう伝えますので！」
　テロンダ遺跡の発掘を少しでも早く終わらせればいい。今まではあまりにも広い上に難解なルーン続きで急がず焦らずのんびりと解読していたが、これからはそうは言っていられない。ただちに今いる学者同士集まり、どうすれば最も効率よく解読できるかを話し合わなければならないだろう。解読作業は一人の人間だけでは勤まらないのだから。
「ありがとう。でも、頑張ってくれるのは嬉しいけれど、無理だけはしないよう気をつけて。そのせいで倒れてしまったら元も子もないわ」
「は、はい！　気をつけます！」
　やはり彼女は優しい女性だと再認識すると、彼女はそろそろお暇すると言ってするりと立ち上がる。長話をしてしまったことに対する謝罪を受けながら扉の前で見送ろうとすると、最後に彼女は言った。
「頼りにしているわ。頑張ってね」
「――！」
　その一言により、自分の頭は沸騰した。暫くの間呆然とその場に立ち尽くし、ハッと我にかえる。
　彼女は自分を信頼している。自分が解読を進め、遺跡の調査を少しでも早く終わらせられると。ならばそれに応えるべく、こんな風に放心している場合ではない。
「解読を進めなければ……！」
　その日から、今までのんびりと解読していたのを改めるため、皆にできるだけ早く解読できるよう進言した。初めは何故早める必要があるのかと不思議そうな顔をしている者がいたが、何人か自分の言葉に賛同した者がいた。その者達の協力もあり、まずは自分達のわかる範囲内でのルーンの訳をまとめ、その後全員で一つの扉の解読をするのではなく、三つほどの組に別れて作業する。そしてここ一月の間に二ヶ月かかって解読した扉と同程度の扉の解読を終わらせることができた。順調に進んでいる。
　扉の解読が出来るたびに報告にいくと、彼女は嬉しそうに顔を綻ばせた。そしてありがとう、無理をしない程度に頑張ってね、と謝辞と励ましの言葉をくれる。その笑顔と言葉を聞くのが、今の自分の何よりの楽しみとなっていた。一つずつ進む度に彼女は喜んでくれる。自分が彼女を喜ばせている。頼りにしてくれている。
　そのうち、彼女が一番頼りにしているのは自分ではないだろうかと思い始めた。解読作業を進めるに至ったのは、賛同者の協力もあったが切り出した自分の成果である。それに彼女自身も、よく口から頼りにしていると言ってくれる。決して自分の妄想や自惚れなどではなく、事実と言えた。
　だからこそ、彼女の口から出たロンという名前に驚きを隠せなかった。何でも彼は、昨日見張りをしている騎士を眠らせた隙に遺跡の中に忍び込んだらしい。見回りの交替をしにきた騎士が眠っている同僚を見つけ、肩をゆさぶっても

力を込めて殴っても起きないことに違和感を覚え、もしや強制的に眠らされたのではと判断し、入り口で待ち構えていると案の定、侵入者が出てきたのだ。
　何より驚愕したのは、その少年は当たり前のようにルーンを使いこなしていたということ。騎士に囲まれた状態で、恐らく侵入するのにも使ったであろう『ぐっすりと眠りなさい（スレエプ・ソウンドルイ）』。そして一番初めにある三つの扉でさえ自分達は解読するのに日数を必要としたのに、そのうちの二つをあっさりと開けてしまったという。そして更には、自分達がまだ解読していない箇所まで足を伸ばした可能性もあると。
　これを聞いたときの学者の反応は様々だった。ルーンを解読できる存在に目を輝かせる者、本当にそんなことができるのか疑いの眼差しを持つ者、解読できるのは嬉しい反面悔しくもある複雑な表情を浮かべる者。
　自分が抱いたのは危惧だった。その少年は間違いなく自分達の中で誰よりもルーンについての見識が高い。何故少年と言われる子供がそんな知識を持っているかはわからないが、このままでは彼女に最も頼られる人物は、確実に自分から彼に変わってしまう。
（彼女に最も信頼されているのは私だ……！　それを、新参者の子供に譲れるわけがない）
　手の平をぐっと握り締めながら俯いていると、いつの間にか仲間達はちらほらと散らばっており、我に返る。いつまでも悔しがっているわけにはいかない。いくらその少年がルーンの知識があるからと、己がすべき役割は変わらないのだ。
「少しいいかしら？」
「！　は、はい！」
　自分も持ち場に戻ろうとしたとき、突然涼やかな声がかけられる。確かめることもない、彼女の声だ。
「実はね、貴方に頼みたいことがあるの」
「わ、私に頼みたいこと……ですか」
「そう。これを調べてもらいたいの」
　彼女が徐に取り出したのは、大きな宝石のような石に留め金をつけただけの首飾りだった。手渡された首飾りをまじまじと眺めた。彼女が持つ装飾品にしてはやけにお粗末な造りだが、石に刻まれている文字を見て思わず目を見張る。
「これは……ルーンが刻まれている？　初めて目にするが一体何だ……？」
「そう。貴方もこれを知らないのね……」
「あ、そ、その……！　お、お力になれず申しわけありません……」
　彼女の反応からして、このルーンが刻まれた首飾りの用途を自分に聞きたかったようだった。しかし、自分もこんなものを見るのは初めてで、一体何に使うのかはわからない。
「この首飾りは、元々我が家にあったものなのだけれど、どうしてこんなものがうちにあるのかわからなくて。古代言語を読める人もいないから、ずっと倉庫に眠っていたの」
　彼女の家柄は、貴族と呼ばれる上流階級。それならば、昔から伝えられているルーンで造られた道具があっても不思議ではない。
「私達が持っていても危険ではないかくらいは知りたくて、いずれルーンの知識がある人に調べてもらおうと思っていたの。……もしよければ、調べてくれないかしら？」
「わ、わたしが、ですか!?」
「ええ。貴方になら頼めると思って。本当はもっと早く頼みたかったのだけど、遺跡の調査で忙しいでしょう？　でも新しい子がきたから、少しは余裕ができるかもと思って。……どうかしら？　勿論、無理にとは言わないわ」
　返事なんて問われる前から決まっていた。彼女は自分を頼りにしてくれている。何より新たにやってきたルーンに詳しい少年ではなく、自分を選んでくれたのが、その証だ。
　やはり彼女が一番頼りにしているのは、他の誰でもない自分なのだ。
「やります！　空き時間を利用して調べてみせます！」

「ありがとう。期待しているわ」
　力強く答えると、彼女はふわりと華のような笑みを見せる。この笑みを見るためならば、寝る間を惜しむことなど厭わない。できるだけ早く、この石について解明しなければならないだろう。
　一人になった後、彼女から渡された首飾りを改めてしげしげと眺めた。乳白色の大粒の石に、刻まれているルーン。よくよく見れば、このルーンは大して難しいものではなかった。目を細めながら、刻まれたルーンを読みあげる。
「レフ……ル、ゲン……セル。レフルゲンセル……レフルゲンスで光り輝いているだから……光り輝いている者、か。訳はこれで間違いないと思うが……なんでそんな言葉をわざわざこの石に……？」
　訳に間違いがないからこそ、刻まれた言葉の真意が全く判断がつかなかった。だが、簡単に諦めるわけにはいかない。彼女の信頼を裏切ることなど、あってはならないのだ。
「彼女が一番頼りにしているのは、この私だ。私なんだ……！　来たばかりの少年になど、負けていられない……！」
　全ては彼女の信頼のために。そして自分に向けられる笑顔のために。
　彼は首飾りを丁寧にポケットへしまうと、本日のノルマを達成すべく、遺跡の方へと向かった。

　自身は止まっているのに、移動し続けている不思議な感覚。しかしそれは決して不快なものではなく、むしろ心地良ささえ感じていた。
（ん？　止まってるのに移動してる？）
　だがそのことを疑問に思うと、意識は一瞬にして覚醒した。何故自分は移動している？　行き止まりの広間で横になっていたはずなのに。
　目を覚ましたロンの視界に真っ先に飛び込んだのは、癖の少ない長い黒髪。至近距離で映る黒髪は、しっとりとした艶があって綺麗だと思った。
「ロン、よかった。目が覚めたんだね」
「目が覚めたからってはしゃぐなよ、落としても知らねえからな」
「……なんで僕、こいつの背中に乗ってるの？」
　ロンは何故自分が今、ギエルドに背負われているのかがわからなかった。自分達は休息をとっていたはずなのに、何故動き出しているのだろう。しかもここは先ほどまでいた広間ではなく、道中の通路だった。しかもこの位置は、大分出入り口に近いところである。このまま進めば後二つ扉を開けるだけで外へと出られるだろう。
『おはようございます、ロン様。黒髪の騎士がロン様を背負っているのは、眠っているロン様をそのまま移動させるためでございます。できれば早いうちに遺跡から出たいと言っておられたので、わたくしが扉を開くルーンを教えたのですよ』
「あー、なるほど……」
　レフルが彼らに答えとなるルーンを教えたのなら、ロンが眠ったままでも移動することはできる。しかし、何故わざわざ遺跡の脱出を急いだのだろう。休息をとるとき、彼らに別段急ぎの用事があるようには思えなかった。ロンが目覚めるまでのんびりと待てば、荷物のように背負う必要などなかったのに。
「ロン、まだ眠いのなら眠ってても構わないよ。レフルゲンセル殿にルーンを聞くから、君は休んでいるといい」
「だな。本調子でないなら寝とけ。宿舎についたら起こしてやるから」
「……いや、寝るのはもういい」
　眠る前に比べ、身体のだるみが大分なくなっている。その気になればもう歩くことはできるだろうが、それを口にしたらきっと止められるだろう。それに、
（目線が高い……！）
　ギエルドの肩から顔を出しているため、普段のロンの背丈よりも顔が高い位置にある。床が普段よりも遠く、何だか新鮮だった。
「……歩くことはできそうだけど、大事をとってもう暫くこのままでいさせてもらうから」
　これが背負われるということなのだろう。普段よりも高い目線だけでなく、相手の背中に寄りかかる体勢は案外楽だ。初めて経験した背負われている状況を、もう少し堪能したところでバチはあたるまい。背負っているギエルド自身がすすめてくれているのだから、遠慮は無用だろう。
（背負われる……俗にいう『おんぶ』ってやつか。流石にランもそこまではしてくれなかったな……）
　ランがいくら男のように振舞っていても、身体はやはり女性そのもので、彼女の力では背負うところまではできても、そのまま歩き続けるということは難しかっただろう。
　それに、背中の広さも目の前にあるものとランとでは大きく違う。彼女の背中はこんなに広くはなかったし、どちらかと言えば細く華奢な方だった。ギエルドとて細身であるはずなのに、彼の方が圧倒的に背中に厚みがある。これが男女の違いというものだろうか。

『ロン様、彼の背をずっと見ておられますがどうかしましたか？』
「うん？　ああ、ランの背中とは随分違うなーと思って」
「そりゃあ違う人間なんだから、違って当然だろ」
「それもそうか」
　違う人間だから違って当然。その答えに納得したロンはギエルドの背中を凝視するのをやめ、普段よりも高い視線を楽しむことにした。しかし回りは特に変わり映えのしない遺跡の中。多少床が遠く、天井が近くなったと感じても、無機質な土壁を見ていて楽しいはずがなく、すぐに飽きる。外に出たらまた違っただろうか。
「ロン、聞きたいことがあるんだけど、いいかな」
「聞きたいこと？」
「そう。ランという人について」
「ランのこと？」
　まさかアジェットの口からランのことについて聞かれるとは思わず、ロンは目を丸くする。
「ランという人がどんな方だったのか、興味が沸いてね。君さえよければ教えてくれないか？」
「ランについて……別に構わないけど」
「ありがとう」
　ランのことを誰かに説明するのは、初めてのことだ。説明するからには、ランの魅力を損なう言葉を決して選んではいけない。ロンは逡巡しながら言葉を繋ぐ。
「ランを一言でいうなら……やっぱりかっこいいが一番しっくりくるかな。いつも前を見据えていて、でも、僕が遅れるとちゃんと振り向いてくれる。ときにはからかってくることもあったけど、最後には頭をなでて軽い調子だけど謝ってくれた。面倒ごとを嫌ってるのに、困ってる人を放っておけないお人よしで、ぶつくさ言いながらも自分から首をつっこんでいったよ。僕を拾ったのも、きっと放っておけなかったんだろうね」
　ひたすら眠り続けるロンを見たとき、このまま起こさなければ、きっと永遠に眠り続けるだろうとランは思ったらしい。ロンもそれは同感だった。元に戻る方法が見つからず絶望していたロンには、再び目覚め当てもなく世界を彷徨うという選択肢は存在しなかったのだ。
「ランは絶望していた僕に、希望をくれた。手を差し伸べてくれた。それが嬉しくてその手をとらずに思わず抱きついてしがみついて大泣きしたけど、責めることなく頭と背中を撫でてくれたよ」
　生まれて初めて感じた人の体温は、とても温かかった。もしもロンが記録人（レコーダー）でなくとも、一生忘れることはないだろう。
「それに、ロンっていう名前もくれた。ランの歳の離れた弟の名前なんだって。可愛がっていたけど、ろくに遊んであげられずに里を出てしまったから、その弟と僕を重ねていた部分もあったんじゃないかな」
　ロンの名もまた、ランに与えられたものだった。それまで奴隷としての識別番号や指示語でしか呼ばれたことのないロンにくれた、かけがえのないもの。女であるのに男児の名前をつけるのはどうなのかとレフルに言われたらしいが、ロンはそんな些細なことは気にしなかった。名前を貰ったという事実が、何より嬉しかったから。
「お前、名前もなかったのか？　生まれたとき親から貰わなかったのかよ」
「生まれたと同時に母親から離されたからね。当時は少ない人数しかいない記録人（レコーダー）の数を増やすために、何人かの女は無理やり子供をつくらされてたんだよ。初代が精霊と交わした契約には、わずかでも記録人（レコーダー）の血を引けば、その子供は必ず記録人（レコーダー）になるっていうのがあってね。記録人（レコーダー）から生まれる子供は全て記録人（レコーダー）なんだよ。僕はその特異性を利用されて生まされた子供の一人。すぐに母親から離されて、別の年老いた記録人（レコーダー）からルーンの知識を埋め込まれて、幼児になるころには売りに出された。売人や買った奴らからしたら、僕に名前なんて必要ないんだよ。識別番号さえあれば充分なんだ」
　ロンの母親は、望んでロンを産んだわけではない。記録人の人数を増やすため、強制的に子供を産まされていたの

だ。そして自分の手で育てることも叶わず、ただ子供を産むことだけを望まれる。悍ましい人生だ。ロンも下手をしたら彼女と同じ道を辿っていた可能性もある。
「酷いな……誰もそれを止めようとする人はいなかったのかい？」
「奴隷に人権なんてないからね。あいつらにとって、記録人（レコーダー）は家畜も同然だったんだ。同じ人間として見ちゃいない。金儲けの道具以外の、なにものでもなかったんだよ」
『ロン様……』
　レフルが悲しげに双眸を歪めてロンを見つめていた。そういえばこの話を口外したのは初めてだ。ランにも言ったことがない。聞かれなかったから言わなかっただけだが、彼らの反応を見るに、自分で思う以上に当時の記録人（レコーダー）の人生は凄絶なものだったらしい。
「……悪かったな、少し無神経だった」
「いいよ別に。遠い昔のことだし」
　今のロンにとっては、五百年も前にされた仕打ちよりも、数年前にランがくれた温もりの方が大きなものとなっている。だからこうして淡々と、当時の事実を第三者である彼らに話すことで傷ついたりなどはしない。記録人（レコーダー）故に記憶を忘却することはないが、感情は時が経てば変わっていくもの。ランによって埋められた心は、昔のやるせない気持ちを忘れさせてくれた。今では昔の自分は大変だった、程度にしか思わない。
「それよりもランの話の続きだけど――」
　ロンはランと共に旅をしていた頃のことを語りだす。初めて二人で遺跡の中に侵入したときのこと。初めて目にする食べ物を前に困惑するロンに、丁寧に食べ方を教えてくれたこと。夜は二人でくっついて眠ったことなど、思い返せばランとの旅路は楽しいことばかりだった。
「それにしても、随分仲がよかったみたいだがどうして今はいないんだ？」
「わたしもそれが気になって……レフルゲンセル殿は、死別したわけではないと言っていたけれど」
「ランは死んでないよ。勝手に殺すなボケ」
「ご、ごめん」
「おいおい、元はといえばお前が紛らわしい言い方するのが悪いんだろうが。今はいない、って言われたら、勘違いするに決まってるじゃねえか」
「えー？　僕そんなこと言ったっけぇ？」
「記録人（レコーダー）のくせにとぼけんなよ」
　わざと戯けてみせると、ギエルドから的確なつっこみが入る。しかし声音には笑いが含まれていて、ロンもつられて笑みを見せた。
『へー、僕が覚えていて君が覚えてないなんて、おっかしいねぇロン』
　ランとも今と似たようなやり取りをしたことがある。ランと交わした約束をつい破ってしまって、誤魔化すためにロンはとぼけてみせたのだ。当然、ランがそれに合わせてくれるわけがなく、先の言葉と同時に両の頬をむにっと引っ張られた。
『ひ、ひはい！　ひひゃいほー！』
『約束を破ったら誤魔化すんじゃなく、謝る！　ほら、ごめんなさいは？』
『ほ、ほへんなひゃい……』
『よろしい』
（あのときは痛かったな……）
　思い浮かべて思わずそっと自分の頬に触れた。ランは確かに優しかったが、ロンが悪さをしたときは容赦なく叱りつけてくる。切れ長の瞳の持ち主であるランの目が怒りでつり上げられる様は威圧感があり、怖かった。それだけで、二度と同じ過ちを繰り返すまいと誓うには充分過ぎるくらいに。

「――ランと別れた理由だけど、さっきも言った通りランが死んじゃったからじゃない。ある街でランに恋人が出来たから、そいつと一緒になったんだ」
「恋人が出来た……？」
「そりゃあ目出度い話だな」
「うん。ランには幸せになってほしかったから、僕はレフルと二人で旅を続けることを選んだんだ」
　ランに拾われ、共に過ごすうち、ロンは次第にこの恩をランに返さなくてはならないと考えるようになった。旅をしている以上、辛いことの一つや二つはあったが、それもランがいたから前向きに乗り越えられた。毎日が生き生きとしていて、とても楽しかった。
　幸せだった。
　恩を返すのは、簡単なことではいけない。ロンがランから貰ったものは、とてつもなく大きなもの。ロンが感じている幸せをランにも感じてもらいたい。しかし、その方法は考えても考えても思い浮かばなかった。どうすればランに幸せになってもらえるのだろう。
　そしてある街で出合った一人の青年。背の高いランよりも更に高い身長の持ち主で、口数は少ないが不言実行な誠実な人間で、街の人間から好かれている男だった。
　彼の方は、ランに一目惚れしたらしい。ランは相変わらず男物の衣装を纏っていたが、このときにはもう男に間違えられることがなくなっていた。女性の視線を集めることはなくなり、変わりに男性の視線を集める。ロンと出合った後の五年という月日を経て、ランの身体は完全に女性のものへと変化していた。
「物静かな奴だったけど、小さい子供とかに読み聞かせとかしてる子供好きで、僕も会うたび頭を撫でてもらったよ。植物の世話とかもするのが好きで、よく如雨露を片手に水を撒いてる姿を見かけたな。ランはそいつを見るたびに、どこか遠い目をしてた。かと思えば赤くなったり挙動不審になったり。初めは理由がわからなかったけど、レフルがランは恋をしたんだって教えてくれた」
　レフルから恋とはどういうことか聞いた後、ロンはこれだと思った。これこそまさにランに恩を返す最高の機会だと。
　しかしそれは自分とランの別れを意味している。それでも、彼の元でランが幸せになれるのならば、そうするべきだろう。
　それに、ロンとていつまでもランにベッタリというわけにはいかない。自立するのにも丁度いい機会なのだろうとロンは決心した。
「そいつもランのことが好きで、告白されてたんだけど、ランは自分は旅を続けなければならないからって断ってた。ランは飄々としているけれど真面目で責任感は強いから、ランの中に旅を放棄するっていう選択肢は初めからなかったんだ。だから僕はランがこの街に残ってもいいように、レフルと契約を結んだ。そうすれば、ランに旅を続ける理由がなくなるから」
　ランは魔石を持てないレフルのために、契約を結んだ。しかし身も蓋もないことを言ってしまえば、レフルは別にランでなくてもよかったのだ。里を出てあちこち旅をしてみたいというランとは、利害が一致したに過ぎない。
　もしもこのときラン一人だけなら、そのまま旅を続けなければならなかっただろう。だが、レフルにはロンがいた。もう一人利害が重なっている人間がいるのだ。

　ならば、その役目をロンが引き継いでしまえば、ランは自由になれる。
「反対されるより先にレフルと契約して、旅立つ準備を整えて二人に言ったんだ。僕は大丈夫だからずっと二人でいればいいって。やっぱり最初はランに反対されたけど、最後まで譲らなかったら折れてくれた。それからはそいつと二人で暮らしてるよ。今もきっとね」
　ロンはランが彼の想いを受け入れるところを見守ってから、二人の幸せを祈って街を出た。それがロンとレフルの二

人旅の始まりである。
「……お前それで本当によかったのかよ。ランって奴のこと、好きじゃなかったのか？」
「そりゃあ大好きだったさ。でも、僕はランに無理をしてほしくなかったし、あいつと一緒にいるのが幸せなら、そうするべきだろ？　確かにランがいなくて寂しいと思うことはあるけど、あのときのことを後悔したことは一度もないよ。それに、僕は独りじゃない」
　ロンの傍には、いつもレフルがいた。たまに口煩いと思うこともあれど、独りではないというだけで充分心強い。ランと別れた後も何とかやってこれたのは、レフルの存在のおかげだろう。孤独だった五百年前とは比べるべくもない。
　先頭を飛んでいたレフルがこちらを振り返り、目が合う。レフルはニコリと微笑ましげに笑った。
「――やっぱり君は優しい子だね」
　いつの間にか隣にいたアジェットに突然頭を撫でられる。今の話に、頭を撫でられる要素があるとは思えず、ロンは思わず固まった。
「……なんでそうなる？　恩を受けたら返すのは当然だろ？」
「そうだけど、思いやる心がなければ他人の幸福なんて祈れないよ。うん、ロンはいい子だね」
　そういって笑顔でロンの頭を撫で続ける。それは宿舎を出た際に出合ったリデルとラーラに対する行動と同じだった。
「子供扱いすんなっての！　僕はお前らよりも何倍も長く生きてるんだからな！」
「でもそのほとんどを寝てたんだろ？　それに、ランって奴にも子供扱いされてたみたいじゃねえか。なら、俺らからも子供扱いされても文句は言えねえよな。見た目は俺らの方が年上なんだしよ」
「む……」
　確かにランからもずっと子供扱いされていた。自分の方が背が高く、年上に見えるからと。こういうとき、中途半端な背丈を恨めしく思う。背がもっと低ければ子供扱いされることに諦めがつくだろうし、ラン並に背が高かったならば、子供扱いされることはなかっただろう。
「ルーン解いたら、絶対お前らより大きくなってやるからな！」
　今はルーンが掛かってるせいで成長が止まっているが、ルーンを解けばロンの身体は成長を再び始める。出合ったばかりの十七歳のランの背丈は、十六のまま時が止まっていたロンよりも高かった。ならばロンも十七になるまでに背が伸びる可能性は充分残されている。はず。
「わたし達より背が高いロンか……少し想像できないな」
「絶対見下ろしてやるから覚悟してろよ！」
「……流石に俺らより高くなるのは無理だろ、性別的に」
「何か言った？」
「いんや何も」
　ボソっと呟かれたギエルドの言葉は、ロンの耳にはっきりとは聞こえなかった。アジェットも完全に拾えなかったらしく、きょとんとしている。
『亜麻色の騎士、次の扉が見えてきました。ルーンをお願いします』
「ああ、わかった」
「ん？　扉なら僕が開けるよ。それくらいの魔力は充分回復したし、別にもうアジェットに頼まなくても――」
『ロン様は今日一日ルーンは厳禁です。回復にのみ専念していてください。反論は一切認めませんので』
　きっぱりと言い放つレフルに、ロンは返す言葉を失う。確かに治癒のルーンで魔力を完全に使い果たしたのだから、大分回復したとはいえ今日はこれ以上ルーンを使わないに越したことはない。それはわかるが、いくらなんでも過保護すぎやしないだろうか。ここから先の扉はこの次で最後であり、それくらいだったらできなくはないのに。
　しかし反論は認めないと言ったレフルには、何を言っても無駄だ。ロンとは違い、途方もない月日を刻んできたレフ

ルは、頑ななときはどんな言葉も決して聞き入れてはくれない。ここはロンが折れるしかないだろう。
「……この過保護精霊め」
『なんとでも』
　せめてもの抵抗で恨みがましく呟いた言葉でさえ、レフルはさらりと流した。
「宿舎に戻って今日の成果をワローラル女史に報告すんのはお前の役目なんだから、今のうちは楽しとけ。辻褄あわせにゃ協力してやっから、そこらへんも考えておいてくれな」
「あー……そうだった」
　むしろ扉を開けることよりも、そちらの方が厄介かもしれない。あの女騎士相手に、あやふやなことを言って誤魔化す、ということはできないだろう。どこを話してどこを隠すか、それが重要となる。
　アジェットがルーンを紡いで開いた扉を潜ったあと、ややおいてアジェットがこちらを振り返る。
「ワローラル殿は信頼できる方だ。ロンの事情を話しても大丈夫じゃないか？」
「僕は嫌だね。あの女、底がしれないから絶対言いたくない」
　アジェットの提案を、ロンはにべもなく却下する。彼女がロンに向かって口にしたことに、嘘や偽りはないだろう。遺跡の調査を早く済ませれば、その分経費がかからなくなる。子供でもわかることだ。
　だが、あれは正直いただけない。首飾りを取り戻そうと一騒動起こしたロンに対し、表面上は普段どおりの笑みを見せながら、彼女はロンを諭した。瞳の奥で怒りの炎を燃やしながら。怒りを抑えてまでロンを協力させたいほど、経済状況が逼迫しているのかと思いきや、王都から遠く離れた僻地であるはずのテロンダの街並みは活気に満ちている。まだ焦るには早すぎる段階だ。だからこそ、彼女には何か別の思惑があるのではと勘繰っている。
「……お前の言いたいこともわからなくはねえな。あのときのワローラル女史、様子がおかしかったし」
『確かにあれは不自然でしたね……』
「どういうことだい？」
　あの場にいたギエルドも、エンジリカの行動に疑問を抱いていたらしい。その場にいなかったアジェットに、あのときのことを説明する。
「それは……変だね。そんなことがあれば、普通は協力を打診しないよ」
「そのおかげで今ここにいられるわけだけどね。ほんっとに何を考えているのやら」
　本来ならば王都に送られているところを、こうして探索できるのはエンジリカの計らいによるもの。しかし彼女に感謝の気持ちなんて沸いてはこない。レフルの命である魔石（リフェ）をその手に握られているのだから当然だ。こちらの弱みを握られて、悪感情を沸かない人間なんていないだろう。
　アジェットもまたギエルドと同じく疑問を持ったようだった。あの場にいた騎士のほとんどはエンジリカを心優しい方だと評していたから、騎士とは見る目がないのかとばかり思っていたが違ったようだ。訂正、あのときあの場にいた連中の見る目がない、だ。
「……なら報告より先に買出し行くか。日も暮れてないし、後回しにしても問題ないだろ」
「本来なら報告は素早く行うべきだけど……仕方ないか」
「何か買うものでもあるの？」
「君の服だよ、ロン」
「僕の？　……ああ」
「ワローラル女史には罠でボロボロになったとでも言えばいいだろ。血塗れの服見せるよりかは説明が楽だ」
　ロンの服は、治癒のルーンを使ったせいですっかり血塗れだ。この格好のまま外を歩いたらきっと目立つだろうし、エンジリカもどうしてそんな怪我をしたのか聞いてくるだろう。そして服に血がついているのにロンの身体に傷が残っていなかったら、確実に怪しまれる。
「買いに行くのはいいけど、僕の財布は没収されてるんだけど」

「わたしとギエルドで出すよ。君に怪我をさせてしまったのはわたし達の責任なんだから」
　当然と言わんばかりに返され、思わず返事に窮する。服を買ってもらったのは、ランが最初で最後だとばかり思っていたのに。
「アジェットの服も破れてんじゃん。そっちはどうするのさ」
「わたしは宿舎に着替えがあるよ。気にしてくれてありがとう」
「別に気にしたわけじゃないけど……」
　返す言葉が見つからなかったから、ふと思ったことを聞いてみただけだ。アジェットはロンの言葉を好意的にとりすぎてはいないだろうか。
　ふと、ロンの身体を支えている背中が小刻みに揺れた。どうやら笑いを堪えているらしい。自分とアジェットのやり取りを見たその反応が、少し癪に障る。
「でや！」
「いて！」
　ロンはギエルドの頭部に手刀を落とす。ギエルドから上がった悲鳴を聞いて、心がスッと晴れた。
「ふう、スッキリした」
「てめえ……このまま床に落としてやろうか……？」
『そんなことをしてみなさい、二度と月日が拝めなくなりますよ』
「本気なわけがないから、そんな目でこっちみんな……」
　レフルが綺麗な笑顔をこちらに向けていた。しかし目は笑っておらず、絶対零度の冷たさを感じる。ギエルドの背中が今度は身震いで震えた。
『そろそろ次の扉ですね。次はレフト、左という意味です。これで最後ですよ』
「これで最後ということは、最初の三つの扉のところだね」
「そうそう。因みに真ん中の扉は中央って意味で、この法則でいくと、反対の扉の開くルーンはきっと右だね」
「そのまんまじゃねえか……」
「まんまだよ」
　事実、この遺跡の扉に刻まれている古代言語は、大変遠まわしな言い方をしているだけで、答えるべきルーンは単純なものばかりだ。わざとややこしくしているとしか思えない。
　苦労して導き出た言葉がそのまんまの答えと知ったとき、相当図太い精神でなければ非常に悔しい思いに駆られるだろう。
「因みに扉に刻まれてるルーンを現代語で訳すとこうなる。『一般的な人間の利き手と反対に位置する方向とは何か』」
「……回りくどいな」
「解読がなかなか進まない理由の一端がわかった気がするよ……」
「それだけこの遺跡に人間を入れたくなかったか、造った奴が余程の捻くれ者だったかのどっちかじゃない？」
　ただ『左』と言わせたいだけなら、他にもっと簡単な言い回しというものがある。
　それをあえてこうしたという事実を鑑みて、辿り着く答えはそれしか思い浮かばなかった。でなければ、こんなにも精神力をガリガリと削るような内容にするはずがない。
　だからこそ、この遺跡にロンが求めているものが隠されているのではと期待が高まった。厳しい罠で侵入者を阻んでいる遺跡にこそ、それなりに価値のあるものがあるのは当然のこと。
　最後の扉を潜り抜け、数時間ぶりに出た外は、まだそれほど日が傾いてはいなかった。
「流石にもう平気だから、自分で歩く」
「そうか」
　ギエルドに降ろしてもらい、両足で立つ。身体のだるみはなく、頭がフラフラすることもない。完全に回復したよ

うだ。
「それとこれ羽織っとけ」
「うぶ！」
　突然頭からバサリと何かを被せられた。それは布面積がとても広い服……もとい、ギエルドが先ほどまで着ていた隊服の上着部分だ。
「流石に血塗れの格好で街歩いたら目立つだろ？　だからそれ着とけ」
「ギエルド……理由は最もだけど、もっと丁寧に渡してあげなよ……」
　渡し方云々はともかく、言っていることは理にかなっているため、ロンはギエルドの上着に素直に袖を通す。同じく服が血塗れになっているアジェットも上着を脱ぎ、血に染まっていない背中の部分を抱えるように持って、できるだけ血の跡を隠している。
「でかい、重い、動き難い」
「開口一番がそれか」
　身長差からサイズが合わないのは明白ではあったが、袖から手は出ず、裾はロンの腿を覆うまである。前をしっかり押さえなければ肩もずれ落ちるだろう。
「……せめてランくらい背があればな」
　ランは長身の持ち主だった。彼女ならば、ギエルドの服も普通に着られただろう。少なくとも、ロンのように袖から手がでないという屈辱的なことにはならなかったはず。
「諦めろ。どんなに嘆いたところで身長は変わらね――っぶ！」
　ポンポンとからかい混じりに頭を撫でられ、ロンは長い袖を振り上げた。見事にべちっとギエルドの顔に命中する。
「てめえ……」
「フフーンだ」
　ロンの紫紺の瞳とギエルドの黒灰色の瞳が合い、バチバチと火花が散った。
「えっと……そろそろ行こうか、二人とも」
『そうですね。低レベルな争いはそこらへんにしましょう、おふた方』
「わーってるよ」
「仕方ないなぁ」
　アジェットとレフルに窘められ、二人は一度は口論を止めるが、街に向かって歩いていく最中、
「ほんっとに口の減らねえガキだな、お前は」
「あっはは！　僕を子供扱いするのなら、大人の余裕っていうものを見せてほしいものだね」
「止めないか二人共……街中なのに……」
　言い争いというなの軽口の叩きあいは続いていた。互いに容赦のない言葉をぶつけ合うが昨日とは違い、ギスギスとした雰囲気はない。特にロンが顕著だった。こんな風に誰かと軽口を叩き合うのは本当に久しぶりで、浮かべる笑みは自然なもの。決して作り笑いではない。
『楽しいですか、ロン様』
　レフルがロンの肩付近に来ると、ロンにだけ聞こえる声量で尋ねてくる。
　ロンはレフルに聞かれてから、自分が今この二人との会話を楽しんでいることに気づいた。しかし、素直にそれを口にするのは気恥ずかしい気がして、
「悪くはないね」
　と、答えるに止めた。
　レフルがその答えを聞いて笑みを深くしたことを、ロンは知らない。

「服屋みっけ。あそこでいいんじゃない？」
「だな。お前の服なんだから、自分で好きなの選べよ」
「いいのが見つかるといいね」
　三人は街中を歩き、漸く見つけた服屋の中に入っていく。レフルは三人の後ろに続いた。
　ここは街中である。人目が多い場所でレフルと会話するわけにはいかず、こうして三人を見守る位置にレフルはついていた。時折ちらりとロンがレフルの様子を気にかけてくるが、レフルはそれにニコリと笑って応じる。
「にしても、王都から離れてるっていう割には活気あるじゃん、この街。流石大陸一の大国っていわれるだけはあるもんだ」
　テロンダに住んでいる人々は多く、往来は活発だ。大抵の国は、首都や王都は活気があるものの、地方には街と呼べない人の少ない村々が多数存在する。それは中心区から離れれば離れるほど多いもので、王都から馬車で五日は要するテロンダもまた辺境の地に該当する。
　なのに人が多く暮らしているということは、この場所が特別なのかもしくは国全体が富んでいるかのどちらかだ。テロンダは別段これといった特産品はないため、後者の方が確立が高い。つまりルインラトゥス全体が豊かな国なのだろう。
「……ロン、君にはこの街が豊かに映っているんだね」
「ん？　……少なくとも、僕が今まで見てきた街の中じゃあ豊かな方だ。他の国だと、地方でこんなに活発なところがあるのすら珍しいよ。税金がどれくらいのしかかってるのかは知らないけど、少なくとも後数年は食うには困らないだろうね。――最低限度の生活でも大丈夫ならだけど」
　レフルもロンに同意だった。ただ生きるために、生命を繋ぐための生活ならば数年は心配せずともいいだろう。だが、ルインラトゥスは豊かな国だ。豊かさを幸福と感じるのではなく、普通と大半の国民が感じているのなら、その生活を脅かされることに不安や不満を感じるのは当然のこと。下のことを知らなければ知らないほど、下を知ったときの焦燥は激しい。
「お前らにこの街がどう映っているのかは知らないけど、他の貧しい国からしたら、誰もが羨望の眼差しを向けるような生活をしてるよ、この街の人間は」
「……だからってのんびりはしてられねえな」
「そうだね」
　豊かな国だからこそ、豊かな国なりの問題がある。自分達が支払う税が無駄に消費されているだけならば、不満が沸くのも当然だろう。
　一番手っ取り早いのは遺跡の発掘をやめることだ。しかしエンジリカの言葉を聞くに、その可能性はゼロに近い。それを考えると、遺跡の発掘を速やかに終わらせたいと願うのもわからなくはない気がした。
「この国って王の独裁ってわけじゃないんだろ？　遺跡発掘するって言い出したとき、誰も止めなかったの？」
「いたよ、何人も。でも、隣国で宝が発見されたと聞いて、ルインラトゥスの遺跡からも発掘されるのではと思ったのは、陛下だけじゃないんだ」
「そういうこと。王に賛同する奴が何人かいてな。そいつらの勢いが凄まじくて可決しちまったのさ」
　あわよくば我が国でも、と思ってしまう者が何人か出るのは、確かに普通のことだ。遺跡から宝が見つかるかもしれないなんて、浪漫を求める心も刺激されるだろう。
「でも、それから二年経ってるにも関わらず、情熱が冷めてないなんてすごい執着心だね。普通だったらとっくに諦めてるよ。ルーンに詳しい奴も限られてるっていうのに」

「……遺跡から宝が出ることを本当に望んでるのは、今じゃ王くらいなもんさ。他に王に賛同してる家臣共は、王の機嫌をとって旨い汁を吸おうとしているような奴だけ。常識ある家臣達は、第一王子を筆頭に、王が余計な費用を算出させないよう心血を注いでんだ」
　彼らの存在によって、遺跡の調査へ使う費用は抑えられているという。それでも二年分の予算は、決して低い額ではないだろう。そしてロンが言ったように王の宝への執着心は強く、いずれは押し切る形になる可能性も無きにしも非ず。
　彼らからしたら楽観視することはできまい。
「にしても、傍迷惑な王様だね。王子様も大変だこと」
「本当にな。金は無限じゃねえんだから、もっと有効的な使い方をしろってんだ」
「ギエルド、ロン。あまり大きな声で陛下のことを言うのは……」
　王への不審や不満を口にする二人をアジェットが窘めようとする。
　旅人であるロンならばいくらでもシラを切れるが、騎士であるギエルドが王への不満を言うのはお世辞にも良いこととは言えない。
『亜麻色の騎士の言うとおりですよ、黒髪の騎士。騎士が王への不満を口にすることは、王への反逆の意思ありととられても文句は言えません。どこで誰が見ているのかわからないのだから、言動には注意なさい。貴方の言動のせいでロン様を危険な目に合わせるわけにはいきません』
　思わずレフルも苦言を呈した。ギエルドに何かあれば、ロンに飛び火してしまうかもしれない。それだけは絶対に阻止しなければ。
「別に平気だろ。王に不満を持ってるのは、何も俺だけじゃねえ。しかも、誰もが最もな理由だと同意してくれるだろうよ。現に、ここをまとめてるワローラル女史は、王に不満を持ってる代表的な一人だしな」
　ギエルドは大仰に肩を竦めてみせるが、言っていることは最もだった。確かに声高々に王への不満を口にするのはよくないことだが、王の現状を誰もが不満に思っているのは周知の事実。
　そして何より、この街の上に立っている人間が王に不満を持っているのならば、それを口にしたとしても厳しく罰するということはないだろう。もしもギエルドを罰するのならば、まずは自身を罰しなければならなくなる。
「もしかしてあの女、王に不満を抱きすぎて危険視されて、王都から離れたテロンダに飛ばされたんじゃないの？　学者の護衛っていう大義名分つけられて」
「まさにその通り。でもって彼女の部下である俺達も巻き込まれたわけだ。下っ端は辛いぜ」
「ギエルド……」
『彼女への不満もなるべく口にすべきではありませんね』
　王への不満を彼女が見逃してくれるというのならば、彼女への不満はもっと口にするものではない。アジェットの視線は完全にギエルドを咎めるものとなっている。
（強制するような形でロン様に手伝わせようとしたのも、自分が早く王都へと戻りたいから……か？　辻褄は合いますが……）
　ほぼ左遷されるようにこの地へとやってきたのなら、王都へ返り咲くことを熱望していてもおかしくはない。しかし彼女の菫色の瞳から、利己的な野心は感じられなかった。ロンが再度捕まったときも、ぶつけたい怒りを抑えているのに必死で、何としてでもロンを手伝わせてやるという気概は感じられたが、その根源となるものが何なのかは全く予想がつかない。本当に純粋に民のことを思って、言葉通りに遺跡の発掘を終わらせたいだけなのかもしれないし、他に理由があるのかもしれない。
（彼女について、深く考えても仕方がないですね。警戒を怠らなければ特に問題もないでしょうし）
　エンジリカについての思考に一段落をつけると、話の方向性は全く違う方へと向いていた。
「そういや部下の騎士のほとんどがあの美人さんに惚れてるみたいだけど、お前らは惚れてないの？」

ロンの言葉に男二人はキョトンと目を丸くし、顔を見合わせた。
（彼女を客観視できているところから、盲目的に惚れていることはないでしょうが……はて）
再度捕まったとき、ギエルドとエンジリカの他に十数人の騎士が回りを囲っていた。そしてレフルが見るに、その場にいたギエルド以外の騎士は、皆エンジリカに見惚れていたように思う。彼女は凛とした美しい女性であるから、ただ惚れるだけならば別段不思議なことはない。レフルも二人がどう答えるのか気になり、視線を彼らに向けた。
「周りが惚れてるからって、俺らも惚れる理由にはならねえだろ。正直俺は苦手なんだわ、ワローラル女史のこと」
「ワローラル殿はあくまで上司であって、それ以上でも以下でもないよ。それに、わたしはまだ騎士に成り立てで自分のことで精一杯だから、暫くは誰かと恋をするつもりはないんだ」
「へー。……なんだつまらん」
「おい、今本音が漏れたぞ」
「気のせい気のせい。あ、この服いいな」
ロンは自身の呟きを誤魔化すと、近くにあった服を手に取る。恐らく、もしも二人のどちらか、もしくは両方が彼女に惚れていたら、からかうつもりだったのだろう。通常と変わらぬ表情だが、レフルにはロンの顔に残念とかかれているのが見える。
多くの者が惚れているからといって、全ての男性が彼女に惚れるのかと言えばそれはありえない。人の好みは十人十色。だからこの二人がエンジリカに対して恋愛感情を抱いていないこともまた、不思議ではない。
一度お眼鏡にかなった服を見つけたロンは、また次の服を物色している。その動きは軽快で、動き難いと愚痴を零していたとは思えないほど。
洒落っ気はないが、ロンも女性なのだ。だからこうした買い物が楽しいのだろう。普段は偶に宿を取るときや、新しい国に入ったときに地図を買うくらいしか金を使う機会がなく、買い物をすることすら滅多にない。無駄を出来る限り省くのは旅人として当然のこと。ましてや効率を重視する傾向にあるロンは、まず不老不死のルーンを理由に食料を買うことがない。着ていた服も、ランと別れる直前に買ったもので、また痛んではいないからとそれ以来買い換えてはいない。宿を取るのは、治安が悪かったり天候が雨だったり、野宿するには適さないときのみだ。つまり、天候がよく治安も悪くはなければ野宿、または夜通し歩き続けている。
こうした極力無駄を省いた旅にロンは根を上げたことなど一度もないが、正直言って娯楽とは全く無縁の生活だ。だからこそ、買い物のようなちょっとしたことでも楽しんでいる姿を見ると安堵するのと同時に、ここを発つときのことを思う。
（これからはわたくしの方からも、人間らしい生活をするよう進言しましょう）
ロンを傷つけてしまうのではと思って今まで黙っていたが、楽しそうなロンを見て、その判断は間違っていたと思い知らされた。ルーンを解除するのは遠い日のことなどではなく、明日訪れる可能性だってある。そして不老不死のルーンを解けば、ロンは普通の人間に戻る。なのに普通の人間の生き方を知らなければ困るのはロンだ。ただ過保護に守るだけではいけない。ロンが元に戻っても生き続けられるように、効率ばかりを求めるロンを時と場合によって諌められなければ。
「試着できたー」
レフルが物思いに耽っている間に、どうやら試着するところまで進んでいたらしい。
試着室のカーテンを開いたロンの姿は、前の服とあまり変わらないものだった。半袖の白いシャツの下に黒のインナー、腰には丈夫そうなベルトがしっかり巻きつけられている。サイドに白のラインがあるハーフパンツに、脹脛まで覆っているヒールの低い頑丈そうなブーツ。華奢な首はこげ茶色のスカーフが、手首をしっかり覆った手袋には、申しわけ程度に紫の刺繍が入っている。動き易さにのみ注視した、普段通りのロンが偉そうに腰に手を当てて仁王立ちしていた。どうやら遠慮なく、全てを一新させたらしい。
「大して変わってねえが……サイズはあってるみたいだな」

「それでいいかい？　ロン」
「うん。これでいいよ」
　あっさりと決まると、アジェットとギエルドは近くにいた店員に会計を済ませるべく話しかける。服はこのまま着ていくことにし、駄目になってしまった服は店側が捨てておいてくれることになった。
　ありがとうございました、というお決まりの言葉を背に受け、三人は服屋を出た。レフルは店員に向かってペコリと一礼する。見えているかどうかなど関係ない。これは気持ちの問題だ。
「思ったより早かったな。まだ日が暮れてねえ」
「なら、のんびりゆっくり戻ろうよ。僕まだ言い訳考えてないんだよね」
「言い訳……本当のことを言うわけにもいかないから仕方ないとはいえ……嘘をつくのは心苦しいな」
「そんなこと言ってる場合じゃねえだろ」
「わたしもそれくらいはわかっているさ」
　アジェットが嘆息した。頭では理解しているが、感情がついていけていないという状態なのだろう。嘘がつけない性分なのは人として美徳ではあるが、彼は貴族だ。上流階級というのは権謀術数がつきもの。どんなに立派な志のある人間でも、高い身分ならば取り入ろうとよからぬ考えを持った者が寄ってくるだろう。そしてそれを快く思わない人間がいたら、そちらからも直接的ではないにせよ、何かしらの攻撃を受ける。
　上流階級の世界が華やかなのは見た目だけだ。高い地位や権力を欲する心は誰にあってもおかしくないのだから当然とも言える。だからこそ、アジェットのように嘘がつけない性格というのは、相手の裏を読まなければならない上流階級の世界では不向きとしかいいようがない。
　しかしギエルドもそれが得意だとは思えなかった。遺跡の中で、楽しそうに剣を振るっていた姿を思い出す。彼の場合、頭で考えるより身体を動かす方が性に合っている気がする。
「お、クレープ屋発見。なあ、食ってこうぜ」
　一風変わった異彩を放つ屋台を見つけたギエルドが、目を輝かせた。屋根の側面に飾られたクレープという文字は大きく色鮮やかに飾られ、とても目立っている。屋台の外装も、パステル調の明るい色で、とにかくやたら派手な屋台だとレフルは思った。
「ギエルド……寄り道は――」
「くれーぷ？　何それ」
「何……？　ロン、お前クレープを知らないのか？」
　派手な屋台に目線が釘付けになっているギエルドをアジェットが諌めようとするが、首を傾げるロンにギエルドが信じられないとばかりに目をつり上げた。
「いいか、クレープっていうのはな――」
　ギエルドがいつになく神妙な顔つきで、クレープについて説明する。ロンだけではなくレフルもクレープという名の食べ物は初耳なため、茶々を入れることなく耳を傾けた。
　クレープというのは、薄く延ばして焼いた生地の上に、生クリームやフルーツを乗せ、そして包み込んだ食べ物らしい。トッピングするものや、かけるソースにより、味のバリエーションは豊富に存在するとか。
「へー、つまり甘味か。砂糖を惜しみなく使ってるなんて贅沢だね。豪勢だこと」
「いや、ルインラトゥスは国中に馬車の通行路が敷かれているから、砂糖を確保することはそれ程大変じゃないんだ。値段も一般市民向けで、それほど高くはないよ」
『砂糖が国中に行き渡っている……本当に豊かな国ですね、ルインラトゥスは』
　素直に関心すると、二人は少し嬉しそうに口の端を上げた。
　甘味は基本的に贅沢品だ。砂糖の元となる植物は別段珍しいものではないが、それを栽培する余裕があるのなら、腹にたまる穀類を優先するのが普通である。

よその国でも、王都のような賑わいのある都市部ならばなくはないが、それは全て金持ち向けに作られる高級な菓子類であり、一般市民の手にはまず届かない。
それがルインラトゥスでは、地方の街でも一般市民に届く値段で売られているというのは、食物事情に余裕があるという証拠だろう。流石は大陸一の国土を誇るだけはある。
「よし、ならクレープを食べたことがないっていうロンのために、ここはやはり買うべきだな。お前も食ってみたいだろ？」
「いや別に」
「そこは空気を読んで、食いたいって言うべきところだろ」
「食べたいのはギエルドだろ？　僕をだしに使うなよ」
ロンが腰に手を当てながら呆れ混じりに瞳を細めた。アジェットも呆れた眼差しをギエルドに向けている。ロンが食いつかなかっただけでなく、味方してくれる者がいないと判断したギエルドは、大袈裟に肩を落とした。いい年をした男の反応ではない。
『――ロン様、食べてみてはどうです？　旅の最中では甘味など食べる機会はありません。口ぶりからして驕って下さるようですし、彼の言葉にのってみては？』
レフルが口を出すと、ギエルドの瞳がキラリと光った。その姿はまるで好物を与えられた子供。決してギエルドを喜ばせるために言ったわけではないが、漸く味方を得たとばかりに黒灰色の瞳を輝かせている。
ロンはレフルの提案に口元を当てながら、ギエルドを見上げた。彼は期待の眼差しでロンを見下ろしている。
「……きっかけがほしいってなら、付き合ってやるよ」
流石に注がれる眼差しの前で断ることもできなかったのか、ロンがうんざりとした表情で肯定の意を示した。
「そうこなくちゃな！」
「ギエルド、わたし達はまだ勤務中――って聞いてない」
ロンの賛同を得たギエルドは、一目散に屋台へと走っていく。当然アジェットの話なんて耳に入っていない。
「甘いもの好きなんだ、ギエルド」
「昔から目がなかったね……甘味を作ろうとすると、つまみ食いされずに完成することがなかったぐらいに。当然その都度説教されていたけど」
「それでもつまみ食いやめなかったんだ。変なところで根性あるね」
「本当にね……」
アジェットは深いため息を吐くと、ロンを伴って屋台の傍でメニューを眺めているギエルドの元へと向かう。
初めは乗り気ではなかったロンも、ギエルドに具をどうするか尋ねられると丸い瞳に好奇の光りが宿った。それを見て、呆れた顔をしていたアジェットも表情を和らげる。
（随分仲がいいように思いましたが、昔からということは彼らは幼馴染ですか）
楽しそうに選んでいる彼らを後目に、レフルは先ほどアジェットが口にした言葉について考えていた。
（幼馴染ならば、余計に解せない。何故亜麻色の騎士は黒髪の騎士を敬う？　……ロン様のいないところで、一度は聞いておいた方がよさそうですね）
彼らにルインラトゥスを守る使命があるように、ロンを守るのがレフルの使命だ。杞憂で済むならそれでいい。だが、彼らの事情がロンの身を危うくする可能性が少しでもあるのならば。
「……！　甘い！」
「甘いに決まってるだろ、クレープなんだから」
「どうやら気に入ったみたいだね」
先ほどのギエルドと同じようにキラキラした瞳を、ロンは手に持ったクレープに向ける。初めて口にした甘味を、彼女はとてもお気にめしたようだ。がぶりとクレープに齧り付く勢いはすさまじく、食が細いロンとは思えないほど。

「……僕の食事、これからずっとクレープでいいよ」
「おう、いいなそれ」
「駄目に決まってるだろう！　同じ物を食べ続けたら栄養が偏ってしまう！　食事というものは、バランスのいい栄養素を摂取することが大事なんだ！」
「えー」
「相変わらず頭固いな、お前」
「そういう問題じゃあないだろう！」
　食事に関して意見の一致を見せたロンとギエルドに、アジェットが顔を真っ赤にしながらガミガミと叱りつけている。
（……今はまだ様子見といきましょうか）
　アジェットに向かって唇を尖らせているロンを見て、レフルは軽く目を伏せた。楽しそうなロンに、水を差すようなことはしたくない。
　止まることのないアジェットの叱責は、日が傾いてくるまで続いた。

　数メートル距離が開いているというのに、ニコニコと微笑む笑顔は背筋を冷やす効果がある。　これが自分が彼女を苦手としている大きな理由だった。一見美しい笑みではあるが、ギエルドには、とって食われそうな顔としか思えない。こんなことを思っているのが彼女を信奉している他の騎士達にバレたら、きっと大目玉をくらうだろう。
「ありがとう、ロン。私の部下の怪我を治してくれて。治癒のルーンは消耗が激しいと聞いているけれど、身体は大丈夫かしら？」
「充分休んだからもう平気。でも大事をとることにしたから戻ってきたんだ」
　にこやかに交わされるロンとエンジリカの会話。しかしどちらも目が笑ってはおらず、第三者から見てもお互いが腹の探り合いをしているのは一目瞭然だった。その空気にあてられ、ギエルドは身体が妙に落ち着かない。
（早く部屋戻って眠りてぇ……）
　そしてこの空気から解放されたい。落ち着かないのはギエルドだけではないようで、アジェットもどこかそわそわとしている。そんな中でレフルだけがロンの肩に腰掛け、足を組んで堂々としていた。自分達の中で一番図太い神経を持っているのは、きっとこの小さな精霊に違いない。
「多分あの遺跡の中、僕達が辿り着いた奥の間みたいな小部屋が他にも幾つかあるよ。昨日、別の場所で同じような部屋に辿り着いたからね。でもってそのほとんどがきっと侵入者撃退用の罠。その中にもしかしたら本物の宝があるかもしれないし、ないかもしれない。王様が望んでるような宝があるかないかまでは、この段階じゃ知りようがないね」
「そんなに危険な罠があったのね……ありがとう、それだけでも十分な成果だわ。皆に注意を呼びかけないといけないわね」
　奥の間にやってきた三人は、銅像に祀られている短剣を発見し持ち帰ろうとした。しかしそれは罠で突然銅像が動き出し、ロンに襲い掛かろうとしたのをアジェットが庇い、ギエルドが短剣を破壊した。負傷したアジェットをロンが治癒のルーンで治したが、魔力の消耗が激しかったため、今日のところはここまでにしようと引き返した。
　これがロンがエンジリカに話した一連の流れだ。言ったことに、ほぼ嘘はない。ただ具体的なことが省略された、要点のみを纏めたもの。
（上手い具合に纏めたが……これで納得してんのかねえ、ワローラル女史は）
　ロンの話した内容は、正直いって具体性がほぼない。その分わかりやすくもあるが、同時に疑問もわくだろう。
「そういえば、その服はどうしたの？　ずっと着ていたのと違うようだけれど」
　案の定、想定していたことを尋ねられた。しかしロンは顔色を変えることはない。
「ああこれ？　実はさ、銅像に襲われたときに服だけバッサリやられちゃってさー。服の替えなんて持ってないし、買おうにも所持金没収されちゃってるから、二人が服屋で新しいの買ってくれたんだー。そろそろ一新させたいなぁとか思ってたから丁度よくって。いやあ、太っ腹だねぇ。アハハ」
　ロンはニッコニッコと笑っている。エンジリカもそれを見てニコリと笑った。
　ギエルドは何故二人がこうも笑いあっているのか、漸く理解する。どちらも自分の意図を読み取られないようにするためだと。笑顔というものは目を細めてつくられるもので、瞳の位置や目線の方向などのちょっとした情報すら得ることができない。無表情以上に、表情を隠すのに特化した表情と言えよう。
（女ってこええ……）
　どちらもそれを理解した上での、満面の笑みなのだろう。たっぷりと含まれた含みが、この大して広くない室内を冷え込ませている原因となっている。
「その小部屋、スイッチとなる短剣を破壊したということは、もう安全ということかしら？」
「だね。銅像もただの銅像のまま、動くことはないよ」

「そう。なら、入り口からそこまでの道順と扉を開くルーンの意味と発音を纏めて提出してくれないかしら。できれば早い方が嬉しいわ」
「なら、今から書いて明日の朝あんたに提出するよ。それでいい？」
「充分よ」
　その言葉の後、漸くエンジリカの口から今日の報告はもういいわ、とのお達しが貰える。アジェットが背筋を伸ばし、エンジリカに一礼した。ギエルドも軽く頭を下げ、くるりと踵を返して部屋を出る。
「それじゃ、部屋に戻って報告書書かないとねー。激しく面倒だけど」
「ロン……ここだと聞こえるよ？」
「別にこれくらい聞こえたって構わないだろ」
　部屋を出てすぐ、ロンが腕を垂直に上げて大きく伸びをした。ギエルドも同じようにしたいのはやまやまだが、仮にも上司の部屋のすぐ近くでそんなことをするわけにはいかない。こういうとき、下っ端というものは辛いものだ。
「紙とペンはわたしの持っているものを貸すよ。それでいいかい？」
「書けるならなんでもいいよ」
『今回はずっと真っ直ぐ進んだだけですから、特に難しいこともないでしょう』
　そんなことを言いながら部屋へ向かう足取りはやはり軽い。上辺は取り繕っていても、身体は正直だ。
　ギエルドはふと顎に手をあて、あることを考えていた。自然と無言になり、そんなギエルドを不思議に思ったアジェットがこちらを振り向く。
「ギエルド、どうしかしたのか？　さっきからずっと黙っているけど」
「ん？　ああ、ちょっとな……」
「クレープ食べすぎて、腹壊したんじゃないの？」
「そんなヤワな胃袋してねえよ」
　茶々を入れてくるロンの額を軽く小突きながら、来た道を振り返る。そして視線をアジェットへ戻した。
「悪い、ちょっくら用事できたから戻るわ」
「用事？」
「それは構わないけど、あまり遅くはならないようにね」
「わかってるって」
　二人に踵を返し、ギエルドは来た道を戻った。
　そしてギエルドが立ち止まったのは、とある扉の前。先ほどまで三人で報告していたエンジリカのいる部屋だ。
（気にしないのがいいのかもしれねえが……そうは言ってられねえよな）
　ギエルドは扉をノックする。どうぞ、と涼やかな声が聞こえると、失礼しますと言いながら扉を開けた。
「あら、どうしたのギエルド君。もう休んでいいと言ったのに」
「……ワローラル様にお聞きしたいことがありまして」
「何かしら？」
　エンジリカが浮かべているのは、目を細め、口角が上がっている微笑。しかしよくよく注視してみれば、目は決して笑ってはおらず、だが腹で何を考えているのかは解りづらい。
（こりゃ直球で聞くしかねえな）
　エンジリカの顔を見た瞬間、ギエルドは探りを入れることを諦めた。元々そういった言い回しが苦手なのもあるが、貼り付けられた笑顔というなの鉄化面をどうにかすることなど、ギエルドにはできない。
「ロンのことですよ。――何故貴女はロンが脱走を企てたのにも関わらず、王都へと送検しなかったのか。俺も王の宝探しにはうんざりしてますから、あいつに協力してもらって早く調査を終わらせたいと思う気持ちには同意します。ですが、彼の持ち物を握ってまで強要するのは、やりすぎでは？」

ロンの口から出た、エンジリカへの不満の言葉を思い出す。本来ならば、ロンはエンジリカに感謝すべきなのだ。先に不法侵入という罪を犯したのはロンであり、遠い地である王都へ送検されることなく、合法的に遺跡の調査をすることができるのだから。

ただし、それは彼女が大事にしている首飾りをエンジリカが握っていなければの話。ギエルドだって、大事な物を取られた上で命令されたならいい気はしない。確かにこちらの油断を誘って脱走を計ったロンも悪いが、それを逆手に利用する方もまた論外だ。反抗心を抱くなという方が無理があるだろう。

「……彼の知識は確かなものだわ。一番初めの三つの扉を開くのでさえ、学者達は何日もかかったというのに、昨日来たばかりの少年は扉を見ただけで開けてしまった。そんな彼さえいれば、遅々として進まない解読よりも、圧倒的に早く遺跡の内部を調べることができる。そう思ったのよ。現に、彼は学者の誰もが到達していない奥の間に辿り着けた」

調査が難航している一番の理由は、扉を開けるためのルーンの解読があまり進んではいないこと。学者達は、扉一枚解読するのに、数日を必要としている。絶対的なルーンの字引のようなものが存在しないうえに、ロンから聞かされた扉の現代語訳も、面倒くせえと言いたくなるようなものだった。現代語でそう思うならば、古代言語では更に文法が複雑だったりするのだろう。解読に時間が掛かるのも無理はないと、今なら思える。

「気ままにしていた頃に比べて、今は学者の方も急ぎで解読をしているけれど、全ての扉を解読するには、数年はかかるわね。――それじゃあ遅すぎるのよ。遺跡があるのはテロンダだけではないというのに」

ギエルドは来たばかりの頃を思い出す。学者達は心が向くまま、実にのんびりと扉の解読作業を行っていた。彼ら曰く、焦っても仕方がないから、と。しかし彼らはそれでよくても、こちらは全くよくはない。そんなマイペースな彼らに苛立ちを覚えたのは、一度や二度ではなかった。

だがある日を境に突然彼らはその態度を改め、一心不乱に解読に取り掛かるようになった。そしてそれを見て満面の笑みを浮かべるエンジリカ。

彼女の笑顔を見ただけで、エンジリカが学者達に発破をかけたのだとギエルドは理解した。学者は男ばかりであったから、美人からの頼まれごとに悪い気はしないだろう。もしくはテロンダ遺跡の調査を早めに終わらせることで、彼らにとって有益になることを告げたのかもしれない。彼女は人間観察に長けている。自分に気がない男に、思わせぶりなことを言ったりすることはない。ギエルドやアジェットが言われたことがないのがその証拠だ。彼女は通用する相手にしか自身の色香を使わない。事実、ロンの言うことをきかせるためにしたのは、彼女の大事なものと判断した首飾りを握ったこと。使えるものは何でも使う。それが彼女の信条なのではとギエルドは勝手に思っている。

「それと丁度昨日、王都から連絡を受けたのよ。――国の定例会議で、次の国家予算に『古代言語（ルーン）の森』という名の、古代にあったルーンの蔵書のみが集められた図書館を再現するための費用を算出すると決まってしまったと」

「な……」

まさか遺跡でロンから聞いたばかりの昔造られたという図書館の名が出るとは思わなかった。そこはかつてルーンに関する知識が集められた、ルーンの為の図書館なのだと。

（そういやその図書館が今どうなってんのか、聞いてねえな）

ロンから聞いたのは、ロンがそこへ辿り着いてランに出会い、そして共に旅立ったという一連の流れのみ。そのまま図書館を後にしただけならば、今も世界のどこかに『古代言語（ルーン）の森』は立ち尽くしているのだろう。

「その図書館を再現するって言っても、今現在残ってる資料なんてたかがしれてるじゃないですか。そんなんで再現するって、いくらなんでも無理が……」

「当たり前よ。きっと甘い蜜を欲する蝶や蟻が、進言したのでしょうね」

言い方は品があるが、菫色の瞳には怒りの炎が燻っていた。ギエルドも知らないうちに、掌に力が篭る。

「まだ完全に可決されたわけじゃないとはいえ、ついに第一王子でも抑えきれなくなってきたのか……！」

「そうよ。それが私が遺跡発掘を急ぐ大きな理由。本格的に来期予算を決めるための会議が始まる前に、遺跡から発掘されるものが全く大したことのないものだったなら、王もがっかりして心が変わるのではないかと思ったのだけれど」

「……俺もそう思ったんですがね。命にはかえられませんでした」
　ロンに強く戻せと言われたのにも関わらず、罠の発動スイッチである短剣を手放そうとしなかった理由はそこにある。莫大な経費をかけて見つけた宝が、ルーンが刻まれているとはいえただの古い短剣だったと知れば、落胆は避けられない。そして遺跡発掘に反対する勢力は、それに便乗して有利に立つこともできるだろう。
　しかしロンの身の安全を全く考慮していなかったせいで、彼女を庇ったアジェットが負傷した。周りの状況を見ていなかった自分の失態だ。そしてアジェットの命と引き換えにそれを優先できるほど、ギエルドは冷徹になることはできなかった。
「問題ないわ。ロンの口ぶりからして、同じような罠がある部屋はまだあるはずよ。そこから一つでも持ってこられたら万々歳……と考えるべきね。負傷はともかく、遺跡の調査で騎士団から死亡者を出すわけにはいかないもの」
　やはりエンジリカも、罠のスイッチとなったルーンが刻まれた道具を持ち帰ることを希望していた。しかし、それができるかどうかはわからない。銅像の攻撃はそこまで俊敏なものではないため、躱すこと事態は可能だ。ギエルドやアジェットのように腕に覚えがある者ならば。だが、罠が発動しているときに肝心の扉が開くかどうかが不明である。その点がわからない以上、ロンを危険な目に合わせることになってしまう。ロンはともかく、彼女の保護者的立場であるレフルは絶対それを良しとしないだろう。一度彼女を危険な目に合わせてしまったのだから余計に。ロンのことになると頑固一徹になる精霊を説得するのは、ギエルドには無理だ。ロンを守ると誓ったアジェットも難色を示すに違いない。
「とりあえず、理解はしてくれたかしら。私がロンの弱みを握るような真似をしてでも協力させたかった理由が」
「ええ、納得しました。でも、それならそうと俺達にも言ってくれりゃあいいじゃないですか」
　前もってきちんと王都での事情を説明してくれれば、ギエルドもアジェットも納得しただろう。今は綺麗事を言っている場合ではないと。
　国家予算を決める会議は、まだ数ヶ月先の話だ。発破をかけられてからの学者達の進捗状況はかなり上がったが、それでもやはり遅い。扉を一つ開けるだけでも数日はかかる彼らと、その場で扉を開けてしまえるロン。後者に是が非でも協力を打診したくなるのは当たり前だ。時間が限られているなら尚更、素早い調査を求めたい。頭の固いアジェットでも納得するだろう。感情はついてはこれなくても、頭では理解するはずだ。
「ロンに、こちらの弱みを知られたくはないのよ。彼は旅人。我が国がどうなろうと、彼にとってはどうでもいいことだわ。そんな彼にこちらの要望を叶えてもらう方法は二つだけ。彼にとって利益になることを提示するか……弱みを握るか。そして私が選んだのは後者。どうしてかなんて、言わなくてもわかるわよね？」
　ギエルドは無言のまま軽く頷く。
　ロンはこちらに協力する意思は皆無といってよかった。足手纏いの面倒なんて真っ平ゴメンと言い放った言葉だけで、そのことが伺える。
　そんな状態の彼女に、こちら側がどんなに懇願してもあっさりと一蹴されるのは目に見える。ならば、彼女が取り戻そうとしていた首飾りを握り締めれてしまえば、こちらの言うことを聞かざるを得ない。それが例え相手の弱みを握るという卑怯な手段であろうとも。
「こちらが弱みを握っている以上、相手に弱みを見せるわけにはいかないわ。ロンにはテロンダ遺跡の調査を終わらせてもらわないと困るのよ」
　弱みを握っていると自覚があるならば、確かにこちらの弱みを見せるわけにはいかないだろう。そこをつつかれロンのいいように状況を持っていく可能性がある。昨夜までのロンならば、確実にそうしていただろう。
「……今なら別に言ったとしても問題ないと思いますよ」
　お互いギスギスしていたときとは違い、今はロンと打ち解けたと思っている。ギエルド自身も、自らを省みずアジェットの怪我を治してくれたロンに感謝をしているし、治してもらった本人も言わずもがな。相変わらず生意気なことを言うが、初めに感じていたトゲトゲしさはなくなっている。今は軽口の叩きあい自体を楽しんでいるように見

えた。
「そういえば大分打ち解けたみたいね。喜ばしい限りだわ。でも、私が直接ロンと関わったわけではないから、そうやすやすと口には出せないの。首飾りも返せないわ。残念ながらね」
「……」
　ギエルドは一番の目的を見透かされ、押し黙る。
　できれば首飾りを、いや魔石（リフェ）をロンに返してやりたいと思っていた。正確にいえばそれはロンのためではなく、レフルのために。
　魔石（リフェ）は精霊の魔力を抽出して可視化した魔力の塊。レフルの命そのものだ。人間でいうならば、心臓を他人に握られているのと同じ状況だろう。彼が娘のように大事に思っているロンが持っているならまだしも、昨日出合ったばかりの人間に自分の命を手にされて、いい気分でいられるわけがない。
　ロンとも打ち解けた今なら、こちらが魔石（リフェ）を握っている必要はないはず。しかし、それは甘い考えであったと思い知らされた。
「ロンの協力は必要不可欠。だからこそ、僅かでも彼が協力を放棄するきっかけを与えるわけにはいかないわ。理解してちょうだい」
「……つまり、ロンのことを信用してないわけですね」
「当然よ。君達は打ち解けたようだけど、彼は一度逃げようとしているの。だから立場上、彼に全幅の信頼を寄せるのは無理だわ」
　結局のところは、先に約束を反故にしたロンの自業自得。それが覆されることはないだろう。エンジリカが柔軟な姿勢を見せるつもりはなさそうだ。
「このことはアジェット君には黙っておきなさい。彼は隠し事が苦手だから、彼を通じてロンにばれてしまう可能性があるわ」
「……了解しました」
　最たる目的である魔石（リフェ）をロンの手に戻すことが叶わないのであれば、ここにはもう用はない。ギエルドはエンジリカに一礼し、くるりと背を向けた。
「あ、ついでに後一ついいですか？」
「なにかしら？」
　ふと頭に過ぎった疑問が沸き、ギエルドは一度振り返る。
「もし遺跡から本当に宝が発掘されたら、どうします？」
　もしもテロンダ遺跡から宝が発見されたならば、これで今までの苦労が報われる――と思うはずがない。むしろ、宝が出たことにより王やその取り巻きの発言力が強まる結果になるだろう。遺跡発掘の反対派からしたら、それは絶対に避けたいことだ。
「そんなの決まっているわ。――壊すのよ、跡形もなく。老朽化が激しかったとでも報告すれば問題ないでしょうし」
　ニコリと笑みを浮かべるエンジリカの目は、やはり笑ってはいなかった。

　今日の探索は順調だった。しかし探索は順調でも、ロンにはその後報告書の提出が待っている。昨日書いた報告書を提出した際、エンジリカにできれば扉に刻まれている問いとなるルーンも訳してくれと頼まれてしまった。ある程度の訳がはっきりすれば、他の扉を訳すときに役立つからと。はっきり言って面倒くさいことこの上ないが、ロンに拒否権はない。できるだけそれを簡単に済ませられるよう、かつ遺跡内部に通っていない場所が残らないように、進行はほぼ直進のみで行うことにした。行き止まりに当たったところで方向転換するという法則でいけば、時間はかかるがほぼ確実に全ての道を通りつつ、行き止まりに辿り着ける。

「どう？　レフル」
『残念ながら、これも罠のようです』
「そっか……」

　ロンは台座に手をついたまま、がくりと項垂れた。
　ロンは顔を上げて祭壇に安置されているモノを見遣る。ここにあるのは小さな指輪だった。リング状のところに、ビッシリとルーンが刻まれている。更に小さな宝石には何も刻まれてはいないが、くすんだ色をしていてあまり綺麗なものではない。罠用ならばつけられた宝石には何の意味もないものであるから、適当なものを見繕ったのだろうか。

「ここもはずれか。まあまだ四つ目なんだろ？　まだ小部屋はあるんだろうし、そう気を落とすなよ」

　今現在いるこの小部屋は、昨日と一昨日辿り着いた部屋を含めて四つ目。つまり今日は二つ目の部屋でもある。因みに前の小部屋で置かれていたのは木製の盾だった。材質である木材の腐敗がかなり進んでおり、触っただけでも砕けそうな代物で、レフルでなくとも一目でこれは違うと判別できた。

「順調に進んだけれど、流石にそろそろ戻らないと日が暮れてしまうだろうね」
「大体一日二箇所ってところか。まあ妥当なペースだな」

　護衛である彼ら二人を連れている以上、日を跨いでの探索はできない。以前のロンならそれを煩わしく思うだろうに、不思議なことにそんな気持ちは沸いてこなかった。
　理由はなんとなくわかっている。この二人と共にいるのが苦痛ではないと思っているから。決して口に出しはしないけれど。

「帰ったらクレープ食べたい」
「駄目だよ。昨日、そのせいで夕食を全く食べなかったじゃないか。だから今日は駄目だ」
「ちぇー」

　ロンは唇を尖らせたが、昨日クレープ屋の前で長々と説教されたことを思い出してそれ以上の反論をするのをやめる。更に夕食をあまり食べずにいたため、報告書が書き終わって清々したところをまた説教された。アジェットは説教するのが趣味なのではと勘繰りたくなる。自分の自業自得だということは棚に上げて。

「まあ一つだけわかったのは、奥の間を開く扉のルーンと設置されてる物がほぼ一致してるってことか」

　ロンが一番最初に辿り着いた奥の間に設置されていたのは鏡、次は短剣、そして盾と指輪。それぞれ開くためのルーンは『鏡（ミルロル）』に『刺す（スタブ）』に『守る（デフェンド）』に『指輪（リング）』だ。最初と今開けた扉はそのままだが、中二つは設置されているものが連想できる単語になっている。

　短剣は細長いもので、斬るというよりは刺すという使い方をするような代物だった。そして盾は身を守るために存在する。この法則は、決して偶然などではないだろう。

「しかし、そんな法則性があるということは、何か深い意味があるのだろうか……？」
「あくまで推測でしかないけど、多分罠と連動してるんじゃないかな。ここらのゴーレムを動かすんだから、その間は扉を開けなくすることぐらいはできそうだし」
「となると……この指輪も持って帰るわけにはいかねえか……」
『ええ。持ち上げた時点でここにあるゴーレム達が襲い掛かってくるでしょう。昨日と同じように』
「まあ持ち帰ったところで、こんなの欲しがるようなヤツはいないだろうけどね」

　ルーンがびっしりと刻まれた指輪など、普通の神経をした女性ならば気味悪がって指に嵌めようなどと思うまい。はっきり言って、ゴミも同然だ。

「それじゃあ帰ろう。報告書書いて風呂入って寝るー」
「今日はちゃんと夕食を食べるんだよ？　クレープは買わないからね」
「わかってるっての！　しつっこいなー」

　念入りに釘を刺してくるアジェットに向かって目を細める。こちらのことを心配してくれているのだろうが、流石に口煩い。過保護な保護者がもう一人増え、ロンは心の中で溜め息をついた。

「ギエルド、戻るよ。――ギエルド？」
「ん？　あ、ワリ。ぼーっとしてた」

　アジェットが促すと、ギエルドはじっと見ていた指輪から顔を逸らした。回りの声が聞こえなくなるほど魅入るような代物とは思えず、ロンは首を傾げる。

「ギエルド、何でそんな一心に指輪見つめてんの？　欲しいってか？」
「欲しいっつーか……まあ、欲しいっちゃ欲しい、のか？」
「なんだそれ。はっきりしないね」

　言いたいことは遠慮なくずけずけ言う性質であろうギエルドが言い淀むなど珍しい。アジェットもロンと同じことを思ったのか、不思議そうな顔をしている。

『この指輪を持ち出したらどうなるか、わからないとは言わせませんよ』
「わかってるよ。本気で持ち出そうなんて思っちゃいねえって」

　レフルがじとりと胡乱な眼差しをギエルドに向ける。そういえば昨日、ギエルドはロンが戻せと言ったにも関わらず、短剣を手放そうとしなかった。大した価値はないと言ったにも関わらず、むしろだからこそ意味があると言っていた。それと関係あるのだろうか。

「鏡でもよけりゃ、一つだけなら持ち出せるヤツがあるよ」
「！　本当か!?」
「でも何でそんなもんわざわざ欲しがるんだよ。欲しけりゃまず、その理由を言ってほしいもんだね」

　あまりの食いつきのよさに、当然のごとく疑問が湧き上がる。こんな大した価値のないものを何故欲しがるのか。

　高値で売れるわけでもなく、またギエルドが金に困っているようにも見えない。

「わたしにも説明してほしいな。君が理由もなく、危険な物を持ち出したいと思うはずがない」
「……わーったよ」

　アジェットからも言われ、ギエルドはボリボリと頭を掻く。そして顎に手を置いて逡巡した後、しっかりした口調で語り始める。

「遺跡から見つかった『宝』が大した価値のないものなら、遺跡発掘を推し進める奴らの出端を挫けると思ったんだよ。大掛かりな費用をかけて見つかったのがしょぼいモンなら、反対派が優勢に出られる。だから何としても大した価値のない宝、かつ遺跡から確実に見つかったと言えるルーンの彫られた痕がある物を持ち帰りたい。これが理由だ」
「そうか……確かにそれなら、少しは陛下の意欲も削げるかもしれないね」
『成る程……一理あります。むしろあなた方にとってはそれが何よりの『宝』となるわけですね』
「だからあのとき持って帰ろうとしてたわけか」

　ロンの中で、遺跡の中で見つかる宝は売る以外に用途がなかったため、逆に王を萎えさせるために欲しがるという発想すらなかった。

「ロン、君が言った持って帰ることができる鏡とは、どんなものなんだい？」
「ここに置いてある指輪とかと同じようなヤツだよ。古臭い鏡の鉄の縁に、ルーンがびっしり刻まれてる」
「それはなんで持ち出しても平気なんだ？」
「魔石（リフェ）で動力となる魔力を吸い取ったからね」
「魔石（リフェ）ってヤツはそんなこともできんのか」
『それは本来、精霊の力です。今は魔石（リフェ）がわたくしの本体ですから』

　精霊が人間と契約を交わす際に対価として渡すものは、契約者の魔力。精霊は契約者との契約内容にそって、人間から魔力を吸収しているのだ。その応用で、物質が帯びている魔力を精霊は自らの糧にすることができる。ただし今のレフルは魔石（リフェ）に大半の魔力を持っていかれているため、その力を使うのは手元に魔石（リフェ）があるときのみと限られていた。

「ロン……やはりワローラル殿に事情を説明した方がいいんじゃないか？　もしかしたら魔石（リフェ）も返してもらえるかもしれない」
「絶対に嫌だね。それに、言ったところで返してくれるとは思えないな。僕一回逃げてるからね。自業自得って言ったら元も子もないけど」

　エンジリカはロンを全く信用していないだろう。持ちかけた取り引きを、こちらは一度蹴ったようなものだ。そんな相手を信用するわけがない。むしろ、ロンがエンジリカだったら絶対に信用なんてしない。
　それでも彼女はロンに遺跡の調査をさせたかった。手っ取り早く自分の言うことを聞かせるならば、弱みを握るのが一番だろう。脱走に失敗し、弱みを見せてしまった時点でロンはエンジリカに負けたも同然なのだ。

「――なあロン。お前、今でも手元に魔石（リフェ）があったら、俺達から逃げるか？」
「……どうしたよ急に」

　いつも茶化してくる雰囲気とは真逆の、神妙な空気を纏ったギエルドが闇色の瞳を真っ直ぐロンに向けている。

「お前が本当に逃げないと約束してくれるなら、ワローラル女史に魔石（リフェ）を返してもらうよう進言する。逃げるつもりがないヤツの大事なモンを握ってるのは、こっちも気持ちのいいもんじゃねえんだよ」
「そうだね。ロンが逃げないのなら、首飾りをこちらが預かる意味はない。わたしからも、ワローラル殿に掛け合ってみよう」

　二人の目は真剣だった。ギエルドにさえからかう色がない。本気でロンに魔石（リフェ）を返すことを考えている。一度は逃げだそうとしたロンを、彼らは心から信じようとしている。

「ほんっとにお人よしだな、お前ら。僕がその厚意を利用するかもしれないとか、思わないわけ？」
「わたしはロンを信じているよ。君はそんなことをするような子じゃない」
「――俺は無条件じゃ無理だ。だから俺達の目ぇ見て逃げないって誓ってくれ。そうしてくれれば、ワローラル女史から何としてでも魔石（リフェ）を取り返してくる」
『確かに人が良過ぎますね、お二人とも』

　レフルがやれやれと嘆息した。ロンも心の中で思い切り息を吐いた後、くるりと二人に背を向けて片手をひらひらと動かした。

「悪いけど無理。誓えない」
「――やっぱり一人で探索した方が効率がいいから、か？」
「それもある。でも、大きな理由はお前達に誓ったとしても意味がないからだよ」

　ロンは振り返りながら言葉を繋いでいく。

「魔石（リフェ）を握ってるのはエンジリカ。お前達じゃない。確実に魔石（リフェ）を取り戻せるわけでもないのに、そんなこと誓ったって意味ないだろ？　とてもじゃないけど、あの女がほいほい返してくれるとは思えないからね」

　エンジリカからしたら、魔石（リフェ）はロンに言うことを聞かせるための、唯一の道具。ロンの協力を必要としている彼女が、易々と応じてくれるとは考え難い。たとえロンが二人に逃げないと誓ったところで、エンジリカが魔石（リフェ）を返してくれなければ何の意味もないのだ。

「確かに絶対とは約束できないけど、できる限り説得を――」
「多分、それも無駄に終わると思う。やってみなきゃわからないとかでなくて、もっと根本的な問題。あの女はお前らの上司で、上に立つ分責任がある。極僅かでも僕が逃げるかもしれない可能性があるのなら、きっと許してはくれないだろうね。――同じ立場だったら僕だって返さないよ。二人も自分がエンジリカの立場だったらどうかって考えてみればわかると思う」

　部下を纏める上に立つ人物は、特に強い責任能力を要求される。部下の失態は直属の上司の失態であり、自分は何も悪くなくとも、咎を着せられることだってある。
　不法侵入したロンを遺跡の手伝いをさせるという危険な綱渡りをしたにも関わらず、部下二人の情熱に負けてロンに首飾りを返したら逃げられたとなったら、目も当てられない。だからこそ、どのようなことがあってもエンジリカがロンに魔石（リフェ）を返すことはないだろう。遺跡の探索が全て終わるその日まで。

「……たく、ワローラル女史と似たようなこと言いやがって……」

　ギエルドが顔を歪めながらボソリと呟いた。しかし何と言ったのかロンには上手く聞き取れない。

「それに探索が終わったら、初めの約束通り荷物と一緒に返してくれるだろ。いくら先にこっちが罪を犯したからって、向こうに魔石（リフェ）を所有する権利はないし。僕以外が持ってても、何の意味もないしね」
『そうですね。今の人間に魔石（リフェ）をどうこうすることはできません。使うことはもちろん、壊すことも。叩きつければ割れるということもありませんし。ロン様以外の方の手にあることは気分のいいことではありませんが、大した問題ではありませんね』

　今無理に取り返さずとも、探索が終われば確実に返却される。流石に取り上げたままということはない。エンジリカにとって魔石（リフェ）はただの石ころ同然であり、使い道などないのだからこのまま所持していたいとも思わないだろう。

「こうなった今となったら、エンジリカには魔石（リフェ）をただの石だって思っててもらってた方が都合がいいんだ。確実に返してもらうためには。――そういうわけだから、魔石（リフェ）を取り戻そうとしてくれなくていいよ。むしろ、それを言って魔石（リフェ）に変な興味を持たれたら困る」

　もし魔石（リフェ）で無機物から魔力を吸いだせることを知ったならば、当然吸収できるなら放出することも出来ると考えるだろう。知らないとシラを切っても彼女はきっと確信を持って、ことあるごとに探りを入れてくるに違いない。そうなると魔石（リフェ）だけは返さないよう、巧まれる可能性が出てくる。それだけは何としてでも阻止したい。

「……悪かったな、余計なことを言い出して」
「確かに早計だったね……すまない」
「……別に」

　ロンは再び彼らに背を向け、扉の方へと歩む。

「その……なんだ。まあお前らが僕やレフルの為に言ってくれたってことは……わかる。だから、一応、ありがとう」

　彼らがこんなことを言い出したのは、エンジリカに握られたままである魔石（リフェ）のことを気にかけたからだろう。考え方に甘さはあるが、そのことに悪い気はしなかった。しかし礼を言うことに気恥ずかしさが沸いてきたため、彼らから顔を逸らす為に背を向けた。ずんずんと扉の前まで進んで呪言を唱え、扉を開く。

「ほ、ほら、行くぞ！　僕には帰ってからもやらないといけないことがあるんだから！」

　少し声が上擦りながらも、ロンは二人に戻ることを促した。

　重低音と共に聞こえるコツコツという甲高い足音に紛れ、後ろから何やら声が聞こえるが他の音が大きくてよくは聞こえない。潜り抜けて扉が完全に閉じて静寂が戻った後、漸くそれが彼らが笑いを堪えるために漏らした声だということがわかった。勢いよく振り向くと、アジェットとギエルドは肩を震わせて、必死に笑うのを堪えているではないか。

「何笑ってんだお前ら……！」

　今までのやり取りで笑う要素なんてありはしない。ならば何故二人が笑っているのかと考えるなら、ロンの行動に対してと考えるのが普通だ。笑わせる意図などないのに行動を笑われて、気分がいいわけがない。

「ご、ごめん、馬鹿にしてるわけじゃないんだ。ただ、ロンが照れてるんだなぁって思ったら自然と笑いが込み上げてきて」
「大分可愛げが出てきたんじゃねえか。なあ」

　睨み付けるとアジェットは謝ってきたが、それでもやはり肩が震えている。ギエルドは最早遠慮どころか笑っていることを隠そうともせず、ニヤニヤとした表情をロンに向けていた。

「そんなに嬉しかったかー。そうかそうか」
「――っ！　うっさいうっさい！　黙れ！」

　ロンは羞恥でカッと顔が熱くなるのを感じた。ダダっとギエルドの前まで駆け戻り、ニヤニヤ笑いを止めないギエルドの腹をボカスカと殴りつけるために拳を握る。しかし、ロンの行動は見透かされていたのか、ひらりとあっさりと躱されてしまった。

「テレんなテレんな。お前が嬉しかったってことはよーっく伝わったからよ」
「だから黙れって言ってんだろ！」

　頭に血が上った状態の攻撃は、単調で避けやすい。そんな基本的なことすら頭からすっかり抜け落ちた状態であるロンは、暫くギエルドと追いかけっこを続けるはめになる。ギエルドは逃げ難いだろうにわざわざロンの方を向いたま

ま、後ろ足でロンの攻撃を避けている。その余裕っぷりが気に入らず、むかむかと湧き上がる怒りは増すばかりだった。

「ギ、ギエルド、流石にからかいすぎだよ。ロンがかわいそうだ」

　見かねたアジェットが止めに入ろうとするが、それよりも、ロンの堪忍袋の緒が切れる方が早かった。

「暫　く（フォルアウィレ）――」
「げ」

　ロンの口から紡がれはじめるルーンに、ギエルドが顔色を変えた。ロンは紫紺色の瞳をつりあげ、ギラリと光らせながらギエルドを睨みつける。
　ギエルドが黙らないなら、強制的に黙らせてやればいい。

「ロ、ロン、ストッ――」
「暫く黙ってろ（ベ・シレントフォルアウィレ）ギエルド！」

　アジェットがルーンを紡ぐロンを止めようとするが、ロンが完全に呪言として言い切る方が早かった。アジェットが遅かった、と顔を強張らせるのと同時に、ギエルドが腕で顔を覆う。
　騒がしかった遺跡内がシンと静まり返った。顔の前で腕を交差させたギエルドは、訝しげに瞳を細めた後、そっと腕を元に戻す。

「ん？　何も変化ねえな」
「え？　本当？」
「！」

　ギエルドが両の手を交互に見つめた後、軽くひらひらと振る。アジェットはその様子にほっと安堵しているようだった。

（本当にルーンがかかってない……今はあのときみたいに耳栓をしてるわけじゃないのに、何で……？）

　ロンがかけようとしたのは、以前アジェットにかけた声そのものを封じるもの。なのにギエルドは何事もなかったかのように、普通にしゃべっている。

（もしかしてこいつ……）

　ギエルドにルーンがかからなかった理由に、一つだけ心当たりがある。というより、それしかない。興奮していた頭はすっかり冷め、ロンは視線を下に落とした。

『皆様、じゃれるのはそのくらいにして外へ向かいましょう。完全に日が暮れてしまいます。――黒髪の騎士についての推測はやめておきましょう。お気になさるかもしれませんが、ロン様に害を成さない存在ということに変わりはありません。恐らく彼らにも何かしら事情があるのでしょう』

　レフルが音もなくロンの肩の上にやってくると、言葉の途中でロンにだけ聞こえるように声量を落とした。ロンは逡巡の後、コクリと首を俯かせることでそれに頷く。

「ギエルドに何もおきてないってことは、もしかしてルーンを失敗したの？」
「……そうなるね」
「しっかしロンでもルーンを失敗することってあるんだな。猿も木から落ちるってヤツか」
「誰が猿だボケ」
「言葉の綾だっつーの。――悪かったな、からかって」
「……別に」

　ロンはふいと彼らから顔を背け、スタスタと来た道を戻る。

　先ほどのルーンは、決して失敗などしていない。だが、理由を説明するとなると、必然的にギエルドにあることを問い詰めることになってしまう。レフルの言うとおり、そのことでギエルドがロンに敵意を向けるようになるとは思えないため、余計なことは聞かず自分の胸にしまっておくのがいい。

（ギエルドにはギエルドの事情ってヤツがある……それはわかってるけど、なんかスッキリしない）

　ロンとて、人が秘めていることを根掘り葉掘り聞くような無作法なことはしたくはないし、彼らの口から語られない以上、余計なことをつつくつもりもない。
　しかし頭ではわかっていても、納得できない自分がいた。納得がいかないのは少し違うかもしれない。胸がどこかむかむかし、何かがつっかえているような不快な感覚。

（僕はあいつらに隠してることなんて何もないのに……あいつは、あいつらは僕に隠し事してるってわけね。……何かムカツク）

　アジェットとギエルドは幼い頃からの付き合いと聞いた。ならばこのことをアジェットが知らないわけがない。そこまで考えて、ふと自分はそれが不満なのだと気づいた。ロンは昨日語ったことが全てであり、アジェットとギエルドに対して隠し事は全てなくなった。なのに二人はロンに何かを隠している。そのことを不公平に感じているのだろう。

「……悪かったっての。クレープ驕ってやるから、機嫌直せって。な」

　ギエルドは俯いたまま無言で歩みを進めるロンを、自分がからかったせいで機嫌が悪いと勘違いしたらしい。ロンの隣に連なり、手を広げてポンポンと頭を軽く撫でられる。

「ギエルド、クレープは駄目だ。ロンが夕食を食べなくなってしまう」
「んー、じゃあ他のスイーツを……」
「それも駄目だ。ロンは食が細いから、間食自体、させるのはよくない」

　食べ物でつろうとしたギエルドに返事をするより先に、アジェットが真面目な顔をしてそれに反対する。ジトリと細

めになっていくアジェットに、ギエルドは次第に押され始めた。

「お前、ほんと頭かってぇな……」
「バランスのとれた食事を摂るのは当たり前のことだろう？　偶にならともかく、毎日のように甘いものばかり食べ続けさせてはだめだ」

　ロンは不毛なやり取りを続ける二人に聞こえないよう、心の中で大きく嘆息した。さっきまで胸中に渦まいていた彼らに対する不満が、溜め息と共に吐き出されたかのような感覚をえる。

（アホらし……何で僕がこいつらのことで不機嫌にならないといけないんだ）

　アジェットとギエルドの言い争いという名の不毛な喧嘩はまだ続いている。そのせいで歩みが完全に止まってしまっていた。呆れた眼差しで彼らを見上げると、彼らに抱いていた不満なんてどうでもいいことのように思える。
　隠し事が何だ。誰しも人には言えないことの一つや二つ、抱えているもの。考えてみればそんなことはすぐにわかることなのに、どうしてうだうだと考えていたのだろう。

「よし、ならこの遺跡の探索が全部終わったら、祝いも兼ねてっつーのはどうだ。これなら文句ねえだろ」
「労う意味も込めて……か。まあそれなら……」
「よし決まりだな」

　漸く話しが纏まったらしく、ギエルドが嬉しそうにグッと拳を握った。どうみてもロンに驕ることに託け、自身が甘い物にありつこうとしている。

「――それなら、ケーキっていうの食べてみたいな。生クリームと甘い果物いっぱいの」
「いいなそれ。よし、暇なときにいい店を探しておこう」

　ギエルドのみえみえの魂胆に、ロンはあえて乗ることにした。甘味と無縁だった以前とは違い、今のロンは甘味のおいしさを身を持って知っている。クレープがあんなに美味しいのならば、ケーキと呼ばれる高級品のスイーツは絶品に違いない。ならば、ここでギエルドの揚げ足をとるよりも、ケーキを食べられる方向へ持っていく方がいいに決まっている。アジェットの許可を得たなら尚更だ。

（ケーキ……円形のスポンジに生クリームや果物でコーティングしたもの。きっと美味しいんだろうな……）

　ロンはうっとりとケーキへ思いをはせる。ギエルド達に抱いていた鬱屈した感情は、キレイさっぱり流されていた。

　遺跡の調査が今までにないほど順調に進んでいる。それは彼女が喜ぶべきことなのに、自分は素直に喜ぶことができなかった。

「えっとこの訳がこうだから、ここは――」
「導、にする？　いや導として、か。ここからここまで繋げると、『旅人が夜道に導として』になるな」
「するとこっちは見る、じゃなくて見定める、か。ん？　つまり、この扉を開くルーンは『北極星（ポレスタル）』なんじゃないか？」
「いや、まだ続きがある……がある方角は？　……『北（ノルトフ）』？」

　一人の学者が『北（ノルトフ）』と呟いた刹那、扉が鈍い音をたてて開き始めた。ワッと短い喝采があがる。

「よっし！　また一つ開いたぞ！」
「つまりこの扉のルーンは『旅人が導として見定めている星がある方角は』か。……またまたまだるっこしい内容だなぁ……」
「ほんとになぁ。俺達が自力で解いたヤツは要点のみを絞っただけだったから、まさかこんな回りくどい文章になってるなんて思わなかったぜ」
「あの少年には感謝しないとな。彼のおかげで、こうして解読が進んだも同然だし」
「違いない」

　ハハハと朗らかな笑い声に、ギリ、と自分は悔しさのあまり歯を食いしばった。
　こうして解読が軌道に乗り始めたのは他でもない、彼女が新たに協力を要請した少年が、中の扉を開くルーンと、その扉に刻まれている文章を完璧に翻訳し、纏めたから。
　単語だけなら自分達でもそれなりにわかる範囲はあるが、接続詞に連なる単語はどうしても難しくなる。そして彼が翻訳した文章を読んでわかったことだが、扉に刻まれているルーンは遠まわしな言い方をしているせいで、文法が複雑化しているのだ。それが解読が難航していた最たる理由だろう。
　そして彼が翻訳したために、自分達でまとめたルーンの訳の一覧が、かなり充実したものとなった。今まで一つの扉を開けるのに数日は要していたのに、今では一日で最低でも二つか三つは開けられる。扉の前で四苦八苦していたのが、まるで嘘のように。

「このペースなら、一月もせずに調査を終えることができるんじゃないか？」
「だな。初めは数年はかかるって思ってたのに……あの少年は本当にすごいな。俺達のかなり上をいっている」

　そう、こうまで状況が好転したのは、紛れもなくロンという名の少年の功績だ。彼は護衛二人だけを連れ、好き勝手に遺跡内部を探索している。そして己が通った道にある扉を開くルーンの翻訳を、彼女に提出しているのだ。提出された書類は、こうして自分達の解読が進んでいることから、嘘偽りが一切ないことが証明されている。

（このままでは……私への彼女の信頼が……！）

　それに比べて自分はどうだろうか。彼女から頼まれた首飾りの解明は、全く進んでいない。『光り輝いている者（レフルゲンセル）』とルーンが刻まれている以上に、全くといっていいほど情報がないのだ。なけなしの資料をひっくり

返したが、どこにも『光り輝いている者（レフルゲンセル）』についての記述は見つからない。そのせいで、彼女には未だいい報告ができないでいた。
　頼まれてから全く進展のない自分と、調査に関わった日から確実に成果を上げている少年。どちらが彼女の役に立っているかなんて、明白だった。そのせいで彼女に出会うと「首飾りはやはりロンに調べてもらう」と言い出されるのではないかと、不安に陥るようになってしまい、ろくに顔をあわせていない。

「おい、さっきから黙っているけど、どうかしたのか？　次の扉の解読に行くぞー？」
「！　あ、ああ。今行く」

　現在グループを組んでいる仲間達が、一度閉まった扉をもう一度開いた。響く重低音に少し前までは誇らしげになったものだが、これがあの少年のもたらした成果だと思うと、気分はよくなるどころか悪くなる一方だ。唇を噛み、手に自然と力が篭る。

「確かロンだっけか、あの少年。彼がすごいのはよくわかったんだけど、直接話せないのがもどかしいよなぁ」
「ああ。やっぱりどうしてもわからない部分って出てくるし、そこを彼に直接聞けないのは、ちょっと不便だよな。あの女隊長さんを通さないといけないのは、正直面倒くさい」
「俺はそれを抜きにしても、彼に一回ルーンについての見解を直接聞いてみたいぜ。あー、あの女騎士さん、講義組んでくれねえかなぁ」
「あ、それなら俺も聞いてみたい」
「でも彼、学者嫌いなんじゃなかったっけ。そう上手くいくかな」

　何より彼は、ルーンの知識があることをいいことに、自分達学者との橋渡しを彼女に一任している。彼は学者嫌いだからと説明を受けたが、自分には彼女と話す機会を増やすための言い訳としか思えなかった。

（遺跡の調査では、どうあがいても彼より先にたつことなんてできない……なら）

　そっと内ポケットに収まっている宝石へ手を伸ばす。彼女からの大事な預かり物を失くすわけにはいかず、常に持ち歩いていた。
　ルーンの知識において、ロンという少年と自分では天と地ほどの差がある。悔しいことだが、これは認めざるをえない。ならば、彼とは別の舞台で彼女の信頼を得るべきであろう。

「――すまない、調べたいことがあるから私は先に戻る！」
「え？　あ、おい！」

　自分が彼女の信頼を勝ち得る為の方法、それは彼女から預けられた宝石の謎を解明すること。資料が少ないならば何に使うものなのか幾つか候補をあげ、実験を繰り返す必要がある。そのためには、遺跡の調査をしている時間すら惜しかった。
　今は前と比べて進捗状況は著しくよくなっている。ならば、自分一人が抜けたところで大して状況に変化はないだろう。
　踵を返して背中を向けた扉が完全に閉じた。その奥では手を伸ばしたままの仲間がポカンと立ち尽くしていた。

「何だあいつ……あいつが調査の効率化を計ろうって言い出したくせに、自分は単独行動すんのか」
「何か興味が沸くことでもあったんじゃないか？　調べたくていてもたってもいられない！　って気持ち、わかるからなぁ。俺らだって似たようなものなんだから、責められないよ」
「だなぁ。まあ、あいつがいなくても俺達だけで何とかなるだろうさ。これもあの少年のおかげだな」

　遺跡の奥に残された学者達の切り替えは早く、次の扉を見つける頃には一人人数が足りないことを気にする素振りすらなかった。

「書けたー！」
『お疲れ様です、ロン様』

　今日の探索した分を纏めた紙を書き上げたロンは、両手をうんと高く掲げて伸ばす。そのあと肩をぐるぐると回し、凝りをほぐした。

『この調子ですと、あと二・三日もあれば踏破できそうですね』
「だね。……目当てのものは見つかってないけど」

　調査を開始してから数日が過ぎた。探索は順調に進み、今ではまだ探索していない場所の方が少ないだろう。
　しかし目当てのものは発見されていない。行き止まりになっている広間にも幾つか辿り着いたが、その全てが罠だった。当然、魔石（リフェ）が手元にない以上、魔力を吸い取ることはできないためそのまま放置して戻っている。

『彼らからしたら、あの鏡が唯一最大の成果でしょうか』

　レフルはちらりと、テーブルに置かれた古ぼけた鏡を見遣る。鉄でできた縁にびっしりとルーンが刻まれた鏡は、本日遺跡から持ち出したもの。丁度近辺を通ったため、ルートを一部変更して取りに行ったのだ。もう魔力は吸い取ったのだからと、ロンはひょいと軽い調子で鏡を持ち上げ、ギエルドに渡した。後はエンジリカに渡して終わりかと思いきや、今日は彼女は何やら忙しいらしく姿がなく、明日の朝報告書のみ提出することになっている。

（彼女は騎士団を纏めているリーダーですから、まあ忙しいでしょうね）

　だから鏡はロンに与えられた部屋の、机の上に放置させられていた。しっかりとした灯りの元にある鏡は、遺跡の中で見たときよりも古びた印象が強い。肝心の表面はくすんでいて、はっきりと何かを映すことがなく、鏡本来の機能すら失われつつあった。こんな鏡を欲しがる人間なんていないだろう。宝を求めて止まない王を、がっかりさせるには充分な品だ。

「にしても……あの遺跡はほんとに何を隠してるんだろう。ちっとも想像つかないや」
『そうですね。あれだけ凝った造りをしていて、全て外れということはありえませんから、何かしら隠されているとは思いますが』

　道化でこの遺跡を造るには、構造が凝りすぎている。問題は、そうまでして何を隠したかったのかが、全く見えてこないという点。大体の遺跡は、侵入者避けの罠などからも連想できるものが隠されていたりする場合が多い。
　なのに、この遺跡の罠は、罠こそ皆同じものであるが、設置されているものはてんでバラバラで共通しているものが何もなかった。それでいて壁や天井が崩れる気配がないのだから、昔の技術には恐れ入るばかりだ。

「僕達が探しているものは、全てのルーンを解くことができる特殊な道具。それを闇雲に人の手に渡らないようにするためにこんな大掛かりなものを造った……一応辻褄は合うけど、正直なところ、もっと別のものが隠されているような

気がしてならないんだよね……」
『それは……』

　ロンは座っている椅子の背凭れに身体を預けながら、少し虚ろな表情で上を仰ぎ見ている。

「基本的に大掛かりな遺跡に隠されているものは、大体が危険なものばかりだ。火を噴く剣とか、大抵のものを貫くことができる槍だとか――太古の昔、戦をするために編み出された武器とかを、人の手に渡らないようにするために。実際ランと一緒に潜った遺跡の中に、一般的に魔剣だとか呼ばれそうな剣が隠されてたこと、結構あったし」
『そうですね。――かつて人間達が、数の限られた魔石（リフェ）を奪うために編み出された武具の数々。その武具のおかげで戦い事態はそう永くは続かなかったようですが、戦いが終われば、それらの武具はただの危険なもの。遺跡は当時、絶好の隠し場所だったでしょうね』

　元々は集落として造られた遺跡から、宝物が発掘されているのはそのためだ。危険なものや大事なものを人目につかない場所へ安置するには、正にうってつけだっただろう。侵入者避けのトラップは、大抵が後からつけられたものといっていい。

『罠と遺跡のルーンを繋ぐためにも、遺跡全体や罠のルーンにそれぞれ『意味』を持たせる必要がありますが……ここの遺跡にはそれが感じられませんね』

　罠から隠されているものが連想できるようになっているのはそのためである。ルーンは『言霊』と呼ばれる力に類似しており、言の葉に紡ぐのではなく物質に刻む場合は『意味』を持たせることで力を発揮する。そうすることにより、永い時を経た現在でもトラップは発動し、侵入者を撃退するのだ。

「あくまで推測に過ぎないけど、テロンダ遺跡は罠を後付けしたんじゃなくて、一緒に造られたんじゃないかな。それだったら、建物自体に老朽を防ぐルーンをかけておけば罠も永続的に発動するようになるし。流石に罠を発動させるための道具の老朽化は防ぎようがないけど、それさえなければ、普通の人間はあの小部屋で死ぬまで銅像と戦わされるはめになる」
『問題は、こんな大掛かりなものを一から造ってまで、何を隠したかったのか、ですね』

　ロンはコクリと頷いた。自分達はもう、この遺跡に望んでいるモノが眠っているという期待は抱いていない。建物から罠まで一から造られたであろうテロンダ遺跡が建設されたのは、早く見積もっても、魔石（リフェ）を巡っての奪い合いが勃発するより前の時代だ。ルーンを解除する道具が生み出された時代とは一致しない。
　何より、人間達が精霊を魔石（リフェ）にしようと思ったのは、その頃から遺跡を造るような大掛かりなルーンの存在が失われ始めたからだ。そのことを危惧し始めた人間達が、新たに力を得るために編み出したのが、精霊の魔石（リフェ）化である。

　ルーンの衰退は、何もここ数百年の出来事ではない。数千年も前から既に始まっていたのだ。ルーンは知識がなければ発動しない、習得が困難を極める言語。最盛期の時代とて、習得を放棄した者は少なからずいるだろう。そして放棄する者が増え続ければ、廃れる以外に道はない。

「……こんなこと今考えてても仕方ない、か。危険な物が見つかったら見つかったらで、あいつらに危険性を説明すれ

ば、無闇に触ったりとか持ち出したりとかしないだろうし」
『そうですね。今は遺跡の調査に集中しましょう。彼女から魔石（リフェ）を返してもらわないといけませんし』

　現在自分達の中での一番の優先事項は、大人しく遺跡の調査を速やかに終わらせ、魔石（リフェ）を返してもらうことに変わっている。もしこれから見つかる宝物が何かしらの危険を孕んでいるとするならば、エンジリカも納得の上、廃棄するだろう。魔石（リフェ）を握られている以上、彼女に好意を抱くことはできないが、その動悸は民を不安がらせている遺跡発掘に対する不満からきているもの。

　彼女自身に立身出世の願望がある様子は見られないため、危険な宝物を利用しようとは思わないだろう。

「この話はこのぐらいにしておくとして……ちょっと外の空気でも吸ってこようかな。口煩いお守りがいないうちに」

　現在ロンが使っている部屋にいるのは、ロンとレフルのみ。ギエルドとアジェットの姿はない。ロンがまだ報告書を書いているときはこの部屋にいて、彼らもまた机に向かって手紙を書いていた。それは家族に向けた定期的に出している手紙らしく、先に書き終えてしまった二人は早速出すべく部屋を後にしている。ロンが報告書を書き終えたのは、彼らが出て行ってすぐのことだった。

「手紙出すだけなら、あいつらもすぐ戻ってくるだろうし。戻ってくる前にいこっか」
『はい、ロン様。お供します』

　ロンは手早く用済みになった紙切れに散歩してくると書き残し、椅子から立ち上がると軽快な足取りで部屋を出た。部屋に戻ってくるであろうアジェットとギエルドは、書置きだけが残された部屋を見て、きっと慌てて探しに走るだろう。
　それを見越して、わざと彼らが出て行ったすぐ後に書き終えるよう、ペースを調整していたに違いない。事実、彼らは報告書に集中しているロンを見て、これならばまだ終わるのにかかりそうと判断したため、ロンを一人残して部屋を出たのだ。戻ってくるまで部屋で大人しくしているだろうと。
　アジェットとギエルド、二人の青年とは打ち解けたロンだが、彼ら以外の騎士の覚えは未だによくはない。前にロン一人で宿舎の中をぶらぶら歩いていたとき、角のところである騎士とぶつかったことがある。ロンはごめんと簡単な謝罪の言葉を口にしたのだが、ぶつかった相手はそれで満足しなかったのか、元々細い目を糸のように細め、礼儀がなっていない！　と突然怒鳴り散らされた。
　よくよくその騎士の顔を見れば、捕らえられたロンを尋問していた男だった。ロンが先にそれに気づき、ゲ、と声を漏らす。それを耳ざとく聞き逃さなかった騎士はそれを理由に、更に声を荒げた。
　その後暫く、礼儀がどうの態度が生意気だの怒鳴られ続け、そして最終的に話の内容は全く別のもに変わっていった。

「ワローラル様からお目こぼしいただいたからと調子に乗るなよ！　貴様はただその知識を買われたに過ぎん！　彼女から特別な目で見てもらっているなど、思いあがった考えなど持つだけ無駄だ！」

　つまりは、この男はロンがエンジリカに頼られているのが気に入らないのだ。ロンは女性だが、ギエルド以外には十台前半の少年と思われて疑われていない。一日の大半を共に過ごしているアジェットすら、ロンが本当は少年ではなく少女だということに気づいていないのだ。だから付き合いが全くない第三者は、更にロンを少女だと気づける者はいないだろう。

　彼からしたら、想いを寄せる女性がいくら少年とはいえ、自分以外の男を頼っているという事実が癪に障るのだろう。ロンはほぼ毎日のようにエンジリカと顔をあわせ、その日の簡単な段取りや報告をしている。当然そこに艶っぽさは微塵もなく、むしろお互い腹の探り合いをして部屋の気温を下げているが、その場にいるアジェットとギエルド以外がそんなことを知るわけもない。中から漏れ聞こえる声だけでは、そんなことまで知る術はないのだ。
　エンジリカに惚れている男が多数いる以上、ロンの存在を憎らしく思う者も多いだろう。その場はロンを探していたアジェットとギエルドが上手く騎士の男を追い払ったが、個人行動をとればまた、嫉妬からくる難癖をつける輩に出くわす可能性が高い。
　なのに何故レフルはロンに個人行動を咎めないのかと言えば、この一件以降、アジェットがロンを守るためと言ってできる範囲の個人行動を禁止したからだ。どこへ行くにも、必ずアジェットかギエルド、どちらかがついてくる。
　ロンのことを心配しているのはわかるが、四六時中ひっついてこられたら、誰だって息が詰まるもの。
　レフルもまた、ロンが無闇に絡まれることは望んでいないが、ロン達以外の視界に映らないレフルがロンより先を行き、曲がり角などで誰もいないことを確認していけば問題ないのだ。ロンのためならば、そのくらいの手間は惜しまない。過保護上等である。

『こちらから来るのは女性だけです！　大丈夫ですよロン様！』
「……ほんとに過保護だなぁ、レフル」
『わたくしはロン様の保護者ですから。当然です』

　腰に手をあて、レフルは胸を張る。ロンが肩をがくりと落として項垂れていることなど気にも留めない。ロンを守るのは、ランと別れてからレフルの使命なのだから。

「あら、こんばんは」
「こんばんは」
「こんばんはー」

　角からやってきたのは、アジェットやギエルドと同じ騎士団のジャケットに、ズボンではなくタイトスカートを履いた女性騎士の二人連れだった。ロンは棒読みにならない程度に、感情の込められた声音で挨拶をする。

「もしかして君、ロン君よね。こんな時間にどうしたの？」
「護衛についてるはずのアジェット君やギエルド君は一緒じゃないの？」

　二人の女性はロンの護衛役である二人の騎士の姿を探すべく、回りを見回している。少し期待の篭った眼差しから、どちらがどちらにかはわからないが、あの二人に気があるようだ。

「ちょっと散歩にね。最近あの美人なリーダーさんに惚れてる騎士からやっかみ受けたせいで、一人でうろつかせてくれなくなってさー。家の手紙出しに行った隙を見て部屋を出てきたの」

　ここで過ごし始めてから、テロンダに駐在している女性騎士はエンジリカ以外にも何人かいることを知った。こうして偶にすれ違ったときに挨拶を交わすだけで、特に会話したことはない。
　彼女達とすれ違う際、常にアジェットとギエルドと行動を共にしていたため、女性達はロンよりも彼ら二人に視線がまず行くためだ。ロンの存在に気づくのはその後。付け足したのを誤魔化すように笑いながら、ロンに軽い会釈を向け

る。こうして彼らがいないときに女性騎士と対面するのは、初めてだった。

「あーうん、でもそれは仕方ないかも……確かほとんどの騎士の男の人って、ワローラル様に惚れ……憧れてるものね」
「ごめんねロン君。気分が悪いかもしれないけど、そんなやっかみなんて気にしないで。遺跡の探索で成果をあげてるロン君に対して、嫉妬してるだけなんだから」
「うん。僕は全然気にしてないよー。男の嫉妬なんて見苦しいよねぇ」

　ロンはニコニコと愛想よく、女性騎士に接していた。エンジリカの前で浮かべる作り笑いではない、自然な笑みだ。
　その理由は至極単純。二人の女性騎士が、ロンよりも背が低い小柄な女性達だからだろう。彼女達の目線は、ロンよりも若干低いところにある。自分よりも外見年齢の高い女性が、自分よりも背が低い。ロンはその事実を喜んでいる。心の中ではきっと拳を握って、よっしゃあ！　と叫んでいるに違いない。

「僕の護衛についた二人なら、そろそろ部屋に戻ってるんじゃないかな？　手紙を出しにいってから大分時間が経ってるし。あいつらに会いたいなら、部屋に行ってみたらどう？」

　ロンはわざと身体を屈め、上目遣いで彼女達を見上げた。口元は楽しげにつり上がっている。
　すると、彼女達の頬はボッと紅く染まり、慌てて両手を身体の前でぶんぶんと振った。

「ち、違うのよロン君！　あ、あたし達そんなつもりじゃなくて……！」
「た、ただ通りすがりにあの二人の姿が見られたなぁって思っただけで、部屋にまで押しかけようなんて思ってないわ」
「そうなの？　違うんだ。お姉さん達可愛いから、あいつらも気に入ると思ったのに」

　ロンのその、歯に衣着せぬ言い方に、ひくっと口元が引きつるのを感じた。

「あ、あたし達なんて、ワローラル様に比べたら全然キレイじゃないし、スタイルだってよくないし……」
「確かにあのお姉さんは美人だけど、あの二人はそういう目で見てないって言ってたよ。ギエルドはむしろ、苦手だって言ってたなぁ」
「え、そうなの？」

　エンジリカに好意を抱いていないという事実に、二人の女性騎士は目を丸くした。この事実はどうやら把握していなかったらしい。確かに所属している男性のほとんどが彼女に惚れていたら、彼らもまた惚れているのだろうと思ってしまうのも不思議ではない。

「ほんとほんと。――僕もあの人より、お姉さん達の方が可愛くて魅力的だなって思うな」

　にこやかにとんでもないセリフを吐くロンに、レフルは手で顔を覆って深い溜め息をついた。
　彼女達がエンジリカよりも魅力的と言うのは、確かに本心だろう。だがそれは、お互い腹の探り合いをするような殺伐さとしたものが彼女達にはなく（つまり可愛げがある）、且つ、身長がロンよりも低いこと（エンジリカはロンよりも高い長身の持ち主）で、機嫌がいいからこそ出てきてた言葉。ロンは決して、決して同性に色情を抱いているわけではない。
　レフルは思わず前の主人の顔を思い出す。彼女は男には容赦なかったが、女性には優しくすることを心がけていた。

そのせいで多くの女性の視線を集めており、実際想いを告げられたことも一度や二度のことではない。その度、彼女の未来を憂いていた懐かしい記憶が甦る。
　そしてそんなランと共に過ごしたロンは、彼女の影響を多大に受けている。己を表す一人称や、少年のような口調はまだいいとしよう。ただ、そんなところまで影響を受けてほしくはなかった。切実に。

「こ、こら！　年上をからかうんじゃありません！」
「えー？　思ったことを言っただけなのに、心外だなぁ」
「もう……！」

　女性騎士達は頬を紅く染め、あたふたとしている。その姿は初々しく、まさしく可愛らしい女性そのものだ。彼女達をそうしたのがロンであるというのが、腑に落ちないというだけで。

「それにしても、お姉さん達はあの人のこと嫌ってないんだね。女の人には好かれなさそうって勝手に思ってたけど」

　ロンはエンジリカや彼女を慕う騎士達がいないことをいいことに、大変失礼極まりないことを口にした。
　それはレフルも思っていた。彼女達の口からでるワローラル様という名前に、侮蔑や嫌悪感が一切含まれていない。少しでもエンジリカのことを嫌っていたのなら、名前を口にする際に嫌悪する感情が零れるもの。特に傍にエンジリカや慕っている者がいない場合は尚更だ。しかし彼女達にそんな感情は全く見られない。エンジリカのことを綺麗と評したときも、羨望はあったが嫉妬は混じっていなかった。

「だってワローラル様は完璧な人だもの。由緒正しい家柄の生まれで、美人で、優しくて、頭もよくて。嫉妬するだけ無駄よね」
「それにワローラル様は、性別で差別したりなさらないし、何より優しい方だもの。あたしもあんな風になれたらなって思うわ」
「そうそう、憧れちゃうわよね。あんなステキな女性になりたいわよね！」
「あの腹黒がステキ、ねぇ……」
「ん？　今何か言った？」
「ううん、なんにも」

　ボソっと呟いたロンの言葉が聞こえたのは、どうやらレフルだけだったらしい。笑顔で誤魔化すロンに、レフルは思わず苦笑した。

（基本的に、部下の受けはいいようですね）

　彼女達の態度を見るに、他の女性騎士もきっとエンジリカには嫉妬よりも憧憬の感情が先走っているだろう。異性だけでなく同性も引き付ける魅力の持ち主。それがエンジリカだ。ロンも出会い方が違えば、彼女達と同じようにエンジリカのことを慕ったかもしれない。あくまで、もしものありえない話ではあるが。

「ワローラル様の部隊に配属されて、あたしとっても嬉しかったのに、まさかこんな辺境の地に飛ばされるなんて思ってもいなかったわ……」
「そうよねぇ。特に特出しているところもないし……こんなことになったのも、王が宝探しを始めるから」

「そうそう。こっちからしたらいい迷惑よ。それに、遺跡の調査に反発したからって、ワローラル様をこんなところへ遠ざけることないじゃない。他にも反発してる人大勢いるのに、どうしてワローラル様ばっかり」

　気づけば会話の内容は王への愚痴へと変わっていた。ロンが口を挟む余裕がないほど、二人は次々に王への不満を零す。

（黒髪の騎士もそうでしたが……騎士が王への不満を躊躇いなく口にする。本来ならば、窘めるべき立場であるにも関わらず。そのことを彼女はどう思っているのでしょう）

　政策に対する不満と、王直接への不満は似ているようで全く異なる。政策に対する不満ならば、王に反抗心を抱いていると指摘されても、政策が不満なだけであり王に反抗するつもりはないと言い逃れることができる。だが、直接王に対する不満を口にしたら、当然言い逃れなどできやしない。
　もしもここが王都から離れた僻地ではなく、王の目端が届く場所であったなら、こんな風に王への不満を遠慮なくぶちまけるなど、できないだろう。

（黒髪の騎士はあまり気にしてはいなかったようですが、騎士でこの調子だと民衆の間ではもっと――）
「いた！　ここにいやがったか！」
「ロン、一人で出歩かないでくれと、この間も言ったじゃないか。探したよ」
「げ、もうきやがった」

　レフルの思考を中途で遮ったのは、ロンを探し回ったであろうアジェットとギエルドの二人だった。周囲を探す為に走り回ったのか、軽く息が乱れている。

「あ、アジェット君にギエルド君。ロン君を探していたの？」

　王への愚痴を零していた彼女達だったが、二人の声が聞こえてきた途端に表情に喜色が混じる。

「ロンを引き止めてくださってありがとうございます」

　アジェットが女性騎士に目を留めると、彼は爽やかな笑顔と共に軽く頭を下げた。礼儀正しいその態度に、女性達の頬が薄らと赤く染まる。しかしアジェットはそんな彼女達からすぐに視線をロンに戻し、表情から笑顔を消して瞳をつり上げた。

「ロン、一人で行動したらまた絡まれてしまうよ。ほとんどの騎士は、君のことを誤解したままなんだから」
「あーはいはい、ごめんなさいねー」
「反省の色、全くねぇな」
「いてててて！」

　ギエルドがロンの頭をがしりと掴む。その手には青筋が立っており、力が込められているのだとすぐにわかった。思わずギエルドをじっと睨みつけてやると、彼はレフルとは反対方向を向きながら、徐にロンの頭から手を放す。わかればそれでいい。

「ロンの相手をしてくれてたみたいだな、サンキュ」
「え、ううん、そんなこと……」
「少しお話ししてただけだし、大したことしてないわ」

　顔だけはいい男二人から礼を言われた女性騎士は、興奮を露にこちらに手を振りながら去っていく。足取りが弾んでいるのは、決して見間違いではないだろう。

「そんじゃとっとと部屋に戻るぞー。子供はもう寝る時間だ」
「僕の実年齢からしたら、二人の方がよっぽど子供だけどね」
「でも身体の年齢は、わたし達よりも年下なんだろう？」
「む……」

　三人は軽口を叩きあいながら（主にロンとギエルドが）、部屋へと戻っていく。
　本日はアジェットがロンの見張りをするらしく、手前の部屋でギエルドが扉を開けた。隣の部屋へ向かうロンとアジェットを後目に、レフルはギエルドの肩近くにすすすと移動する。

『――自分が騎士だという自覚があるならば、今後街中で王の不満を口にするのはやめたほうがいいですよ』
「ん？　いきなりどうしたよ、お前」
『騎士が王の不満を口にすれば、やがてそれは民衆にも広がります。テロンダの街に住む人々のことを思うならば、いくら自分が不満でも、絶対に口に出していいことではありません』

　本当はこんなことをギエルドに言うつもりなどなかった。彼やテロンダに住んでいる人々がいくら王に不満を抱いていようが、ロンの旅路を邪魔しなければ別段何とも思わない。例えそのせいで王の顰蹙を買い、反乱分子として街全体が粛清されたとしても。
　しかし、ギエルドやエンジリカだけでなく、普通の騎士まで王へ不満を吐く姿を見たら、どことなく彼らの行く末が心配に――つまり情が移ってきていた己にレフルは気づく。

『何だかんだで、わたくしもあなた方のことを気に入っているようです。ですから、できるだけあなた方にも、危険なことに首をつっこんでほしくはないのですよ』

　レフルは魔石（リフェ）にされた後も、ずっと人間と共に過ごしていた数少ない精霊だ。今でこそこうしてロンと共に各地を回っているが、十四年より前は人間の集落で暮らしていたのだ。考え方が他の精霊よりも人間に近くなっていることは明白であるし、情が沸きやすいのも言うまでもない。

『エンジリカ・ワローラルが腹の底で何を考えているのか、正直よくわかりません。ですが、彼女が王に反抗心を抱いていて、それが民衆にも広がりつつあることは、あまりいいことではない。聡い貴方なら、言わなくてもわかるでしょう？』

　ギエルドから、返答はない。無言のまま、レフルをじっと見据えている。それを肯定と受け取ったレフルは、軽く目を伏せてギエルドに背を向けた。

『話はそれだけです。お休みなさいませ』
「おう」

　レフルはバタンと扉が閉まる音を聞きながら、既に閉じている隣の部屋の扉をすり抜けた。

　普段通り扉を開くと、そこは今まで通ってきた通路とは一風変わった場所だった。

「何だここ。他の場所と随分雰囲気が違うな」
「壁にぎっしりとルーンが……何て書いてあるんだろうね」

　ロンは目を細めながら、壁に刻まれているルーンを大まかに辿っていく。そして軽く息をついた。

「どうやらここ、この遺跡の中核みたいな場所っぽい。ここから一面、ぜーんぶ倒壊を防ぐ保持のルーンだ。遺跡を半永久的に維持させるための」

　壁にびっしりと刻まれたルーンは、行き止まりの広間で見つけた小物などに刻まれていたのと同じような系統のもの。ただし、こちらは罠の発動に関するものではなく、遺跡全体の強度を上げ、倒壊を防ぐために刻まれている。

「これだけビッシリ刻まれてりゃ、半径数百メートルは効果範囲になるね」
「へー、そりゃすげえ」
「だからこんな広大な遺跡が、全く倒壊する気配もなく残り続けているのか」

　簡単に説明すると、二人はしげしげと壁を眺めた。だがレフルだけが眉間に皺を寄せ、訝しげな顔をする。

『しかし解せませんね……本来倒壊を防ぐ役割を果たす保持のルーンは、一箇所に纏めるのではなく分散させるもの。これではここのルーンが失われてしまえば、遺跡全てが倒壊してしまいます』
「げ、大丈夫なのかよそれ」
「壊すにしても、物理的にルーンが刻まれてるところを削ったりしない限り大丈夫だよ。――でも、レフルの言葉にも一理ある。特に保持のルーンは物質の劣化が激しいし」

　本来倒壊を防ぐルーンは、数箇所に分散して刻むもの。そうすることにより、一部のルーンが失われたとしても、倒壊する部分がその周辺のみに止めることができる。しかしこのように一箇所に纏めた場合、この場から力を失った刹那、恐らく遺跡の全てが倒壊してしまうだろう。
　保持のルーンは老朽化による崩壊を防ぐためのものであり、物質の劣化までは防ぐことができない。それどころか、劣化していくものを無理やり保たせているため、通常よりも早く物質は衰えていく。ルーンがかかっている間は決して倒壊することがなくとも、効果が消失した場合、劣化し続けた建物がそのままの状態を維持するのは不可能だ。
　老朽化そのものを防げるルーンは、ロンにかけられている不老不死のルーンしか存在しない。物質はいずれ朽ちるもの。それは人間でも無機物でも変わりはない。

「ルーンは強い力を発するけど、わりと繊細でね。文字の一部に傷をつけただけでも効力を失うんだ」
「それって、扉を開くためのルーンも、かい？」
「うん。少しでも切り込みが入ったら、正答を唱えても扉は開かなくなるよ」
「それって結構ヤバイんじゃないのか。今地震とか起きたら、俺ら全員遺跡の中に生き埋めじゃねえか」

「ここにあるのは、それらを防ぐのも含めたルーンなんだよ。地震がおきても、この遺跡の中はルーンがある限り崩れないから、寧ろ外よりもよっぽど安全だ。それに、ここまで来られる人間は当然ルーンの知識があるわけだから、不用意にルーンに傷をつけたりするわけないね」

　ルーンの意味を理解しているのならば、刻まれている文字に傷を入れるだけで力が失われることも知っているのが普通だ。これに触れれば自身の身が危うくなるとわかっていて、触る馬鹿などいるわけがない。

「つまり、人為的に傷をつけようとしない限り、安全というわけだね？」
『そういうことです。――どうやらここには倒壊を防ぐルーンだけでなく、罠の発動や扉を開くためのルーンの仕組みも刻まれているようですね。完全に遺跡の機能を司るルーンを、一つ所に纏めてしまったようです』
「無用心っちゃ、無用心だけど……こんな奥までやってこられる人間の方が少ないことを考えたら、数箇所に散らすよりも安全……いや効率的、か」

　人間が立ち入らず、且つ自然災害対策も万全であるならば、数箇所に渡ってルーンを刻むより、当然一箇所で刻んだ方が楽だろう。それでも、壁一面ぎっしりと刻まれているルーンは、一朝一夕で彫るのは不可能ではあるが。

「あ、扉だ」
「丁度曲がり角に合わせて扉、か。どうすんだ、ここを開けて進むかまだ続いてる通路を通るか」
「開けるに決まってる。戻るのはいつでもできるんだから」

　通路の前方に扉があり、行き止まりになっていた。しかし左に曲がればルーンが刻まれた通路はまだ続いている。しかし壁に刻まれているルーンがどういうものかわかっているロンにとっては、この通路を進むことに特に意味はないのだ。今はただ、遺跡の内部にくまなく足を運ぶことが大切である。

「えーっと……欠けたり満ちたり日々姿を変え、常に空に浮かんでいて夜空を照らす光りを何明かりというか……」
「それって月、だよね」
「最後の部分、月って言わすだけなら必要ねえよな」
「ほんとにね。『月（モオン）』」

　相変わらず面倒くさい文章を翻訳し、答えを口にすると聞きなれた重低音が響いた。扉が開ききる前にはもう潜り抜けて、ロンは左右を見渡した。
　ここにも同じく前方に道がなく、左右に通路が真っ直ぐ伸びていた。レフルに視線を送り、通路内を明るく照らしてもらう。

「あ、ここ前に通ったことある」
「え、そうなの？」
「ほんとに違いなんてわかるもんか？　俺には前に通った道との違いなんざサッパリわからねえぜ」

　確かに同じような石壁が続いているため全て同じに見えるかもしれないが、実際はそれぞれ異なっている。石と石の繋ぎ目だとか、壁の埃の被り具合だとか、全て異なる部分を何かしらもっているのだ。それぞれ場所によって環境も多少は変わるのだから、完全に全く同じ造りになっていることの方が、むしろ可能性が低い。

「僕には判別がつくよ。『記録人（レコーダー）』だからね。ここは昨日通ったばかりの通路だよ。あっちからこっちへ進んだ」

　これは形状をどれだけ記憶しているかによるため、ロン以外の記録人（レコーダー）がこの世にいない以上、こんな風に判断できるのはロンだけだろう。こういうとき、記録人（レコーダー）としての記憶力は便利だ。目の前の通路が、一度通った道なのか否かが一目で分かる。普通の人間ならば判別できず、同じところをぐるぐる回ることになるかもしれない。

「なら、戻るか。もう通った道に用なんてないだろ」
「だね。――『月（モオン）』」

　もう一度扉を開く呪言を紡ぎ、重低音を響かせる。こちらが通った道ならば、先の道を左に曲がって進むべきだ。開いた扉を潜り、進路方向に向かって歩き出す。

「ロン、あそこ。何かあるよ」
「石版みたいだな……行ってみっか」
「不用意に触るなよ」
「わかってるって」

　アジェットが見つけたのは、壁に寄りかからせるように設置されていた、横に長い漆黒の石版。そこにも同じようにルーンが刻まれているが、壁に刻まれていたものと違い、こちらはどうやら何かしらの効果があるものではなく、ただの文章のようだった。ぎっしり詰められておらず、適度な間が空けられている。

（……何だろう、胸騒ぎがする）

　石版の背にある壁にも、他と同じようにルーンがびっしりと刻まれている。それと比べると、この石版はこの空間において、唯一の異質なもの。だから不穏なものを感じるのだろうか。

「……レフル、少し光りを強めてもらっていい？　これ、黒いから読みづらい」
『わかりました、ロン様』

　レフルはス、と天井近くまで昇り、小さな身体の回りに光りを纏わせ始める。レフルが完全に光りに覆われると、まるで昼間の外のような明るさが遺跡の中に広がっていた。これで石版が読みやすい。

「どれどれ……」

　ロンは石版に書かれた文字を一つずつ丁寧に拾い上げ、読み進めようとした。

（これは……！）

　ロンは思わず石版の上の部分を掴む。何度も何度も、間違いではないことを確認しながら読み返す。

「ロン!?」
「大丈夫か、ロン。お前どうしたんだよ急に」

　気づけば身体が震えていたのか、二人が左右から顔を覗き込まれていた。ロンは一度息を吐き、深呼吸して心を落ち着かせた後、徐に石版から身を引く。

『ロン様……その石版には何と……？』
「ごめん、もう少し待って。今頭の中整理してるから」

　石版の内容を彼らにどう説明すればいいか、暫し考え込む。そして変にオブラートに包むことはせず、石版に書かれていることをそのまま伝えるべきだという結論に至った。

「今から石版に書いてあることを言うから、心を落ち着かせてよく聞いて」

　意を決して二人の顔を見上げた。レフルも光りを発光するのを止め、ロンの肩付近に降りてくる。いつになく神妙な様子のロンに、ギエルドもからかう素振りを見せずロンを見遣った。

「『我等の低俗な欲望により生まれし災厄、ここに眠る。多くの犠牲を払いつつも、我等は災厄を封印することに成功せし。これにて世界は平穏を保たれた。我等は願う、永遠に災厄が解き放たれることなどないことを。そしてここに辿り着きし者に告ぐ。封印を解こうなどと決して思うことなかれ。さすれば再び『災厄』が世界を蝕むであろう』」
「おいおいそりゃ……」
「まさか……この遺跡に隠されていたものって……」
「そう、宝なんかじゃなかったんだ」

　二の句が紡げないでいる二人を後目に、ロンは一度石版をまっすぐ見つめた後、石版近くの壁に手を置いた。

「やっぱり……こっちに刻まれてるのは封印……活動を永遠に停止させるためのルーンだ。きっとこの壁の向こう側に、古代の人間が生み出して封印された『災厄』がある。何千年も、眠り続けてるんだ……」

　静かに立ち尽くす封印のルーンが刻まれている石壁を、ロンはそっと手でなぞる。そしてくるりと振り返り、呆然としているアジェットとギエルドに視線を送った。

「戻ろう。でもってエンジリカに、遺跡探索を中止することを進言しないと」

　ここには王が望む宝どころか、遺跡発掘の反対派にすら望んでいないものが眠っている。エンジリカとて、国を危険に晒すモノが眠っている遺跡を放置したいと思わないだろう。

「ロン……ここに眠っている災厄とは、一体……」
「ごめん。石版には災厄としか書いてないから、どんなものかまではわかんない」

「なあ……大昔の人間の悪ふざけ、ってことはねえよな」
「あっはは……そう思いたい気持ちはわからなくはないよ。でも、これだけのルーンを、こんなギッシリ刻み込む時間と手間を惜しまないような酔狂なヤツの仕業にする方が、確率的には低いと思わない？」

　石版が寄りかかっている壁に刻まれているのは、封印関連のルーンばかりだ。封印に関する記述がひたすら連なり、中には同じ文章を重複させることによる強化も図られている。流石にこれを酔狂で済ますには無理があるだろう。

『もしやここに眠っているのは……』
「レフル、何か知ってんの？」

　いつの間にかレフルが石版の上に移動していた。目を細める小さな身体は僅かに震えている。

『――ここに眠っているのは恐らく、ネヴェラドント・トウクヘル。決して触れてはならないモノ、と呼ばれております』
「……なんだそれ」

　レフルが口にした言葉は、ロンの膨大な記憶にも存在しないものだった。物心が完全につくより前に叩き込まれたルーンの知識に、その名詞は含まれていない。

『ロン様が知らないのも無理はありません。この遺跡が建てられたのはまだルーンが全盛期を迎えたばかりの頃。およそ五千年以上も前です。記憶人（レコーダー）が発現したのは三千年程前ですから、二千年前のできごとが伝わっていないのは無理からぬことでしょう』

　途方もない数字に、ロンは一瞬気が遠くなるのを感じた。ロンが生まれた五百年前のことですら、ずっと眠っていたロンには長すぎる時間だというのに、その十倍もの数字を言われてピンとくるはずもない。

『わたくしも他の精霊から一度だけ伝え聞いただけですので記憶がおぼろげですが、これだけははっきりと覚えております。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は、かつて『災厄』と呼ばれた全てを滅ぼしかけた危険な生体兵器だと』
「生体兵器？」
「あ、もしかして動く銅像みたいなものかい？」
『いいえ、ゴーレムは一定の条件下でのみ命令にそって動く、自立式人形。生体兵器はゴーレムと違い、明確な意思を持った生きた兵器です』

　ゴーレムの知識はあるが、レフルのいう生体兵器に関する知識はロンの中にはない。記憶人（レコーダー）が発現した時代には、既に存在していなかったということだろう。

『記憶人（レコーダー）が発現するよりも更に前、ルーンによって栄華を極めた人間達は、更なる栄華を求めて戦争を始めました。他国の財を吸い上げ、隷属させるために。その戦は敵をより多く殲滅し、且つ味方をきちんと識別する絶対的な兵器が望まれ、そして生み出されたのが生体兵器と呼ばれるものです』

　ロンは口を挟むことなく、レフルの話に耳を傾ける。ロンの記憶にない過去の戦。この場合のみロンの立場はアジェットやギエルドと同じものになる。絶対に聞き逃すことをしてはいけない。

『生体兵器、と一口に言っても形状は様々です。動物と動物をルーンによって組み合わせたり、または人体を改造して身体能力を著しく高めたり。またはゴーレムと同じように無機物にルーンで命を吹き込んだり。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）もそれに当たります。全ての敵を一網打尽にするために生み出された、究極の生体兵器』

　ロンは思わず封印のルーンが刻まれた壁を睨みつけた。
　気が遠くなるほど大昔に造られた究極の生体兵器が、この壁を超えた先にある。それがどんなものなのか、想像もしたくない。

『――しかし、敵を殲滅することにのみ力を入れ続けた結果、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は制御することができなくなり、敵味方問わず襲いかかったそうです。破壊しようにも、並の兵器やルーンでは破壊することはできず、結果、動きを封じている間に封印することを古の人々は選びました……わたくしが説明できることはこれで全てです。申しわけありませんが、どんな姿形をしていて、どのようにして猛威を奮ったのかまでは……』
「充分だよ、レフル。とにかくこいつが危険で、絶対解放しちゃいけないっていうことだけはよーっくわかったから。ね」

　最後にロンは、アジェットとギエルドに同意を促した。彼らは強張った表情でぎこちなく頷く。
　暫くの間彼らは無言で立ち尽くしていたが、先に口火をきったのはアジェットだった。

「――戻ろう。こうしている間にも、学者達がこの場所に近づいているかもしれない」
「だな、戻るか」
「うん、戻ろう」

　学者達もロン程ではないが、ロンが訳した報告書により、解読ペースが格段に上がっている。流石に学者達も馬鹿ではないから、たとえここに辿り着いたとしても封印のルーンの刻まれた壁に傷を入れるという愚かな行為はしないはず。だが、彼らが解読できるのはあくまで文章として使われているルーンのみで、紋様のように刻まれてるルーンについてはどんな用途で刻まれているかもわからないだろう。石版の文章は読めるかもしれないが、封印のルーンがかけられていると知らない人間がうかつに壁に手を触れるのは、できるだけ避けたいことだ。

『――わたくしは暫くここへ留まります。他の人間達がもしもここへ足を踏み入れようとしたら、追い払う役が必要でしょう』
「わかった、頼む。でも、ある程度時間が経ったらちゃんと戻ってこいよ？」
『承知しておりますよ、ロン様』

　遺跡の外と中ではお互い連絡をとりようがない。例え外が完全に落ち着いたとしても、遺跡の最深部にいるレフルにそれを知る術はないのだ。レフルもそれを理解していたようで、穏やかな笑みと共に、右手を軽く胸に当てながらロンに向かって一礼する。

（できるだけ早めに戻った方がいいな……ここから入り口までの最短通路は……）

　ロンは頭の中に今まで踏破してきた通路の構図を描き、どの道順が最も近くなるかを考えながら、器用に外へと逸る足を動かした。

　真摯な三対の瞳が、こちらをまっすぐ見据えている。特に一つだけ低い位置にある紫紺の瞳をこんなに真っ直ぐ見たのは、脱走した彼女（・・）と対面したとき以来だろうか。つまり、彼女は今余裕が全くなく、必死な状態ということに他ならない。あのときと同じように。

（本当に表情を隠さなくてはならないのは、自身が感情的な時。豊富なルーンの知識はあるようだけれど、やはりまだ子供ね）

　あのときのロンは、まるで親の仇を見るかのような忌々しげな目を、エンジリカに向けていた。正直、怒りたいのは取り引きを勝手に反故にされたうえに、騒ぎを起こされたこちらの方。しかし、ここで怒りに身を任せたところで何も変わりはしないと即座に判断し、煮えくり返る腸を押さえつけて周囲を味方につけ、協力を取り付けることに成功した。ここで大事なのはロンを王都に送検することではなく、遺跡調査を自らの監視のもとさせることなのだから。己自身の感情など、考慮する必要はどこにもない。

「そう、テロンダ遺跡に眠っていたのは宝ではなく『災厄』。しかも、国一つ滅ぼしかねない危険なものである可能性が高い、ということね」
「ああ。だから今すぐ、テロンダ遺跡から学者を撤退させるべきだ。あいつらが余計なことして、封印を解かないようにね」

　エンジリカは、軽く顔を俯かせた。報告するとき、常にこちらの腹を探りにかかっていた彼女とは思えない失態をたった今犯したことを、本人は気づいていないに違いない。その言葉はまさしく、ルーンの知識が浅い者でも『災厄』の封印を解くことができると言っているようなものだということを。

「ワローラル殿、直ちに調査を中止し、王都に報告しましょう。陛下も民を危険に晒すことを望んではいないはずです」
「でもって学者が全員帰ってき次第、入り口封鎖しましょうや。扉に刻まれてるルーンに傷を入れれば、扉は二度と開かなくなるそうなんで。公には『何も見つからなかった』ってことにすればいいわけですし」

　これまた彼女は失態を犯した。ギエルドのそのセリフか察するに、施された封印とやらも、同じような方法で解除可能ということではないか。封印のルーンに傷をつければ、封印の効果がなくなる、つまり、封印されたものが解き放たれてしまうと。
　テロンダ遺跡の中には『災厄』が眠っている。とてもじゃないがこんなことを一般に公になどできないだろう。いくらルーンで封印されているといっても、現在はルーンについて知らない者達が圧倒的多数だ。いつか封印が解けてしまうのではないかという不安に陥る民衆の姿が、容易く想像できる。しかもそれが、知識がない者でも解くことができるというのなら、尚のこと。

「一口に『災厄』というけれど、それはどんなものかわかるかしら？」
「確証はないけど、これは恐らく五千年程前に造られた、制御不能に陥った生体兵器のことだと思う。解放されたらどうかるかまでは、流石にわかんないけど」
「まあ、生体兵器。初めて聞いたわ。一体どのようなものなの？」

「形状は様々。でもって言葉通りの生きた兵器だよ。敵のみを殲滅するために、兵器が自分で敵味方を区別するために造られた。でも、あそこに封じられてるのは、敵味方関係なく攻撃をしかけた制御の利かないヤツなんだろうね。厳重に封印のルーンがかけられてる」

　ロンの口から出た言葉にピクリと眉が動くが、いつもの笑顔でそれを押し隠した。
　笑顔は便利な表情である。こちらの思っていることを包み隠してくれる上に、聡くない者にはそれだけで好印象を与えることができるのだから。目の前にいる三人は笑顔で誤魔化されてくれるような可愛げはないが、それでも前者の役割は大きく、エンジリカが笑顔を絶やすことはない。

「それにしても、よくそんな五千年前のことがわかったわね。石版に、そういったことが詳しく書かれていたの？」
「……いいや、書かれてないよ。僕は以前、『古代言語（ルーン）の森』って呼ばれてた、ルーンについての本ばかりが集められた図書遺跡を訪れたことがある。そこで読んだ文献に、確かそんなようなことが載っていたのを、石版を見て思い出したんだ」
「『古代言語（ルーン）の森』、ですって？」

　エンジリカは思わず眉根を寄せた。その言葉は、最も耳にしたくないもの。『古代言語（ルーン）の森』は、王が誰でもルーンを学べるようにするための場を造ろうと推し進め出した案件である。今はもうないものとばかり思っていたが、現存していたのか。

「ルーンに関する資料はもうほとんど失われていたと思っていたけれど……そんなものがまだ存在していたのね」

　そうなると厄介だ。もしも『古代言語（ルーン）の森』が現在も実在することが学者や王の耳にでも入ったとしたら、それを見つけ出そうと絶対騒ぎ立てるだろう。そして『古代言語（ルーン）の森』を見つけるための捜索隊が編成され、また余分な金を使うことになる。

　そして何故ロンがルーンに詳しいのかも理解できた。資料が豊富にある『古代言語（ルーン）の森』でなら、存分にルーンについて学べただろう。
　つまりロンは、今現在王が望んだ姿そのものだ。『古代言語（ルーン）の森』でルーンを学べば、一般の人々もルーンを使えるようになるという。夢想でしかなかったものが、実現可能になってしまう。

「いや、今はもうないよ。立ち去る際に、全部跡形もなく燃やしてきたから。今のこの時代にルーンは必要ないしね」

　この言葉をもしも学者が聞いたら、なんて勿体無いことをと嘆き悲しんだだろう。当の本人は何事もなかったかのように、真顔のままだが。微塵も勿体無いとも、悪いことをしたとも思っていないに違いない。
　エンジリカほっと内心安堵した。彼女の手で既にないものとされたなら、先ほど過ぎった危惧は杞憂で済まされる。

「だから、今すぐここにいる騎士全員と学者に、このことを伝えてほしいんだよ。人間さえ入らなければ、絶対封印は解けないから」

　紫紺の瞳は、今すぐ動けと言わんばかりにこちらを睨みつけてくる。エンジリカは決してその視線から目を逸らすことなく、にっこりと微笑んだ。常に浮かべている、仮面のごとき氷の笑みを。

　彼女はある一つの点において、話が矛盾していることに気がついていないのだろうか。いや、淀みない視線から、絶対に気がついていない。ならば、まずはそれを指摘せねばならないだろう。

「人が入らなければ絶対安全だというけれど、なら、どうしてあの遺跡は初めから人が入れないよう設計されなかったのかしら？　絶対に人を近づけたくないなら、人が遺跡に進入することを想定して造らないと思うのだけれど」

　そう、人間が立ち寄ることで封印が解かれることを危惧するならば、初めから人間が中へと入ることができない造りにしてしまえばよかったのだ。そうすればその『災厄』とやらを封じた人間の思惑通り、永遠に封印は解かれない。なのに何故人が遺跡の内部に入れるようにしたのか。
　これにロンは、どう応えてくれるだろうか――正答が不明な答えを。

「そ、れは……」

　ロンが口ごもる。視線が逸らされ、顔を俯けた。彼女の両隣にいる二人も指摘されて初めて気づいたらしく、目を丸くしながらロンを見下ろした。

「言われてみれば、そうだ。一体どうして何だろう」
「……っ、確かに矛盾してるかもしれないけど、壁一面ぎっしり封印のルーンが刻まれてるほどの『災厄』だ。早めに封鎖する方がいいに決まってる！」

　ロンは返答できないと判断したのか出てきた答えは封鎖を促すつまらないもの。しかし再びこちらを見上げる紫紺の瞳に、動揺の色が走っている。まさかそんなことを指摘されるだなんて思ってもいなかったのだろう。それにもし動揺していなくとも、彼女にその理由がわかるはずがない。いくら知識があろうとも、遺跡の建設にロン自身が携わったわけではないのだから。それに、元々明確な答えが返ってくると期待して言ったわけでもない。
　エンジリカは軽く目を伏せた。ロンが神妙な顔をして遺跡の中の『災厄』を告げたときから、ある考えが浮かんでいた。それはロンの協力によって、遺跡の調査が軌道に乗り始めたときから頭に過ぎっていたもの。しかし、それを叶えるための手札が、エンジリカにはなかった。
　だが、それが突然こうして転がり込んできたのだ。これを利用しない手はない。

「――ねえロン。これからも私に力を貸してくれるつもりはないかしら。君のルーンの知識が私には必要なの」
「お前……何を企んでる」

　紫紺の瞳に剣呑が走る。これは一筋縄ではいかないだろう。しかし、彼女を手放すわけにはいかない。ある目的を達成させるためには。

「君にも説明したでしょう？　今この国の王は、遺跡の発掘にばかり御執心で、周りが見えていない状況なの。――そんな王、必要だと思う？」
「な……！」

　エンジリカの言葉に即座に反応したのはアジェットだけだった。ロンは胡乱な瞳をこちらに向け続けている。ギエル

ドもまた黒灰色の瞳を細め、伺うような眼差しでこちらを見ていた。

「謀反でも起こすおつもりなのですか、ラローラル殿！　そんなことをすれば国が混乱状態に陥って……！」
「……で？　僕にその協力しろと？」

　ロンよりも身体を前に出し、感情的になるアジェットとは裏腹に、肝心のロンは見た目には酷く落ち着いているように見えた。いや、それはあくまで見た目だけで、心のうちでは激情が燻っているのをかろうじて堪えているのだろう。紫紺の瞳には暗い色が宿り、引き結ばれた口元は、歯を食いしばっているように見える。

「ルーンの力は偉大だわ。君が私の部下を眠らせたように、一方的に相手を戦闘不能にできるのだもの。戦が起きれば必ず誰かが血を流すことになる。でも、ルーンを使えば、たった一人の血だけで全てを終わらせることができると思わない？」

　反乱を起こせば、国中が不安に陥り、混乱することはよくわかっている。多くの犠牲者を出してしまうことも。だが、ルーンを使えば被害を最小限に抑えることが机上の空論でなくなる、大いなる力となる。

「ワローラル殿！　早まった考えはお止め下さい！　それは陛下に対する反逆です！　それに貴女は、ロンを戦に出すおつもりですか!?」
「流石にそこまではしないわ、アジェット君。ただ、ロンに有用なルーンをいろいろ教えてほしいのよ」
「だったら、学者の連中に教わればいいだろ。それくらいなら、別に僕でなくてもいいはずだ」
「教えてもらうだけなら、ね。ただ、ことが終わるまで君には私の傍にいてもらいたいの。誰よりもルーンを使いこなす君を、王側につかせるわけにはいかないわ。君を敵に回したくないのよ」

　ロンの持つルーンの知識は、ルインラトゥスにいる全ての学者の知識を結集させたものより、遥か上を行く。彼女がその気になれば、どんな軍勢が束になってかかったとしても、次々と強制的に眠らせるルーンで無力化できるだろう。こちらの戦力がそうされては困るのだ。だから、絶対に、彼女を王の側へつかせることだけはあってはならない。

「君が私に協力してくれるというのであれば、遺跡の封鎖に全力を尽くしましょう。でも、君が手伝ってくれないというのなら――その『災厄』の力を利用するのも、いいかもしれないわね」
「……！」

　ロンの肩が僅かに跳ねる。紫紺の瞳が忌々しげに歪められた。そのロンの表情を見てエンジリカは、まさにこれが首飾りに続く手札となると確信した。

「封印されてから五千年も経っているのでしょう？　なら、その生体兵器とやらも、きっと永い時を経て機能が劣化しているのではないかしら。今ならもし封印を解いたとしても、人の言うことを聞いてくれるかもしれないわね」

　勿論、これは本心などではない。エンジリカとて、国にどういう被害を及ぼすかわからないモノを、そう簡単に解放するつもりはない。しかし、遺跡の扉を完全に開かなくし、封鎖してしまうことを勿体無いと思っているのもまた事実。もしも先ほど口にした通り、機能が劣化していて人間の命令を素直に聞くのだとしたら、使わない理由がなくなる。
　それを確認するための術があるかどうかは、また別の話になってしまうが。

「馬鹿言うな！　ルーンが最盛期の時代の人間でも操作できなかったヤツを、いくら時間経過で劣化したからって、ルーンを全く使えない今の人間が操れるわけがない！」

　先ほどのアジェットと同じように、ロンが身を乗り出してこちらにギラギラと光る瞳をぶつけてくる。
　大分彼女は冷静さを欠いているようだ。何としてでも、エンジリカが封印を解くのをやめさせなければと顔一面に書いてある。

（だから感情を隠すことは大事だというのに……これでは自分から弱みを曝け出しているようなものだわ）

　笑顔の裏でそんなことを思いながら、エンジリカは様々な感情が織り交ぜあった紫紺の瞳からの視線を、逸らすことなく見返した。

「君が私に協力してくれるなら、その必要はなくなるわ」
「……っ！」

　彼女からしたら、今のエンジリカはまさに『悪』そのものだろう。大事にしていた首飾りを握られ、『災厄』の封印と引き換えに従属を強要しているのだから。

（罵りたければ好きなだけ罵ればいいわ。綺麗事を並べるのは簡単だけれど、それでは何も解決しないのだから。それに今は特に手段をえり好みできる状況ではないし。たとえそれが決して褒められたことではない、卑劣なことであっても）

　大切なのは、本来の目的を見失うことなく達成すること。そしてその過程で出せる被害を最小限に抑えられるのなら、抑えるべきだ。
　ロンに恨まれるだけでそれが可能となるならば、喜んでエンジリカはその手段を選ぶ。これで犠牲になるのは、ロンの心のみ。それで国が、民が救えるのならば、安いもの。

「それでロン、どうするの？　私に協力してくれるのかしら」

　ロンは俯いたまま何も言わない。小さな手がぎゅっと握り締められているのが見えた。
　彼女は今、内心葛藤している。エンジリカの言葉に従うか否かを。これならあと一息だ。たった一言でも了承の言質をとれば、後はこちらが好きなように言いくるめることができる。

「私のことを手伝ってくれるなら、首飾りを明日にでも返してあげるし、ことを終えたら今度こそ君を解放するわ。ずっと私の下にいてほしいなんて、流石に言うつもりはないの」

　エンジリカが望んでいるのは、あくまで政権の交代だ。国を消耗させる王を変えたい。それさえ済んでしまえば、彼女は用済みとなる。そのときはどこへなりと姿を消せばいい。
　彼女の持っていた首飾りも、ルーンが刻まれていたため何か秘密があるのではないかと、一応一番自分に忠実な学者に預けてはみたが、『光り輝いている者（レフルゲンセル）』という言葉がわかったのみで、特に収穫はなかった。

　これ以上、めぼしい情報が手に入るとも思えなかったため、あの学者に近々返却するよう求めていたところだ。新たに弱みを握れた今となっては、ロンに返したとしても問題ないだろう。

「黙っていたままではわからないわ。ねえ、どうするのか言ってくれないと――」
「そこまでです、ワローラル殿」

　ロンに向けていた視線を横に逸らすと、翠の視線と銀色に光る刃がエンジリカの菫色の瞳に映る。アジェットが抜き放った剣先を、こちらに向けていた。

「貴女のしていることは――ただの反逆です。わたしは国に仕える騎士として、それを見過ごすことはできない」

　向けられた剣先に震えはなく、迷いもない。エンジリカの返答次第では、彼は躊躇うことなくエンジリカにその刃を翳すだろう。エンジリカは口の端を僅かにつり上げた。迷いがないのであれば、惑わせばいい。

「そう、君は遺跡発掘を推進する王の味方をするというのね。王が進める遺跡発掘の政策に不安を抱く民は、どうでもいいと？」
「そ、そんなことは言っておりません！　ですが、力で陛下を玉座から無理やり降ろすやり方は間違っています！」

　翠玉の瞳が揺れた。彼の真面目で清廉潔白な性根は人として褒められるべきものだが、それ故正論に弱い。

「私も力で全てを解決することは、決していいことではないと理解しているわ」
「ならば……！」
「でも、今の王は遺跡発掘を止めることも自分が玉座を辞すことも頭にない。このままいくと、いずれ王は誰の忠言も聞き入れず、遺跡発掘に邁進するようになる可能性が高いわ。第一王子や重臣達ですら軌道を修正するだけで必死だというのに、君はそんな王を、どうやって止めようというの？」
「っ……」

　アジェットは言葉に詰まり、剣先が下がる。エンジリカとて、正攻法が通じる相手ならそちらを選んでいる。それが無理だからこそ、こうした手段に出ているのだ。
　こちらを非難するのは簡単なこと。だが、解決策を見つけることは容易ではない。エンジリカが考え、導き出した結論が、一般的に見れば非合法ととれる方法なだけ。

「私が望んでいるのは、あくまで今の王を玉座から降ろすこと。その次を安心して任せられる後釜まで追放しようなどとは、思ってないわ」

　第一王位継承権を持つ王子は、初めから遺跡発掘に反対の意を示していた。そして政策に遺跡の発掘に関する事業を組み込もうとする王を、重臣達の筆頭となって阻止している。まだ二十代前半の若輩者ながら、芯のしっかりした聡明な王子だ。彼ならば、次の王として任せるのに相応しいだろう。

（まあ、王の暴走を防ぐために、今後は私達の監視下には置かれるでしょうけれども）

　第一王子は確かに優秀ではあるが、守るべきモノの為に一部を切り捨てられる冷徹さを持ち合わせていない。現に、彼は遺跡発掘に傾倒する王に見切りをつけることができず、結果、王を助長させる一因となってしまった。

（第一王子が早い段階で王を見限っていれば、私達が動く必要などなかったというのに……）

　だから自分達が彼をこれから見張るのは、当然の措置と言える。二度と今の王のような愚策を敷かせるわけにはいかない。

「だ、そうだ。落ち着けアジェット」

　今まで成り行きを静観していたギエルドが、アジェットの腕を掴んだ。

「明らかにワローラル女史が言っていることは正論だ。――手段は気にくわねえがな。だから剣を収めろ」
「しかし……！」
「収めろアジェット。今は刃を抜くときじゃない」

　黒灰色の瞳が鋭くアジェットを射抜く。アジェットは口を悔しげに引き結びながら、徐に剣を鞘へ戻した。

（あら……？　この二人は親友同士だと思っていたのだけれど、違ったのかしら）

　見るからにアジェットは、剣を収めることに納得していない。なのにギエルドはアジェットにそれを強制させた。まるで命令だと言わんばかりに。

「さて、ワローラル女史。やり方は気にいらねぇが、俺も王に不満を抱える一人の人間として、あんたの話もわからなくはない。――俺はあんたに従うよ」
「な!?」
「ギエルド!?」

　ロンとアジェットが目を大きく見開きながら、信じられないという眼差しをギエルドに向けた。
　エンジリカはさして意外とは思わず、黒灰色の瞳に向かってニコリと微笑みを送る。今ならば、以前話したことを告げても構わないという意味を込めて。

「――先日王都で、ある意見が可決された。次の予算会議で『古代言語（ルーン）の森』を再現するための予算を組み込む、ってな」
「はあ!?　城の連中バッカじゃないの!?　資料なんてほとんど残ってないってのに、再現なんてできるわけないだろ！」

　間髪をいれずにロンが反応した。実際に『古代言語（ルーン）の森』に行ったことがある彼女だからこそ、どれだけ無謀なことかが身に染みてわかるのだろう。

「限られた資料しかないのに……再現するだなんて不可能だ」
「そうだよ。それなのに本気で造ろうとしてんだよ、あの王（バカ）は」

　ギエルドは吐き捨てるように言うと、軽く肩を竦めた。エンジリカが伝えた『古代言語（ルーン）の森』の建築について、彼は相当腹を立てているらしい。

「けれど、だからと言って君は陛下を裏切るのか!?　確かに陛下の行いは正しいものではない、でも、その心は常に民のことを考えていらっしゃるじゃないか！　それは君も知っているだろう！」
「ああ知ってるさ！　でもな、こっちにだって、我慢の限界っつーもんがあるんだよ！」

　アジェットはどうにしかしてギエルドの意思を変えたいらしいが、ギエルドは逆に彼に向かっていきり立つ。

「本当に国を良くしようと思ってるってなら、自分のしてることが本当に民のためになるかくらい気づけってんだ！
国を良くしたいっていう心だけじゃ、何にもならねえんだよ！」
（まさにその通りね）

　第一王子や重臣達が、中々王に見切りをつけられないのはそのせいだった。王が遺跡を発掘し、宝を発見したいと願うのは自身の浪漫を追求するためではない。宝を発見することで自国を潤す、しいては民のために始めた政策だった。
　それに集ろうとする蟻はともかく、王は宝を発掘することが民の幸せに繋がると、心から信じている。その心がある限り決して彼は暴君ではないと、重臣達は必死に政策の軌道修正に精を出しているのだ。
　だがたった今ギエルドが言った通り、いくら心で民を思っていたとしても、実際の彼の行動はむしろ民に不安や不満を与えることにしかなっていない。彼らも早くそのことに気づけばいいのにとエンジリカは願うばかりだ。

「――話が逸れたわね。ロン、ギエルド君は私に、アジェット君は王につくようだけれど、君はどちらにつくのかしら」
「今それを、この場で聞くって、ほんっと腹黒いなお前」
「何とでも言いなさい」

　顰められた顔を、エンジリカは笑顔で受け流す。ロンの罵詈雑言など、エンジリカの心を僅かに揺さぶることもない。

「ワローラル女史、今決断させるのは酷だ。考える時間くらい与えてやっても別にいいんじゃないのか？」
（動揺している今だからこそ承知させたいのだけれど……流石にここまできたらロンにもそれが伝わりそうね）

　本当なら今すぐ言質がほしいが、遺跡の封鎖を指示できるのはエンジリカだけ。ならば今この場で急ぐ必要もないだろう。どうせ彼女が選べる選択肢はたった一つだけなのだから。

「そうね。なら、返事は明日にしましょう。――それと、アジェット・フォン・ビクスマルテ。上官に剣を向けたことに対する処罰として、謹慎を言い渡すわ。何が正しいのかではなく、どうすることが一番民のためになるか、君も一晩よく考えることね」

　アジェットとて、王をこのままにしておくわけにはいかないと思っているはず。ただ、清廉潔白な彼は、ロンを利用するようなやり方に反発を覚えているだけだ。少し頭を冷やせば、こうすることでしか王を止める術はないと、腹を括ってくれるだろう。ギエルドと同じように。

　外で待機させていた騎士を中に呼び、アジェットとロンを連れて行かせる。今日のところはこれでいい。しかし明日は必ずロンに協力することを頷かせる。どんな手段を用いようとも。

「ワローラル様」

　一人の騎士がエンジリカに近づき、あるモノをそっとエンジリカの前に差し出す。それはルーンが刻まれた乳白色の大粒の石。今まで学者に預けていたロンの首飾りだ。

「先ほど学者がワローラル様を尋ねてきまして。途中までは話が終わるまで待つと言っていたのですが、急に用事を思い出したからと、これを貴女に渡すように言って戻りました」
「そう。ありがとう」

　にっこりと微笑むと、首飾りを手渡した騎士は僅かに顔を赤らめながら、こちらに一礼する。

「……ロンの所持品を、あいつが大嫌いな学者に預けてたのか」

　騎士が全て部屋から出て行った後、胡乱な眼差しを隠そうともしないギエルドが、エンジリカを見下ろしている。

「安全のためよ。ルーンが刻まれていなければ、取り上げることもなかったでしょうね」

　勿論それは嘘ではない。ルーンが刻まれている以上、何が起こるかわからないため、安全を確認する上で調べることは必須だ。ただ、他にも利用すべき点があるのかも知りたかったというだけ。

「安全は確認されたわ。刻まれていたルーンも、光り輝いている者（レフルゲンセル）と書かれていただけの、特に何の用途もないただの綺麗な石ね」

　あの学者はまだこの石を調べたがっていたが、彼にこれ以上のことがわかるとは思えなかった為、昼間、騎士に返却を命じさせたのだ。もしもこの石に何かしらの秘密があるとしても、現状、それを知る術はロンに直接尋ねる以外にない。そして彼女は絶対に首飾り以上の用途があることを口にしたりしないだろう。
　エンジリカに有益なことをもたらさないのであれば、ただの石同然だ。何のためらいもなくロンに返却することができる。

「……その石の秘密、もし俺が知ってると言ったらどうする？」
「あら、もしかしてロンは、君にしゃべったの？」
「ええ、まあ」

　必死になって取り返そうとしていた首飾りの秘密をギエルドに口にした。大分仲はよくなったとは思っていたが、そこまでロンから信頼されていたとは思っていなかった。ロンはエンジリカと同じ、自分の不利益になるようなことは一切合切他人に漏らさないように細心の注意を払っていると思っていたのに。そこはやはりまだ子供だからだろうか。

「それをわざわざ口にしたということは、私に教えてくれるつもりがあるということかしら」

「あの二人……アジェットとロンに、絶対危害を加えないと約束してくれるならな」

　エンジリカはその言葉を聞いて軽く目を伏せた。どうやらギエルドがエンジリカ側についたのは、王に対する不満だけではないらしい。
　彼は一人黙っていたとき、この二人が用済みとして抹殺されることを一番恐れたのかもしれない。確かにこの二人がエンジリカの味方につかないとするならば、正直邪魔なだけだ。王都での話しを聞いて、感情よりも結果論を優先する気になったと思ったが、まだ感情的な部分を捨てきれていないらしい。
　そしてエンジリカは、彼らの命までとろうとまでは思っていない。まず、ロン程のルーンの知識を持った人間を殺すのは勿体無く、そしてアジェットは家柄が厄介だ。彼の家柄はエンジリカの家よりも位が高く、ルインラトゥスでは珍しく民からの信頼も厚い上級貴族だ。彼らを敵に回せば、エンジリカ達が反対に民から反発を買うだろう。民のために奮闘しているのだから、それだけは避けたいところである。

「ええ、勿論よ。それに私は元々、あの二人に危害を加えるつもりはないの。だからそこは安心してくれていいわ、ギエルド君」

　瞳を細め、ニッコリと微笑む。ギエルドを魅了するための笑みではない。こちらの意図を測らせないようにするための、仮面の微笑み。

「……そこだけは、あんたを信じることにする」
「ありがとう」

　ギエルドの黒灰色の瞳は躊躇いがちな色が含まれている。ギエルドからしたら、ロンが信頼して話してくれたことをエンジリカに漏らすのだから、気が引けているのだろう。ギエルドは視線を僅かに逸らしながら息を吐き、そして再びエンジリカに視線が向けられた。そこに迷いはない。

「その首飾りは――」

　淡々と紡ぎ出される言葉に、エンジリカは自然と口の端が釣りあがっていくのを感じた。

　騎士に囲まれながら連れてこられたのは、牢ではなく今まで使っていた部屋だった。しかしこちらを自由にする意図はないようで、無理やり背中を押されて部屋に押し込まれると、がちゃりと鍵を閉められる音が聞こえてくる。

「猶予を下さったワローラル様に深く感謝するがいい！」

　扉の向こうから聞こえてくる男の声は聞き覚えがある。ロンを何かと目の仇にしてくるあの騎士だ。そしてぞろぞろと人数分の足音が少しずつ遠くなっていくのがわかった。見張りとして部屋の前に誰かが残ってはいない。鍵をかけたから部屋から出られないと安心したのだろう。

（逃げようと思えば逃げられる。でも、ここで逃げたって何の解決にもならないんだ……！）

　恐らくエンジリカは、ロンは絶対に逃げないと確信している。そうでなければ、閉じ込めただけで大人しく放置なんてしないだろう。こちらの考えなんてお見通しだと言わんばかりの笑みが脳裏によぎり、ロンは拳を力強く握りしめた。

「ロン……その、大丈夫？」

　恐る恐るとアジェットがロンの様子を伺うべく、顔を覗き込んでくる。視界に映ったアジェット、いや、騎士の隊服が視界に映り、カッと溜まりに溜まっていた鬱屈した気持ちが爆発した。

「大丈夫なもんか！　首飾りの次は遺跡の災厄の封印!?　人の心をどれだけ弄べば気が済むんだよ、あの女は！」

　レフルの命である魔石（リフェ）を握られていることは、先に不法侵入した己の自業自得だと諦めもつく。しかし、これはロンには何の落ち度もない。にも関わらず、エンジリカはロンを自身のいいように使おうとしている。そこにロンの人間としての感情は完全に意味のないもの。

　あのときと同じだ。五百年前、買われた学者にいいように使われていたときと。どんなに反抗心を抱いても、それを口にしたとしても、扱いが変わることなどなかった。生きたメモ帳及び辞書として、道具として使われる。そこにロンという一人の人間としての尊厳はない。
　ランのおかげで完全に薄れていたやるせない気持ちが、胸中に巡る。今の時代は奴隷制度はない。だからこれからは誰かの道具として生きることなんてないのだと、一人の人間として生きられると喜んだのに。なのに、

「何が民のためだ！　そのためには何をしてもいいってか!?　人の尊厳を踏みにじるのもいい加減にしろ！」
「……すまない」
「！　お、お前が謝ってどうすんだよ……」

　顔を俯かせ、下を向くアジェットの力のない謝罪に、ロンはハッと我に返った。
　ロンの吐き出した言葉は、あくまでエンジリカに対してのもの。アジェットに向けるべきものではない。これではた

だの、八つ当たりだ。怒りがするすると萎んでいく。

「……僕の方こそごめん。アジェットは悪くないのに、八つ当たりした。本当に、ごめん」
「いいよ、気にしないで。ワローラル殿のした仕打ちを考えたら、ロンが怒るのは当たり前だ」

　アジェットは淡く微笑みながら、ロンの頭を軽く撫でた。子ども扱いされるのは普段はあまりいい気分のすることではないが、ささくれ立っている心にはじんわりと温かい。

「……あいつがいたら、またからかってきたかな。僕の頭かき回しながら」
「……」

　いつもなら入ってくるだろう茶々がないことで、少し浮上したロンの気分がまた下降する。そのもう一人は手段を気に入らないと口にしながらも、向こう側に行ってしまった。軽口を叩きあいながらも、決して口には出さなかったけれども、ロンはアジェットだけでなく彼のことも、一応信頼していたのに。

（あいつにもあいつなりに考えてのことだってことはわかってるけどさ……）

　飄々としながらも、根っこの部分はアジェットと同じで、困ってる人を放っておけないお人よし。遺跡までの行き帰りの道中、街の人々から声をかけられない日なんて一日たりともなかった。それだけ街の人々に慕われていたギエルド。同時に彼らを守るためならば、手段を選んではいられないのだろう。例えそれが意に添わないことだとしても。

「ギエルド……どうしてワローラル殿に……。君が、陛下を裏切るなんて……」

　アジェットもギエルドがエンジリカ側に行ってしまったことにショックを受けているようだった。普段は爽やかな表情を浮かべるアジェットの顔に影が差し、その面影がない

（僕よりも……アジェットの方がショックは大きいんだろうな）

　他愛ない口喧嘩ならば、ほぼ毎日のように繰り返していた。ギエルドはアジェットを頭の固いヤツと辟易したような顔をし、アジェットはギエルドにもっと真面目になるべきだと真剣な顔で説き伏せようとする。
　しかし彼らと出合ったばかりの頃、アジェットがロンを庇って負傷した際に是が非でも持ち帰ろうとしていた短剣を、躊躇いなく破壊したことから、ギエルドにとってアジェットは大事な友人であることがわかる。アジェットもまた、口煩いのはギエルドのことを思ってのことだろう。

　そんな二人が、完全に真っ二つに別れた。片方は卑劣なやり方を嫌い、王側へ。もう片方は手段を選んでいるときではないと、エンジリカ側へ。これはただの意見の食い違いでは済む問題ではない。アジェットが王を見放さない限り、ギエルドとの敵対を意味している。
　そこでふと疑問に思った。どうしてアジェットは遺跡発掘に傾倒する王を、見限らないのか。ギエルドがエンジリカ側についたことが信じられないと口にしたということは、自身もまた王を裏切ることがないということ。
　ふと、ギエルドの口からは王への不満の言葉を幾度か聞いたことがあるが、アジェットの口からは全くないことを思い出す。むしろ、そんなギエルドを窘めていた。それは騎士として至って普通の行為であったから気にも留めていな

かったが、彼もまた遺跡発掘に傾倒する王をどうにかしなければと強く思っているはず。ギエルドも同じだ。だからこそ、彼が王を見限り、エンジリカ側についたとしても何も不思議なことではないではないか。むしろアジェットは、何故王の不満を口にしていたギエルドが、王を絶対に裏切らないと信じていたのだろう。

（もしかして、あのこと（・・・・）に関係があったりする……？）

　以前知った、彼らがロンに隠していること。それが確実に関係しているとは思わないが、無関係とも断言できない。ロンは、俯いているアジェットを見上げた。

「ねえ。一つ聞きたいことがあるんだけど」
「ん？　何だい？」
「ギエルドってさ、本当は何者？」
「え？」

　鬱屈した表情が一転、きょとんとした顔に変わる。突然何を言い出したのか、サッパリ検討もついていない、と物語っている。流石に唐突な言い方だったかもしれない。ならば、ここはあえて単刀直入に核心を突かせてもらおう。

「だって『ギエルド』って、偽名だろ？」
「！」

　アジェットの表情に驚愕が走る。アジェットも知っているという前提で話しを進めたが、どうやら間違ってはいないようだ。

「日々偽名を使って過ごしてる人間が、普通なわけないよね。だから、本当はどんなヤツなのかと思って」

　疑問系ではなく、断定する形で話しを進めることで、誤魔化しは一切効かないことを暗に告げる。まっすぐ翡翠の瞳を見上げると、アジェットは苦虫を噛み潰したような顔をしながら、そっと瞳を伏せた。

「どうして……それを？」
「前に僕がギエルドにルーンをかけようとして失敗したの、覚えてる？」

　ロンの問いに、アジェットは無言で頷いた。

「実はあれ、僕がルーンの内容を間違えたから失敗したんじゃない。ある明確な理由があって発動しなかったんだ」

　からかってきたギエルドを黙らせようとして、発動しなかったルーン。呪言の内容に誤りは一切なかった。なのに何故発動しなかったのかといえば、それはルーンの仕組みが関係している。

「ルーンは口にすると、一部を除いて声が届く範囲全てに効果が現れる。言い換えると、無差別に効果が発揮されるんだ。でも、一対多数で囲まれる状況でもないと、逆に味方まで巻き添えになるだろ？」

　因みに除かれた一部は、治癒等の消費量の激しいルーンが該当する。ルーンは魔力の消耗が大きければ大きいほど、効果範囲が狭くなるのだ。

「そうしないために、効果を個人に絞る方法がある。紡いだ呪言の一番最後に、個人名を付け足すんだ。そうすれば、付け足されたヤツだけにルーンがかかる」

　出合ったばかりの初日、声を封じた上に痺れさせたアジェットをベットの上に移動させるため、浮かせるルーンをロンは紡いだ。そのときもしも最後に『アジェット』と付け足さなければ、部屋にあるモノ全てが宙に浮くという惨事が起きただろう。
　そしてからかうのを止めないギエルドのみ強制的に黙らせようとして、ロンは呪言の終わりにギエルドの名前を付け足した。だが、ルーンは発動しなかった。

「あのとき黙らせたかったのはギエルドだけだったから、ギエルドの名前を最後に付け足した。にも関わらず、ギエルドにルーンがかからなかった。何故ならルーンが、その場に『ギエルド』っていう人間は存在しないと認識したから。付け足す個人名は、『本当の名前』でないと発動しないんだよ。偽名や愛称じゃ、特定の個人にルーンをかけることはできないんだ」

　正確には、その人物が無意識に自分の名だと思っている名前が、真の名としてルーンは認識する。例えばロンの場合、幼い頃は識別番号で呼ばれ、名前と呼ぶべきものを持ち合わせていなかった。しかし当時はその番号こそが、ロンを示す『名前』であり、その番号を付け足すことでロンにルーンがかかった。
　だが今は違う。ランがつけてくれた『ロン』という名前こそ、今では正に自身の名前だと心の底から思っている。かつての識別番号で、ロンにルーンをかけることはできない。

　ギエルドにルーンがかからなかったということは、いくら呼ばれ親しんだ名前とはいえ、心の奥底では『ギエルド』を本当の名前と認識していないことに他ならない。愛称を本名と捉える人間がいないように、偽名を本当の名と心に刻むことは不可能だ。

「ギエルドにルーンがかからなかったってことは、ギエルドは『ギエルド』という名前を、本名だって思ってないってこと。――これ、アジェットが言ってた『ギエルドは絶対に王を裏切らない』っていうのと関係があったりする？」
「……っ」

　アジェットが息を飲む。引き結ばれた口元に決して合うことのない視線は、まさしく肯定の意味だろう。本人はそれを意識しているかどうかは別として。

「……言いたくないなら言わなくてもいいよ。ただ少し気になっただけだし」

　別に彼らの秘密を暴いてやろうと思ったわけではない。エンジリカ側についたギエルドに疑問を持つアジェットを不思議に思い、気になっただけだ。

「まあ……隠し事されてるって思わなかったわけでもないけど」

　ロンはフイ、とアジェットから顔を逸らし、自分のベットへと移動して腰掛けた。
　つまりは隠し事をされたという不満からくる反抗心であり、感情的なもの。あのときはすっかり萎んだ不満が、ギエルドがエンジリカについたことによる動揺から、再び湧き上がってきたのだ。

「……すまない。わたしの口からは、このことについて言えないんだ……」
「だろうね。アジェットのことじゃなくて、ギエルドのことだし」

　これがアジェット本人のことならば、もしかしたらこの場で答えてくれたかもしれない。だが、相手はアジェットではなくギエルドなのだ。理由はどうあれ、自分以外の相手の秘密を漏らすことは彼の性格柄ありえない。

「その……ロンは今、ギエルドのこと、どう思ってる？」
「正直に言うと……僕もよくわかんない。頭じゃあいつの言っていることは理解できるけど、結果的にあいつが敵に回ったことが信じられないし、信じたくない」

　ギエルドとは口を開けば軽口の応酬を繰り広げていたが、それは彼のことを嫌っていたからではない。むしろそれがギエルドとのコミュニケーション方法であり、向こうもそれを分かった上で乗ってくれていたと思っている。ロンを庇ったアジェットを助け、己の事情を告げてからは大分歩み寄れていたとも思う。
　信頼していたからこそ、ギエルドが敵になったというショックは大きかった。

「……アジェット、お前もエンジリカの方に行きたかったら行けばいいよ」
「な……」
「王とあの女、どっちが民衆にとって望まれるか考えたら、絶対あの女だろ。――やり方はともかく」

　エンジリカのやり口はともかくとして、掲げていることは悪いことではない。むしろ遺跡発掘に傾倒する王の、自業自得とも言える。ロンにも協力しろと圧力さえかけてこなければ、頑張れと声援くらいは送ったかもしれない。

「感情を一切考慮しなければ、王の改心を待つよりあの女について、王位を奪った方が明らかに手っ取り早い。口ぶりからして、他にも仲間がいるっぽいしね。手回しや根回しは大分進んでるって考えられるから、きっと成功するだろうよ」

　自分で口にしながら、言葉を紡ぐたびに心が冷えていくのを感じていた。

「完全にあの女に分があるってなら、大人しく協力した方が身のためかもね。何も命寄越せって言ってるわけでもないし。まあ、命寄越せって言われても僕死ぬことないけど」

　最後には自嘲するかのように口の端をつり上げる。
　感情を切り離して考えれば考えるほど、エンジリカの言っていることは正しいと思い始めている自分がいる。きっとエンジリカと基本的に思考回路が似ているせいかもしれない。感情よりも合理的な方を選択するという考え方が。

「――ロン、本当はどう思ってるんだ？」
「え？」

　神妙な光りを宿した翡翠色の瞳が、まっすぐロンを見下ろしていた。

「客観的に見たらワローラル殿の言っていることは正しい、じゃなくて、ロンの正直な気持ちを聞かせてほしい。ロン、君はどう思ってるんだ」
「正直な……気持ち」

　ここで感情的なことを告げて、一体なんの意味があるのだろう。例え心情を吐露したところで、何も変わることなんてない。それはアジェットもわかっているはずだ。

　目的が見えず、首を傾げると、アジェットは膝を折って視線の位置をロンに合わせてくる。

「さっきみたいにわたしに当たってもいいから、ロンの正直な気持ちを教えてほしい。――君は、本当にワローラル殿のしていることは、正しいと思っているのか？」
「っ……！」

　近くなった目線からの真摯な言葉に、ロンは息を詰まらせた。

「あの女が正しいなんて……本当は思ってるわけないだろ！　思いたくもない！　魔石（リフェ）を返せ！　人を勝手に面倒事に巻き込むな！　不愉快だ！」

　今までの鬱憤を晴らすかのようにロンは叫ぶ。エンジリカの正しさは、あくまで感情を排除した客観的見解だ。そこに私情を挟めば、当然ロンはエンジリカの仕打ちを『正しいこと』なんて捉えることはできない。

「どんな人間だろうと、他人を勝手に犠牲にする権利なんてあるわけがない！　人に犠牲を強いる前に、自分がなってみろってんだ！」

　エンジリカが王への反逆で犠牲にしようとしているのは、ロンの命ではなく心。大儀を果たすためなら人の心を踏みにじることに対し、何の躊躇も抱いていないように見受けられる。必要悪と割り切っているのだろう。だが、そんな選択を選べるのは、己が決して犠牲になる側にならない者だからだ。ロンの心を犠牲にすることも、命をとられないだけましだろうという傲慢さを感じる。決して被害妄想ではない。

　ひとしきり叫び終えた後、ロンの頭にポンと手が乗せられる。頭から伝わる手の僅かな温もりが、冷え切った心に心地良い。

「わたしもロンと同じだ。一般人である君の弱みを握り、強制的に言うことを聞かせる行為は騎士として許すことができない。たとえそれが、多くの人々が望むことであっても」

　エンジリカは何が『正しい』のかではなく、民衆が『望んでいる』かを考えろと言ったが、アジェットの意思は、全く変わっていないようだった。

「お前……ほんっとにお人よしで、甘いね。それだといつか、そんな自分のこと後悔するようになるよ？」
「……確かにそうだね。君やワローラル殿から言わせれば、わたしはきっと甘いんだろう。でも、どう考えても彼女の考えに納得がいかないんだ。だからわたしは自分の感情に従って、ロンの味方をするって決めた――だから」

　アジェットは声のトーンを落とし、ロンの耳元に顔を近づける。囁くような小声で言葉を続けた。

「深夜になったらここを抜け出して、テロンダ遺跡に行こう。先にこちらが入り口を封じてしまえば、ロンがワローラル殿の言うことを聞く必要がなくなる」
「！」

　確かにこちらがそうしてしまえば、エンジリカはロンに対するカードを一つ失うことになる。しかしロンはその考えを首を振って否定した。

「それは向こうも読んでるだろうよ。あの女は、僕に協力させたがってるからね……大勢の騎士が待ち構えてるよ、きっと」

　テロンダ遺跡の封鎖は、エンジリカにとって最大の武器といっていい。それを失うようなヘマはしないだろう。既にテロンダ遺跡の見張りは強化されているはずだ。

「やってみなければわからないじゃないか。わたしは、やる前から諦めたくはない。君だってそうじゃないのか？」
「……」

　確かにやる前から諦めては、明日、エンジリカに協力することに頷かなければならなくなる。それは失敗したとしても変わらないだろう。
　最終的な結果が同じなのであれば、少しでもいい方向へ動かせるようにするべきだ。

「――やろう、アジェット。このままじっとしてたって何も変わらないんだ。だったら動いた方がいいに決まってる」
「ああ、勿論」

　ロンはベッドから立ち上がり、いつも使っていた机の引き出しから紙とペンを取り出す。さっと遺跡周辺の見取り図的なものを描き、アジェットを手招きした。

「遺跡周辺はこうなってる。普段、見張りの騎士はここに立っていて――」

　声のトーンを抑えながら、二人で段取りを考える。やるからには、絶対に成功させたい。

「決行は深夜よりも、早朝の方がいいと思う。夜中は向こうも警戒するだろうけど、夜が明ける頃になれば気も抜けてるんじゃないかな。緊張感をずっと保ち続けてるのって大変だし」
「確かに……早朝から動き出す学者もいないし、その方がいいかもしれない」

　二人で話し合い、段取りは纏まった。決行までは身体を休めればいいだろう。ロンはブーツを脱ぎ、両手を広げなが

らベッドに背中から倒れ込む。

「……ここまで話しといて今更だけど、謹慎くらってるのにこの部屋抜け出していいの？」
「いくら頭が固いと言われてるわたしだって、今はじっとしている場合ではないことくらいわかるさ」

　話しが纏まって、心も大分落ち着いてきたからだろう。ふと、生真面目な彼の口から謹慎を食らったというのに抜けだそうと持ちかけられたことを不思議に思い、気づけばそのまま口に出していた。苦笑と共にアジェットに返される。それもそうかとロンは笑った。

「そうだ、ロン。一つ聞いてもいいかい？」
「ん？　何？」

「質問というか疑問なんだけど……どうしてテロンダ遺跡は、わざわざ中に人が入れるようにしたんだろう。人を入れたくないのなら、初めから入れないようにすればよかったのに」
「あー……それか」

　ロンはむくりと身体を起こしながら、頭を掻く。

「それは僕もはっきりとは言えないんだよね……建造に立ち会ったわけでもないし」

　エンジリカに同じ事を問い詰められたとき、ロンは返すことができなかった。当然、現代に五千年前に造られたテロンダ遺跡建造に携わった人間なんて、存在していない。
　真相を知るのはあくまで彼らのみであり、ロンには想像することでしか彼らの意図を汲み取ることはできないのだ。

　そしてエンジリカは、推論で納得してくれるような可愛げのある女ではない。それにあのときはそんな粗を指摘されるとは思わずひどく動揺したせいで、考えを上手く纏められず、咄嗟に口に出すことができなかった。

「だからあくまで推測でしかないんだけど……もしも扉に刻まれてる文字がルーンじゃなくて、現代語で、でもって開く言葉も現代語だったら、どう思う？」
「えーと……人の利き手と反対の手の方向は、だったよね。……何か、馬鹿にされてるような……変な気分だ」

　想像してみたのか、アジェットが何とも言えない表情を浮かべている。それが普通の人間の反応だろう。

「当時……五千年前は普通にルーンが使われてた。今でこそ複雑な文法で解読が大変なことになってるけど、建てられた時代は僕が今さっき言ったような状態なんだよ。回りくどい言い回しに簡単な答え。普通の感性持ってる人間なら、馬鹿にされてるって思うだろうね」

　ロンも初めに中央の扉を開こうとしたとき、顔を思いっきり顰めた。そして一言、なんだこりゃ。レフルもあんぐりと口を開けながら扉を見ていて、彼もまたロンと同じ気持ちだということがわかった。

「でもって中は、一度彷徨ったら脱出するのが難しい迷宮だ。最初は興味深々な人間も、そんな遺跡の中に入りたがる

なんて思わなくなるだろ。完全に人間をシャットアウトするよりもわざと招き入れて、この中は危険だと思わせた方がいいって判断したんじゃないかな」

　もしも入り口を作らず、全て壁にしたとしても、壁を壊してでも中を見てみたいという好奇心旺盛な輩が出てくる可能性もあっただろう。それならば初めから入り口を造れば、壁を壊してでも中へという輩は格段に減る。これもあくまで推測でしかないが。

「それに五千年前に記録人（レコーダー）は存在しなかった。広大な迷宮の道順を全て把握することができる記憶力の持ち主が現れるなんて、想定してなかっただろうね」

　テロンダ遺跡を、普通の人間が一人で探索するのは不可能だ。確実に中で彷徨い、最悪二度と太陽の光りを拝むことはできなくなる。生きた人間を目印にしながら奥へ進むといった人海戦術でもって遺跡を踏破しようとする国の存在もまた、想定外だったに違いない。

「今思うとあの女、僕が言い返せないってわかってて、わざとこの質問したんだろうな……」

　あのときのことを思い出すと、苛立ちが沸々と甦ってくる。あの鉄壁の笑顔がとても憎らしい。絶対に彼女の思い通りになってたまるものかと、強く心の中で誓う。

「――ロン、絶対に成功させよう。過去の災厄を、現代に甦らせないために」

　アジェットが、握った拳をロンの前に突き出した。

「当、然！　あの女の好きにさせるかってんだ」

　ニカリと笑いながら、ロンはアジェットの拳に向かって、一回り小さい自分の拳をコツンと合わせた。

　シンと静まり返っている空間。もしも『感覚』というものがあるのなら、僅かに露出されている肌は冷たいと感じるのだろうか。
　外部からの光りを完全に遮断された内部に、ポツンとたった独り、淡い光りを纏わせながらレフルはぐるぐると同じところはずっと回り続けていた。

（さて、大分時間が経ったとは思いますが……今はどのくらいなのでしょう）

　ロン達を見送った後、レフルはずっと壁にルーンが刻まれている通路を見回っていた。ここへ入るための扉はロン達が使った以外にも、更に二つあったのだ。計四つ。少し距離のあるこの四つの扉のうちどこから学者が入ってきてもいいように、聴覚を澄ませている。

（しかし本当にここに残ってよかった。杞憂で済めばよかったと思っていたのに、あれから二組もやってくるなんて……）

　あくまで念のために残っていたレフルだったが、その懸念が当たってしまった。聞きなれた重低音と共に、騎士を連れた学者の集団が二組、ここに辿り着いてしまったのだ。音を聞きつけすぐさま向かい、扉が完全に開ききる前に全身から強い光りを放って扉が閉じるまで二の足を踏ませた。諦めずに何度も扉を開く人間達に負けじとレフルは発光し続け、何とか彼らを帰らせることに成功している。

（彼らがここまで到達できたのも、ロン様の書いた報告よによる成果でしょうねぇ……）

　学者側から請われた、扉のルーンの翻訳。それにより、ルーンの知識が広がった学者達は、ロンに頼りきることなく、自分達でも翻訳を進めていった。そのスピードはロンと比べるべくもないが、彼らからしたらとてつもない進歩だろう。
　そしてついにここまで辿り着いてしまった。ほぼ廃れた状態であるルーンを駆使し、更にロンのもたらした新たな知識を貪欲に追求し、自らのものとした結果だろう。彼らのひたむきさに、レフルは皮肉でも何でもなく感心した。

（学者という人種を見たのは初めてですが、ひたむきな方達のようですね。ロン様のもたらした知識を得て、ここまで辿り着いてしまうのだから恐れ入る）

　一途な心は、レフルが好む人間の美徳だ。ひたむきに努力する姿こそ、人間が最も輝いているときだとレフルは思っている。ロンのように、一方的に嫌ってはいない。

（追い返すのはとても心苦しいですが……これも決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を解放するのを防ぐため。仕方がありません）

　気持ち的には、彼らにこの通路を思う存分見学させてやりたいと思う。しかし場所が場所だ。完全に安全と言えるようなところならば、ロンも好き勝手させるだろうが、ここにはテロンダ遺跡を形成するための大事なルーンが集まり過ぎている。下手をしたら、彼らどころかテロンダに住む住人、更にはルインラトゥス全土に渡り被害が出る可能性もある。

（一一二組目を返してから、三組目が来る気配はなし。そろそろ戻ってもよさそうですね）

　探究心が強くとも、人間は身体を休めるために夜は眠るもの。もうその時間になっていたといても全く不思議ではない。

（これだけ時間が経てば、表の扉の封鎖も終えているでしょうし。戻りますか）

　レフルはこの場から戻ることを決め、上へ上へと上昇し始める。天井をすり抜け、更に上へと昇っていくと、少しして雰囲気が一変した。閉鎖的な空間から、遮るものが何もない外の世界へと。

（星が綺麗ですね）

　呑気にそんなことを思いつつ、外の世界を上空から見下ろす。テロンダの街がある方角は真っ暗で、僅かな灯りすら灯されていない。しかし、遺跡のある周辺は点々と橙色の淡い光りが見える。妙だ。

（少し様子を見てみましょうか）

　レフルは纏っている光りを消し、遺跡の出入り口に向かって下降する。すぐに淡い光りの正体はわかった。周囲を見回っている騎士の持つ松明だ。だが、もう封鎖が完了していてもおかしくない時分であろうに、何故騎士が見回りをしているのだろう。しかも、その数は普段の倍以上の人員がいる。ざわりと胸の奥が騒ぐのを感じた。

（……扉の下へ急ぎましょう）

　騎士の真横を通り過ぎ、レフルは出入り口である三つの扉の前へ向かう。そこにも数人の騎士が配置されていた。彼らの持つ松明のおかげで暗闇の中でも扉がはっきり見えており、レフル自身が発光する手間が省けている。

（扉が……無傷？　そんな、未だ封鎖をしていないとは、一体どういう……？）

　脳裏に過ぎったのは、常に笑みを絶やさない美貌の女騎士。ここの騎士団の責任者である彼女は、騎士達に扉を使えなくするよう指示していないことになる。それは一体どのような意味を示しているのか。

（まさかあの娘、古の兵器に魅せられた……？　そんな愚かな人間ではないと思っていましたが……予想が外れるとは）

　この状態は、遺跡に眠る生体兵器を封印し続けるのではなく、利用することを選んだからとしか思えない。民に危険が及ぶであろう過去の遺物をそのままにする理由は、それしか思い浮かばなかった。

（そうなると……もしや、ロン様は捕らえられているのでは……？）

　ロンは決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を解放することを、絶対よしとしない。エンジリカからしたら、そんなロンは最早邪魔な存在だろう。アジェットとギエルドがフォローに回ってくれるとは思うが、相手は彼らの上官である。どこまで庇えるかわからない。下手をしたら、彼らもまた上官への反逆行為として捕らえられているかもしれない。

「なあ、随分前に中に入った学者、全然出てこないが大丈夫か？」
「どうだろうな。ワローラル様のために調べたいことがあると言っていたから中にいれたが、護衛は必要ないと言ったのは向こうだぞ。ほぼ遺跡の探索をし終えた今となっては、あの学者がどうなろうと知ったことではないな」
（！　まだ中に学者がいる!?）

　ロンの下へと飛び立とうとしたとき、扉の前にいた騎士達の会話がそれを止めた。レフルは扉の方を向く。

（大分時間が経ったということは、既に深いところまで潜っているということ……追いかけるか？　いや、でもわたく

し一人ではここから最奥まで辿り着けるかどうか……）

　精霊としての莫大な知識はあっても、ロンのように全ての道筋を把握できるような記憶力はレフルにはない。
　暫く悩んだ後、レフルは扉に背を向けた。いくらほぼ全ての道を探索し、内部の地図が作られてるといっても、単独で遺跡を調査できる者はロンだけだ。道しるべとなってくれる護衛もなしに、たった独りで遺跡に潜るなど、自殺行為ともいえる。

（最奥につくまでにきっと力尽きるでしょう。ならば、わたくしはロン様と合流すべきだ）

　遺跡の中に単身突入したとされる学者を見捨てる選択をしたレフルは、一度テロンダ遺跡に配置されている騎士の数を把握しておこうと、遺跡周辺を飛び回る。扉を使用不可能にする目的も果たさなくてはならないのだから、先にそういった情報を集めておいた方が合流後役に立つだろう。
　飛び回っていると、ふと騎士団の中によく見知った背中が見えた。同じく松明を手に持っているため、背中まである漆黒の髪でも暗闇にはっきりと映し出されている。

『黒髪の騎士！』
「！　っと」

　ギエルドを呼ぶと、彼はピクっと肩を震わせながらも、違和感のないように取り繕いながらこちらを振り返る。

『ロン様は無事ですか!?　どこですか！　ついでにどうして封鎖がされていないんですか！　亜麻色の騎士は一緒ではないんですか!?』

　一方的に捲し立てると、ギエルドは苦い顔をしながら周囲の様子を伺う。レフルも落ち着いて回りを見遣った。松明を持った騎士がうろついているこの場は、明らかに場所が悪い。

「――こっちこい。少し離れるから」

　小声でギエルドが呟くと、彼は回りにいる騎士達から距離をとる。しかし不審には思われないよう、見回りの範囲内である場所は外れない、絶妙な場所。

『ロン様は!?　亜麻色の騎士は!?　封鎖は!?　ロン様は!?』
「お前……ほんとロンのことばかりだな……」

　黒灰色の瞳が呆れた眼差しを寄越すが、そんなことを気にする必要などどこにもない。今一番大事なのは、ロンが無事かどうかだ。

「――ロンは無事だ。怪我はしてない。ただ今は、宿舎の部屋でアジェットと共に軟禁くらってる」
『な！　なんですって！』

　封鎖されていないことから、封鎖を推奨するロンが自由でいられないことは予測がついてはいたが、あくまで頭で理

解していたに過ぎない。レフルは宿舎がある方向を睨みつける。

『今すぐ戻ってロン様の救出を……！』
「あー、それなんだけどよ。――レフルゲンセル、ちょっと俺の頼みを聞いてくれねえか？　お前にやってほしいことがあるんだ」
『わたくしにやってほしいこと？』
「ああ」

　頷くギエルドの表情に、いつもの飄々とした雰囲気がない。
　ロンを助けるには、物に触れることのできないレフルだけでは厳しいと、ギエルドも承知しているのだろう。状況的に、あまりいい話ではなさそうだが、真っ直ぐレフルを見据える瞳は、信じてやってもいいかもしれない。

『まずは話を聞きましょう。協力するかどうかはその後決めます』
「わかった。実はな――」

　ギエルドは周囲を警戒しながら、声のトーンを更に落としながら言葉を紡いでいく。聞く度に眉間に皺がよるのを感じたが、黙って聞いてくれと言わんばかりにこちらを見つめる瞳を見ると、反論をぐっと飲み込むしかなかった。

「こういった事情だ。だから頼む、俺に協力してほしい」

　全てを聞き終えたレフルは、腕を組みながらギエルドの目線より少し高い位置へと移動する。顎を上げて逡巡したのち、まっすぐこちらを見据える瞳と視線を合わせる。

『――いいでしょう。協力しましょう。ただし、条件があります』
「何だ？　その条件って」
『貴方の本当の名前を教えなさい。フルネームで』
「っ!?　な、何でそれ知って……？」

　レフルはギエルドという名前が本当の名前ではないと知った経緯を説明する。自分だけでなく、ロンもそのことに気づいていることも含めて。

『娘のように大事なロン様を危険に晒すのです。それくらいの誠意を見せるのは当然だとは思いませんか、黒髪の騎士』
「そりゃまあ確かに……道理だな」

　ギエルドは一度軽く咳払いしてから、ボソリと呟くように本当の名前と思わしき名を言う。
　その名前を聞いてレフルは琥珀色の瞳を丸くさせたが、すぐに納得した。

『成る程。だから……』
「……あんまり驚いてねえな。てっきりドン引くだろうなって思ってたぜ」
『わたくしは以前、亜麻色の騎士が貴方に敬語を使うところを何度か目撃しておりますから。家名に『フォン』がつく上級貴族の青年が敬語を使う相手など、自然と限られます』

「？　ああ……出合ったばっかの頃か」

　ギエルドはがしがしと頭を掻いた。まだ彼にレフルの存在が視界に映らなかったときのことを思い出したのだろう。それがなければ、レフルももっと驚いたかもしれない。ロンが知ったら、全身で驚きを露にするだろう。

『――名前も教えていただけましたから、約束通り、協力しましょう』
「お、サンキュ」

　ギエルドがニカリと笑う。黒灰色の瞳に悪戯っぽい光りが宿った。

　太陽がまだ上りきらない周囲は薄暗い。日中は賑わいを見せるテロンダの街も、今のこの時間帯は静寂に満ちている。チチ、という鳥の囀りが、朝の到来を予感させた。

「ロン、走り続けてるけど、大丈夫かい？」
「平気。早く街を抜けよう」
「ああ」

　ロンはアジェットと共に、早朝のテロンダの街を駆け抜けていた。昨夜決めた、遺跡の扉のルーンを使えなくするために。

（レフルが戻ってこないのが少し気がかりだけど……）

　アジェットは休息のために仮眠をとったが、ロンはレフルが帰ってくるかもしれないからと、寝ずにレフルの帰りを待っていた。帰ってきたと同時に現状を説明し、彼にも手伝ってもらうために。
　だが、決行の早朝になるまで、レフルはロンのところへ帰ってはこなかった。いくらレフルが時間の経過を計ることができない精霊であっても、流石に夜中には帰ってくるだろうとロンは思っていたのに。

（戻ってこないのは仕方がない、か……きっとまだ遺跡の中にいるんだ。いくらなんでも今日中には帰ってくるだろ）

　結局ロンは一睡もしないまま（元々寝る必要はないため問題はない）決行時刻となり、アジェットを起こして窓からこっそり部屋を後にした。すれ違いになることも考えたが、いつ騎士が自分達がいないことに気づいて部屋を開けるかわからないため、書置きを残すわけにもいかず。その場合はレフルにとてつもなく心配をかけてしまうのだろうなとロンは苦笑する。

「ロン、遺跡が見えたよ」

　完全に街を抜けてから、先行するアジェットが、太い木の後ろに姿を隠しながら、少し顔を出して様子を伺っている。ロンも周囲に誰もいないことを確認した後、アジェットの傍へと寄った。

「やっぱり騎士がうろうろしてるか……」

　しっかりと武装した騎士が、扉の前に立ちはだかっている。だがその騎士を含め、周辺にいる人数は片手で足りる程度だった。このくらいの人数ならば、なんとかなるかもしれない。

「あ、あの騎士欠伸した。やっぱり気が抜けてきてる……読みどおりだ」
「勤務中に欠伸なんて……って今は言ってるときじゃあないね。むしろ感謝しないといけない」

　生真面目なアジェットが、欠伸をかみ殺している騎士に大して呆れ混じりの苦笑を浮かべた。素直に喜ぶことができ

ないのが、アジェットらしい。

「よし、ここから作戦通り、二手に別れよう。――後はよろしく、アジェット」
「ああ、わかってる。お互い最善を尽くそう」

　目配せしたのち、ロンはアジェットが潜む木の幹からそろそろと抜け出し、別の木の陰に隠れる。それを何度も繰り返し、遺跡に近づいていく。

　ロンが移動していったのは、出入り口から少し離れた位置だ。扉に傷を入れるのは、ロンの役目ではない。木の陰から少し顔を出すと、こちらにいる騎士もまた、欠伸をかみ殺していた。――決行するなら今だ。

「ぐっすりと眠りなさい（スレエプ・ソウンドルイ）！」

　ロンは木陰から飛び出し、久しぶりに眠らせるルーンを紡ぐ。シンと静まり返っていた早朝に、ロンの甲高い声はよく響いた。

「な、きさ……！」

　はっきりとロンのルーンを聞いた騎士は、顔を強張らせながらがくりと膝をつき、そして眠りに落ちていく。

「あの小僧……！」

　入り口付近にいた騎士もロンに気づき、一斉にこちらに向かって走ってくる。彼らには声が届かなかったのだろう。ロンは大きく舌打ちし、再び木々の中へと逃げ込んだ。

「待て！」
「待てって言われて待つ馬鹿なんていないんだよ！」

　ちらりと遺跡の方角を見遣ると、自分達とは反対に入り口の方へ向かう一つの影が見えた。それに気づかれないためにロンはすぐに視線を前へと戻し、背後から追いかけてくる騎士達から全速力が逃げ回る。

「おのれ、ちょこまかと……！」

　もしも一直線上の道での追いかけっこだったなら、ロンはそれほど時間を置かずに追いつかれていたかもしれない。だが、近くに生えている木々の合間をぬうことで、騎士はどう動くか予測がつかないロンの動きに翻弄される。

「ぐっすりと眠りなさい（スレエプ・ソウンドルイ）！」

　再びロンはルーンを紡ぐと、背後に迫る騎士がバタバタと倒れていった。だが、一人だけは突然倒れる仲間に驚きつつ、走る足が止まらない。

「げ」

　顔を顰めるロンとは裏腹に、騎士の顔は得意気だった。彼だけはルーンを無効化するために、耳栓をしていたのだろう。調子に乗ったのか、騎士は速度を上げてロンを追い続ける。

「捕まえた！」
「つっ……！」

　ついに腕を掴まれ、がくんと身体が後ろに傾いた。両腕を騎士にとられ、捻り上げられる。

「残念だったな。こんなこともあろうかと、ルーン対策は万全を期しているのだ！」
「どうせそれ誰かの入れ知恵だろ。何をえらっそうに」
「フハハハハハ！　思い知ったか小僧！」

　会話がかみ合っていないところが、この男にロンの声は聞こえていないことの証拠だろう。この場で何度呪言を紡いでも、彼にルーンはかからない。
　しかしこれは想定内だ。ロンは気づかれないように口の端をつり上げる。
　ロンの役割は、囮。扉から少し離れた場所に飛び出し、注意を引き付ける。そして遺跡の正面が手薄になったところを、アジェットが扉に刃物を突き立てる、という算段になっていた。
　遺跡の前にいた騎士、全てを引き付けることに成功しているから、きっとアジェットはとっくに扉に剣を突き立てているに違いない。

「うおら！　歩け！」
「いったいな、このクソ親父！　ハゲ予備軍！　怒鳴り散らし屋！」
「喚く暇があるなら足を動かせ、小僧！」

　悪態をつきながら遺跡の前まで引っ張られると、ロンは紫紺の瞳を大きく見開くこととなる。

「おかえりなさい」

　肩までの金糸の髪をさらりと揺らしながら、優雅な微笑みでロンを出迎える一人の女性。その傍らには膝をつき、首元に剣を突きつけられているアジェットがいた。

「アジェット！」
「駄目じゃない、ロン。部屋で待っていてもらわないと。返事をするのは別にここでなくてもいいのだから」

　ロンは頭から血の気が引いていくのを感じた。ぞっと背筋が冷たくなる。彼女はどうしてそんな冷たい笑顔を浮かべられるのだろう。
　作戦は失敗した。やはりエンジリカの方でも、自分達が部屋を抜け出して遺跡にやってくると予測していたのだろう。完全に読まれていた。

「アジェット君も、駄目でしょう？　真面目な君が部屋を抜け出すなんて、ご両親や兄弟がこのことを知ったら、どう思うかしら」
「……わたしは、自分が正しいと思ったことを実行しただけです。わたしの両親も兄も、自分で考え実行したことならば、責めることはないでしょう」

アジェットの言うとおり、自分達は決して悪いことをしようとしたわけではない。エンジリカに代わり、先にこちらが遺跡の扉を使えなくしてしまおうとしただけ。そしてそれは、テロンダに住む人々が、毎日普段通り暮らせることに繋がるのだ。この場に置いての正義は、まさしく自分達にあると言える。アジェットの家族がどんな人間かは知らないが、正しいことをしようとしたのだから、彼らに対して卑屈になるところなど何もない。

「昨日も言ったけど、ロンが私に協力してくれるというのなら、すぐに封鎖するわ。せっかく時間をあげたのに……考え直してくれなかったのね」

　エンジリカは片手を頬に添えながら、物憂げに瞳を細める。その姿だけを見ると、こちらが完全に悪役のように思えてくるのは、彼女の外見がやはり美しいからか。背後にいるロンの腕を掴んでいる騎士の雰囲気が和らいでいる気がした。回りを見れば、騎士達は皆エンジリカに注視している。
　この場にギエルドの姿がないことだけが、唯一の救いだろうか。できれば彼とは、敵対したくはない。

「――その被害者面、やめてくれない？　微塵もそんなこと思ってないくせに」

　笑顔で己の感情を全て包み隠すエンジリカのこと。その物憂げな顔ですら、心内からくるものではないだろう。己の容姿の使い方を熟知している彼女だからこそ、その表情が表面上のものでしかないと断言できる。

「きっさま！　ワローラル様に向かってなんという無礼な！」
「何と言う暴言か！　小僧、そこになおれ！」

　エンジリカの周りにいる騎士から罵声が飛んでくる。ロンとアジェットを囲う彼らは、エンジリカのことを微塵にも疑っていないのだろう。盲目的なその姿勢は、不老不死の実現を頑なに信じていたロンの大嫌いな学者の姿と重なった。

（学者が嫌いなのは変わらないけど、こういう妄信的なヤツ等も大嫌いだ……！）

　心の中で盛大に叫びながら、ロンはエンジリカを睨み続ける。彼女の目的はあくまでロンに協力させること。それを成すためにはどんな手段も厭わないだろう。
　だが、こちらとてそう簡単に彼女に屈する気はない。

「僕は絶対お前なんかに従わない。人の尊厳無視するのを、民衆のためとかもっともらしい理由を使って誤魔化そうなんて思うなよ」
「――誤魔化すつもりなんてないわ。そして正当化するつもりもない。君からしたら私のしていることは気に食わないでしょうね。わかっているわ。でも、今の私は手段を選んでいられないの。王の横暴を止めるために、君の力が必要なのよ」

「王の横暴、ね。王を倒すのはいいとして、今度はお前らが民に横暴を振るうようにならなきゃいいけど？」
「っ――！」

　挑発するように、わざと煽ることを口にすると、エンジリカの鉄壁の笑みが僅かに崩れる。すぐにまた笑みを浮かべたが、口元が引きつった不完全な笑みだった。

「貴様、また――！」
「黙っていなさい。収拾がつかなくなるわ」

　ロンの暴言に取り巻きの騎士が黙っているわけがなく、彼らはいきり立つが、エンジリカの一言によってそれは阻まれる。ロンにとっても、余計な茶々が入らないのは願ったりだ。

「私達は、あくまで民のため民衆のために動いているの。権力を握りたいわけではないわ。そこは勘違いしないでほしいの」
「ハッ、どうだか。上辺だけなら何とでもいえる。でも、腹の底じゃどう思ってるか知ってるのは本人だけ。お前は本当にその気がなくても、他の連中は知れたもんじゃないね」
「……」

　エンジリカから反論がない。もしかしたら、彼女も心の奥底では、仲間内にそれを狙う輩がいるかもしれないという危惧を抱いているのかもしれない。

「だからこそ、君には味方でいてもらいたいのよ。ルーンを使いこなす君を、敵に回したくないの」
「とっくに敵に回してる癖に、今更何言ってんだよ」

　魔石（リフェ）を握られた時点で、ロンはエンジリカ側につく気はなくなっている。遺跡の調査はロン自身もしたかったことだからこそ、仕方なく彼女の言うとおり動いただけ。それだけでなく遺跡の封鎖をエサに、今度は意に反することを強要されたのだ。
　ロンでなくとも、エンジリカの心証は最悪なものとなるだろう。

「初めっから、お前は僕にとっての敵だ、エンジリカ。お前が掲げる大儀なんて知ったことじゃないし、従う義理もない」
「……そう。私は君の味方になりえないのね」
「当たり前。お前だって、口じゃ味方とか言ってるけど、本音は利用したいだけだろ？　モノはいいようってまさにこのことだね」

　ロンがエンジリカを信用していないのと同じく、エンジリカもロンのことを信用していない。それで味方になってくれとは、とんだ茶番もいいところだ。大儀で正当化するつもりはなくても、綺麗な言葉で本音を覆い隠すことは得意らしい。自分達の確執を知らなければ、回りにはきっと彼女の方が正しいと映るだろうから。

「それなら……仕方ないわね。――こちらももう遠慮なんてしないわ」
「これで遠慮してたっていう事実に驚くよ。あれか、今度はアジェットの命と引き換えに――ってか」

「それもあるわね」

　エンジリカはあっさり肯定すると、懐に手を入れる。そして取り出したものに、ロンは視線を奪われた。
　落とさないようにと、丈夫な紐と金具をつけられた乳白色の大粒の宝石。見間違いようのない、レフルの魔石（リフェ）だ。

「これ、光り輝いている者（レフルゲンセル）という精霊の、魔石（リフェ）と呼ばれる命の塊なのでしょう？」
「なんで…それを……！」

　人間を恐れた精霊は、もう二千年以上も人前に姿を晒しておらず、そのため存在が伝えられていない。仮に精霊の存在を知っていたとしても、精霊の保有する魔力を魔石（リフェ）に変換する特殊なルーンは完全に廃れている。記憶人（レコーダー）の口伝にも残ってはいないことを考えると、意図的に存在を抹消されたのだろう。
　なのにエンジリカは、スラスラと途切れることなく魔石（リフェ）について述べてみせた。
　考えるまでもなかった。エンジリカが魔石（リフェ）について知る術は、もう一つ残されているのだから。

「ギエルド君が教えてくれたのよ。魔石（リフェ）について、ね。精霊の命の塊だからこそ、この石はこんなにも美しいのかしら」

　エンジリカが首飾りの紐を掴んで眼前に掲げ、ロンとの視線の間に魔石（リフェ）を挟む。ロンはぐっと歯を食いしばった。やはりギエルドが彼女に漏らしたのだ。魔石（リフェ）の全てを。レフルを、精霊を視界に映すことのない彼女が、それ以外で魔石（リフェ）について知るわけがない。

「それとね、アジェット君を捕まえたのもギエルド君なのよ。彼には本当に感謝しなくちゃね」
「なッ！　本当なのか、アジェット！」
「ああ……木陰に待機していたギエルドに気づけなくて……」

　あのときエンジリカにつくと言ったギエルドと、こうして敵対する覚悟がなかったわけではない。ただ、それでも避けられるものなら避けたいとは思っていたし、向こうもそれは同じであろうと勝手に思っていた。
　でも違った。そう思っていたのは自分達だけであり、ギエルドは完全に折り合いをつけていたのだ。いともあっさりと。姿が見えないだけで安堵していた己が、とても滑稽に思える。

（クソッ。僕のことはまだしも、アジェットとは幼馴染じゃなかったのか!?　どうしてそんなあっさりと掌返せるんだよ……！）

　長い付き合いであるアジェットにすらそうであるならば、ギエルドに話したことは全てエンジリカに筒抜けであると考えた方がいいかもしれない。ロンが五百年以上も前から生き続けている最後の記録人（レコーダー）であること、魔石（リフェ）の主であるレフルの存在そのものを。

「アジェット君を捕まえた後、今度はロンを捕まえると言って離れたから今はいないけれど、そろそろ戻ってくるでしょうね」

　わざわざ丁寧にこの場にいない理由を説明するエンジリカに、忌々しさが募る。ロンは苛立ち任せに身体を捻るが、背後の騎士が腕を掴む力は強く、振りほどけない。――ルーンを使うか、だが。

「ロン、ルーンを使って逃げようだなんて思わない方がいいわ。もし呪言を口に出したそのときは――」

　エンジリカの言葉と同時に、アジェットに向けられた刃先が、顎に触れるか触れないかのギリギリの位置でピタリと止まる。

「彼の生涯はそこで終わる。それでもかまわないというのなら、止めないけれど」
（こッの性悪……！）

　これはロンがアジェットを見殺しにできるわけがないと確信しているからこその台詞。それをわかった上で吐くなど、性格が悪いにも程がある。
　ロンはエンジリカと同じ、合理主義なところがあると自覚している。感情云々ではなく、客観的に見て正しいと思ったり、その方が効率的だと思ったら、そちらを優先させるだろう。
　そんな二人にも絶対的に違うところがある。非情になりきれるか否かだ。エンジリカは前者で、ロンは後者。
　ロンはかつて奴隷として学者に売られ、備品のように扱われた過去がある。強制労働はなく、ロンの母親のように子供を産むことも強制されず、他の奴隷や同族に比べれば幾分かマシな扱いではあっただろう。簡素だが食事はきちんと出されたし、学者が休息をとるときは同じくとることもできた。だが、人としての尊厳を無視される毎日ということは変わらない。ロンを買った学者は、ロンを人間だと思っていなかった。生きる辞書にしてメモ帳であり、最終的に実験台にするつもりでロンを購入した。もしも失敗してロンが死んだとしても、別の記録人（レコーダー）を買えばいいと、気にも留めていなかっただろう。
　ロンは犠牲にされる側の気持ちがわかる。だからこそ、エンジリカのような徹底した合理主義者を好きになれず、貧乏くじを引くようなお人よしに好感を抱くのだろう。出合ったばかりの人間に手を伸ばす、ランのような人間を。
　だからいくらロンが合理的な考えの持ち主だからとて、数日間親しい付き合いをしたアジェットを見捨て、自分だけが助かる選択を選ぶことなんてできない。できるわけがない。

「大人しくしていてね、ロン。痛みはないはずだから」
「……僕をどうするつもり？」
「私に従ってもらうの。君の意思とは関係なく、ね」

　それが何を意味しているかなんて、ルーンをよく知るロンに具体的な説明はいらなかった。ゾワリと背筋に悪寒が走る。

「服従のルーンを僕にかけるつもりか……！」
「ええ。親切な学者がルーンについて、私にいろいろ教えてくれたの」

　ニコリと浮かべる鉄壁の笑みに、隙はない。自身の絶対優位を確信しているからだろう。だが一つ、彼女は大事なことを見落としている。

「肝心なこと忘れてない？　服従のルーンは治癒のルーン並に魔力を消耗するってこと。お前、自分の魔力足りると

思ってんの？」
「問題ないわ。そのための魔石（リフェ）なのだから」
「？」

　ロンは訝しげに顔を顰めた。どことなく会話が噛みあっていない。そんなロンに気づいていないのか、エンジリカは得意気に話しを続ける。

「魔石（リフェ）は精霊の命の塊にして、膨大な魔力を秘めた石。使用者の魔力に関係なく、込められた魔力を引き出せる……できれば使うのは王を相手にするときにしたかったのだけれど、仕方がないわよね。君が私に従ってくれないのだもの」
「！」

ロンはエンジリカから表情を隠すため、目を開きながら顔を俯かせる。その途中、アジェットの翠玉の瞳と目があった。彼もまたあることに気づいたのだろう。

（成る程……そういうことか）

　荒んでいた心が次第に落ち着いていくのを感じた。それはきっと、彼（・）の狙いがわかったから。クッと笑いたくなったのを悟られないように堪える。ぐっと腹に力を入れてから再び顔を上げ、エンジリカをまっすぐ睨みつけた。

「やれるものならやってみろ。僕は絶対お前に従わない」
「――これがただの脅しだと思ったら大間違いよ、ロン」

　エンジリカは笑みを浮かべるのを止め、瞳孔が開いている菫色の瞳をロンに向ける。生意気な態度を変えないロンに、彼女の腸は煮えくり返っているようだった。

「私に絶対服従しなさい（カルルイオウトアブソルテオベディエンセ、ト・メ）」

　ルーンを唱えた刹那、エンジリカの身体から黒い靄が溢れ出す。そしてロンの中へ、するすると吸い寄せられるかのように体内に入り込んできた。

「ぐ……っ」

　黒い靄が侵入するにつれ、身体が重くなり、意識が遠のきそうになる。力が抜けていくような感覚に耐え切れず、がくりと地面に膝をつく。

「ロン！」
「下手に抵抗しない方がいいわ。その方が楽に――」

　エンジリカが不自然に言葉を途切らせた。いや、途切らせざるを得なかった。待ちわびたその反応に持てる力を振り絞って顔を上げると、彼女もまたロンと同じように地面に膝をついている。

「く……な、なぜ……、うッ……」

　エンジリカの整った顔から血が噴出する。それだけでなく、彼女の纏う隊服が点々と紅い染みを作っている。消費の激しいルーンを使った反動だ。エンジリカから湧き出ていた黒い靄が霧散すると、ロンの身体がスッと軽くなる。完全に成立させるより前に集中力を切らしたために、エンジリカの紡いだルーンの効果が消え失せたのだ。

「ワ、ワローラル様！　大丈夫ですか!?」
「突然出血するなど、一体何が……？」

『ロン様！　亜麻色の騎士！　下を向いて目を瞑っていてください！』

　困惑する騎士達の声音に混ざりながら聞こえてきた、頭上からの聞きなれた声。ロンは上を向きたい衝動を抑えながら下を向き、目をぎゅっと紡いだ。恐らくアジェットも同じようにしたはずだ。エンジリカの異変に気をとられている騎士等は、ロン達の行動になど、目もくれていないだろう。

「い、医者だ！　今すぐ医者を――うぐっ!?」
「ま、まぶし！　め、目が!?」

　困惑する騎士達が更に混迷を極めた声を発すると同時に、目を瞑って真っ暗だった視界が真っ白に染まる。
　レフルだ。レフルがロン達のいる頭上から、目を瞑っていても視界が白くなるほどの強烈な光りを発している。これで更に下を向いていなければ、ロンやアジェットも目をやられていたかもしれない。
　強烈な光りも次第に弱まり、真っ白な視界が再び黒へと戻っていった。

『今ですお二方！』

　レフルの合図と共にロンは瞳を見開いた。身体を強く捻ると、今までしっかりロンの腕を掴んでいた騎士の手が容易く解ける。
　身体が自由になったロンは、蹲るエンジリカの傍に落ちている乳白色の石に手を伸ばし、それを拾い上げた。

（やっと取り戻せた……！）

　レフルの魔石（リフェ）。そしてランから譲り受けた首飾りを。すぐさま首へとかけ、魔石（リフェ）を服の下へとしまう。
　ふとアジェットが気になり、彼が剣を突きつけていた騎士の方を見ると、既にそこにアジェットの姿はなかった。同時に、アジェットに向けられていた剣もなくなっている。それに気づけば、自由の身となったアジェットがどこへ向かったかなんて、考えるまでもない。自然と足先が行く方角へ身を任せると、やはりそこにアジェットはいた。

　三つの大きな鈍重な扉。そのうちの二つには既に、ルーンが刻まれている部分に刃が斬り込まれた痕がある。そして残す三つ目の扉に向かって、アジェットは剣を振り下ろした。

「よっし！」
「！　ロン、君もこっちにきてたのか」

　抜き身のままの剣を徐に下げながら、アジェットがロンの方を振り向いた。

「こっちも、魔石（リフェ）を取り返すことができたよ。ほら」

　紐を掴んで取り戻した魔石（リフェ）をアジェットに見せる。ここへは扉の封鎖を目的としてきたが、まさか魔石（リフェ）まで取り戻せるとは思っていなかった。

『ロン様！　亜麻色の騎士！』
「レフル！」

　音もなく宙を飛んでやってくる小さな人物は、紛れもなくレフル本人だ。未だ遺跡の中で番をしているのだと思っていたが、それは違ったらしい。

『早くに合流できず、申しわけありません。黒髪の騎士が提示した策に協力していたため、ギリギリまで上空に待機しておりました』
「そうそう、俺に協力してもらってたってわけだ。そんなわけで、恨むなよ？」
「ギエルド！」

　レフルの後からいつもの飄々とした調子で、ギエルドが姿を現した。ハッハッハ、と軽い調子で笑うギエルドに、ロンは拳を強く握り締める。

「せや！」
「ぐほっ！」

　胡散臭い笑顔を貼り付けるギエルドの腹に、ロンは拳をお見舞いする。綺麗に鳩尾へと入った拳を受け、ギエルドは悶絶した。

「うん、清々した。これでエンジリカにいろいろしゃべったことは許してやるよ、ギエルド」
「っの、やろ……！」
「そういいつつ、君も魔石（リフェ）についてワローラル殿に話したことを、悪いとは思っているんだろう？　さっきの攻撃も、避けようと思えば避けられたじゃないか」

　にこやかに告げるアジェットに、ギエルドは罰が悪そうな顔をしながらそっぽを向いた。図星のようだ。普段飄々としているくせに、時折妙に律儀なところがアジェットと気が合っているのかもしれない。

「でも、君が陛下を見限っていないとわかってよかった。安心したよ」
「あー……それな。実を言うと、俺らがワローラル女史のとこに配属されたのは、兄貴（・・）からの指示だったんだよ。明確な反逆の意志や証拠があったら捕まえてくれって」

　腹をさすりながらも、ギエルドは顔をあげて己の事情とやらを白状する。ロンはそれに成る程と頷いた。だからわざわざこんなことをしでかしたのだと。しかしアジェットの反応は真逆で、顔を驚愕に染める。

「な、何ですかそれは!?　わたしはそんなこと、一言も……！」

　どうやら、アジェットには寝耳に水の話だったらしい。わなわなと身体が震えている。

「ああ、アジェットにゃ言ってねえよ。だってそんなこと言ったらお前、最初っからワローラル女史のことを疑ってかかるだろ。それじゃ困るんだよ」
「あー、確かに。アジェットは顔に出やすいし、嘘も苦手だもんね」
「……っ！」

　ギエルドの言葉はまさしく核心をついていて、アジェットも反論できずに押し黙った。生真面目で融通が利かないアジェットに、エンジリカの行動を見定めつつ知らないふりをする演技を求めるものではない。その判断は正しいといえる。

「とりあえず、ギエルドっていう偽名使ってまでコソコソしてた理由はよくわかった。でも、なんでそれをお前がわざわざやってんの？　どこかの誰かさん」
「誰かさんは酷いな。でもってギエルドは偽名じゃねえよ、愛称だ。家名のオルドスクっていうのは本当に偽名だけどな」
『その話は後にしましょう。まだ彼女を捕らえるところまではしていないのですから』
「あ、そうだった。戻るぞ」

　服従のルーンを使おうとしたエンジリカは、極端な魔力の消耗により数時間は身動きがとれない状態であるが、レフルの光りで目が眩んでいるだけの騎士達は、暫く放っておけば回復してしまう。魔石（リフェ）が手元にある以上、彼らに遅れをとることはないが、回復されたら面倒だ。

　集まっている十数人の騎士達が顔を抑えながらふらふらしている姿は、何ともシュールだった。独り蹲っているエンジリカは、ロン達が戻ってきたのを察したのか、徐に顔を上げる。

「ギエルド君……まさかあの場で、嘘をつかれるとは思わなかったわ……」

　ルーンの反動により蹲っていたエンジリカは、どうやらレフルの光りに目をやられずに済んだらしい。しかし本来ならば、顔を上げるどころか意識を保つことも難しいだろうに、彼女はまだ意識を手放してはいなかった。

　なんて精神力の強さだろう。他の人間だったら、とっくに気を失っている。

「いいえ。俺があのときあんたに言ったことは、全部本当のことですよワローラル女史。ただ」
「最も肝心なことを言わなかっただけだっていう」

　ギエルドの台詞にロンが続けた。服の下から魔石（リフェ）を取り出し、胸元で乳白色の宝石が揺れる。

「この光り輝いている者（レフルゲンセル）って刻まれた魔石（リフェ）だけは特殊でね。この魔石（リフェ）の魔力を引き出せるのは、正当な持ち主だけ。僕以外の人間には、ただの石ころ同然なんだ」

　レフルは魔石（リフェ）にされる寸前に細工を施し、己と契約を交わさない限り魔力を引き出せないようにした。それが根底にあるロンと、理解していないエンジリカ。会話がかみ合わないと思ったのはこれが原因だ。

　そして悟った。ギエルドはあえて一部を隠した真実をエンジリカに語ったのだと。それは彼が、ロン達の敵に回っていないことを意味していた。

「悪く思うなよ、ワローラル女史。これも第一王子の命令でね。あのクソ親父がどうなろうと知ったことじゃねえが、兄貴にゃ逆らえないんだわ」
「……何ですって？」

　エンジリカの瞳が唖然と大きく見開かれる。そしてそれはロンも同じだった。紫紺の瞳を丸くさせ、ギエルドを凝視する。

「え……ちょ、ギエルド……それって……」

　導き出された答えにロンが動揺していると、ギエルドの隣にアジェットがスッと並んだ。

「彼は――いえ、この方はギークェルド・レクス・ルインラトゥス殿下。正真正銘、この国の第二王子であらせられます」
「うえええええええええええ!?」

　ロンの口から絶叫が飛び出す。頭ではそうだとすぐに理解したのに、感情は全くついていけない。いや、認めたくない気持ちが大きいからだろう。

「ありえない！　ありえないだろ！　王子ってもっと礼儀正しい、品行方正って感じの人間じゃないの!?　どう考えたってこいつ真逆じゃないか！　気品なんてかけらもないし！」
「お前が俺のことどう思ってるか、一発でわかる台詞だな」
「じゃあギエルドは、自分が品行方正な人間だとでも言うつもりか！」
「ハッ、言えるわけがねえ」
「即答しないで下さい、殿下……」

　腰に手を当てながら偉そうに胸を逸らすギエルド。アジェットが呆れ混じりに肩を落とした。
　王のことを『クソ親父』、第一王子のことを『兄貴』と呼べるのは、彼らと同じ血を引いている者に限られる。それに王位継承者が『第一』王子と呼ばれるのは、第二、第三の存在があってこそだ。それがまさか、こんなところにいるだなんて誰も思わないだろうが。

「そんな馬鹿なこと……と言いたいところだけど……ビクスマルテのアジェット君が認めたということは、本当なのね……」
「……どういうこと？」

　先ほどまでロンと同じく驚愕や疑いの眼差しでギエルドを見ていたのに、アジェットがギエルドのことを説明した途端、腑に落ちた表情をするエンジリカ。

「わたしの家は、代々王家直属の護衛騎士を務めているんだ。歳の離れた一番上の兄が陛下を、二番目の兄が第一王子を、そしてわたしが――」
「俺についてるってわけだ」
「だから大貴族の坊ちゃんがこんなところに、か……」

　アジェットが騎士としてテロンダにいるのは、家柄に関係なく本人の意思だと勝手に思っていた。
　いや、本人の意思も勿論あるのだろうが、それ以上に自分が仕えるべき相手、ギエルドの護衛が大半の目的だろう。

「すまない、ロン。こんな事情があったから、わたしの口からは言えなかったんだ……」
「あーうん、そうだね。そりゃ仕方ない」

　実はギエルドはルインラトゥスの第二王子で、身分を偽るためにギエルド・オルドスクという偽名を使っている、なんて機密中の機密だ。ギエルド本人が言うならともかく、仕えている立場であるアジェットが口に出せないのも無理はない。

「ま、そういうことだ、ワローラル女史。あんたの反逆の意思は明確。流石に確実な証拠まではなかったけど、ロンをルーンを使って操ろうとした事実でまあ充分だろ。ビクスマルテの人間の証言があれば、言い逃れもできねえしな」

　ギエルドはエンジリカの前で片膝をついて、目線を近くに合わせる。菫色の瞳が、ギエルドを捉えた。この状態においてもなお、菫色の瞳から力強い意思は失われていない。

「……私を捕らえたからと……全てが終わると思ったら、大間違いよ。それに……今の第一王子に、王を止めるなんて……できるのかしら？」
「わかってるさ。だからこれからは、俺ものんびりするつもりはねえよ。民を守りたいと思う気持ちは、俺も兄貴も変わらない。――お前らと同じようにな」

　黒灰色の瞳と菫色の瞳の視線が交錯する。どちらも逸らすことのない睨み合い。抱いている思いは同じなはずなのに、お互い歩み寄る選択肢はないと語っているようだった。

「ギエルド、エンジリカと言い争うのは後にしようよ。そうでないと、そろそろ騎士達の目が回復するだろうし」

　未だ騎士達は、顔を抑えて蹲っているが、呻き声は聞こえない。時間が経つにつれ回復していっていることが本人たちもわかっているのだろう。だからこそ、落ち着きを取り戻している。

「――そうだな」

　軽く目を伏せたギエルドが、徐に立ち上がる。そのときだった。

　――ドォオオン。

「うわぁ!?」

　突如響いてきたのは、地を揺らすほどの大音響。ぐらぐらと地盤が揺れ、ロンは咄嗟にその場にしゃがみ込む。

「い、一体何が起きて……？」
「なんつか、まるで何か倒壊したような音だな……。遺跡、大丈夫か？」
「！　まさか!?」

　ロンはざわりとした胸騒ぎに、未だ地面が揺れているにも関わらず立ち上がり、門の方へと走る。

「も、門が……遺跡が……！」
　扉の前に辿り着いたロンを待っていたのは、無残に崩れ落ち、扉どころか遺跡全体が崩れ落ちた瓦礫の山だった。

　乱れる吐息。ずきずきと痛み出す足。身体は全身で限界を訴えているにも関わらず、足を止めることはなかった。光りが入らない暗闇の通路での唯一の頼りである小さな松明を掲げ、進むべき道を照らす。
　ここはテロンダ遺跡。普段ならば共に進む仲間と導となる騎士が同行するが、ここにいるのはたった独りだけ。それもそのはず、今はすでに夜も更けた時刻であり、仲間も騎士も、皆寝入っている頃だろう。

（もう……少し、のはず。地図が正しければ……もうすぐ、つくはず、なんだ……！）

　全ては彼女のため。エンジリカ・ワローラルの信頼を勝ち取るためなら、これくらいのことなど、苦労のうちには入らない。
　既に昨日となっているだろう昼頃、彼女から手渡された宝石の謎を解明すべく、書物と格闘していたとき、ついに恐れていたことが現実になってしまったのだ。

「ワローラル様からの伝言だ。預けた首飾りを、できれば今日中に返還すべし、だそうだ」

　無情にも告げられたその言葉に、当然のごとくもう少し待ってもらえないかと必死に訴えた。だが、彼女の方から既にギリギリまでの猶予が与えられていた、の一点張りで、取り付く島もない。そうこうしているうちに、騎士は部屋を

出て行ってしまった。
　彼女の期待に応えられなかった現実に、暫く呆然と部屋の中で立ち尽くした。どれ位の間、そうしていたかはわからない。ふと我に返り、机の上に転がっている乳白色の宝石を見つめる。
　とても心苦しいことだが、彼女にこの宝石を返しにいかねばならないだろう。期待に応えることができなかったからとて、彼女の意思に反することはしたくない。

　重い足取りで彼女のいる執務室へ向かうと、そこには先客がいるらしかった。ずっと宝石の研究のため閉じこもっていたせいでここ数日の間彼女の顔を全く見ていなかったため、せっかくなので待たせてもらうことにした。それを考えると、少し重くなっていた心が軽くなる。しかし、

「そう、テロンダ遺跡に眠っていたのは宝ではなく『災厄』。しかも、国一つ滅ぼしかねない危険なものである可能性が高い、ということね」
「ああ。だから今すぐ、テロンダ遺跡から学者を撤退させるべきだ。あいつらが余計なことして、封印を解かないようにね」

　その『先客』とやらが、ロンという少年だということに気づき、気分が一気に下降する。思わずポケットの中に入っている宝石を握り締めた。もしかしたら、彼女はこの宝石を彼に預けるつもりなのかもしれない。そのために返却を望んだのならば、辻褄も合う。
　自然と耳は室内での会話を聞き逃さないよう、すましていた。
　どうやら話からして、彼は本日遺跡の最奥らしき場所へと辿り着いたようだ。そしてそこへ眠っていたものは『宝』ではなく、生体兵器と呼ばれる『災厄』であると。どんな形状をしているかわからないが、大昔の人間が警告しているのだから、とても危険なものであるのに違いないと。

（そんなものがあの遺跡に……彼はそこまで進んでいたのか……）

　ここ最近、ずっと遺跡に足を運んでおらず、仲間達との意思疎通もしていないため、進捗状況はサッパリとわかっていない。数日間をほぼ無駄に消費しただけの自分と、テロンダ遺跡の核心にまで触れた少年。その差は、言わずもがな歴然だ。彼女でなくとも、どちらを信頼するかと聞かれたら、後者を迷いなく選択するだろう。

（私の……私の今までしてきたことは……）

　彼女の信頼を取り戻すべく、別の土俵で勝負しようとしたことが裏目に出てしまうとは。彼は着実に実績を重ねていったのだろう。あのまま他の仲間と同じように遺跡の調査をしていても、彼に叶うわけがないなどという考えが過ぎらないほど、後悔の念が胸中に押し寄せる。そんなときだった。

「君が私に協力してくれるというのであれば、遺跡の封鎖に全力を尽くしましょう。でも、君が手伝ってくれないというのなら――その『災厄』の力を利用するのも、いいかもしれないわね」

　彼女のその言葉に、顔を上げた。彼女は、『災厄』を扱うことを望んでいるのか。その『災厄』は生体兵器と呼ばれる生きた兵器であり、制御不能に陥ったから封印されている。しかし封印されてから現在まで、途方もなく永い時が経過した今ならば力が弱まり、人間の言うことを聞くのではないだろうか。

「封印されてから五千年も経っているのでしょう？　なら、その生体兵器とやらも、きっと永い時を経て機能が劣化しているのではないかしら。今ならもし封印を解いたとしても、人の言うことを聞いてくれるかもしれないわね」

　自分の思いを後押しするかのような彼女の言葉に、決心が固まった。そうと決まれば、直ぐに行動を起こした方がいいだろう。遺跡の調査は終わりを向かえつつあるのだ。完全に終了するより前に、彼女の信頼を取り戻したい。

　ひとまず、彼女に頼まれていた宝石を近くにいた騎士に預け、仲間達が研究成果を一箇所に纏めている部屋の扉を勢いよく開く。そこで今日の分の成果を纏めていた仲間達が、ギョッと驚きながらこちらを見遣る。

「テロンダ遺跡の調査、どこまで進んでる!?」
「何だよお前、久しぶりに顔出したと思ったら突然……」
「どこまで進んでるんだ!?」
「え、あ、おい！」

　机の上に広げられている書類を、手当たり次第手に取る。ほとんどが扉を開閉するための訳であったが、その中に趣きが違うものが何枚か混ざっていた。直線と直線で繋がれた道に、点々と存在するポイント。ガサゴソと漁ると、線は道であり、ポイントは扉であることがわかった。そして別紙に、扉を開くための呪言が記入されている。地図だ。一枚では収まりきらなかったらしく地図となっている紙を繋げていくと、テロンダ遺跡の全貌が記された、完璧な地図であることがわかった。彼らもまた数の優位を経て、遺跡の内部構造を把握していったのだろう。

「これ、暫く借りる！」
「はあ!?　お前、ふざけ……！」

　手早く机の上の必要であろう資料のみをかき集め、仲間達が何か言おうとする前に部屋を飛び出した。これさえあれば、独りでも最奥まで行けるかもしれない。あの広大な遺跡の中をたった独りで探索するのは得策とは言えないが、こればかりは他人を頼るわけにはいかないのだ。

（古の生体兵器を解き放ち、私が思うが侭に動かせたなら……！　彼女の信頼は確実に私へ向けられる！）

　その一心で、一度自室に戻って松明を取り、夕暮れに照らされるテロンダの街中を全速力で駆け抜ける。
　辿り着いた頃にはもう日は完全に暮れ、一面紺色の世界に包まれようとしていた。ぜえぜえと切れる息を少し整えてから、ドンと聳え立つ大きな扉を見上げた。これ以上の休息をとっている暇はない。いくら地図があるといっても、広大な遺跡の中を独りで探索するのだから、それなりに時間はかかってしまうだろう。

「お前は……学者、か。本日の探索は完全に終了したと聞いているが、どうした？」
「そ、その……早急に、調べたいことが、あり、まして……！」

　早速入り口の扉を開けようとしたところ、見張りをしていた騎士に呼び止められる。今は一刻も時間を無駄にしている暇などないというのに。内心舌打ちをした。

「彼女、の、エンジリカ・ワローラル様のために、どうしても調べなくてはならないことがあるんです……！」
「何、ワローラル様のため？」

　こんなところで時間を食ってはいられないと、己の目的を騎士達をまっすぐ見据えながら語った。彼女は彼らの上司だ。その彼女のための行動なのだから、彼らとて納得するだろう。事実、彼女の名前を出すと、彼らは苦い顔をしていたのを一変させた。

「――この時間では護衛をつけることはできないが、それでもいいか？」
「大丈夫です！　地図がありますから、一人でいきます！」

　むしろ護衛など不必要だ。自分の手柄が分散されてしまう。騎士は互いに頷くと、通れと簡素な一言を寄越す。
　待ち望んだ許可の言葉に、まずは持っていた松明に火を灯す。そして中央の扉を開け、勇んで探索を開始した。
　それからどれ程の時間が経ったかはわからない。暗い遺跡内では、時間を計ることは困難だ。普段ならば入り口から現在時点での凡その距離と進む速さを計算して導き出すが、疲れきった身体は、そんな計算すらする余裕がなかった。全身から噴出した汗が肌を伝い、熱くなった身体を冷やす。

（迷ってはいない……地図通り進んでいるのだから……あと少し。あと少しで……！）

　がくがくと震える足を、一歩一歩前進させていく。こんなに長時間歩き続けたことは、生まれて初めてだった。机に齧りついて資料を漁ったり、考えを紙に纏めたりする作業は得意だが、運動能力は決して高い方ではないと自覚している。
　それでもやらなければならないのだ。彼女の、エンジリカの信頼を取り戻すために。
　目の前に既に数えるのも億劫になった扉が立ちはだかる。よろよろと壁に寄りかかりながらルーンを纏めた紙を開き、この扉を開くための答えを探す。

「この扉は……あった！」

　該当するルーンを見つけて唱えると、聞きなれた重低音と共に扉が開いていく。寄りかかっていた壁から身体を離し、開き始めた扉をおぼつかない足取りで潜った。しかしついに足に限界が来たのか、突然がくりと力が抜け、ばたりと地面に身体が横たわる。からんと松明が手から零れ落ちた。

「うっ……く」

　しかしここまで来て力尽きるわけにはいかない。よろよろと腕に力を込めて身体を起こし、転がっている松明に手を伸ばす。指先が柄の部分に触れ、少しずつ引き寄せて掴むことに成功した。
　もう片方の手に力を込めて、重い身体にぐっと力を入れて起きあがる。しかし、立つまでにはいかず、四つん這い姿勢から座る形にするのがやっとの状態だった。

（流石に休息をとった方がいいか……ん？）

　周囲を見渡しながらそんなことを考えていると、近くにある壁に違和感を覚えた。松明を頭上に掲げて目を凝らす

と、その壁には何かが刻まれた跡がある。扉でもないのに。

「これは……もしや！」

　力が入らなかったはずの足が不思議と力を取り戻し、立ち上がって壁に寄った。そこにはルーンと思わしき紋様が複雑な形を作りながら刻まれているのがわかる。まさしく自分が探していたものが、目の前にあった。

「これがきっと『災厄』の……生体兵器を封印しているルーンか……！　やっと見つけた」

　後はルーンを解除し、生体兵器を復活させればいい。刻まれたルーンを解除するのはとても簡単だ。どこでもいいから、ルーンに傷を入れればそれでいい。そうすればここに刻まれたルーンは力を失い、封印は解かれる。

「フ、フフ、フ。ハハ、ハハハハハハハハハハ！」

　口から自然と哄笑が漏れる。これで彼女の信頼は自分のものだ。女神のような微笑みが、自分にだけ向けられる。豊富なルーンの知識を持つ少年でも、他の誰でもない、自分だけのものになる。

「私の……私の手足となり、力となれ！　封印されし生体兵器よ……！」

　松明を持たない空いている手を振り上げ、猫のように指先を曲げながら躊躇いなく石壁に向かって振り下ろした。

　無残に崩れ落ちている瓦礫を眺めているうちに、地響きは収まっていた。突然崩れてしまった遺跡。考えられることはたった一つ。テロンダ遺跡の中核のルーンが失われた、それ以外にない。
　だが、何故テロンダ遺跡を存在させ続けていたルーンが突然消えてしまったのかがわからない。建設されてから五千年以上、何事もなく建ち続けていたように刻まれているルーンが自然消滅するはずがなく、こんな今朝方から遺跡の探索をしようとした学者もいないはずだ。通常この時間帯の人間は、まだ眠っている。

『これは……！　も、もしやあの学者が……？』
「レフル、何か知ってんの!?」

　ロンの傍にきたレフルの方を振り向くと、レフルは口元を引き結びながら、ポツポツと語り始める。

『実は……遺跡内部から地上へ戻った際……遺跡の様子を見回っていたときに、入り口に立っていた騎士が口にしていたのです。一人の学者が、調べたいことがあるから中へ入っていった、と』
「なっ!?　おい、それ聞いてねえぞ！」
「まだ中に人が残っていたというのか……！」

　遅れてやってきたギエルドとアジェットが、扉のルーンを消失させた時点で中にまだ人がいた事実に驚愕していた。ロンもまた驚いてレフルに視線を向ける。日が暮れたであろう時刻に遺跡の中へ、しかも単身乗り込むなど、正気の人間のすることではない。ロンのように道順全てを把握できるような記憶力がなければ、高い確率で遺跡の中を彷徨うことになるのだから。

『……申しわけありません。時間が経てば、その学者も遺跡から出て行くだろうと……』

　レフルは言葉を濁す。その情報を知ったとき、恐らく些細ごととして捨て置いたのだろう。その選択を批難することは、ロンにはできない。ロンも同じ状況に陥れば、間違いなく同じ選択をしていただろうから。

（それに、今考えなきゃいけないのは、そんなことじゃない）

　時間的に考えて、その単身遺跡に潜り込んだ学者は最奥へと辿り着いてしまったのだろう。そして倒壊を防ぐための保持のルーンを故意か事故かはわからないが、消失させてしまった。ルーンを消失させた学者はまず間違いなく瓦礫の生き埋めとなり、もうこの世にはいないだろう。それを今更嘆いていても意味がない。

「今すぐ街中の人間叩き起こさないと！　これだけ派手な音して崩れたんだ、災厄を封印してるルーンも絶対壊れてる！　早くしないと、古の災厄にテロンダが蹂躙されるかもしれない！」

　その学者は何を考えたか、封印されていたはずの災厄を解放したことになる。ロンは忌々しげに舌を打った。やはり学者にはろくなヤツがいない。

「瓦礫で埋もれて再起不能……ってことになりゃしねえかな」
「そうなったらそうなったで万々歳だ！　でも、最悪のことを想定して動いた方がいいに決まってるだろ！」

　ギエルドに向かってそうは言ったが、ロンには封印するのがやっとだった生体兵器が瓦礫に埋もれたくらいで機能を停止するとは思えない。今はまだ身動きがとれない状態だとしても、いずれは瓦礫を押しのけて地上に現れる。そうなる前に、テロンダに住んでいる人々を少しでも遠くに避難させなければ。

「ロンの言うとおりだ。最悪の事態に備えるべく、まずは街の人々を安全なところへ避難させないと」
『わたくしもロン様と同意見です。正直なところ、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）がそう簡単に機能を停止するとは思えません』
「俺達だけじゃ無理だな。――ここはワローラル女史といがみ合っている場合じゃねえ」
「だね。戻るよ」

　すぐさまエンジリカがいる場所へと戻ると、騎士達の何人かは視力が回復したのか、エンジリカの周囲に集まっている。一人は彼女の上半身を抱えながら、こちらを鋭い眼光で睨みつけてきた。

「貴様ら……！　ワローラル様になんて仕打ちを……！」

　正直なところを言えば、先に仕掛けてきたのはエンジリカだ。こちらはただそれに対抗しただけ。なのにこっちが一方的に悪者扱いされるというのは腑に落ちないが、エンジリカが全て正しいと妄信している彼らに、何を言っても無駄だろう。

「エンジリカ、まだ意識ある？」
「……私にまだ用でもあるのかしら、ロン」

　騎士達を無視してエンジリカに話しかけると、菫色の瞳が力なくこちらを見据えた。流石に体力の限界が近づいているらしく、先ほどの強い意志は失われている。だが、今彼女に意識を手放してもらうのは困る。

「さっきの地響き、遺跡が倒壊する音だった。扉も完全に瓦礫になって使い物にならなくなってる。この倒壊で、『災厄』を封じてたルーンが失われた可能性が高いんだ。だから今すぐテロンダにいる全ての騎士達に、住民を避難誘導する命令出して」

　テロンダで暮らす人々の数は多い。その全ての避難誘導をロン達三人だけで行うのはまず無理だ。ここにいるエンジリカを慕っている騎士達だけでも足りない。一人でも多くの人間を逃がすために、今は人手が必要不可欠だ。

「貴様！　ワローラル様に命令するつもりか！」
「我等は貴様の指図など受けんぞ！」
「…貴方たちは、少し、黙って……」
「……！」

　やはりというべきか、エンジリカを囲う騎士達はロンに敵愾心を隠そうともしない。しかしそれも、エンジリカの言

葉であっさりと大人しくなる。ここまで盲目的な支持を得るには、外見のよさだけでも容易ではない。彼女の影響力の高さには、皮肉でもなく舌を巻く思いだ。

「……皆、よく聞いて。これから最悪の事態に備えるため、総動員で民間人の避難に当たりなさい。今ここにいない騎士達にも、同じことを伝えるの」
「こ、こいつらの命令に従うというのですか!?」
「今一番大事なのは、テロンダの住人の安全よ。誰の命令だとか、そんなことは些細なことだわ。騎士は民衆のために存在する。違ったかしら？」
「い、いえ、まさしくその通りです！」
「なら、今すぐ行動なさい。いつ災厄が現れるのかわからないのだから、迅速に、ね」
「はい！」

　レフルの光りから回復し始めた騎士達は、背筋をピシっと伸ばした後、エンジリカのことを気にかけながらも街の方角へと走っていく。エンジリカを抱えていた騎士も、そっと彼女を地に横たえ、敬礼をしてその場を去った。

「…これで、いいわ……貴方たちも、さっさと街へいきなさい」
「言われなくてもそのつもり。アジェット、ギエルド。どっちかエンジリカ担いで」
「先に俺が担ぐわ。交替にしようぜ、アジェット」
「わかりました」

　エンジリカだけをこのまま置いていくつもりは自分達にはない。このままここにいたら、いつ生体兵器に襲われるかわからないのだから。憎たらしい相手ではあるが、命が掛かってるなら話は別だ。ロンはどんな人間だろうと、無駄に命を散らすことを望まない。それに、ギエルドは彼女を捕まえるためにいろいろ手を回していたのだから、彼らもまたこんなところでむざむざ死なせたりはしないだろう。

「……置いていけ、と言っても聞かないのでしょうね」
「当然ですよ、ワローラル女史。あんたにはいろいろ聞きたいこともあるしな。その後は、しかるべき罰を受けてもらうぜ」

　長身であるエンジリカはそれなりに体重もあるだろうに、ギエルドはひょいと、エンジリカの膝の下と背中に腕を通して持ち上げる。おお、と思わずロンは感嘆した。
　そして急いで街まで戻ると、大荷物を背負った住民達が、遺跡とは反対の方角へと走っていく姿がちらりほらりと見えている。エンジリカに命じられたからだろうが、彼らは着実に仕事をこなしてくれたらしい。ドタバタとした騒がしさは、街の中心へいくにつれて大きくなっていった。

「住民の皆さん！　少しでも遺跡から遠く離れて！」
「命あっての物だねだ！　手荷物はできるだけ少なくして身を軽くしろ！」

　アジェットとギエルドも、騎士としての本領を発揮すべく、走りながら民衆に呼びかけ続ける。
　逃げ遅れている人がいないかと、一度遺跡の方角へと戻り、そこでも同じように大声を上げた。流石に遺跡側の街周辺は、早朝駆け抜けたときと同じようにシンと静まり返っている。ここにはもう、人は残っていないだろう。

「ここら辺は、もういいみたいだね」
「だな。そろそろ俺らも逃げようぜ」

　その言葉にロンも頷き、遺跡の方角に背を向けた。そんなとき、ふと、街の外から音が聞こえ、思わず振り向いた。

「ねえ、何か変な音がしない？」
「音？　……お、確かに」
「本当だ。何の音だろう？」

　ミシッ、ピキ……バキッ

　初めは耳を澄まさなければ聞こえなかった音が、次第に耳を澄まさずとも、聞こえてくる大きさとなっていく。妙な胸騒ぎを覚えたロンは、遺跡の方角へと駆け出した。

『ロン様!?』
「おい！　待てロン！」
「そっちは危険だ！」

　レフルの驚愕する声と、二人の諌める声をロンは聞き流した。危険だなんてことはよくわかっている。だが、この胸騒ぎは、原因を調べなければ収まらないだろうと思ったのだ。いや、自分は原因を知らなければならない。
　街を抜けて雑木林に入った。入ると同時に、耳障りの悪い音の正体もまた、判明する。

「なんだ……あれ……」

　それを一言で言うなら、どろどろの水の塊だった。近くに群生する木々をすっぽりと覆い、揺ら揺らと揺れている。液体が直立している、奇妙な光景。

　ピキピキ……バキ！

　水の塊に抱き込まれている木の幹に罅が入った。初めは小さかった罅が、次第に大きくなり、最終的には根元から折れてしまう。
　水の塊は、一度直立していた部分を徐々に地面へと下降させると、地面を這うように移動していく。その際、小さく細かくなった木の破片をポトリと落としながら。まるでいらないモノを排出しているかのように。そして別の木々に近づくと、水の塊は木の幹を這いながら登っていき、近くに生えている木を巻き込みながら再び覆っていく。
　ロンは水の塊から一定の距離を保ちながら遺跡の方角へ走ると、そこには無残に砕けた木の破片が辺り一面に散らばっていた。それら全て萎びており、朽ちて割れたとしか思えない程カラカラに乾いている。そして、来るときにはあったはずの草花の姿もない。

『ロン様！　ここにいるのは危険です！　戻りましょう！』

　レフルが木々をつき抜けながら、まっすぐロンの元へとやってくる。白い容貌は、切羽詰った焦りに満ちていた。

「ねえ、レフル……もしかして、あの水の塊って……」
『……恐らくあれが、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）でしょう』

　ルーン全盛期の、古代の人々が生み出した制御不可能となった生体兵器にして、ついに目覚めてしまった古の災厄。

「木を覆ったかと思ったら、中で木が砕けて……でもって排出されたの拾ってみたら、こんな……まるで枯れ木みたいに……」

　街の住人に避難を呼びかけにいくまでは、ここにはまだ枯れるには早い木々がたくさん生えていたのだ。ここまで戻ってくるまで、一時間も経っていない。そんな短い間に木が枯れ、砕け散るなど、ありえない。

『あれは……どうやら植物が保有している魔力を吸収しているようです。ここいらに生えていた木々は、魔力を吸い尽くされたせいで、朽ちてしまったのでしょう……』

　魔力は保有する量に違いはあれど、万物が共通して持っているものである。特に生物には、動植物問わず、人間と同じく魔力を生み出すための細胞がある。魔力を強制的に吸い出されるということは、治癒のルーンを使ったロンや服従のルーンを使おうとしたエンジリカのように、身体に大きなダメージを与えられるのと同じこと。そして吸い出され続ければ、身体はいずれ限界を向かえ、死に至る。これは何も植物だけに言えることではない。

『液体の部分に触れてしまったが最後、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に魔力を吸い取られ続けるでしょう。身体が限界を迎えるそのときまで』

　ロンは背筋に走った悪寒に、思わず両腕で自分を抱きしめる。
　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は、体内で木々が粉々になると再び移動を開始した。のんびりと地を這い、吸殻を撒き散らしながら別の木へ。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の体内に取り込まれた木々は、ミシミシと音を立て、全身に罅が広がっていく。

「な、何だありゃ!?」
「もしかしてあれが災厄なのでしょうか……」
「アジェット、ギエルド」

　置き去りにした彼らもまたこちらに来てしまったらしい。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）から視線を動かし、ロンの姿を見とめると、呆れたような顔をしてこちらにやってくる。

『貴方たち、待っていてくださいと言ったのに……』
「遅いっつーんだよ。待ってられっか」

　どうやら危険だからと、空中を移動できるレフルのみがロンの様子を見にきたらしい。

「あれ……ギエルド、エンジリカどうしたんだよ」

　先ほどまでギエルドがエンジリカを抱えていたのに、彼女の姿がどこにもない。アジェットもまた、エンジリカを抱えてはいなかった。

「ワローラル女史なら置いてきた。どうせ暫く動けねえんだし、こっちで何かあったなら、身軽な方がいいだろ？」
「……アジェット、よく許可したね」
「逃げる際に拾えばいい、と言われてしまえば、こちらはもう殿下の言うことに従うしかないんだ……」

　どこか諦めた様子で、アジェットは大きく溜め息を吐く。失念してしまいがちになるが、ギエルドはルインラトゥスの第二王子であり、アジェットはそんなギエルドの護衛役。つまり、逆らうことができない立場である。
　彼らが現れて気持ちが少し緩んだのを感じるが、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の姿を視界に納めると、再び身体に緊張が走った。

「……レフル、あれ、どうにかできない、か？」
『――方法がないわけではありません』
「本当かい!?」

　アジェットが目の色を変える。ギエルドの黒灰色の瞳にも喜色が混じった。しかし、レフルの浮かべる表情は沈んでいてひどく浮かない。

『体内に取り込んでいる木々のせいで解りづらいですが……あのようなジェル状の生体兵器の体内には、働きを制御している『核』と呼ばれるものが必ずあります。人間で言うところの、心臓や脳に当たる部分です。その『核』を破壊することができれば、機能を完全に停止――殺すことができるでしょう』
「なら、今楽しく食事をしている隙をついて――」

『ただ、それはあくまで理論上の話です。体外にあるならともかく、体内にある『核』を破壊するのは容易ではありません。もしできるのならば、古の人間がとっくに破壊しているはずですから。背後から剣を刺したとしても、核までには届かず、物理的攻撃は全て液体が衝撃を吸収してしまうでしょうね……』

　ロンは苦々しげに口元を歪めた。理論的には可能でも、現実的には不可能、とレフルは言っている。

「物理的なものだけでなくて、ルーンもきっと間近で叫んでも『核』まで届かないんだろうな……」

　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は木を覆ってしまえるほどの巨躯を持つ。その分内包する体内の容積は大きく、質量も比例して多いだろう。『核』は決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を構成する大部分の液体に大事に守られ、どんな攻撃も無効化してしまう。だから、手のつけようがない。古の人間が破壊することを諦め、封印する道を選んだ理由がわかった気がした。

「そんな……それは、打つ手なしということではないですか……！」
『ええ。だから決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の近くにいるのは危険なのです。ですか

ら、あなた方もいますぐ逃げて下さい。命に関わります』
「おい、レフルゲンセル。今ここで逃げたとして……そしたらこいつはどうなる？　野放しにしておくのか？　野放しにしておく方が、いろいろとヤバイんじゃないのかよ」
『……』

　ギエルドに痛いところをつかれ、レフルは押し黙った。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）をこのまま野放しにしておけば、被害は無残に砕け散った木々だけでは済まされない。テロンダの自然を食い尽くした後は、他にも糧を求めて移動するに決まっている。そうなれば、他の街も同じように、自然を食い尽くすだろう。止めることができなれば、被害は広がり続ける一方だ。世界中から魔力を吸い取られてしまったら、人間どころか生物が生きるこなどできなくなってしまう。

「だったら少しくらいあがいてみてもいいんじゃねえか？　諦めるのはいつだってできるだろ？　――俺は王子だ。ルインラトゥスを守る義務があるんだよ」

　レフルを見据える黒灰色の瞳に宿るのは、揺ぎ無い意思。
　ギエルドは普段は飄々としているのに、性根は律儀で真面目だ。生真面目と揶揄するアジェットのことを言えたことではない。
　例え、彼が王子でないとしても、根っからのお人よしであるギエルドがこの事態を放っておけはしないだろう。そしてそれは、亜麻色の髪を持つ彼の護衛もまた同じ。

「殿下の言うとおりです。ここで諦めてしまったら、国中の人々を危険に晒すことになってしまう……それだけは絶対に阻止するべきだ」

　黒灰色と翡翠の二つの瞳を向けられたレフルは、降参といわんばかりに肩を竦めながら諸手を上げる。何だかんだで、レフルは一途な思いに弱いように思う。ロンがランとの別れを決心したときと同じように。

「で、お二人さん。熱くなるのはいいけど、実際問題どうやってあいつを止めるよ」

　ここからこっそりと様子を伺うだけでは、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）をどうこうするなど夢もまた夢だ。根性論もいいが、現実的な方法を編み出さない限り、古の災厄はなくならない。

「とりあえず、近寄って剣でも投げつけてやろうと思ってんだけど」
「うわ、思った以上に原始的！　一発で核を破壊できたら褒め称えてあげる」
「……わたしと殿下の持つ二つだけでは、圧倒的に足らないな」

　アジェットが顔を引きつらせながら、手に持っている抜き身の剣を見下ろした。ギエルドの持つ剣も一つ。そしてロンは、武器なんて持ち合わせていない。

『……数で攻めるのは、もしかしたら有効かもしれません』
「え？」
『決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は、永い時を経て封印から解放されたばかり。更に、崩

壊した遺跡の瓦礫からも自身を守るために、少なからず苦心したはず』
「そうか……今なら弱っているかもしれないと、そういうことだね？」
『ええ。あくまで、希望的観測でしかありませんが……』

　それでも、ありうる話ではある。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は、ゴーレムのように決められた動きをする自立式人形ではない。明確な己の意志を持った生体兵器だ。五千年もの封印から解放されたてで、即本調子を取り戻せるとは思えない。おまけにそれをさせる前に起きた遺跡の崩落は、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に小さくはないダメージを与えたはずだ。のんびりとした鈍い動きは、その表れかもしれない。

「今はそれに賭けてもいいんじゃない？　質より量をブチかますには、圧倒的に量が不足してるけど」
「宿舎まで戻れば、武器庫に大量の剣や槍が保管されてはいるけど……」
「流石に遠いな……」

　宿舎とテロンダ遺跡は、走っても確実に十分以上はかかる程の距離がある。往復で二十分、いや、三人で武器を抱えたとしても、一度に持ってくる量には限度があり、ありったけの武器を投げつけるには到底足りない。何度も往復する必要が出てくる。

「……危険かもしれないけど、一つ考えがある」
「何だ。言ってみろ」
「一人が決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の注意を引きつけて、宿舎までおびき寄せる。残り二人がそれより先に宿舎へ走って、ありったけの武器をある程度高い所にある部屋に運び込むんだ」
「確かにそれなら、ここまで往復するよりかは現実的ではあるけど……」

　宿舎内の移動ならば、それほど時間を有することなく、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の手が届かないような高い所に武器を集めることができる。しかし、問題は――

『ですがロン様、囮役はとても危険です。そんなことをさせるわけには……！』
「だから囮は僕がやるよ。最悪決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に捕まったとしても、死にはしないしね」

　ロンに刻まれている不老不死のルーンは、何が起ころうともロンを生かそうとする。ならば、アジェットやギエルドに任せるよりも、ロンがした方がいいに決まっている。

「ロン！　また君は自分のことを無下にするつもりか！　そんな危険なことを君にさせるわけにはいかない。その囮役、わたしがする」

「……自分を犠牲にするつもりなんて、これっぽっちも思ってないよ」

　突然いきり立ったアジェットに、ロンは務めて冷静に、アジェットの翡翠の瞳を見上げた。

「僕ならもし追いつかれそうになっても、ルーンで一時的に動きを止めることができるだろ。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）にどこまで通用するかはわからないけど、できないよりはマシだ。それに僕が言いだしっぺなのに、それを誰かに押し付けるなんて嫌だね。危険なのは僕だけじゃない。アジェットもギエルドも同じだ。僕だってお前らを危険に合わせたくないんだよ」

　アジェットがロンを危険に合わせたくないと思うならば、逆もまた然りだ。
　彼らからしたらロンは年下に見えるのだろうが、実際はロンの方が何倍も年上で、一方的に守られることなど望んではいない。

「絶対に無茶はしないって誓う。だから僕にやらせてよ」

　アジェットと、ずっと黙って聞いているレフルとギエルドを交互に見つめる。すると、頭にポンと何かが乗せられた。ギエルドの腕がロンに向かって伸ばされており、彼の手だということが判明する。

「そこまで言われちゃ、仕方ねえな。ロンの意見を尊重しようぜ。いいだろ、二人とも？」
「……わかりました」
『ロン様、決して無茶だけはしないで下さいね』
「サンキュ。わかってる」

　理解を得られれば、することは決まっている。アジェットとギエルドはそっと草陰から抜け出ると、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）から一定の距離を保ちながら街の方角へと向かった。途中、放置してきたというエンジリカも拾っていくだろう。

「レフル、お前も二人の方に行って。準備が終わったら、光って合図してほしいんだ」
『……そういうことでしたら、参りましょう。お気をつけて』

　レフルも二人の後に続き、ロンの元を離れる。一人きりになったロンは、離れた場所で木の魔力を吸い取っている決して触れてはならないモノを一睨みすると、草陰から飛び出して散らばっている木片を拾った。

「こっち向け！　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）！」

　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に近づいて木片を投げつける。液体の中にズブリと入った木片は少しの間身体の中に留まると、ペッと吐き出すように体外へと出されてしまった。こちらには見向きもしない。

「だったら――こっちを向け（イトツロンス・ヘレ）！」

　普通の言葉で言っても、モノをぶつけてみても駄目でも、ルーンならばきっとこちらに注意を向けるはず。問題は、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）にどれだけルーンが掛かるかだ。これでもし決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）がロンに注意を向けなければ、ルーンが効かないということになる。

だがロンは、その可能性は低いと見ている。破壊するような、物理的ダメージを与えるルーンに対しては相当な耐性はあるのだろうが、動きを止めるような、行動を制限するルーンならば、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に有効であると。
そうでなければ、古の人間は決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を壊すどころか封印することすら叶わなかっただろう。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の動きを止めることができなければ、封印のルーンを刻む余裕などあるはずもない。
木々を覆っていた決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が、まだ吸収中であるにも関わらず、ゆっくりと地面へと下降していく。確信を得たロンは、ぐっと拳を握った。

（よし、効いた……！）

平面へと降り立った決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は、他の木に移るでもなく、別の場所へ移動するでもなく、じっとその場に佇んでいる。縦に長かった体が、今度は地面に合わせて横に長い身体となったが、こうして見ると厚みもかなりのものだった。目測でしかないが、五十センチくらいはあるかもしれない。木を覆ったように、大人の人間すら簡単に飲み込んでしまえる大きさだ。
ジッと決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を睨みつける。体内にあった木片は既に体外に放り出したのか、それらしき姿が見えない。だからこそ漸く見つけることができた。とても小さな黒い球体を。あれが決して触れてはならないモノの心臓部である『核』に違いない。

（思った以上に小さいな……これは相当数打たないと当たらな――）

顎に手を当てながら思考に耽っていたロンは、ある違和感を感じて思考を中断する。
決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）とロンの距離が明らかに縮まっていた。それだけでなく、五十センチはあった身体の厚みが、半分にまで薄くなっている。そして薄くなった分だけ、ロンに近づいていることがわかった。ゾッと背中に悪寒が走る。

「――僕を食いたきゃこっちこい！」

危うくエサにされかけるところだったロンは、纏わりついた悪寒を振り払い、街に向かって走りだす。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は地を這いながら、ロンの後を追いかけ始めた。

（危なかった……！　でもこれはこれで結果オーライ、だね）

決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）はただ闇雲に襲い掛かる兵器ではなく、明確な意志を持った生体兵器だということを、今更ながら実感する。ロンに気づかれないよう近づき、隙をついて丸飲みするつもりだったのだろう。元より油断していたわけではないが、より一層警戒を強める。
決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）から完全に逃げ切ってはいけないので、ロンは後ろを時折振り返りながらスピードを調節した。思っていた以上に、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の足は遅い。これくらいならば、余裕を持って合図を待てるだろう。そう思っていた矢先の出来事だった。

「……な、どこ……？」

「お……！　僕…こ……！」

　どこからともなく聞こえてくるのは、幼い子供の声。住民の避難が大分進んだからこそ、街の中に取り残されている人間はいないと判断したからこそ、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を宿舎までおびき寄せるという手段をロンは選んだというのに。

（まだ誰か残ってた!?）

　ロンは逃げ遅れた人間の場所を特定しようと、耳を澄ました。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を彼らがいる場所に引き込んでしまうわけにはいかない。

（一体どこに……ってあ！）

　回りの様子を伺っていると、突然決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の進路方向が変わった。ロンの方にではなく、丁度手前にあった道を曲がっていく。

「ま、待て！」

　ロンは慌てて決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の後を追っていく。角を曲がると、その先に小さな黒影が二つ見えた。声の幼さからして、それはまだ幼い子供だろう。ロンよりも簡単に捕らえられる獲物として、標的を変えたのだ。

「きゃあああああ！　何あれぇ！」
「こ、こっちくるなぁ！」

　はっきりと聞こえてきた子供の悲鳴に、ロンはチッと下を打つ。

「そこを動くな（ドントモヴェ・テャト）、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）！」

　彼らに逃げる隙を与えるためにルーンを唱えた。しかし、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の動きは止まるどころか、更に子供がいる方向へと近づいていくばかり。ルーンが効いていない。

（ルーンが効かない……いや違う。こいつ、自分の名前を認識してないんだ……！）

　先ほどのルーンは効いたのだから、これはギエルドにルーンが掛からなかったときと同じ状況と考えていいだろう。あくまで『決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）』とは、人間側が名づけた呼び名であり、本当の名前ではないのだ。

　むしろ、古の時代を考えたら真の名前など兵器に与えているはずがない。敵に漏れてしまったら、ロンがしようとしたのと同じように動きを封じられてしまうのだから。

（って、そんなこと考えてる場合じゃない！）

　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）はもう子供たちの間近まで接近しつつあった。彼らは悲鳴をあげるばかりで逃げようとしない。恐怖に身が竦み、動けないのだろう。だからといって、動きを封じるルーンをそのまま紡ぐことはできない。そうすれば決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）だけでなく子供達まで動けなくなってしまう。それでは意味がない。
　そこがルーンの万能でないところだった。掛けたい相手を絞るには、その相手の真の名を知らなければならない。

（ああ、くそ！　どうしたら――ってあの二人は！）

　怯える子供の影は近づくにつれはっきりとした姿をロンにも見せてくれる。短い茶色の髪の少年と、赤毛を可愛らしく結い上げた少女。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の名はわからずとも、この二人の子供の名前は記憶していた。

「空に浮け（フロアトインエムプトイ）、リデル、ラーラ！」

　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が後一歩の距離まで近づいたとき、二人の子供の小さな身体が宙へと浮上しはじめる。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は自身の身体を縦に伸ばすが、二人が上空へ移動する速度の方が速かった。
　小さな身体はあっという間に小さな点になっていく。

「うわぁ！　すごおおおい！　お空飛んでるう！」
「高いよお！　怖いよおお！」

　上空から聞こえる嬌声と悲鳴に苦笑しながら、獲物を見失った決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が、標的を再びロンに切り替えたのがわかった。
　ロンはちらりと上空を見遣る。上空にいるリデルとラーラは空の上にいることに気をとられていて、声のトーンを落とせばロンの声なんて耳に入らないだろう。

「暫くその場で待機してろ（スタンドブイオンテャトスポト・フォルアウィレ）」

　小さめに、だがはっきりと告げたルーンは、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）にはしっかりと聞こえたらしく、ピタリと動きが止まった。ロンは一度決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）から距離をとると、息を大きく吸いこむ。リデルとラーラがいる上空を見上げ、少しでも声が届くようにと、口の周りを手で囲んだ。

「ここへ戻ってこい（レツルン・ヘレ）、リデル、ラーラ！」

　キャッキャと騒いでいる二人に声が届いたか不安になるが、小さな点が、徐々に大きくなっていくのがわかった。ルーンが無事にかかり、下降している。

「あ、あのときのちっちゃなお兄ちゃんだ！」
「僕は小さくないっての！」
「痛ぁ！　叩かないでよぉ」

　上空から降りてきたリデルは、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の前で怯えていた姿は微塵もなく、ニッコニッコと上機嫌だった。どうやらリデルは、一時的に空へ避難したルーンがお気に召したらしい。ロンに頭を叩かれてもなお、笑顔は曇らなかった。

「うっ、ひっく。こわ、怖かったよう……！」

　彼とは正反対に、ラーラは着地するやいなや、すぐさまロンに飛びついてきた。背中に腕を回してぎゅっとロンの身体にしがみつき、ボロボロと涙を流している。

「えーと、あーと……うん、もう大丈夫だから」

　生まれてこの方、泣いている子供を宥めるなんてことをしたことがなく、ロンの記憶の中に対処の仕方がなくて困惑する。考えた末、ロンがランと出合ったときのランの行動を思い出しながら、ラーラの背中をポンポンとさすってやった。

「ねえねえ、ち――お兄ちゃん、さっきのあれって、お兄ちゃんのルーンなの？」
「……そうだよ。それはともかく、二人共、なんでこんなところにいるのさ。騎士から逃げるように言われていただろ？」
「そ、それは……」
「――あたしが悪いの！」

　ロンの問いに、罰の悪そうな顔をするリデルに変わって、ラーラが甲高い声を上げた。目にはまだ一杯に涙が溜まっていたが、それでも少しは落ち着きを取り戻したらしい。

「あたしが大事なお人形、おうちにわすれちゃったから……もどってきちゃったの。リデルはあたしにつきあってくれただけなの。リデルは悪くないのよ！」
「成る程……その大事な人形は持ってこれた？」
「うん！　ここにあるよ！」

　ラーラはロンの身体から手を離すと、履いているスカートのポケットに手を入れる。ラーラの小さな手よりも更に小さな子猫のヌイグルミが姿を現した。

「『てんごく』に行っちゃったおばあちゃんが作ってくれたの。あたしの宝物なの」
「そっか、持ってこられてよかったね」

　ロンはラーラの頭を軽く撫でた。本来の目的を果たし、いざ親達の元へ戻ろうとした途端、回りに誰の姿もないことに気づいたのだろう。そして困惑しながら街を彷徨っているうちに、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・

トウクヘル）と遭遇してしまった。
　こうして会ったのが、偶々名前を知っていた彼らだったことは、不幸中の幸いだろう。もしも名前を知らない相手だったならば、助ける手段を講じえず、見殺しにするしかなかったかもしれない。

「用が済んでるなら話は早い。二人共、騎士団の宿舎がどこにあるかは知ってるよね？」
「うん、わかるよ！　アジェットとギエルドが住んでるところでしょ」
「あたしもわかるわ！」

　リデルが元気よく手を上げながら応えると、それにラーラも続いた。ロンは内心よし、と呟く。

「なら、二人はこのまま宿舎の方に行って。そこにはアジェットとギエルドがいるから。今から親達のところへ行くよりかは、分かり易くて安全だろ？」

　騎士団の誘導から逸れてしまった以上、小さな彼らがその誘導に追いつくのは容易ではない。だが、アジェットとギエルドがいる宿舎へ行かせれば、後はあの二人が安全な場所でじっと大人しくさせるだろう。ついでに、たった二人で勝手に街中へ戻ってきたことへの説教もしてくれるに違いない。ロンの方からも言ってやりたいのは山々だが、今は説教よりもリデルとラーラの安全確保が第一優先だ。それに説教なんて、生きてさえいればいつだってできる。

「途中寄り道せずに、まっすぐ宿舎へ行くんだ。そうすれば、アジェットとギエルドが助けてくれるから。――二人で行けるね？」
「うん、大丈夫！　――って、お兄ちゃんはいかないの？」
「まあね。さっきどろどろした水の塊みたいなヤツいただろ？　今、アジェット達とあいつを何とかする作戦の実行中なんだ」
「うわあ、かっこいい！　お兄ちゃんすごいなぁ」
「そ、それ、一人で大丈夫なの？」

　リデルが瞳をキラキラさせたのとは裏腹に、ラーラは不安げに顔を曇らせた。恐怖があっさり興味に切り替わったリデルとは違って、彼女はまだ残っているのだろう。得体の知れないモノへの恐怖を簡単に捨てられないのは仕方がない。
　ロンは安心させるため、ラーラの前で腰を屈めて視線を合わせる。

「僕なら大丈夫。その証拠に、ラーラ達をこうやって助けられただろ？　余裕がなかったら、誰かを助けるなんてできないよ。心配してくれてありがとね」

　ポンポン、と軽く頭を撫でると、不安そうな顔が若干和らぐ。

　ロンはちらりと決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）がいる方向へ視線をやった。まだルーンは切れていないようで、こちらに来る気配はない。それでも警戒は解かず、リデルとラーラに視線は戻しても意識は向けたままにする。

「リデル、ラーラ、ちゃんと僕の言う通りにできる？」

「大丈夫だよ！　寄り道しないで、ちゃんとまっすぐアジェットとギエルドのところまで行くよ！」

　元気よく返事をしたリデルは、颯爽と宿舎の方角へパタパタと走っていく。数メートル進むと大きくこちらに手を振った。

「ラーラ！　早くこいよー！」
「う、うん！　ちょっと待ってて！」

　ラーラは呼んでいるリデルに返事をすると、ロンと向き合った。ロンはまだ何かあるのかと首を傾げながら立ち上がる。

「たすけてくれて、ありがとう！　あと、前にした約束もちゃんと守ってくれたね」
「約束？　ああ……」

　そういえば以前彼らと会ったとき、またルーンを見せる約束を交わしたことを思い出す。彼らを助けたことにより、結果的にルーンを披露することになっただけだが、彼女にとってはそれでもいいらしい。まあ、宙を移動するなど、ルーンを使わなければありえない体験だが。

「あたし達との約束守ってくれたから、絶対また約束守ってくれると思うけど……でもムリしちゃだめだよ？　ロンはアジェットやギエルドと違ってお姉ちゃんなんだから！」
「え……？」

　手を腰に当て、まるでこちらを言い聞かせるようにラーラが唇を尖らせる。ロンは思わずポカンと口を開けた。

「うん、それだけ。じゃあね、ロンお姉ちゃん！」

　ラーラがニッコリ笑顔でリデルの元へ走っていく。二人は仲良く手を繋ぎながら、宿舎の方へ向かっていった。

「あー……そういやさっき抱きつかれたっけなぁ。サラシ巻いてるわけじゃないし、そりゃわかるか」

　ロンはボリボリと照れくさげに頭をかいた。『お姉ちゃん』なんて呼ばれ慣れてなくて、少しこそばゆい。
　大した大きさではないからと、胸には何も巻いていない。普段は全くわからずとも、正面から触れれば、そこに女性特有の膨らみがあるとわかるだろう。ラーラが不安げな表情を浮かべていたのは、ロンが少年ではなく少女であり、危険なことをすることを心から心配してくれたからだろう。生意気だが、心優しい少女だ。

「っと、こんなことしてる場合じゃなかった」

　ロンはリデルとラーラの姿が、完全に視界からいなくなったのを確認すると、踵を返してまだ止まったままでいるであろう決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の様子を見に戻る。物陰から姿を現す気配は未だない。

（おっかしいな……暫く（フォルアウィレ）って言ったから、そろそろ動き出してもいいはずなのに）

　ルーンの効果は、基本かける側の魔力の量に依存する。ロンの場合は大体五、六時間程度。流石にそんなに長い時間決して触れてはならないモノを停止させても全く意味がないため、呪言の中に『暫く（フォルアウィレ）』と修飾することにより、効果時間を限定できるのだ。この場合、効果が五・六時間から数分ほどへと時間が大幅に短縮する。

（……嫌な予感）

　角を曲がる寸前、突然頭上に影が差す。ぶるっと背筋に悪寒が走ったロンは、キュッと足を急停止させ、後ろに大きく跳ねた。すると、先ほどまでロンがいたところにどろどろとした水の塊がボタボタと落ちてくるではないか。
　顔を上に上げると、決して触れてはならないモノが上から降ってくるところだった。死角の位置である壁にペタリと張り付き、ロンが戻ってくるのを待っていたのだろう。

（戻ってくるってわかってるなら、追い掛け回すより待ち伏せした方が効果的だけどさ！）

　恐らく決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は、自分が今本調子でないことがわかっている。だからルーンが解けてもすぐに姿を現すことはせず、待ち伏せして急襲すること選んだ。

「あ！　待てってば！」

　そして急襲が失敗してしまった決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は、ロンを捕らえることは不可能、と判断したらしい。少しずつロンから距離をとり始め、近くに丁度生えていた木に向かっている。このままでは、レフルの合図があったとしても、宿舎の方におびき寄せることができない。

（いや待て……宿舎には今リデルとラーラが向かってる……。少し時間を置いた方がいいかもしれないな）

　ロンは決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）から近すぎず離れすぎずという微妙な距離をとり、動きを観察した。合図があるまでは、ここら辺をうろうろしている方がいいかもしれない。あくまで今はアジェット達が準備をするまでの時間稼ぎであり、何も、無理に追い掛け回される必要もないのだ。

　そうと決め、暫く傍観に徹しようとしたそのときだった。宿舎のある方角からチカチカと閃光が放たれたのは。

「え、もう!?」

　考えるまでもなく、準備が整ったというレフルからの合図だろう。リデルとラーラは宿舎まで辿り着いただろうか。

（……うん、僕が行くまでははにはついてるだろ）

　そう結論付けることにし、木々の魔力を吸い尽くした決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を睨みつけると、のろのろと次の獲物を探し始めているところだった。

「僕を狙え（アイムアト・メ）！」

　ピタリ、とロンがいる方向とは正反対へ行こうとしていた決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の身体が一度止まった。そして身体全体を反転させることなく、そのままの体勢からロンの方へと歩み始める。確実にロンに狙いを定めた動きだ。

（よし！）

　ロンは背後を伺いながら、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に追いつかれない程度の速度で宿舎へと向かう。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は不毛な追いかけっこに飽きることなく、ずっとロンの後を追いかけてきた。

（にしても……想像以上にルーンの効きがいいな）

　止まれと言えば止まり、こっちを向けと言ったらあっさり意識をこちらに向けた。どうしてこうも都合よくルーンが掛かるのだろうとふと疑問に思ったとき、ロンを全く無視して木々の魔力を吸っていた姿を思い出す。
　木々よりも、人間が持つ魔力の方が保有量は大きい。にも関わらず、近くにいるロンに狙いを定めず動けない木々に狙いを絞っていたのは、レフルの言うとおり本調子でないまま受けた遺跡の崩落のダメージが大きかったせいではないだろうか。魔力が多い方の動き回る獲物よりも、少なくても確実に魔力を吸収できる獲物を優先する。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が本調子ではないという確信を得た気がした。

（もしかして今なら、破壊系のルーンで完全に倒すことできるんじゃ――って、駄目だ。効果を絞れないから、周りにある家まで壊れる……）

　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に向かって破壊を意味するルーンを紡げば、古の人間の念願が叶うかもしれない。だが、動きを止めたりするルーンと系統の異なる破壊のルーンにまで、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に効く保障はなく、下手をすれば周りにある家々だけが無残に倒壊してしまうという惨事になりかねない。流石にそれには抵抗があった。
　こちらはまだ、やれることが残っているのだ。周りにある建物を崩壊させてでも倒すという選択肢は、やれることをやりきった後の最後の手段だろう。人間にしろ建造物にしろ、被害が少ないことに越したことはない。

（宿舎、見えてきた！）

　順調に宿舎までの道のりを辿っていくと、漸く宿舎の屋根が見えてくる。あと少しだ。
　近づいて行くにつれ、連なっている窓の一つが開いているのが確認できた。高すぎず、かといって低すぎない、丁度おあつらえ向きといえる二階の一室。その付近に、ちょろちょろと飛んでいる羽を生やした小さな人間がいる。

『ロン様！』
「レフル！」

レフルがロンに気づくと、窓から二人の青年が顔を出す。アジェットとギエルドだ。

　ロンは今一度後ろを振り返り、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）がロンを目指しているのを確認する。

「二人共！　邪魔だから一端中に引っ込んでて！」
「邪魔っておま……」
『そこをどきなさい、二人とも。ロン様が中に入れないではないですか』
「あ、そういうことか」

　レフルがロンの断片的すぎる言葉を正確に訳すと、彼らは納得がいったとばかりに顔を引っ込める。そのとき丁度ロンは、その一室の真下へと辿り着いていた。
　決して触れてはならないモノが蠢動しながらロンの背後へと接近してきていた。表面に立つ漣が、気味の悪さを掻き立てる。身体を次第に横へと広げ、逃げ道を塞ごうとしていた。

「浮け（フロアト）、僕の身体（ムイボドイ）！」

　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の身体の一部がロンに触れる寸前、ロンの身体は浮遊感に包まれる。重力に逆らい、上昇していく身体。二階の開いた窓のところまで昇ると、縁の部分を手で掴み、腕にぐっと力を入れて上へ浮こうとする身体を室内へねじ込んだ。

「着地する（イトランドス）」

　続けてルーンを紡ぐと浮遊感がなくなり、ロンは不安定な体勢のままべしゃりと尻から床へと落ちた。鈍痛が表面を這って全身に伝わっていく。

「いったたたた……」
『ロン様！　大丈夫ですか!?』
「ロン！　大丈夫かい!?」
「何とかなったみたいだな」

　過保護な二人の反応に対し、ギエルドは窓の下にいるであろう決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を見下ろしていた。ロンは痛む体を叱咤して立ち上がる。当然ながら、この部屋にいるのはアジェットとギエルド、そしてレフルのみで、他の人間の姿はない。後は、かろうじて部屋を出るための扉が開く程度にスペースを埋め尽くしている、大量の武器の数々くらいか。

「リデルとラーラは？」
「あの二人なら、最上階の一室で大人しくしてもらってるよ」
「時間がなかったから、お説教は後回しにしてな」

　ニヤリとギエルドが不敵な笑みを浮かべる。これであの二人の安全は確認された。内心ホッと安堵する。だが安心する以外にも、もう一人別の人間のことも聞かねばならない。

「――エンジリカはどうした？」
「……彼女の自室へ。動き回れる状態ではなかったけど、念のために鍵も掛けておいた。宿舎は現在空っぽだから、誰の助けも借りることはできないだろう。逃げられないよ」
「当然の処置だわな。ま、あれが宿舎内に入りさえしなきゃ安全だろうよ」

　騎士団はエンジリカの命により、住民の避難誘導に全員が繰り出している。古の災厄が街中にどんな被害を撒き散らすかわからない以上、一番優先すべき事柄は住民の安全だ。彼らもわかっているからこそ、総出で取り組んでいるのだろう。それがエンジリカの身柄を保護することができないことに繋がっていても。エンジリカが目指しているものは民のための政治体制。ここで住民のために動かなければ、エンジリカの意に反することになる。

「それよか、今すぐあいつを何とかしようぜ。放って置いたら逃げられちまう」
「だね。お前ら耳塞いでろ。――そこで止まってろ（テェン・ストプ）」

　アジェットとギエルドが耳を塞いだのを確認し、目の前でロンがいなくなったことに困惑して、もぞもぞとその場で佇んでいる決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に向かって呪言を紡ぐ。ルーンを掛けた直後、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）は漣すら立てず、その場にピタリと止まった。

「よし、全部投げんぞ！」
「ロン、全て抜き身だから、怪我をしないように気をつけて」
「りょーかい！」

　室内に運び込まれた大量の剣やら槍の刃先に気をつけ、両手で柄の部分を握り締めてから、窓の外の下にいる水の塊に投げつける。

「でりゃあ！」

　三人で数回繰り返すだけで、既に決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の身体中に剣や槍が突き刺さった状態となる。隙間なく投げても柄同士がぶつかってお互いをはじき出してしまうため、一度投げるのを止めて様子を見た。

「うげ」
「……まあ、予想はしてたけど」
「なんてことだ……」

　突き刺さった剣は、ずぶずぶと決して触れてはならないモノの体内に沈んでいったかと思うと、ピュッと勢いよく体内から飛び出し、カランコロンと地面へと転がる。差し込んだ剣や槍は、全て『核』を貫くことなく、吐き出されてしまった。槍に関しては柄の部分が落下の拍子に砕け散っている。槍の柄の材質は木だ。そこから魔力だけを吸収したのだということがわかり、思わず口元が引きつる。

『やはり、液状の身体が、衝撃をいなしてしまったのですね……』
「まだ諦めるのは早いだろ。手当たり次第投げるぞ！」

　苦々しげに言葉を漏らすレフルに、ギエルドが苛立ちの混じった声をあげた。用意されている武器はまだ大量に残っている。彼の言うとおり全てを終わらせていないのに、ここで諦めるわけにはいかない。

「武器同士で幾つか弾かれてもいいから、とにかく数投げよう。間隔あけたら、全く同じ結果になるよ、きっと」
「そうだね。生半可な量では先ほどの二の舞になるだけだ」
「口開くよりも身体動かすぞ！　おらあ！」

　ギエルドが長身を生かし、腕を大きく伸ばして槍を振りかざす。勢いを得た槍は落下のスピードも合わさって、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に深々と突き刺さっていく。
　休みなく剣や槍を投げ落としていくと、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の身体はまるで剣山のように幾多の刃物が突き刺さっている状態となった。同時に、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を囲うように武器が散乱し始める。体内から吐き出されてしまったものだろう。しかしそちらに気をとられるわけにはいかず、一心不乱に投げ続ける。
　山のように積まれていた武器の数々は、あっという間に数を減らしていった。

「最後の、一本！」

　ロンが最後に放った剣は、ずぶりと音を立てて決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に突き刺さった。暫く様子を伺うと、先に投げつけた剣や槍が体外へと排出され、そして最後の剣もまた、一度体内に入り込んだと同時に、あっけなく体外へと放たれた。

「ちくしょう……！　手詰まりか！」
「簡単にはいかないとは思ってはいましたが……」

　窓の下には、何一つ変わらない状態の決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が佇んでいる。ロンが掛けたルーンにより動き回ることはできないが、体内構造の働きまで止めてしまう力はなく、核は体内の液体により厳重に守られているのだろう。

「他の手考えるぞ！　ロン、あいつはいつまであのまま止まってんだ？」
「今は昼前だから……夕方になる前くらいまではあのまま、かな」
「それなら、先にリデルとラーラを街の外へ避難させましょう。そして騎士団と協力して街に厳戒態勢を引かなければ。古の災厄を、テロンダの外に出すわけにはいきません」
「だな」
『対処はまた、彼らを避難させてから決めましょう……今はここにいても何の意味もありません』

　二人はそうと決めるやいなや、窓に背を向けて扉を開く。ロンもレフルと共にその後に続いて部屋を出て上の階を目指すが、彼らのように頭を切り替えることができない。

（今はルーンが効いてるからいいけど……解けた後、またあいつにルーンが掛かるんだろうか……）

　ロンの懸念はそれだった。今打てる手を打ってしまった以上、この場に残っているリデルとラーラの安全の確保を優先した方がいいのはわかる。だが、もしテロンダの街を封鎖したとしても、そんなことは決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に全く関係のないことだ。むしろ道を塞ぐ人間を、喜んで襲い掛かる可能性の方が高くはないだろうか。

（それにルーンが解けるまで放置するってことは、それまでに本調子を取り戻すかもしれないってことだ）

　のろのろとした動きも、ルーンがあっさりとかかるのも、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が本調子ではないからという理由がきっと大きい。こんなにあっさりルーンがかかるのならば、遺跡の石版に「多くの犠牲を払いつつも」という一文が載るわけがなく。本来は動きを封じるのでさえ、複数の人間が同時に呪言を唱えるような大掛かりなものでなければ、掛からないのではないだろうか。
　一度考え出した後ろ向きな思考は止まらず、ロンの胸の中で警鐘がひたすら鳴り響く。
　このまま決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を放置するのはよくない。だが、出来ることはしてしまった。放置しないにしても、することがないのだ。

（核は体内の液体が守って手出しができない……でもって決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に直接触れるのは自殺行為だから、さっきみたいに遠くから武器を投げ込むしか核を破壊する方法はなし……破壊のルーンを紡げば周りの建物が壊れるし……何とか核だけ壊せる方法は――）

　思考の波の中、一つの閃光がそれを打ち破る。あった。たった一つだけ確実に核のみを破壊できる方法が。
　その方法が確実に可能と言えるのは、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が本調子ではないと言える今だけ。そしてそれを実行に移せるのも、ロンだけだ。

「アジェット！　悪いけどちょっとこれ預かってて！」
「え!?」

　ロンは走りながら首飾りを外し、前を走るアジェットに半ば押し付けるように魔石（リフェ）を手渡すと、くるりと踵を返した。

「おい！　ロンお前どこへ！」
「ちょっとした野暮用！」
『野暮用？　……！　ロン様、まさか！』

　レフルの上擦った声を聞き流し、ロンは来た道を戻り始める。どうやらレフルはロンが今からしようとしていることを感づいてしまったらしい。チッと軽く舌を打った。やはり付き合いが長いだけあり、レフルはロンの思考回路を把握している。

『お二方！　ロン様を追いかけて止めて下さい！　早く！』
「え、あ、ああ！」
「――おいロン！　お前何をしでかすつもりだ！」

　レフルに急かされ、アジェットとギエルドがロンの後を追ってくる。コンパスの長さや進む速度自体はあちらが上だ。本気で追いかけられたら、すぐに捕まって理由を詳しく説明させられるだろう。そうしたら彼らからも強く止められるに違いない。それでは困るのだ。たとえそれがロンのことを想ってのことだとしても。

「暫くそこで待ってろ（ワイトフォルアウィレ・テェレ）！」
「げ！」
「うわ！　足が……！」

　一度だけ振り向いてルーンを紡ぐと、彼らの足がピタリと止まった。上半身は問題なく動くが、足は床に縫い付けられたかのように動かすことができないでいる。これでルーンが掛かっている間、彼らはロンを追ってくることはない。

『ロン様！　お待ち下さい！』
「待てと言われて待つ馬鹿はいないってね！」

　唯一通常のルーンを無効化する精霊のレフルがロンの後を追ってくるが、ロンに触れることのできないレフルにロンを止めることなど不可能だ。わざとらしく明るく弾んだ声で返事をすると、レフルはロンの顔の真横にまでやってきた。浮かべる表情は酷く焦っている。

『ロン様！　お止め下さい！　まだ他に方法はあるはずです！　ですから……！』
「確かにあるかもしれないけど、ないかもしれない！　今からやる方法だって、確実性が高いのは今しかないんだ！　分かれ！」
『分かりたくありません！　どうしてあなたは、自分の身体を大事にしてくれないんですか!?』
「……」

　レフルはロンがランと別れてから、常にロンのことを考えて行動してくれている。ロンがレフルの契約者となったからではなく、一人になったロンを心配してのことだろう。彼は出会ったときからランと同じく、親愛の情で接してくれていた。

「……死なないからいいや、って思ってないっていったら嘘になるけど」
『ならば！』
「でも、それだけじゃないんだ。死なないからじゃなくて、もっと別の理由がある」

　ロンは先ほどまでいた部屋へと戻ると、開いたままの窓から下を見下ろした。そこには変わらず決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が停止したまま佇んでいる。

「守りたいと思ったんだよ。こいつからあいつらを。それって、レフルが僕のこと心配してくれるのと同じじゃないかな」

　ランと別れてからは、人と深く接することをしなくなった。だからレフルがロンのことを心配してくれるのを当たり前と感じ、ときには言いくるめて効率を重視していた。それを温かくて尊いものだということをずっと失念していたのを思い出せたのは、彼らのおかげだ。ロンを不老不死のルーンが掛かっているからと特別視するのではなく、一人の人

間として接してくれたから。

「それと今なら、僕を庇って怪我をしたランの気持ちがわかるよ。自分の身体がどうなってもいいっていう卑屈な考えじゃないんだって。大事だから、守りたいから身体を張ってでも助けたくなる。理屈じゃないんだ」
『ロン様……』

　ロンは眼下で佇む決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を睨みつける。今はロンの掛けたルーンにより、大人しく止まっているが、きっちり五、六時間掛かったままでいてくれる保障はなかった。本調子を取り戻せば、その場で自由を取り戻してしまうかもしれない。そうなったら、国を守ろうと太刀打ちしようとする彼らはどうなってしまうか。

「大丈夫、僕は絶対死なないよ。ルーンが掛かってるからじゃない。まだルーン解いて本当にやりたいこととか、目指してることとか、何にもないのに人生終わらせるなんて、つまらないじゃん」

　不老不死のルーンを解いた後のこと。それをロンはまだ全く考えていない。だが、アジェットやギエルドのように、何か生きがいのようなものを見つけられたら、楽しく生きられるのではないかと思っている。
　今はなくとも、いずれは見つかるかもしれない。それまでは、己に掛けられたルーンを解くことを第一に考えていこう。与えられた時間はたっぷりとある。

「じゃあ行って来るわ！」
『ロン様！』

　ロンは窓の縁に手をかけ、軽快な動きで飛び降りた。下にいる決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）のもとへと。

ざぶんと大きな音を立てたのにも関わらず、飛沫は全くあがらなかった。水の塊は飛び込むのに深さが足りないかと思われたが、足が着水直後、まるで引っ張られるかのように全身が体内へと吸い込まれる。

（っ……！　力が、はいらな……）

　ロンは全身から力が抜けていくのを感じた。間違いなく決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に魔力を吸収されている。そしてこのままいけば、細胞からも魔力を無理やり吸い出されるだろう。

（核は……どこ!?）

　力が入らない手足を気力だけで動かす。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の体内はやはり液体と同じようで、少しでも身体が動けば浮力によって移動することができた。
　皮膚から感じる決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の体内はとてもひんやりしていて肌寒い。なのに全く身体は冷えてくれないどころか、体温は急速に上昇していく。魔力がロンの体内から放出され続けている限り、体温の上昇は続くだろう。細胞から無理やり魔力を搾り取られるまで、時間がないことを示している。

（うぐ……。あ、あれ……）

　透明な世界が広がる視界に、小さな黒い塊が霞んで見えた。ロンは腕に力を入れて手を伸ばす。漕ぐように片方の腕を振って、黒い塊が眼前へと近づいた。
　ロン以外にもう一つ存在する体内の異物。それは一度だけ見た、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の核に他ならない。

（この距離なら、いける……！）

　ぼやける視線を双眸を窄めることで明瞭にする。腹部に力を入れ、ロンは口を開こうとした刹那、

「――ガッ、ごふっ！」

　全身に激痛が迸る。手足だけでなく、腹部、胸部、背筋、腰、そして顔からも。僅かに開かれている視線に、紅い色が広がっていくのが見えた。噴出した血だ。

（核、は……目前、なの……に！）

　激痛による悲鳴を、直接口に出さないので精一杯だった。ここで一度口を開けば、口内に液体が入り、体内にも決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を取り込んでしまうことになる。しかし同時に息を吐き出してしまったため、息苦しさがロンを襲った。

（負ける、もんか……！）

　ここで諦めてしまえば、不老不死のルーンにより死ぬことのないロンは、永遠に魔力を吸い取られ続けることになってしまう。そんなことは絶対に嫌だ。
　核は変わらずロンの眼前にある。まるで苦痛に喘いでいるロンを悠然と見物でもしているかのよう。

（一言……たった一言でいいんだ……！　耐えてくれ、僕の身体……！）

　激痛と息苦しさに耐えながらも、ロンは核に向かって小さく言の葉の紡ぐ。

「……壊れろ（デレオ）！」

　腹から搾り出した声は、一体どれくらいの大きさだったのか。蚊のなくような小ささだったかもしれないし、普通の声量だったかもしれない。
　ルーンを紡いだその直後、ロンの視界に閃光が走る。眩い光りにロンは思わず瞼を閉じてしまったが、しかしその寸前に確かに見た。黒い塊に明確な罅が入っていくのを。ロンの紡いだルーンは、しっかり核へと届いていた。

（やった……核、壊れたんだ……！）

　それを裏づけするかのように、液体の中にいた身体が、突如平たいところへどさりと落とされる。頬に触れるざらざらとした砂利の感覚からして、ここは間違いなく地面。そして何より、水中にいるような浮遊感がなくなり、息苦しさから解放された。
　終わった。全てロンが望んだ通りに。

『ロン様！』

　遠くでレフルが呼んでいる声がする。しかし、それに返事をする余力は最早ロンに残されてはおらず、そこでプツリとロンの意識は途絶えた。

「ロン！」

　ルーンから解放され、自由を取り戻した足が真っ先に向かったのは、先ほどまで使っていた部屋。野暮用と言ったロンがそこへ向かったという確証はないが、ロンを止めてほしいと必死に叫んでいたレフルの様子からして、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）を一人でどうにかしようと向かったに違いない。それは併走するギエルドも同じ考えのようだった。

　開いたままの部屋の扉の先に、同じく開きっぱなしの窓。走ってきた勢いのまま窓の下を覗くと、離れた地面に横たわる一人の少年と、その周辺を飛んでいる透き通った羽を持つ小さな人間がいた。

「あの野郎……やっぱり無茶しやがったな！」

　言うなり、ギエルドは縁を掴んで窓の外へと躊躇なく飛び出した。アジェットもまた、それに続いて飛び降りる。ここは二階だが、飛び降りるのが難しいほど高いわけでもない。

「レフルゲンセル殿！　ロンは無事か!?」
『お二方……ルーンが解けたのですね』

　ロンの全身はまるで雨に打たれたかのように濡れているだけでなく、自分達が買い与えた服が、所々薄らと紅く染まっている。ゾッと背筋に悪寒が走った。あの時と同じ状態だ。以前ロンが、アジェットの怪我を治したときと。

『……呼吸はしております。怪我は……もう治ってしまったと言った方が正しいでしょう。不老不死のルーンが正常に働いている証です。だから命に別状はありません』

　命に別状はない、それは喜ぶべきことであるはずなのに、どうにも素直に安堵することができなかった。口にしたレフルの表情が、浮かない顔をしているせいもあるかもしれない。

『――ですが、常人だったら致死に相当する魔力を決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に吸収されてしまいました。暫くは、昏睡したままでしょうね……』
「ロン……！」

　ぐっと、手に力を篭め、そこでロンから預かっていた魔石（リフェ）の存在を思い出した。濁りのない乳白色の石は宝石にしては大粒ではあるが、アジェットの掌だと簡単に覆ってしまえるほど、石としては小さく頼りない。しかし紛れもなく、精霊『光り輝いている者（レフルゲンセル）』の大半の魔力を保有した命の塊。もしも決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に吸収されてしまったら、レフルの命は風前の灯火となってしまっただろう。
　これをロンから預かったときから、嫌な予感がしていた。また、自らを省みない行動をとるのではないかと。
　その予感は的中してしまった。レフルの口ぶりや全身濡れている状態からして、確実に核を破壊するために、自分から決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の体内に飛び込んだのかもしれない。いや、きっとそうだ。そうでなければ、昏倒するまで魔力を吸収される事態に陥るはずがない。

『守りたかったのだそうです』
「え？」
『あなた方を守りたかった。そして決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が本調子ではない今ならば、どうにかすることができると判断し、決断なさったのです。決して軽はずみな考えでの行動ではないことだけは、ご理解下さい……』

　レフルの言葉に、アジェットは顔を歪めた。
　守りたかった。それはこちらの台詞だ。ゴーレムから受けた裂傷を治してくれたあのときから、どんなことがあって

もロンのことを守ろうと決めたのに。
　なのに、また守られてしまった。絶対にさせたくなかった捨て身の方法をとらせてしまった。

「このやろ……見た目はガキの癖に、俺ら守ろうなんて生意気なんだよ」

　ギエルドが握った拳をロンの頭に近づけるが、それは寸でのところで力なく止まる。いつもは揺ぎ無い意思が宿る黒灰色の瞳が、複雑な色を映しながら揺れていた。きっとアジェット自身も彼と同じような目でロンを見ているのだろう。命に別状がないことを嬉しく思う一方で、無事とも言い難い状態を苦々しく思う心。ロンにそんな判断をさせてしまった己の不甲斐無さ。

「わたしは……なんて無力なんだ」
『貴方だけではありませんよ、亜麻色の騎士。わたくしも……いえ、ロン様以外のどんな存在も、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の前では無力も同然。体外から核を破壊することは出来ず、ロン様のように体内に潜り込んだ場合、核を破壊するより先に魔力を吸い尽くされて命を失うでしょう。その身に不老不死のルーンを宿しているロン様だからこそ、成し遂げることができたといえます』

　ありったけの武器に串刺しにされても、平然としていた決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）。これ以上は成す術はないと、宿舎の最上階に一時的に避難させたリデルとラーラをテロンダの外へと逃がすことを選んだが、今思うと、あれ以上の策を用意できたかと問われると首を振らざるをえない。
　ロンはきっとそれを危惧していたのだろう。リデルとラーラの元へ行くのをあまりよしとしていなかった。その時点で気づいていたらロンを止められただろうか。いや、止めたとしても変わりとなる策を見出せなければ、ロンの意思を変えることはできまい。

「――これ以上は不毛だから止めておこうぜ。古の災厄はなくなったんだ。今はその功労者であるロンを休ませてやらねえとな。こんな地べたじゃ、休まるもんも休まらねえだろ」
「そう……ですね」

　まるでロンを囲むように土は濡れ、泥となっている。他の場所は全く濡れていないため、まるでロンのいるところだけ、局所的な豪雨が降ったかのようだ。決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）という古の災厄がこんなところにいたのが、まるで嘘のように。

「それでは、わたしがロンを運びます。今まで使っていた自室でいいかな？」
『お願いします』
「頼んだ」

アジェットは横たわるロンの背中をそっと起こし、背中と膝の裏に腕を入れて持ち上げる。細身である身体は、想像していた以上に軽かった。

（食が細いから、きっとこんなに軽いんだな……もっとしっかり食べないと筋肉はつかないし、背も伸びないと言わなければ）

　そして無茶をしたことに対する説教もしなければならないだろう。ロンに言いたいことはたくさんある。

（だから、できるだけ早く目を覚ましてくれ）

　今はそれだけを願い、アジェットは瞼を閉じているロンの穏やかな顔を身ながら淡く微笑んだ。

　ツンとしたかび臭さが鼻を刺激する。それと同時に頭に触れているものにも違和感を覚えた。柔らかいのにしっかりとした土台がある不思議な感覚。そして少しずつ鮮明になっていく意識に、自分が覚醒しつつあるのだと自覚した。

「あ、起きた？」
「！」

　瞳に真っ先に映ったのは、逆さに映った人間の顔だった。何故人間がここにいる。眠りにつくまえは、ここに誰もいなかったはずだ。
　突如現れた不審な人間から持てる速さで脱兎のごとく離れると、周りを見ていなかったせいで背中にドスンと衝撃が走った。本棚だ。
　それでも距離をとったことで、心は少し落ち着いた。そこにいる人間を目を細めながら観察すると共に、自分の陥っている状況を確認する。
　この人間は起きた、と尋ねた。その言葉からそういえば自分はずっと眠っていたことを思い出す。何故眠っていたのか、それは――

（なんで……起きてしまったんだ……）

　自身にかけられた不老不死のルーンを解除方法を探すため、記憶を頼りにここ、『古代言語（ルーン）の森』へとやってきたが、淡い期待は水泡に帰した。この場以外にルーンの情報が集まっている場所はなく、つまり、それは不老不死のルーンを解除することができないことを意味している。

　だから自分は眠りについたのだ。成す術のなくなった現状に絶望して。

「おはよう。そして初めましてお嬢さん。僕はラン。君の名前を教えてもらってもいいかい？」

　人間がニコリと笑みを見せる。ビクリと身体が震えた。この人間は何を企んでいるのだろう。
　人間が自分に向けるものは、己の欲望を満たすものばかりだ。奴隷として、ルーンの知識が詰まった生きた字引とし

て利用する。この人間も、ろくでもないことを考えているに違いない。

「怖がらなくていいよ。僕は君みたいな可愛いお嬢さんに、危害を加えるつもりなんてないから。ただ、少し話しがしたいだけ。だからまず、君の名前を教えてほしいんだ」

　あからさまに警戒している自分に、人間は変わらずに締まりのない笑顔を向けてくる。本当に何を考えているのかわからない。
　とりあえず、この場は相手の問いに答えて様子を見てみればいいだろう。そう決めて口を開こうとして、言葉が出てこなかった。
　自分に名前と呼べるような名前なんてない。あるのは奴隷としてつけられた識別番号だけ。だが、それを口にするのは躊躇われた。この人間には『ラン』という確固とした名があるのに、自分にはそれがない。

（自分が人と違うのは、不老不死のルーンだけじゃなかった……）

　誰もが持っているであろう、個人につけられる『名前』すら持っていない自分。本当に、どうして自分は目覚めてしまったのか。あのまま眠っていたら、この事実にずっと目を逸らしたまま、永久を過ごせていただろうに。

「えーっと、言いたくないならそれでもいいよ？　無理にとは聞かないから」

　応えずに黙りこくる自分に、人間が戸惑いを覚えたらしい。本当は言いたくないのではなく言えない、が正しいのだが。

「でも、この質問には応えてほしい、かな。――どうして君は、不老不死のルーンを得たの？」
「――！」

　何故それを、と言葉にしようとしたとき、ボロボロになった服の袖が目に入る。そこから自分の手首がのぞき、ルーンの痕がくっきりと見えていた。わかる者には見るだけでわかるのだ。この刻まれているルーンこそが、身体に不老不死を与えられている証だと。

（どうして不老不死を得たか、だって……？　そんなの……）

　光りが遮断され、蝋燭の淡い灯火のみが照らす密閉された部屋。積年の成果を漸く果たせるときがきたと、高々に笑う男。ここにいる原因となった過去に、自分の過失なんて一切ない。

「好きでなったんじゃない！」

　気づいたら人間に向かって叫んでいた。今一番厭なことは、自分が望んで不老不死のルーンを得たのだと勘違いされること。そんなことを望んでいたら、わざわざ『古代言語（ルーン）の森』にまで足を運ぶわけがないのに。

「好きでこんな身体になったんじゃない！　変態学者の実験台にされたんだ！」

　沸々と湧き上がる、自身をこんな身体にした学者への怒り。常に感じていた理不尽は一切解消されることがなく、そして怒りをぶつけたい張本人は、自分を不老不死にしたせいで勝手に死んだ。今までずっとやり場がなかった怒りが爆発する。

「物心ついたときからずっと！　人のことメモ帳や辞書扱いしてこき使ってきた癖に！　用が済んだら実験台だ！　失敗したら買いなおせばいいとか思ってたんだろうさ！　変わりに自分が死んでたら世話ないけど！」

　一気に学者への怒りをぶちまけたせいで息苦しくなり、肩で大きく呼吸をする。乱れる息を整えながら人間を見遣った。
　怒りを向けられた人間は流石に笑顔を浮かべてはいなかった。だが、謂れのない怒りを受けて、不機嫌になった顔でもなく。
　軽く細められた瞳に引き結ばれた口元。そんな表情は今まで見たことがない。喜んでいる表情でもなければ、当然楽しげでもないその表情は、一体何を思ってのものなのだろう。

「――ねえ、君。僕についてくる気ない？」
「は……？」

　突然この人間は何を言い出すのか。ついてくる？　初めて会ったばかりの人間に？　自分が？　何故。

「不老不死のルーンを、解くつもりはある？」
「！」

　身体が身震いした。解くつもりどころか、その不老不死を解くためにここまでやってきたのだ。しかし、ここに解除方法が載っている書物はなかった。それなのにこの人間は自分は解く方法を知っているとでもいうのだろうか。
　解除できる方法があるはずがない。なのに、知らず知らずのうちにゴクリと息を飲み、人間を凝視している自分がいる。他に解除の手立てがあるとは到底思えないのに、もしやと期待する心は止められない。

「僕はあるものを探してるんだけど……これが何かわかるかい？」

　人間は首にかかっている紐を引っ張り、服の下に隠れていたものを取り出した。
　それは乳白色の大粒の宝石だった。それが一体どうかしたのかと目を訝しげに細めるが、それがただの石ではないことに気づく。

「それは……魔石（リフェ）！」

　宝石に刻まれているのは光り輝いている者（レフルゲンセル）という古代言語で書かれた精霊の名前。名が刻まれた宝石は精霊の命の塊であると、受け継がれた記憶が教えてくれる。
　当然ながら実際に見るのは初めてだ。魔石（リフェ）化により、精霊は人前から姿を消した。そして精霊を魔石（リフェ）に変えるルーンは記憶に受け継がれていない。だから現代で新たに精霊を魔石（リフェ）にすることは不可能だ。なのに何故、この人間は魔石（リフェ）を持っているのだろう。

「やっぱり知ってたか。なら話は早い。僕が探してるっていうのは、この魔石（リフェ）にかかっているルーンを解除できる道具なんだ」
「魔石（リフェ）にかかったルーンの……解除？」

　そんなことができるはずがない。凡そ三千年程前から伝わるルーンの知識の記憶の中に、そのルーンの存在はなかった。精霊を魔石（リフェ）に変えるルーンのように、意図的に伝えるのを避けた様子もない。本当にそんなルーンが実在するならば、自分の記憶にないことは不自然だ。伝えることに何の問題もないルーンであるはずなのに。

「君が知らないのもムリはないよ、記録人（レコーダー）のお嬢さん。その存在を広めたのは人間じゃなく、精霊だから。いくら記憶力があっても、知る機会がなければ記憶しようがないからね」

　ならば何故この人間は、そんなことを知っているのだろう。精霊に知り合いがいるとでも言うつもりか。それ以前に、

「……それと不老不死のルーンを解除するの、どう関係が？」

　魔石（リフェ）と不老不死のルーン。繋がりが全く見当たらない。まず、二つのルーンは系統が異なり、魔石（リフェ）にかかったルーンを解除できたとしても、それと同じ方法で不老不死のルーンが解除されるかと聞かれたら、応えはノーだ。
　ルーンは万能な能力ではなく、あくまで言の葉を紡ぐもの。言葉の種類と同じ数のルーンがあり、解除するルーンもまたそれぞれ別個に存在する。同じルーンで別のルーンを解除することなど、できはしないのだ。

「それが関係あるんだ、実は。魔石（リフェ）にかかったルーンを解除する道具が、どうして人間には伝わらず、精霊にのみ伝わったと思う？」
「……そこに原因があるってこと？」

　口ぶりからして、答えを求めるというよりはそこに着眼してほしいと判断する。すると人間は嬉しそうに口の端を上げた。

「うん、そうだよ。君は中々頭の回転が速いね。――その道具は、人間と精霊が協力して編み出されたモノなんだ。でも正直に言うと今どこにあるのか、どんな形をしているのか、具体的なことはほとんどわかってないんだけど、一つだけはっきりしていることがある」

　その唯一はっきりとわかっていること、というのが一番重要なことのようだ。人間の顔から笑みが消え、真顔になる。

「それはルーンの種類・系統に関係なく、どんなルーンでも解除することができるということ。大掛かりな保持のルーンが刻まれた遺跡も、古の時代に猛威を奮ったルーンで造られた兵器も、それを使えば一瞬で掛かっているルーンが消失する。遺跡は倒壊して、兵器はただのガラクタになるだろうね。だから精霊にのみ存在が伝えられて、人間には伝わらなかった。一歩間違えばとてつもなく危険な代物になるだろうから」

　それが確かに本当ならば、ルーンの根幹を揺るがすことになる。ルーンは決して万能ではなく、有効にするだけでな

く無効化するのにも知識がなければできない。だからこそ、効果が持続する系統のルーンを使う際、使用者は慎重にならざるを得なくなる。だが、簡単に無効化できるようになるならば、失敗しても無効化すればいいと、安易な考えに至る輩が増えてしまうかもしれない。
　それに自身が生まれるよりも更に大昔にそれが完成されたのなら、それを知った人間が悪用する確立は、とても高いだろう。相手のルーンを完全に無効化できると知れば、喉から手が出るほど欲しくなるに違いない。
　人間には伝わらず、精霊にのみ広まった理由がわかった気がした。

「その道具はね、どんなルーンでも解除してしまうんだ。――つまり、君にかかっている不老不死のルーンも、解除することができる」
「――！」

　身体が戦慄した。ぷるぷると止まらない震えが全身を支配する。

「さっきも言った通り、どこにあるのかまではわからないんだけどね……」

　それが本当に不老不死のルーンを解除してくれるのかという問いかけは、愚問だ。精霊にのみ伝わっているという強力なルーン。それだけで信憑性はかなり高い。それに、この人間が嘘をついているようには見えなかった。自分に嘘をついて得をすることもない。
　じわりと目頭が熱くなった。元に戻れる。それがいつになるかという期日まではわからずとも、それだけで充分だった。

「だから一緒に探しに行こうよ。ね？」

　人間が距離を詰めてきた。しかし今の自分にはもうこの人間を警戒する気は起きない。再び差し伸べられた手をまじまじと見つめる。掌と甲だけが覆われたグローブから伸びる指先は細長かった。そして視線を手から顔に移すと、そこにあるのは柔らかな満面の笑み。
　とても温かそうだと思ったときには、身体が勝手に動いていた。差し出された手をとらずに立ち上がり、勢いよく人間に飛びついた。

「うわっととと！」

　人間は突然飛びついてきた自分に驚いたのか、体勢を崩して尻餅をつく。そんなことを気にも留めず、人間の背中に腕を回し、ぎゅっと力強くしがみついた。

（やっぱり、温かい……）

　人がこんなにも温かいだなんて知らなかった。生を受けてすぐに生母から引き離され、年老いた同族からルーンの知識を受け継いだ。そして物心ついたときには自身を買った学者の手足としていいように使われる毎日。人の温もりを感じる体験など、できるわけもない。

　熱くなった目頭から、ボロボロと大粒の雫が溢れ出す。初めて感じた温かさを嬉しく思ったのと、今までの経験の辛

さや悲しさが入り混じった複雑な感情が、涙腺を完全に崩壊させてしまったのかもしれない。

「ひっ……く。あ……うう」
「うん、今は思いっきり泣くといい。スッキリしたら、今度は一緒に頑張ろう。ああそうそう、僕にはもう一人仲間がいてね。後で紹介してあげる。きっと驚くよ」

　背中に回された腕と囁く声音は、とても優しいものだった。

　泣くのは今だけにしよう。今まで晴らすことのできなかった鬱憤を全て涙で流してしまおう。そして、新たに歩み始める。彼女がもたらしてくれた希望を手にするために。

終

　懐かしい夢を見た。生まれて初めて負以外の感情を抱いた大切な記憶にして、ロンの原点。じわりと広がる温もりに意識が浮上していき、薄らと目を開いた。

（……ここどこだよ）

　ロンの視界に飛び込んできたのは初めて見る天井だった。白地に細かく刻まれた規則的な模様は、派手さはなくとも手の込んだ造りをしていることが一目でわかる。そして目線を徐々に降ろしていくと、いかにもふかふかとしてそうな柔らかい布の塊が目の前にあった。身体に被せる寝具だ。

（何でベッドの上で寝て……？　ああ、そうか……あいつらが運んでくれたのか）

　完全に覚醒した意識は、ベッドの上で眠っている理由をあっさりと見つけ出す。
　アジェットかギエルドのどちらかが、決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に魔力を吸われ過ぎて気を失ったロンを移動させた。お人よしな彼らに、ロンをその場に放置するという選択肢はないだろう。

（いやいや待て待て……それにしたってこの場所は……妙だ。どう考えても寄宿舎じゃないし）

　ロンはむくりと起き上がると、掛けられた寝具をまじまじと見た。ふわふわとした、柔らかく滑らかな、上等なもの。寄宿舎にあったものは、もっと硬くて安っぽいものだったはず。間違ってもこんな高値がするであろう一品を支給するはずがない。

「げ」

　そして自身の纏っている寝間着――きっと誰かの手によって着替えさせられたであろうものに気づいて、顔を引きつらせた。
　首から鎖骨までが露な構造なせいで、首に刻まれているルーンが露になってしまっている。だが、これくらいならばまだ許せる範囲だ。しかし襟元にたっぷりとあしらわれたフリルはいただけない。袖はレース状となっており、手首へ近づくにつれて裾が広がっていく形状になっていた。おまけに胸元には、何とも可愛らしいリボンが鎮座している。

「あ、目覚めたんですね！　よかった！」
「え……？」

　突如聞こえてきた知らない少女の声に、ロンは顔を困惑させた。肩まであるさらりとした桃色の髪を揺らし、明るい青の瞳を爛々と輝かせながら、まるで花のようなふんわりとしたドレスを靡かせ、ロンのいるベッドの傍へと寄ってきた。少し離れた場所にあるテーブルの上に、本が置かれている。どうやら彼女はずっとこの部屋の中にいたらしい。

「どこか苦しいところや痛むところはないですか？」
「えーっと、ない、けど……あんた誰？」

　その言葉に少女は大きな瞳をまん丸に見開いて口元を押さえた。そして恥ずかしげに薄らと頬を染め、手を胸の前で組む。

「ご、ごめんなさい。突然知らない人が近くにいたら、ビックリしてしまいますよね」
「うん。だから名前、教えてくれない？」
「あ、はい！　わたし、アイリリース・フォン・シュガステルスと言います。どうぞイリスと呼んで下さい」

　イリスと名乗った少女は、礼儀正しくペコリとロンに向かって頭を下げた。まだあどけなさが完全に抜け気っていない顔立ちからして、年齢は十台半ばといったところ。そして名乗りあげた家名に含まれた『フォン』という単語に、この少女もまたアジェットと同じく上級貴族かと検討をつけた。身につけている物は見るからに高価なものであり、彼女の仕草の一つ一つに品がある。

「イリスが、僕のこと看ていてくれたの？」
「はい。ギエルドお兄様から頼まれました。自分達の変わりに、貴女を看ていてほしいと」
（成る程。僕を任せて事後処理に奔走してるわけか）

　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の脅威が完全に去った今、避難させていた住民を再び誘導しなければならないだろうし、エンジリカのことも含めた報告も王都にしなければならないだろう。故に、彼らには眠っているロンにかまける余裕などない。信頼のある人間にロンの世話を任せるのは自然な流れだ。

「後もう一つ聞きたいんだけど」
「何です？」
「……この服用意したのも、イリス？」

　ロン的にはこれが一番重要だった。何故こんなにも、ひらひらとした服を着せられているのか。そしてロンが着ていた服はどこへ行ってしまったのか。正直こんな頼りない格好は落ち着かないため、早く服を返してもらいたい。

「ええ、そうですよ。貴女の服は汚れてしまったので、こちらで洗っておきました。わたしの服のサイズが合ってよかったです。とても似合ってますよ。可愛いです」
「……そりゃどうも」

　ロンは顔を引きつらせながら、短く礼を言うに止めた。正直いって、この服が自分に似合っているとは思えない。髪は短くボサボサで、顔も中性的だ。服を着ているというより着られている状態と言った方が正しいだろう。それに、こういった可愛らしい服装は、イリスのような見た目が可憐な少女にしか似合うはずがない。

（とりあえず僕の服は無事みたいだし……言って早く返してもらおう……）

　服を返してもらい、今すぐ着替える。そう決意して口を開こうとするが、それは突然部屋の中に響いた扉を軽く叩く音と同時にした声に阻害されてしまった。

「イリス、俺だ。入るぞ」
「お兄様」
「げ」

　入っていいと言っていないのにも関わらず、ガチャリと音を立てて扉が勝手に開かれる。そして丁度中へと入ってきたギエルドと目が合った。

「お、漸く起き……ぶっ！」

　そして開口一番、気遣いの言葉を中途で途切らせ、盛大に噴出した。肩をぶるぶると震わせるに留まらず、腹を抱えて笑い出す。

「おまっ、その、その格好……！　ぶっはははは！」
「……」

　確かにこいつがこの格好を見たら、絶対笑うだろうなとは思っていた。だが、頭でそうと理解していても、実際無遠慮に爆笑されたら誰だって苛立ちを覚えるに決まっている。

「お兄様、どうしてそんな笑うのですか。とても可愛いのに。失礼ですよ！」
「暫く笑い苦しめ（スリグフトラウグフテルパインフルネスス、フォルアウィレ）、ギークェルド」
「ウッハハハハハハハハ！」
「お兄様!?」

　不機嫌なまま重低音でルーンを呟くと、ギエルドの笑い声に勢いが増した。

「お兄様！　ですから――」
「あっはははははは！　ぶはははははは！」
「お兄様……？」

　イリスは笑い止まないギエルドを咎めようとするが、少しして異変に気づく。ギエルドの頬には冷や汗が流れ、口から笑い声が漏れても表情は決して楽しそうなものではない。

「あっはは、ロン！　ハハハハハハ、テメ、ハハハハハハ！　今、ハハハハハ、何かけやがっハハハハハハハハ！」
「笑い苦しめ、って言った。ざまあみろ」

　笑いながらも、どうにか言葉を繋いだギエルドをロンは鼻で嗤う。胸がすかっとした。

「で、殿下!?」
『自業自得ですね、黒髪の騎士』

　扉の奥からアジェットとレフルが姿を現した。ギエルドの後に続く予定が、突然笑い出したために扉の前に二の足を

踏んでいたのだろう。だが流石に様子がおかしくなって中へと入ってきたというところか。
　ロンは掛けられた布団を胸のところまで引き上げ、できるだけ服が見えないようにする。

「イリス。悪いけど僕の服持ってきて。今すぐ」
「は、はい！　あ、あの……お兄様は大丈夫なのでしょうか……？」
「数分もすれば自然に治るから心配無用。だから早くとってきて」
「わ、わかりました……！」

　おろおろとしていたイリスに、服を持ってきてもらうよう頼む。初めはギエルドのことを気にしていた彼女も、最終的には頷いて部屋を後にした。

『ロン様、お目覚めになって何よりです』
「……心配かけたね、レフル」

　レフルがロンの近くにまで飛んでくる。ロンはイリスの姿が完全に部屋からいなくなったのを確認してから応えた。

「えっと、目を覚ましてくれて嬉しいよ、ロン」

　先ほどのイリスと同じように、腹を抱えて笑い続けるギエルドにおろおろしているアジェットが、起き上がっているロンを見て多少困惑した笑顔を向ける。一々ギエルドのことまで気を配ろうとしているあたりは、とてもアジェットらしい。

「身体の方は大丈夫なのかい？」
「うん、もう大丈夫。ついでに気分もすっきり爽快」
「ハハハハハ！　テメ、ハハハハハハ！」

　恨めしげな瞳でギエルドが睨んでくるが、そんなことを意に返すロンではない。軽くスルーしてアジェットに問いかけた。

「そういやここどこ？　明らかに宿舎じゃないよね」

　ロンが今いるベッドもそうだが、間取りや建物自体の造りも宿舎とは異なっている。派手ではないものの、瀟洒な雰囲気が嫌味のない上品さを感じさせた。寄宿舎にそんなものは必要がない。

「ここはシュガステルス家の屋敷だよ。テロンダから馬車で二日程の距離にある、テルシュタイン領にある本家のね」
「テロンダから二日？　僕そんなに寝てたのか……」

　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）に吸い取られた魔力は生半可なものではない。短時間ではあったが、一滴も残さないとばかりに容赦なく搾り取られたのだ。不老不死の身体でなければ、破壊のルーンを紡ぐより先に、命を失っていただろう。

『いえ、二日でなくて今日で十五日目です』
「ぶっ！」

　訂正された日にちに、ロンは思わず吹き出した。つまりまる十四日間、眠り続けたということになる。予想していた以上に、ロンの負ったダメージは深刻だったようだ。

「本当に目覚めてくれてよかった。中々目を覚まさないからずっと心配していたんだ」

　アジェットが、ロンが眠り続けていた間のことを語る。
　決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）が消滅した後、二人はまず避難させたテロンダの人々を安全が確認された街へと連れ戻した。行動が早かったため大した混乱もなく、翌日にはすでに落ち着いたらしい。
　そしてテロンダの街のことが落着した後、王都へ事の次第を報告するために帰還することとなったが、そこでロンのことが問題となった。王都までは馬車で五日。決して短いとはいえないその道中に、眠り続けるロンを連れて行くのは憚られ、だからと行ってテロンダに置いて行くのもまた同じく。
　妥協案として、テロンダから二日の距離があるテルシュタイン領へ向かい、そこでロンを預け、二人は王都へと向かった。そして事後処理を一通り終わらせ、ロンの様子を見るために昨夜戻ってきたという。

「ゲホッ。ったく、寝すぎなんだよ、ゲホゲホッ」
「咳するかしゃべるか、どっちかにしたら？」
「誰の、せいだ、誰の、ゲホッ」

　漸くルーンが切れたのか、笑い声が止む。だが変わりに喉を痛めたらしく、幾度が咳き込んでいる。

「それは置いておくとして……エンジリカはどうなった？」

　紫紺の瞳をまっすぐ二人に向けると、二人は顔を見合わせ頷きあう。

「ゲホッ。……ワローラル女史は王都へ送検した。これから裁判を受けることになる」
「だから、一応は解決したといえるよ。裁判までまだ日取りがあるけどね」

　現在、王に反感を覚え、武力に訴えようとしているのはエンジリカだけではない。彼女の口ぶりからして仲間は確実にいる。裁判までの尋問で、他の仲間が誰なのか聞き出せればよいが、エンジリカがそう簡単に白状するとは思えない。裁判までの日にちが長いのは、そうした尋問の時間を設けたためだろう。長丁場になりそうだ。

「ま、後は専門職に任せようや。俺らの仕事は終わりだ」
「確かにテロンダの事件は解決したと言っていいと思うけど……お前達の抱えてる問題は全然進展してないじゃん。様子見にきてくれて言うことじゃないけど、ここでのんびりしてていいの？」

　ロンのことを心配して来てくれたのは嬉しいが、彼らの抱えている問題は山積しているはず。今回の件で、遺跡発掘に対する危険性が明らかになり、民には更なる不安が広がるだろう。それをどう解消するか、王が勧める遺跡発掘に対する施策と同時進行で考えていかなければなるまい。

「お兄さんのこと、手伝ってやらなくていいわけ？　第二王子のギークェルドサマ」

　今も第一王子が中心となって打開策を模索しているのだから、傍にいて補佐するのが弟としての勤めだろう。だが、ギエルドは大仰に肩を竦めた。

「俺があっちにいたところで、できることほとんどねぇんだよ。どうにも頭を使ったお仕事は不向きなもんで。兄貴もそこらへんはよーっくわかってらっしゃる」

　確かにギエルドは考えるよりもまず行動に移すタイプの人間だ。頭脳労働には向いていないことはよくわかるし、正直なところ似合わない。

「お前、失礼なこと考えてるだろ？」
「気のせいだろ。それより、お前ら早く王都に戻った方がいいよ。ごたごたが続いてるなら王都に居たほうがいいに決まってる。ここからの距離も近いわけじゃないんだろ？　それに僕はもう大丈夫だから」

　漸く目覚めた身体は、ずっと寝ていたとは思えないほどすこぶる快調だ。不老不死のルーンが眠っている間、時間をかけて体調を整えてくれたのだろう。彼らもロンの無事が確認できたのだから、すぐにでも王都へ戻るべきだ。時間がかかるのならば、尚のこと。

「――ロン、そのことで君に話があるんだけど、いいかな？」
「僕に話？」

　ロンは改まって話さなければならないことがあったかと自身の記憶を漁るが、心当たりがない。一体どのような話であるのか不思議に思いつつ、立ち話も何だからと、二人にベッドの端に座るよう促した。アジェットは微笑を浮かべてそれに頷く。ギエルドはイリスが使っていたと思われる椅子をベッドの近くに移動させ、そこにどかりと腰掛けて偉そうに長い足を組む。

「テロンダ遺跡の調査は終わったわけだけど、これから君はどうするんだい？」
「んー？　当然これからも元の身体に戻るために旅を続けるよ。それっぽい遺跡があるところ目指してね。ルインラトゥスにはまだ他にもたくさん遺跡があるから、暫くはルインラトゥスに厄介になるだろうけど」

　結局は虱潰しに遺跡を梯子することになるだろう。効率は悪いが、情報が全くないのだから仕方がない。それに、不老不死のルーンを持つロンに与えられた時間は無限にある。急いで事を仕損じるよりかは、よほどいい。

「つまり、遺跡を発見する度に不法侵入を繰り返す、と」
「……」

　ギエルドの身も蓋もない言い方に、ロンは顔を思い切り顰めた。図星ではあるが、ニヤリと不敵な笑みを見せられな

がら言われると腹が立ってくるというもの。

「ロン、気持ち的には君に好きなだけ遺跡を調査させてあげたいとは思うけど、わたしは騎士として、不法侵入を見逃すわけにはいかないんだ」
「今回はワローラル女史が免除したが、次はそうはいかねえってわけだ。何てったって、今ルインラトゥス中の遺跡は王が熱心に調査を勧めてるからな。当然侵入したのがバレたら、駐在してる騎士が黙っちゃいねえだろうなぁ」
「……で？　僕にどうしろと？」

　彼らはロンの不法侵入を咎めたくて、こんなことを言っているわけではないだろう。ロンの事情を知らなかった頃とは違う。特にギエルドは、黒灰色の瞳を爛々と輝かせている。何か企んでると言わんばかりだ。

『ロン様のような深いルーンの知識の持ち主に遺跡を調べてもらうことは、彼らにとっても都合がいいことなのですよ。ただ、不法侵入がいただけないというだけで』
（そういうことか……）

　話の全貌が掴めた。彼らは今、ロンにエンジリカと交わしたときと同じような交渉をしようとしているのだと。

「国の許可が得られたならば、不法侵入ではなく、合法的にルインラトゥスの全ての遺跡を調査できるよ」
「ワローラル女史も言ってたが、今現在大勢の学者達が遺跡の調査に乗り出してはいるが、成果は全くあがってねえ。費用だけが嵩んでるわけだ。だが、お前が手伝ってくれるなら大幅にその分の費用を浮かせられる」

　遺跡の大きさにもよるが、ロンならば一つの遺跡を調査するのにそれほど日数を要しない。ルインラトゥスにある遺跡の数がどれほどかはわからないが、にわかな知識しかない者達の調査より、ずっと正確で早いのは確かである。
　ロンは合法的に、好きに遺跡を調査できる。そして彼らはその分の経費を浮かせられる。数日前とほぼ同じ交渉内容だ。なのに気分は滅入るどころかどこか清々しい。
　ロンは自身の首元に視線を落とした。見慣れた紐が服の下に潜り込み、更にその下にあるものの重さを感じる。

「こっちもタダでとは言わねえさ。今ならなんと――」

　ギエルドが椅子から立ち上がり、アジェットの肩に両手を置いた。

「腕よし顔よし性格よしの、三つが揃った護衛つきだ」

　口元が釣りあがった笑みは、王子というよりもどこかの悪の親玉と言った方が近いかもしれないと思った。自然とロンの口元が緩む。

「……なるほど、アジェットが護衛についてくれるわけだ。でも、大事な王子様の護衛の方はしなくていいの？」
「オイコラ、今わざと俺を抜かしただろ」
「だって最後の一つはどう考えても違うじゃん。もっと自分を見つめ直した方がいいんじゃない？」
「お、腕と顔がいいことは認めたな」
「殿下……」

　アジェットが苦笑するも、その表情はひどく穏やかだ。

　そして二対の瞳が真っ直ぐロンを見つめた。ロンなら頷いてくれるに違いないと、確信のある光りが宿っている。
　ロンの胸元に鎮座する、乳白色に輝く宝石、魔石（リフェ）。確実にロンを頷かせたいのならば、これを取り上げればそれで済むことを彼らは知っている。レフルの命である魔石（リフェ）がロンにとってどれだけ大事なモノか、理解しているのだから。

　魔石（リフェ）は決して触れてはならないモノ（ネヴェラドント・トウクヘル）の体内に飛び込む前、アジェットに預けている。なのに彼らはそれを握るのではなく、眠り続けているロンの首にかけてくれた。彼らの中に、初めからそんなことをする選択肢などないのだろう。だからこそ、彼らのことは信じられる。

「断る理由はないね」

　自身が望む探索が好きにできて、そしてそれが彼らの役にも立つ。断る理由があるわけがなかった。あのときのように、逃げ出したいという気持ちは微塵も沸かない。むしろ、彼らともう暫く共にいられることを嬉しく思っている自分がいる。

　ランとは全く違う人間だが、彼らの傍もまた彼女と違った意味で居心地がいい。無条件に甘えられる家族のような存在ではなく、自然体のまま、気を張ることなく対等に接することができる関係。
　これがきっと『仲間』と呼ばれる間柄。ロンに注がれる眼差しこそが、何よりの信頼の証。

「ありがとう。これからもよろしく、ロン」
「もちっと素直な言い方の方が俺好みではあるが、まあいいだろ」
「心外だね。今でも充分素直なつもりだけど？」
「それが素直だっつーなら、世界中の人間の大半が素直ってことになるな」
「それでもギエルドは、捻くれものに分類されるんだろうね」
「お前だけにゃ言われたくねえよ」
「……また始まった」

　ロンとギエルドの軽口の叩きあいに、アジェットががくりと肩を落とす。そしてそれを慰めるかのように、レフルがアジェットの肩付近へと移動した。

『これが二人にとってのコミュニケーション方法になってますからね。お互い楽しんでいるようですし、好きにさせておいてもいいでしょう』
「……そう、ですね」

　アジェットは諦め混じりに嘆息する。生真面目な性格は、こういうとき不便だなと自分のことを棚に上げてロンは思う。

『ロン様ともども、よろしくお願い致します、お二方』

「おう、よろしくな」
「こちらこそよろしくお願いするよ、レフルゲンセル殿」
『わたくしのことはレフルとお呼び下さって結構ですよ。レフルゲンセルは呼び辛いでしょう？』
「なら、お言葉に甘えてレフルって呼ばせてもらうわ」
「それでは、レフル殿、と……」
『はい。こちらもこれからはお名前で呼ばせていただきます、アジェットにギエルド』

　そしてレフルはロンの傍にパタパタと寄り、ロンが目覚める前に三人で今後のことを話しあっていたことを告げる。予めロンの了承を得ることを前提に話を纏めたところで、ロンの様子を見に来たところだったのだと。

『まずは王都に出向き、王と謁見することになるのですが、よろしいですか？』
「全ての決定権は王にあるんだっけ？　なら王に会うのは当然の流れだね」

　王制であるルインラトゥスは、当然全ての決定権は君臨している王にある。それが例え遺跡の調査に傾倒している王であっても変わらない。だからこそ、ギエルドの兄である第一王子を筆頭に、軌道を修正するのに必死になっている。
　逆を言えば、王さえ頷かせてしまえばロンが遺跡の調査の許可を得られるのだ。

「できればロンの体調が戻り次第、一緒に王都へ来てほしいんだけど……」
「僕は今すぐ出発しても構わないよ。たっぷり寝て体調も万全だから」
「なら明日の朝一で行くか。流石に目覚めてすぐ立つんじゃ、イリスが心配するからな」
「――そういやあのイリスって子、ギエルドのことお兄様って呼んでたけど、兄妹だったの？　家名違うけど」

　ふと抱いた疑問をギエルドにぶつけてみた。家名が違うどころか顔も全く似ていない。それに大してギエルドは、至極あっさり返答する。

「所謂義兄弟ってヤツだ。イリスの姉さんが、兄貴の婚約者なんだ」
「あー、だから『お兄様』ってわけね」

　兄弟に伴侶ができた場合、その伴侶の家族もまた家族になるのが婚姻だ。一般家庭ならばそう物々しいものではないが、王族の婚姻はそれは気を遣うものとなるだろう。
　当の本人達は、それを気にした素振りはなさそうではあるが。聞けば、シュガステルスには男児がおらず、ルインラトゥス王家もギエルドと第一王子の二人だけで、王女はいないらしい。そのためお互い異性の兄弟に憧れており、イリスのことを本当の妹のように可愛がっているのだとか。

「しかし、一つ腑に落ちないことが……」
「どうしたアジェット」

　アジェットが口元に手をあてて、妙に真剣な眼差しでロンの方を見る。

「いえ……何故アイリリースはロンに自身の服を貸したのかと……ロンの性別を勘違いしたのでしょうか」
「……」

　ロンは紫紺の瞳を開いたまま、固まった。ロンだけでなく、レフルとギエルドもピタリと固まったまま動かない。沈黙する三人に、アジェットは困惑気に首を傾げた。

「え、さ、三人共、どうし」
「僕はとっくにギエルドが教えてるものだとばかり思ったんだけど」

　アジェットの言葉を遮り、ロンは横目でギエルドを見遣る。ギエルドは切れ長の瞳を物憂げに細めた。

「いやいやいや、そんな個人的なこと教えるわけねえだろ。俺の方こそ、自分で気づいたかロンが教えたんだとばかり……お前を運ぶとき、躊躇いなく横抱きにしてたからな。俺だったら野郎は絶対そんな運び方しねえ、気持ちわりぃ」
『鈍い鈍いと思ってましたが……まさかここまでとは……』
「えっと……話が、掴めないんだけど……？」

　未だわかっていないアジェットに、三人は同時に大きく嘆息しながら肩を竦める。こんなあからさまな反応をもってしても気づかないのは、決してロンのせいではない。
　不自然な沈黙が空気を満たす中、それを打ち破るかのように扉が軽くノックされた。先ほどのように勝手に開くことはなく、ギエルドが促すことでロンの服を持った桃色の髪の少女が姿を現した。

「ロンさん、お待たせいたし――皆さんどうかしました？」

　部屋に入ってきたイリスは、中の微妙な空気を敏感に感じ取ったのだろう。可愛らしく首を横に傾ける。しかし説明する気が起きなかったロンは、無言のままイリスを手招きした。

「どうぞ、ロンさん」
「どうもね」

　イリスが持ってきた服は、手袋にスカーフまで、きちんと一式揃っていた。ちらりとベッドの下を見ると、そこにはずっと置いてあったのだろう、ロンのブーツもある。これに着替えさえすれば、元通りのロンだ。
　一つ面倒くさいのが、着替えるためにはアジェットにまず本当のことを告げなければならないこと。

「……着替えるから、お前ら一旦出てってくれない？」
「そうだな。行くぞ、アジェット」
「え？　で、殿下？　え……？」

　ここで漸くアジェットは事実に気づいたらしく、顔を驚愕に染めた。身体が固まってしまったのか、寝台から立ち上がったまま、ピクリとも動かない。

「着替えてしまうのは少し勿体無いです……可愛いのに……。あ、よければその服、差し上げますよ？」
「気持ちだけ受け取っとく」

　にこにこと屈託のない笑みを浮かべるイリスに、言外にいらないと断った後、早く出て行けという意思を乗せた視線をアジェットに向ける。それに怯んだアジェットに、レフルが追撃を加えた。

『立ち竦んでないで、さっさと部屋から出て行きなさい。女性の着替えを見るおつもりですか？』
「――えええええええええええええええええ!?」

　アジェットの大絶叫が部屋中を木霊した。それに驚いたイリスがびくりと肩を震わせ、ギエルドがやれやれと首を横に振る。

「そういうわけだからほれ、外出るぞー」
「あ、は、はい！」

　ギエルドがのそのそと部屋を出ると、アジェットも慌ててそれに続いた。レフルは大仰に嘆息したのち、ロンに軽く一礼して同じく部屋を出て行く。そして部屋の向こうから聞こえる激しく動揺する声を聞き流しながら、ロンは自分の服に着替え始めた。

（うーん、落ち着いたら説教されるかもしれない）

　頭の固いアジェットのこと、女性らしい口調や動作云々といったことを言ってくる可能性は高いだろう。今のうちに、言い負かせる内容を考えておいた方がよさそうだ。

「楽しそうですね、ロンさん」
「ん？　そう見える？」
「はい」

　イリスの言うとおり、自分は今楽しそうな顔をしているのだろう。説教されるのは好きじゃないが、それはロンのことを思って言ってくれていることも知っている。それに、それを回避するためにあれやこれやと考えるのも苦ではなかった。

「実際楽しいんだろうね、あいつらといると」

　口から出た素直な言葉に自分でも驚きながらも、悪い気はしない。
　最後にブーツを履いて完全に普段通りの自分に戻ったロンは、貸してもらっていた服を丁寧に畳んでイリスへと渡した後、ぎゃあぎゃあと喧しくなっている廊下へ続く扉を開いた。